

「三十年祭には神が表へ顯れて扉開いて守護する。世界何うなると思ふかな」と云ふお言葉に徴しても亦明治四十年六月五日御本席臨終のお指図「十年のはたらき百日でさした日これからみてなにかの事みな 心におさめて奮発せにゃならん。これをくどう にたのみおく」といふお言葉に徴しても教祖三十年祭には神が表へ顯われて万づお指図を下さることゝ待ち設けたものは一人や二人ではない。天理教界の重なる人々は皆其うであつたらうと思われ

然るに三十年祭は過ぎても少しも神が表へ顯われて天啓を下さるゝ模様がない。然らば御本席の十年祭がすんだなら不意として神が顯われるかも知らない。けれども其れは本部ではない。必らず他の場所に違いない。何故なれば本部には目下の所神の社となる様な大人格者は一人も居ないからである。私は此う思つていた。

けれども世間の噂はとり／＼であつた。或は本部の奥様に神様が降るであらうと。私は此の説に対しては絶対に否定した。何故なれば奥様の様な人間心の激しい方に神が降る理由がないからである。其うなると後に残る者は奈良系様であるが私は奈良系様には到底神様がお降りはないと思つていた。何故なれば神の社になる位の人はずと慈悲と謙遜とに充ち／＼た方ではなければならぬからである。

其の間にあつて此処に神が顯われた。彼処に神が降つたと云ふ噂はいろ／＼あつたが探つて見れば何れもこれも本部の神の座に直つて天啓を取り次ぐに足る様な高德の人とは思われなかつた。

然るに三月の一日になつて私は未知の人から不思議な手紙を受取つた。其の差出人は播州美囊郡三木在高木村井出様方津田出とあつて表には至急親展と書いてある。

開封すると出たのが継ぎの手紙である。「謹啓時下春暖の候と相成候処貴兄には御道一条には格別の御苦勞被下難有御礼申上さし頂き申候 就而は突然乍ら愚筆を呈し候小生はもと湖東大教会の信徒にて三年以来苦心惨憺何卒して真実の誠の道を求めんとし久しく御本部ひのきしんに出さして頂き真実調べをさして頂き居候処本部員はじめ大教会長及重役の素行なりを見てついに失望落胆いたしこの道の為に親類一同の勸当を受け苦心したる身のやるせなく考え居候ひし処貴君発行の新宗教を拝見致し大いに感服いたし氣をとりなほしこの三十年祭迄を期し面白くもなく詰所の手伝いをいたし居り御教祖御神魂を拝せんと苦心いたし居候ひしに端なくも去る廿二日はじめて多年の宿望を達し歡喜の涙にくれついに詰所を逃去して御教祖親様に御供いたし目下同御ひざもとに日々ようきづとめの日をくらし居候勿体なくも忝なくも次の如き御歌を頂き候。

八ツのほこりのその中でほしいをしいをうちわすれうか／＼こゝまでついてきてうれし／＼で日を暮し国の土産にするわいな

嗚呼小生等のいんねんは前生如何なる者に候ひしやらん死を以てこの御恵にむくい奉るべく決心いたし候

これも一偏に貴君の御誠意の一片の御蔭と忝く蔭乍ら御礼申上居候次第に候よつてその御恩に報いんが為め一片の老婆心をおこし一筆申上る次第に候

恐らく世界ひろしと雖も十二の菊花の御紋章をその家の入口に表示し如何なる事も見定め御礼などは一文もとらず只管慈悲を専にし親族近所一同の反対を受けけいさつにも度々御苦勞なし下されその昔御通り被下しまゝの御苦勞の道を御通り被下てきくも見るも涙の種に御座候あゝ御教祖親様を慕ひ現下の天理教会の有様に嘆涙を流す者は一度当地まで研究に出でられん事を日夜祈り居候決して決して無理に御すゝめ申さず候今回の婦人会の席上にて貴下の感ぜし言葉あればそれをもちて福井屋を尋故御教祖の御里三味田前川様へも御苦勞被下度祈上候然すれば貴兄の真実の誠を通してを moi 当る事も有之べくと存じ候小生は御教祖九十年の御苦勞を偲び目今の教会にを moi を廻らす時奮感に堪へず血涙滂沱とゞめ難く候依て婦部の砌は死を決して同志を叫合し本部の大改革を断行いたすべく候其際は貴下にも御拝眉の光榮に浴せしめ給はん事を願上候みかくらうたを去る廿五年祭以前よりの御製を謹写し敬愛する貴下に呈出いたし候謹而御心読被下度候

申上度事は山々なれ共又拝眉の上敬具至て無筆の私の事故何卒御判読被下度又失礼の点も有之候はんが御ゆるし被下度候」

私は繰り返えし／＼読んで見たがさつぱりわからない。多分此の青年は熱心の余り夢に教祖の神魂に接し「八ツのほこりのその中で」云々の歌を賜つたのであらう。其れにしてもわからないのは次の文句である。

「恐らく世界ひろしと雖も十二の菊花の御紋章をその家の入口に表示し如何なる事も見定

め御礼などは一文もとらず只管慈悲を専にし親族近所一同の反対を受けけいさつにも度々御苦勞なし下されその昔御通り被下しまゝの御苦勞の道を御通り被下てきくも見るも涙の種に御座候あゝ御教祖親様を慕ひ現下の天理教会の有様に嘆涙を流す者は一度当地まで研究に出でられん事を日夜祈り居候決して決して無理に御すゝめ申さず候」

十二の菊花の御紋章をその家の入口に表示していると云えば余程天理教のわかつた家に違くない。其の人物も余程熱心なる御道の信者に違くない。これだけに想像がついたけれども余りに手紙が雲を握む様な文章なので筆者にはわかつても読む私には少しもわからなかつた。殊に私にとつて最も奇異な感を起させたのは終の「みかくらうたを去る廿五年祭以前よりの御製を謹写し敬愛する貴下に呈出いたし候謹而御心読被下度候」の文句である。

廿五年祭以前！ 教祖の御かくれになつてから既に三十年である。生前に御遺しになつたのは御神樂歌と御筆先と三下りの御神樂歌と数首の歌とよりないと云ふことを聞いている。其れに去る廿五年祭以前よりの御製其んなものがあるか知らん。

兎に角其れが偽物であつても偽物でなくても発信者が私に対して「誠の道の人と信じ唯一人貴下のみ呈す」

と云ふ厚意に対しても厚く受けなければならぬと思つて座り直して拝見した。形式は御神樂歌の通りで三下りになつている。

一下り目

一ツひろい	せかいの	そのなかに	日本ん	わまで	なるく	になるど																			
二ツふし	きなと	ころわ	日本んど	や	あさひ	のみは	たれ	ひかり	とる																
三ツみな	せかい	から	だん	／＼	と	あさひ	のみは	たに	した	ごを	て														
四ツよ	にも	まれ	なる	日本	んど	や	こゝろ	の	ま	こと	が	ひかり	くる												
五ツいつ	いつ	まれ	い	も	この	こゝろ	か	ゞ	み	の	ご	と	く	に	う	つ	し	を	く						
六ツむ	こ	わ	う	み	や	ま	ど	ろ	の	なか	あ	さ	ひ	の	ひ	か	り	れ	た	す	け	ゆ	く		
七ツな	にか	め	づ	ら	し	この	た	す	け	む	ね	の	う	ち	に	て	し	や	ん	せ	よ				
八ツや	ま	さ	か	た	ち	わ	け	み	ち	を	つ	け	せ	か	い	の	は	て	ま	で	た	す	け	ゆ	く
九ツこ	れ	ま	で	た	す	け	を	し	て	い	れ	ど	じ	つ	の	か	み	と	も	き	も	つ	か	ず	
十を	と	を	ど	この	た	び	この	じ	ば	れ	二	せ	れ	め	づ	ら	し	た	す	け	す	る			

二下り目

一ツひろい	せかいの	そのなかに	やま	と	わ	ま	こと	ゝ	い	わ	れ	て	も											
二ツふし	ん	ばかり	が	ま	こと	れ	も	こ	ゝ	ろ	の	ま	こと	が	さ	ら	ま	ら	ん					
三ツみな	ふ	しん	と	ゆ	う	もの	わ	こ	ゝ	ろ	の	た	て	か	ゑ	ふ	しん	や	ど					
四ツよ	にも	せ	か	い	も	こ	ゝ	ろ	に	も	か	み	の	を	し	ゑ	を	し	ら	べ	ら	せ		
五ツいつ	も	か	ぐ	ら	や	て	を	ど	り	れ	こ	を	き	の	も	と	を	し	ら	づ	し	て		
六ツむ	り	に	と	を	せ	と	ゆ	わ	ん	れ	な	こ	ゝ	ろ	の	ふ	しん	が	あ	り	か	た	い	
七ツ…	記載	無し																						
八ツや	し	き	わ	か	み	い	の	ぜん	じ	や	と	を	し	ゑ	を	い	た	わ	み	の	う	ち	や	
九ツこ	れ	で	ぜん	じ	が	わ	か	り	た	ら	こ	を	き	の	も	と	を	ゝ	し	ら	べ	ら	せ	
十を	と	て	も	か	み	な	を	よ	び	ら	せ	ば	し	か	り	し	や	ん	を	せ	な	ゝ	ら	ん

三下り目

一ツひろい	せかいの	そのなかに	の	こ	し	を	い	た	る	し	き	ひ	つ	を											
二ツふ	か	い	は	な	し	わ	じ	き	ひ	つ	や	よ	め	ど	わ	か	ら	ん	だ	ん	ね	ん	な		
三ツみな	せ	か	い	の	む	ね	の	う	ち	し	き	ひ	つ	よ	め	ど	も	わ	か	ら	い	で			
四ツよ	を	こ	そ	つ	と	め	に	つ	き	な	が	ら	じ	き	ひ	つ	ま	も	ら	ん	だ	ん	ね	ん	や
五ツいつ	いつ	ま	で	い	も	ま	も	れ	よ	と	の	こ	し	を	い	た	る	じ	き	ひ	つ	を			
六ツむ	か	し	に	か	わ	ら	ん	た	す	け	を	ば	す	れ	ど	わ	か	ら	ん	だ	ん	ね	ん	や	
七ツな	ん	ぼ	し	ん	じ	ん	し	た	と	て	も	じ	き	ひ	つ	ま	も	ら	ん	だ	ん	ね	ん	や	
八ツや	ま	の	な	か	い	と	い	り	こ	ん	で	じ	き	ひ	つ	ま	こ	と	を	た	づ	ね	れ	た	
九ツこ	ゝ	わ	こ	の	よ	の	し	は	さ	ら	め	じ	き	ひ	つ	を	し	ゑ	を	せ	な	な	ら	ん	
十を	と	を	ど	この	た	び	この	し	ば	れ	こ	ゝ	ど	の	ま	こ	と	を	さ	ら	め	さ	す		

意味はわかっているが何うも用語が教祖のお書きになつた御神樂歌と違ふ様である。

例えば一ツひろいせかいのそのなかに

日本んわまでなるくになるど

の如き

二ツふしきなところわ日本んどや あさひのみはたれひかりとる

の如き播州訛りと云おうか何処の訛りと云おうか兎に角大和の方言とは違つた方言で書かれてある。

其れで元来此の御歌が一見れば教祖御昇天後の御作らしいが一何うして出来たのかさえ知らない私はこれは適切に誰かの偽作に相違ないと思つた。其れで私は津田氏に対して此の御神樂歌は何うして出来たのか製作の由来を尋ねてやつた。四五日すると其の手紙は「受取人不在ニ付返送ス」と云う附箋がついて返つて来た。

何れ本部へ帰つたら私の所を訪ねると云ふのであるから委細は其の時わかるだらうと其の俣に放つて置いた。二週間計りすると二人の青年一人は手鞆をもつて一が入つて来た。其の鞆を持った青年が池田と云い持たない方が津田と云つて当の手紙の発信者である。

此の両氏の談話で手紙の意味も御神樂歌の出来た由来も始めてわかつた。

津田氏の履歴は手紙によつてほぼわかっているが私が今此処で紹介せんとする二代教祖の最初の発見者であり且つ最初の紹介者である池田氏の履歴が明かでないからこれを明かにして置こうと思ふ。

池田氏は横浜の富豪に生れ何不自由なき身分であつたが二十八歳の時天理教を信じたため家より勘当された。其れから氏は氏の家の裏山の墓地に接した洞穴を住居として昼はお助けに町に出で夜は冷たい洞穴に帰つて疲れた身を横えるのであつた。氏は現今の天理教々師が尽せ運べの一点張りで信徒を苦しめるのに憤慨しお助けに行つても病人が助かつてしまえば再び其の家に行かず勿論御礼は一文も受けなかつた。従つて氏の収入と云つても元よりあらう筈がなく自分の内の畑の大根を引き抜いて生まのまゝかじり水を呑んで其の日を通つた。其のために身体は次第に衰弱して声も出なくなつた。然し其れも馴れるに従つて次第に何等の苦痛も感じなくなり却つて水と大根の中に無限の甘味を感じる様に至つた。

其う云ふ簡易生活も夏季は比較的凌ぎ易いのであるが冬季になつてはより大なる困難を伴ふのである。氏は寒さに向ふと近所より鋤を借りて来て横穴を掘り藁の屑を沢山集めて来て其の中に埋まつて眠つた。勿論氏は勘当の身であるから着換えと云つても持つていな。夏冬通して一枚の羽織に一枚の着物と一枚の袴とで過さねばならなかつた。其れにも係らず氏は毫も辟易せず寒中裸体になつて氷の張つている水の中へ飛び込んで心身の修養に力めた。其れが三年、其の結果氏は一種不可思議な通力を得た。お助けに出ても不思議に助かる。随分不可思議な難病や奇病迄助かる。氏の評判は大したものである。

彼の先達さんに一つ拝んで貰おう

と皆な氏の姿の町に顕われるのを待ちかねている。其処に蓬々と延びた髪を一束に後に結んで一本歯の足駄をはいた氏の姿が顕われると彼地の娘さん此地のお婆さんが呼び入れて拝んで貰ふと助かる。お礼を出しても取らない。余り不思議なので誰か氏の跡をつけたものがあつて始めて氏が洞穴の中に住居していることを知つた。其れが去年の冬である。其れ迄は誰も氏が何処に住み如何なる生活をしているかを知つたものがなかつた。其れからと云ふもの今迄氏に助けられた人達は先生を彼云ふ洞穴の中に置いてはすまぬと云ふので互いに贖金して俄かに一万円の教会を普請することになり天理教が不評判なので名を大和教会と命名して水火風と大神宮様と明治天皇様を祀り官の許可を得た。其れ迄氏は教導職の免状をもたないで布教するのは不都合だと云ふので警察へしばしば拘引せられんとした。氏が己は信者から一文も貰つたことはない。却つて此方で施しをしているのだから警察へ行く必要がないと云つて頑として応じなかつた。

これより先き氏は神の御告げに依り貝殻だとか灰だとか云ふ廢物を利用して体裁の美しい且つ防火力と耐久力とに富んだ新式の屋根の葺き方を発明し、其れを或る所で応用した所我もと頼みに来るものが多く目下非常に好評を博しつつある。氏は先ず町内にブラ／＼と遊んでいる者を集めて其れに仕事を教え日給を与えた外に煙草代として幾分の心付けをするから皆喜んで働く。其うして余つた利益は大抵貧乏人に施してしまうか病人の見舞になつてしまふ。

然るに今年の一月になつて氏の脳中には兼て聞いていた三十年祭には神が表へ顕われると云ふ一言が明瞭に浮んで来た。其れで兼ねて懇意にしている坪川と云ふ天理教の教師の許へ三十年祭には果して神が表へ顕われるであらうか何うかと云ふことを尋ねに行つた。

此の坪川と云ふ教師は、教祖より夢に何うか横浜に行つて教師の教師になつて呉れ。講社はつくらぬで良いからと云ふ御告げを蒙つて横浜に出て来た人である。其の人が池田氏

の尋ねて行く前の或る晩に年寄りのお婆さんが夢に顕われ
「爺！ 爺！ 其方は長い間御苦勞であつた。此の度の三十年祭には本部の神殿に五日間
姿を顕わすから尋ねて来る者に教えてやつて呉れ」
とお告げになつた。其処で池田氏が尋ねて行つた。三十年祭には神が表に顕われるか何う
かと云ふことを。其の時坪川氏は云つた。
「三十年祭には神が表へ顕われることは確かである。必らず三日なり五日なり顕われるに
違いない。けれども其れは本部の人達には顕われない」
と。池田氏は此の坪川氏の一言を信じ
「ヨシ其れなら己は何うしても大和へ行つて来る」
と云つて正月信徒の家を拜んで回つた時貰つた包金の中十五円だけ自分の旅費にして後は
人にやつてしまい其の金を持つて理の親に当る老夫婦の所へ寄つて其の内一円の金を神様
に供えた。然るに老夫の留守を守つていたお婆さんが大和へ行つて来るには十円あれば沢
山だから何うか五円だけ貸して呉れと強請まれるので止むを得ず五円貸し信州の稲荷山支
教会へ回つて湖東の詰所に着いた頃は囊中余す所タツター円であつた。けれども其の金も
何時の間にか失くなつてしまい氏は全く無一文となつた。氏は仕方がないから煙草屋のお
婆さんから抵当を置いて煙草二つを借りて喫んだが其れも吸つてしまつたから今度は袂糞
を拾つて吸ふ様になつた。
けれども其の中に氏が余り抵当物を取りに来ないので煙草屋より湖東へ向けて催促に行
つた。其時一円の大金を与えて氏の窮境を救つたのが昨年以來詰所に日の寄進に来ていた
津田千代治氏である。
其う云ふ窮境にあつても氏は三十年祭には神が表へ顕われると云ふ一言を信じて神の姿
を見ない中は横浜に帰らぬと決心した。始めの中は三十年祭の道具片付の手伝をしていた
が其れもなくなつてしまつたから氏は毎日神殿に参つて一心をこめて祈願をしたが少しも
御徴がない。詰所では横浜の男は何うするんだらう、大方金がないから彼して何時迄も喰
い潰しているんだらう！ と云ふ様な陰口を利く様になつた。氏は其う云ふ非難の中にも
信ずる所あつて毎日神殿と御墓地に参詣して此の度顕われる神の姿を一目なりとも拝まし
て頂きたいと相変らず一心に祈願したが少しも御徴がない。いよいよ明日は二十九日目
になると云ふ前の日氏は例の如く御墓地に参拝して
「もし三十年祭に神が表へお顕れになるなら誠に明日と申しては御無理な願かも知れませ
んが一日二日の中に顕われる神の姿を拝まして頂きたい。其れでなければ横浜へ帰らして
頂きます」
と一心こめて祈願した。其うすると氏はウト　と睡くなつて来たのでこれは神様が帰つ
て寝よと云ふことに違いないと思つて詰所へ帰つて未だ宵の中に布団を冠つて寝入つた。
其うすると明け方の夢に白衣をきて羽織をきて袴をはいた五十計りの婦人の姿！ 其の胸
に月日がパッと映つた。氏はこれぞ此の度表われる神に違いないと思つて思わず
神様有難う御座います！
と云ふと夢か現か
池田君！ 池田君！ 参拝に行きましょう
と云ふ声が聞えた。氏は早速はね起きて手水を使つて神殿に参拝し夢に見た人がいるかと
思つて見回したがいない。けれども氏は根気よく昼飯も喰わないで午後三時頃迄神殿の
大火鉢の所で待つていた。そうすると不思議や三時頃になると池田氏が夢に見たと同一の
姿で神殿に顕われた。神様を拜むかと思えば別に拜む様子もなくスツ　と火鉢の方に向
つて歩んで来る。池田氏は夢に見た神の姿と同一なので夢中になつて
お婆さん待つていました！
と云つて立ち上らうとすると
「マア／＼座つて居れ／＼。私はお前を迎えに来たのだ。神様が二世の建て換えの一の道
具が今日立とうか明日立とうかと云つているから早く行つて呉れと云われるので出て来
た。お前には長々御苦勞をかけたな。御苦勞／＼。」
火鉢の周囲には沢山の人がいたが若い男と中年のお婆さんが何か云つているけれども何
が何んだやら薩張りわからぬ。
「お前は水と大根をかじつて三年行をしたらう？」
池田氏は驚いた。實際其の通りであるから。
「お前が袂糞を喫んだことがあるね？」
氏は之れにも驚いた。
「彼は神様が皆させたのだぜ。
お前の内は何百万つて云ふ財産家だらう？
お前は内にいれば何不自由ない身分だけれども其れでは苦勞の味がわからぬから神様が
苦勞をさせなかつたのだ！

御前の内は由緒ある家だ。お前の内には沢山宝物があるだらう。昔は池田丹波守と云つてお前の家は池田家の本家だ！」

池田氏は余りによく知っているので驚いてしまった。

「お婆さんは一体何処の方ですか！」

「私はな播州美囊郡高木村井出クニといふものだ。其う 此処に名刺がある。これをお前に渡して置こう。其処に井出千太郎と書いてあるのは私の亭主だ」

と云つて名刺を池田氏に渡した。

「お前は長い間御苦労であつたな。サア／＼もつと近うお寄り。お前にやるものがある」

袂から卵を一つ出して池田氏に与えてから火鉢の周囲にいる人達に向つて

「貴方方にも上げたいのだけれども此の人は又た別だから」

「サア昆布。これを皆様に上げてお呉れ」

と昆布を池田氏に渡す。先刻から二人の対話を聴いていた人達はただ不思議の感に打たれて池田氏に向つて

「あのお婆さんは一体何んですか」

「親様です。神様です」

けれども周囲の人の不審は中々晴れない。

「お婆さんの手は始終震えていますね。お婆さん病気ですか？」

其の中の一人が云つた。

「其う 私 はこれが病気で始終これだけ震えている。然しこうすると震が止まる」と両手で受ける形をする。

「皆様の中何方でも良いからチョット私の手をもつて御覧」

其の中の一人が手を握ると

「もつとしつかりお握りなさい」

「もつとカー杯に」

其の男がカー杯に力を入れて握ると其の男の身体は球の様に飛び上つてハッハと息を切らして

「何うぞ許して頂きたい。恐れ入りました」

其の男が下ると今度は池田氏に向つて

「今度お前握つて御覧。ウント力を入れて握つて御覧」

池田氏がウンと力を入れて握ると両人の身体が動かぬ。

「此の人は皆様と別ですぜ」

周囲の人には何が何んだかわからぬ。

「皆様には未だ疑つている方がある。何も研究だから私の肩につかまつて御覧なさい。何人でも此処においでになるだけ」

其処で其の火鉢の周囲にいた十七八人の人が皆此の婦人の肩につかまると十八人の身体が皆飛び上つてハッハと息を切らして

「恐れ入りました」

先刻から神殿に参拝に来て此の有様を見ていた本部の青年は其の俣奥に入つて祖霊殿の青年を召んで来て

「彼奴催眠術をやつて人を誑していやがる。不都合な奴だ」

其う云つて側へ来て

「お前は何処の人間だ」

「播州から参りました」

「教会は何処だ？」

「ありません」

「詰所は何処だ？」

「ありません」

「天理教の信者だか信者でないか？」

「天理教の信者ではありません」

「其んなら此処にいることはならん」

「然し神様が五日間此処にいて呉れと申されますから此処に置いて下さい。別に悪い事は致しませんから」

「お前の名前は何んて名前だ」

「播州美囊郡三木在高木村井出クニと申します」

「其れじゃお前の所へ郵便が来ていた」

それから事務所から葉書をもつて来て

「サア」

側にいた池田氏は青年の無礼の態度に身体がムズ して立ち掛けやうとするのを婦人

はジッと其の手を握つた。鎮まれと云ふ暗号である。

神殿の当番の中山重吉氏は屋台の中から眼を皿の様にしている。

池田氏が津田氏から貰つた懐の金で皆に寿司でも買つて来てやろうかと考えていると婦人は

「サアお前に紙入れを渡して置くからこれで焼芋を買つて来て皆様にお上げ」

と云つて紙入を其の俣に渡した。

「お前何処へ買いに行くね？」

「門前の角のおかみさんと所で買おうと思います」

「其う お前は良く私の心を知っているね。彼の人には子供をかゝえて一人で困つているのだから彼の人から買つてやつておくれ」

婦人の精神は何んでも成らん者、不自由なもの貧乏なものを助けるにあるのである。

池田氏は門前の角で焼芋を買つて其の足で福井屋 婦人の旅館 に行き茶椀と茶瓶と座布団とを借り座布団を腰に挟んで帰ると婦人は

「其う お前は良く気が付いた。今皆様にお前がお茶を持つて来るし茶椀を持つて来るつてことを話した所だ。其れからお前其処へ隠しているものがあるだらう」

池田氏は座布団を腰よりとつて婦人にすゝめる。

「お前は本当に親切だね。私は要らぬからお前お敷き」

「エ、其う仰やらずに何うぞ親様御敷き下さい」

其れから周囲の人々に向つて

「皆様にも上げたいけれども其う もつて来られませんかから御免下さい」

「サア其の焼芋を暖かい中に皆様に御上げ」

火鉢の周囲の人達は先刻から青年とお婆さんが分らぬことを云ふから焼芋を買つても喰べると云ふ気もなく二人の顔を眺めている。婦人は焼芋を三つ四つ持つて神殿の当番の中山重吉氏の所へ持つて行つて

「貴ん方は御苦労ですな。詰らぬものだけでも一つ御上り。退屈でしょうから此方へ来てお喰り」

重吉氏もノコ と大火鉢の側へやつて来た。

「貴ん方は御苦労ですな。今に結好にして上げますぜ」

彼れ之れする中にやがて本部の夕勤めの時刻になつた。本部員がゾロ と神殿に上つて来た。すると婦人は池田氏の袂を引いて

「サア帰らう」

「親様お勤めですから」

「マアお勤めなんか良いから帰らう」

青年と婦人は外に出た。

「お前に今夜話があるから福井屋へおいで。其れから明日は里へ行こうね」

「里つて三味田ですか？」

「其う／＼三味田／＼。其れにしては其んな頭をしては行かれないから髪を刈つてお出で」

池田氏は福井屋の前で婦人と別れ湖東の詰所に帰ると卵と名刺を出して大声で

「目的を達した／＼」

と躍り込んだ。外の信徒は横浜の男何を云つてゐると云つて囁いた。其の中に一人池田君の今日逢つた婦人の話を聞いて親様の入り込みに違いないと感じたのが津田氏である。

二人は其の晩打ち連れて福井屋に婦人を尋ねた。そうして徹夜して語り明かした。

翌日三味田に行くために婦人と青年は福井屋を出た。湖東の信徒で大阪の人が一人台湾の人が一人お伴をした。福井屋を出ると池田氏が

「三味田へ行くには此方じゃありませんか？」

と云つても婦人は黙つて池田氏の袂を引いて東の方にズン／＼行き本部の正門側の装束屋へ入つた。

婦人が

「注文して置いた羽織が出来て居りましょうか」

と尋ねるとおかみさんは早速黒木綿の男羽織を持つて来た。婦人は其れを受取つて店先に白褪めたボロ／＼した羽織を着て立つて居る池田氏を呼び入れて

「此の羽織を着て御覧。これは神様がお前のために一番上等の羽織を注文してゝ下すつたのですぜ」

池田氏はただ驚く計りである。何時の間にか此んな羽織を注文してゝ下すつたのだらうと

「親様これ私に下さるんですか」

「あゝ神様が私にお前に着せてやつて呉れと仰つて注文させなすつたのですぜ」

「何うも有難う御座います」

「今日は寒いから其の上に二枚重ねて着なさい」

おかみさんは余り汚い着物を着た青年に新しい羽織を着せるのだと聞いてただ驚いている。婦人は

「お前の此の紋はお前の所の紋じゃないね。これは皇后様から頂戴した紋だ。お前の所の紋は五三の桐だ」

「オウ此の羽織には紋がないね。良し／＼。これは此の俣里迄着て行つて帰つたらお前の好きな紋を書いて貰いなさい」

其れから側の店で下駄を買つて元来た道を引き返して三昧田に行つた。一緒に行つた台湾の人は三年以来の跛者である。

一行に外れた津田氏は遅れたと思つて近道を早足で行つたが一行は三十分程遅れて着いた。着くと直ぐ婦人は裏へ回つて井戸端で拍手四つ打つと不思議に身体が飛び上つた。

やがて座敷へ上つて四辺を見回していたが婦人はシク／＼と泣き出した。そうして教祖の姪に当る静子さんを相手にお前に此う云つて置いたこともあつた、あゝ云つて置いたこともあつた。高い心は持つて呉れるな／＼と呉々も云つて置いたけれども誰も聴分けするものがないのが残念である、と云つて頻りに泣く。静子さんも泣く。婦人も泣く。其処に一場の悲劇が演ぜられたのである。

其の中に婦人は立つて

唐天竺はまだおろか

広い世界の隅々迄も

救いあげるが神の行

と云ふ歌を声美しく歌いつゝ舞いおわると座敷の真中に大の字なりにバタンと倒れた。

前川家の人達も付いて行つた人達も皆驚いたが暫時すると起き上つて

「皆様誠にすみません。私はこれが病気ですから何うぞ御免なすつて下さい」

其れから静子さんを相手に五六時間話したが段々夕刻も近いて来たので帰らうとすると静子さんが自分よりも若い五十三四の婦人を攫えて伯母さん！／＼と云つて離れない。婦人も泣く静子さんも泣く。其処に又た再び第二の悲劇が演ぜられた。

婦人は三昧田に行つて紙と筆をかり

いでたちきたるふるさとや、むかひにきたかまごゝろで、またたちかへる真の火柱

教祖の帰るを日々待ちかねて

かへらわからん思ふわふびんや

の二首を書いたのであるがこれは本部へやらうと思つて神様お書きになつたのだけれども本部へやつてもわからんから此処に置いて行くと云つて其の歌を前川家に残して去つた。

婦人が帰らうとすると婦人について来た三年程足の悪い台湾の信徒は婦人に足を直して呉れと懇願した。婦人は信者の足を撫でて引つ張るとクツンと音して延びた。其の後を撫でて息を吹きかけてやると三年の跛者が即座に立つて自由に歩む様になつた。

これより先き婦人が三昧田へ来る前に三島の店先で痛いと思つて足をさすつていられた。池田氏が「何うしました？」

と聞くと

「私のは直ぐ良くなる」

と云われたそうであるが其の時台湾の人の足の悩みが婦人の身上に映つたのである。

一行は丹波市へ回つたがうどん屋の前に来るとうどんを喰べて行こうと云つて婦人が先に立つて入つた。ついて行つた大阪と台湾の信徒は遠慮して入らぬでいると婦人は

「うどん屋も入つて喰べて呉れる人がなければ助からん。これも助けだから入りなさい」

と云つて一同を入れた。立つ時池田氏が払おうとすると婦人は其の金をとつて池田氏にやり自分の金を出して払をして三島へ帰つた。

帰ると一行よりも早く前川の若主人梅蔵氏が福井屋へ来ていた。用は婦人に是非もう一度三昧田へ来て戴きたいといふことであつた。婦人は其の招待に応じて其れから三日目に再び三昧田に行つたところ非常に歓待して御馳走したといふことである。

婦人は始め三島へ来た時唾で来た。其れで福井屋へ泊るにも筆談で泊つた。福井屋でも始めの中は詰らないお客様の様に思つて座敷も粗末な座敷を当がつていたが段々経つと凡人でないことがわかり座敷をかえるやら待遇をかえるやら出発の際は宿泊料も要らぬと云ふやうな有様であつた。其れについて婦人は語る。

「私が丹波市の停車場を降りると唾になつて一口も利けない。福井屋さんに行つた時も唾である。仕方がないから筆談で何うか一晚泊めて戴きたいと云ふと福井屋さんでは私の所では宿錢をお先きに戴きますと云われる。宿錢は上げますから泊めて下さいと云つて泊めて貰ふたのだが其れが立つ時には宿錢は要らないと其れ程挨拶が変りました」

と。

三島に滞在の期間は確かに二月十八日より二十二三日の間であると聞いた。其の間に湖

東では大分婦人の信者が出来事務所では大分制止に骨を折つた様である。

福井屋では婦人が来ると間もなく子供が眼が悪くなつたが婦人にお助けを乞うと眼をねぶつて呉れられ其れで良くなつた。又た二十三日には本部婦人会の例会で今度福井屋の主婦が話す当番に当つたが何か話の材料を教えて戴きたいと願ふと書いて与えられたのが次の身の心得である。

みのころゑ

みわけきゝわけこのかみわけ。みづとひとわかせにそう。かせはこのいきにそう。日々うつるかゞみのみち。をもうころにとりわけて。つらしをわすれよろこびを。日々つめばてんよりの。みとくをさずけ下されば。心のほこりはらいけり。うれし／＼に日ををくり。はんじよのもとにまもりをく。

福井屋の主婦は果してこれを話題として婦人会の席上で話されたか何うか知らないが噛み締めて見れば見る程無限の味のある歌である。

婦人は家を出る時お前の様なものは二度と帰つて来るなと云つて夫より追い出されたのであるが三島へ着くと内(播州)へ向けて手紙を出した。其の手紙の文句は

「むかいにくるならまごころでこい。井出さん一人でよろしい。ふじんのかたはいりません。かみさまがどのやうにまうしてもまつよしことふさのりやうにんおともするとまうしてゐます。」

と云ふのである。二三日経つと婦人の夫千太郎氏は迎いにわざわざ三島迄やつて来た。而して婦人を連れて播州に帰つた。其の時池田氏は始めより婦人に随行して播州迄行くことに極まつていたが津田氏は停車場迄印半天を着て見送りの姿をし停車場で印半天をぬいで播州迄随行した。

汽車の中で井出氏は二人の顔を見て笑っている。

「何んですか？」

と訊ねるとマア内迄お出でなさい。面白いものを見せて上げるからと。

之れより先き三年程前から待宜言房なる二人の神が憑いて色々の御託宣があつた。待宜といふ神の出る時は婦人の顔がキツイ恐ろしい顔になり厳格なことを云ふ。又た言房といふ神の出る時は柔しい顔になり柔しいことを云ふ。其の待宜と云ふ神の話に

「今度横浜には大和教会と云つて一万円の普請が出来る。其れが出来ると皆さんをただで連れて行つて富士山も見せてやる。軍艦も見せてやる」

と。其れが今度池田氏に一万円の普請が出来ると云ふことを聞いて播州の人達はこれが待宜さんかなこれが言房さんかなと云つて皆なビックリした。

夫の千太郎氏も婦人の口からしばしば待宜言房の言葉が出るから何んな神か神の正体を見せると云つて婦人に迫つた。婦人は其の度に

「今其の神は横浜で洞穴の中に住み水と大根をかじつて行をしている。今見せると皆様ビックリして病気になるから今少し経つと連れて来て見せます」

と云つていた。今度婦人の伴をして行つた二人の青年が其れだと聞いて信徒は意外の感に打たれたのである。

二人は播州に滞在すること一週間。其の間に旧の正月廿六日即ち真の教祖三十年祭が来た。二人の青年が行く迄は婦人に憑いている。神が天理教の神であることを知らない信徒の人達は二人の青年の来訪に依り臆げに此の神は天理教の神であることを悟つたものもあつたが悟らないものゝ方が大部分である。其の有想無想が寄り集つて天理教祖の三十年祭を行つた。神様はイソ／＼として勇んでいられる。お膳が並ぶと正座には婦人其の左右には夫千太郎氏と待宜言房の兩人。

其の時の婦人即ち井出クニ子は井出クニ子ではない。教祖である。其の言葉も平常と違つて權威を帯びている。

亭主！

ハイ

結好やな

ハイ 結好で御座います

普段は狐憑だとか稲荷様だとか云つて苛めている夫も此う云ふ時は強いて逆わぬ。今度は待宜(池田氏)に向つて

待宜！

ハイ

待宜結好やな。今日は教祖の三十年祭だ。本部では新をやつている。これが本当の三十年祭だ！ 結好やな。

ハイ結好でございます。

言房！

.....

言房！
ハイ
結好やな
皆様充分祝つてやつて下さい。
其れから酒宴に移り歌ふ踊る。夜の十二時頃迄呑めや歌えの大陽氣大騒ぎを演じた。其れから一旦酒席をお開きと云ふことになりこれから式だと云ふ。
サア待宜祝詞を上げい！
池田氏は祝詞を上げた。其の時池田氏は座つた俣前に三尺も飛んで出た様に思ふが祝詞を上ぐる瞬間は夢中で何もわからなかつたと云ふ。
此う云ふ具合で天理教徒の全く思いもつかぬ意外な土地で本当の三十年祭が行われたのである。

二人の滞在中朝起きると枕許に次の歌があつた。

八ツほこりのその中で
ほしいをしいをうちわすれ
うか／＼こゝまでついてきて
うれし／＼で日を暮らし
国のみやげにするわいな
八ツほこりのそのなかに
かわいにくいをうちわすれ
しらぬところにすむ人に
まことの心さづけをく
八ツほこりのそのなかに
うらみはらだちうちわすれ
をもうこゝろのそのなかに
めづらしたすけがあらわれた
八ツほこりのそのなかに
よくにこをまんうちわすれ
日々つもるよろこびや
きよそのまことをもいけり

二人は此の歌を懐にして一先ず二世の建て換えの地場を去ることにした。去るに望み婦人は金五円と手提鞆とを与えて

言房は小遣をもつている。これはお前にやる。
其れからお前に云つて置くが言房は火だお前は水だ！ 言房があばれ出したらお前が鎮めてやらなければならん。もしお前の手に余つたら奈良から春日を出す。
と。其の後間もなく此の言葉が事実となつて表われたのである。

二人は高木村を出で、此の新福音を伝ふべく三十余ヶ所の天理教会を回つたが年少氣鋭の津田氏は至る所激烈なる教会攻撃をやるので池田氏は蔭に回つてあやまり役にならなければならなかつた。かくの如く廻り／＼つて二人は奈良へ歸つたが奈良で湖東の集談所で二人の今日迄の実験談をやると其処に聴いていた奈良兄弟活版所の吉田岩次郎氏は早速其の翌朝家を飛び出して播州に向つた。これが婦人の所謂春日である。

二人は奈良で徹夜して話し続け翌日三島へ来て何処にも寄らず直に私の所を訪ねたといふことである。其れが三月の十七八日かと思ふ。

私は二人の話を聴いてこれこそ自分の待ちかねた第三の天啓人だ！ と云ふ思想が稲妻の様に頭を往来した。其れには何が故にと云ふ様な理屈を挟む余裕がなかつた。其れと同時に彼の疑問の手紙と疑問の御かぐらうたの由来も明瞭になつたのである。

二人は夕刻迄話して去つたが二三日経つと本部の門前に貼紙が出たと云ふことを聞いた。私は其の文は皆かつたが後で聞けば播州ではチャンと一人の青年が本部で暴れ出していることを知り吉田氏に促して

「お前早く行つて若い者の乱暴を止めて呉れ」
と云つて三島に向つて急行させた。吉田氏の三島に来た頃は上せ切つた青年等は要所／＼の重なる場所に通つて貼つて回つた後であつたが

「親様より今其う云ふことをしても埃の中に矢は立たぬから今暫時待て」

と云ふ命令であるといふことを伝えて一々又た剥いで回つた。

其の時婦人より二人の青年に寄せた手紙は即ち
「かみのみちせくないそぐなをやをもへ。こゝろのみちのつくまでわふたりもろともしづめしづまれ」

なにごとともわすれるな

田両氏へ
これである。

其れから吉田氏は
「私の通知する迄二人を預つて置いて呉れ」
と云ふ婦人の命令に依つて二人の青年を吉田活版所へ連れて帰つた。其の後数日経つと三
月廿七日には高木村の伊勢詣りの団体五十余人の中に婦人も混つて奈良へ来るといふこと
を津田氏が知らせに来て呉れた。それで私は二十七日丹波市の三番で奈良へ行き吉田活版
所を尋ねた。吉田氏も新宗教の愛読者で私の名前も知つているので早速出て来て奥に招じ
て呉れられた。奥には池田津田の両氏がいた。

三人を相手に色々話している中に昼になつた。婦人の着駅は二時何分の予定である。然
し或は不意として其れより早いかも知らないと云ふので昼飯を戴くと直ぐ停車場に迎いに
行つた。行くと間もなく十二時四十八分の汽車が着いた。婦人の乗つていた汽車はこの汽
車であつたのである。一行は五十五六人の団体であるが何れが私の逢わんとして求めてい
た婦人であると云ふことは直ちにわかつた。

婦人は何地かと云えば丸顔で福德円満といふ相を備えている。年齢は五十四五でテッ
リと肥り背は低いが全然全身火と熱と力と光との権化の様である。見るからに暖かい懐し
い感を與。髪は切り髪にして後にチョット結んである。

汽車から降りて迎いに出た私共に暖かい会釈を與え一行の人達をいたわりながら停車場
の構外に出て行く。聞けば一行の中に汽車に酔ふ人達が十七鉢人あるのであるが婦人が同
乗すれば単に汽車に酔わない計りでなく一行中一人も病人を生じないのである。其れで自
分は何も伊勢詣り等したくはないけれども人に頼まれてついて来たのである。事実婦人を
頼りについて来たものは一行の半数以上で其れだけの人達は婦人が今此処から帰るといえ
ば直ぐ後について帰る人達である。婦人は実に其れだけ村人より渴仰せられ信頼せられつ
ゝあるのである。

私は迎いに出た池田津田楠原等と云ふ人達と共に婦人の前に回り後に回つて其の一言一
行を注意するに実に見境もつかぬ大人物なることをツク／＼感じた。これが婦人より得た
第一印象である。

婦人は吉田氏の宅へチョット寄つて釜屋旅館で一同と共に休息してやがて打ち揃つて奈
良見物にと出掛けた。私は一言でも余計に婦人の言を聞きたいと思つて後尻／＼ついて回
つた。

春日の道を歩いている時津田氏が私の現在の事業と教界の人々の其れに対する態度につ
いて婦人に説明すると婦人は

「天理教の人達には其れが自分達のためになされていることがわからないのです。私等も
此うして人を助けるために苦勞をしても世間では阿房か氣狂いか位にしか思つていな
い。何んでも人を助けるには阿房にならなければ助けられません」

阿房にならなければ人を助けられん。実に其の通りである。人並のことを言い人並のこ
とをしていて何うして人を助けることが出来やう。本当に人が助けるには何うしても阿房
か氣狂いにならなければならぬ。実に至言であると思つた。

其の日は暖かい日ではあつたが私共にとつては汗の出る程暖かい日ではなかつた。然る
に婦人は熱くて／＼仕様がなないと云つて薄衣になられた。而して云ふ。

「私は三年程前から冬でも身体が熱くて／＼何うも仕様がな。夜寝る時は裸体になつて
置に肌をすりつけなければ寝られない」

熱は慈悲である。もつて如何に婦人の精神が大慈悲心に燃えているかどわかる。

私の此の随行中に得たもう一つの収穫は大仏より南円堂に出る小路を歩いていた時婦人
は路傍の杉林を見て

「人間も杉の様に真直に延びると結好やけれどもな」
と嘆ぜられた。何んでもないと思えば何んでもない言葉であるが味えば又たこれ程意味の
深い言葉はない。恐らく婦人の人間教育の標準は此処にあると思われる。

私共は旅館で婦人に別れて吉田氏の宅に帰つたが留守中に福井氏が来ていた。

吉田氏は私に向つて
「何うお思いになりますか」

と訊ねた。私は
「真物です。確に真物です。偉いお方だ！」

「其れで私も安心しました」

池田津田両氏も

「今迄は私共計りで心補足て仕様がなかつたのです。これで私共も安心しました」

夜になつて吉田家より婦人の旅館に迎いに行くと婦人は夫と嫁さんとを連れておいでに
なつた。と云ふのは吉田家にては岩次郎氏が婦人を信心し出してからは商売其つ地除けに

してお助けに出るために家庭に一悶着あつた様である。其れに対して婦人より手紙が来た。其の意味は兄さん姉さんの云ふ事をお聞き家業の隙にお助けをせよと云ふことであつた。今度吉田家に来られと云ふのは其の事情治めのためである。従つて多少込み入つた話があるだらうと思つたが一向其う云ふ様子はない。来ると一通りの挨拶がすんでから神憑以来の道すがらを話し此んな阿房の氣狂いのために内々すれあふやうなことがあつてはすまない。其れで今晚御邪魔しに上りましたが私の所の教は何も内を放つて置いてお助けに出さえすれば良いと云ふことは教しえん。其んなことした所で第一神の受取りがない。内も助けなければならぬし外も助けなければならぬ。其やから岩次郎さんも昼は一生懸命で兄やんや姉さんの云ふことを聴いて夜だけお助けさせて戴くことにしたら何うでしょうな。井出さん！ 夫を立て、決して自分の意見を立てない。此の巧妙なる一言の裁のため一家の事情がピタリと治まつた。而して主人も主婦も即座に婦人の信者になつた。ただ三番目の兄さん（吉田家は四人の男兄弟で岩次郎氏は一番末弟である）のみは厭く迄疑つて居る様子である。氏は第一に先ず池田氏に其の事実なる証拠を見せよ。もし見せることができなければ横濱迄行つて事実の真偽を確かめると云ふのである。随分思い切つた突撃である。周囲の人達は池田氏が如何なる返答をするか返答次第に依つて一場の活劇が演ぜられるであらうと手に汗を握つていたが池田氏は何も答えなかつた。其の時の婦人の言葉が面白い。「貴方は池田さんが詐をついて居ると思つておいでになるから腹が立つ。然し貴方が彼奴己を誑しやがる。何処迄も本当だか詐だか突き止めなければならんと云つて横濱迄行つて見た所で何にもならない。其う云ふ事を一々心配し出したら夜も寝られん様になる。其れよりか人間と云ふものは皆な詐つきなものだと極めてしまえば腹が立たない。彼は又た己を誑しに来た。私も一つ誑されて聞いていやうと思つていたら腹が立たない。な皆様其うじゃありませんか」

氏も恐れ入りましたと云つて池田氏攻撃は止めた。今度は婦人の身体の特徴即ち始終震動していると云ふことに非常に疑問を懐き手を握つて見、離して見して試験して居たが終いに庭石を上げたならば本当に神の力だと云ふことを信じやうと云い出した。

其の時婦人は笑つていたが
「もし私が其の石を上げたなら貴方は私に何ないにしてくださる！」
と尋ねた。

「頭を下げて恐れ入ります」
「私は人様に頭を下げて戴くことは勿体なくて能うしません。其れでは私の方から此の様に頭を下げてさして戴きますから其れで許して戴きたい」

流石に無駄の氏も婦人の此の謙遜なる言葉に返す言葉なく共に恐れ入りましたと云つて引き下がつた。

これより先き井出氏が神の云ふことを聞かない時滅多に怒ることのない神様も怒つて其処等にあつた巨石を井戸に向つて投じた。其れがために今迄は滾々と湧き出た水晶の様な水がピタンと止まつた。井出氏は人を十五六人使つて漸く其の石を挙げたが依然として水は出ない。神様の云われるには

「亭主が神の云ふことを聞かんから井戸の水を止めた。亭主さえ悪かつたと云つてあやまれば石があつても出る。あやまらなければ何時迄たつても出やせぬ」

井出氏も仕方なく神様の所へ行つて心得違ひを致して申訳ありませんと云つてあやまつた。其の瞬間より再び水晶の様な水が滾々として出る様になつた。

其う云ふ無限の怪力があるのだから普通行の未だ積まない増上慢の行者ならば怪力を顕わして後何彼と文句つけるのであるが婦人は其う云ふ無用の所に神の力を顕わすことを悦ばぬ。自ら頭を下げて殺氣の充ちた一座の空気を和げた力と云ふものは到底凡人ではない。

私は始めより婦人と膝つき合わせる迄近く接近していたから婦人は一番先きに私に向つて手を差出されたから良くわかつて居るが彼の力が決して人為的に出るものではない。正さしく宇宙の大動力の分身に違ひないと感じた。神である。何うしても神である。

婦人は三番目の兄さんの去つて後一同に向つて
「此の中で彼の方が一番心が直ぐですぜ」

と云つて讃めていられた。
話は進んで今日の天理教のことに及んだが婦人は謙遜にして柔和な調子で語る。

「私は何も天理教の講社をとつて何うしよう此うしよう云ふ欲は微塵もないけれども七年前以前教祖に頼まれて広い世界を探しても貴方を置いて頼むべき方がない。何うか天理教を助けてやつてくださると頼まれ、其れならば折角これ迄に大きくなつた天理教を今此処で潰すは惜しいことである。助けてやりたいと思つて廿五年祭の時手紙に写真を添えて切手を三枚入れて管長様宛に出したけれども返事がない。其れで手紙に写真を取返しに行く

と誰も相手にして呉れない。其れで大和は厭で／＼仕方がないけれども今年又た神様が何うか大和へ行つて五日間神に姿を顕わしてくれ。其れでなければ三十年祭には神が顕われると云ふ言葉が詐になる。何うか行つて呉れと仰せになるので行つて神に座つていと。

お前は何処の信徒だ？

何処の信徒でもありません

詰所は何処だ？

詰所はありません

天理教の信者か信者でないか？

天理教の信者ではありません

其れじゃ此処にいることはならん

と突き出さん計りの権幕。

神様が五日間此処に座つていて呉れと仰せになるから置いて下さい。何も悪いことは致しませんからと云つてやつとあやまつて置いて貰つた。本部と云ふ所は其う云ふ所です。日本国中尋ねても吾が宗旨だから参らす吾が宗旨でないから参らせないと云ふところは恐らく天理教だけで御座いましょう。彼云ふことをするから外の参り所は何宗の人も来て参るが天理教だけは自分の宗旨の人より外参つて来ない。彼んなことをしないで何宗の人出も参詣に来たら良う参詣に来て下されたと云えば来た人も満足して帰る。其れが繁盛の元となるのだけれども其れがわからない。

其れに第一三島に行つても宿屋がないから沢山の人が行つても泊ることができない。詰所があつても詰所は信徒より外泊めない。神様の歌に八ツ大和は豊年やと云ふてあるけれども何時迄経つても大和が豊年にならないのは詰所を建てゝ其処でありつたけ絞取り取らうとするからです。今の様にしては三島の商人も教会に出入する商人だけ儲かつて他の商人は儲からない。其れでは万人助けの道とは云えん。宿屋も立てゝやらなければならないし魚屋も立てゝやらなければならない。其れが互い立て合い助け合いの道である。

本部へ行つて見ているとお授けを戴くために遠い処から来て二日も三日も待つている人がある。彼んなことをしないで其の日／＼に運んでやつたら何れだけ人が助かるかわからん。其れがわからんから仕方がない。

お授けのお礼でも今は信徒からとつているけれども彼は信徒からとるべきものでない。彼して布教してくれる子供があればこそ親の光も出るのであるから彼は却つて親からすべきものである。

其れにお授けを戴くには支教会分教会大教会と順序を経てお授けを戴いて又た其の上に順々とお礼をして回つている。彼んなことをしているから道がおくれる。順序の道は一切踏むこと要らん。

日の寄進もいけない。今日の日の寄進は神にするのではない人間にするのだから神の受取りがない。此うして私見たいにジツとして自分のしたいこともせず神様の御用をしているのが日の寄進だ。日本国中探しても私より大きな日の寄進をしている人はありませんぜ。

神様の歌の中にありましよう

蒔えたる種はみな生える

といふことが。彼は教会へドシ／＼上げることだと思ふと間違ふ。広い世界に向つて慈悲善根の種を蒔くことですぜ。

何んでも其う云ふ風に広う／＼とつて行かななければならない。其れを今日の天理教では狭く／＼とつて行くから窮屈なものになつてしまつている。

天理の二字これより大きな理は此の世の中にありませんぜ。其の一番大きな理を一番小さなものにしてはいる。

今の天理教は人間教理八分であるから此の上広がらん。これからは教祖の説いたお道を広めなければならない。私は其のお道を広めに来たのですぜ。何も私が偉いものになつて何うしやう此うしやうの欲はありませんのですぜ。何うぞ皆様を偉いものにして私は一番あかん者になりたいとこう思つているのです。

座敷の隅々からは笑声が起つた。婦人は真面目に

いや本当ですぜ。これ迄は乃木大将にしる誰にしる死んでからばかし神様に祀られたのですが其れではだん／＼偉いものが出なくなるから今度は生きてる中に活神様にして上げるのです。而して皆様を活神様にしてしまつて私は一番後から神様になるのです。

婦人が此う語り終つた時一座の顔面には点の光輝が映つた様に思われた。

今の天理教を信心する人は信心すればする程埃を積むばかりです。

教会も今の様に下から絞り上げるだけでは助からぬ。此の道は上から下に向つて尽せ果せと云ふ道ではない。上から下に向つて尽し運びをしなければならない道である。其れを

下から上に向つて尽し運んでいるから低い所の土を高い所に運ぶ様なもので何時迄経つても世界が直路にならない。これからは上に尽し運びは要らぬからどうか下に向つて尽し運びをして下さい。

買物をなさるならなるたけ小さな店から買つてやつて下さい。又たお助けにお出でになるなら何んでも病人を悦ばせてやつて下さい。八ツの埃も説くことはならん。何故かと申せば八ツの埃を説く人は我が身に十六も埃があります。我が身に埃のあるものが何うして人の埃を払ふことができますかいな。

あしきをはらうてたすけたまへてんりわうのみこと
てんりわうのみことといふのは神様をお呼び申すのではありませんぜ。我が身の埃を払つて人の埃を貰い受けさして戴きたいと云ふことですぜ。ですからてんりわうのと云ふ所で右手と左手で確か先方の埃をかゝえるのです。

凡そ此の世の中で人を助けると云ふ心程罪な心がおますかいな。人を助けるのではない。人を助けさして戴くのです。人間に人を助ける力がおますかいな。皆な神様のお蔭で人を助けさせて戴いて因縁を切らして戴くのですからお礼を云わなければならない。其れを己が助けてやつた己が救ふてやつたと云ふ高慢な心が出るから却つて因縁を積むのです。

天理教では理を聞かした人が親と云ふことになつていますが彼は間違つている。理を聞かした人が親ではなくて理を聞いて戴いた人が親である。何故かと申せば先方で聞いて下さつたから此方の因縁を其れだけ切らして戴いているのですから先方を親と立てなければならぬ。其れを今の会長様は己が理を聞かしたから己が親だと云ふていなさる。しかし親と申す方は此の世に月日両神これが実の親後は皆一列兄弟です。親も子もありません。親と云ふのは理が親ですぜ。理より外に親はありませんぜ。理に間違つたら会長様の云ふことでも役員さんの云ふことでも聞かないでよろしい。

諄々として説かるゝ所ことごとく私の理想である。私は実に生れてから以来かゝる大なる悦を見たことがない。婦人は更に語を継いで語る。

今度出来た神様の歌に「ひろいせかいのそのなかに、やまとはまことゝいわれても、ふしんばかりがまことでも、こゝろのまことがさだまらぬ」といふてお嘆きになつていますがあの普請は心の普請で教会の普請ではない。其れを天理教では教会の普請にとつてい

る。
今の神殿を建てるには方々から金を寄せ集めて建てた。其んなこととして建てるのなら誰でも建てられる。皆世界が寄り合ふて出けたち来るがこれ不思議で自然と寄り合ふて出来てこそ不思議である。一厘の金でも徴収して建てた屋敷は埃屋敷や。

今度の普請等も彼んな大きなことをして信徒の金を無徒なことに費している。管長にしる信徒にしる同じ人間です。人間は一人一畳敷あれば沢山ときめたものである。其れを自分計り大きな所に住んで甘い物を食えば其れで良いものだと思つている。

(私は直接聞かないが他の人達の聞いた所に依れば今度の普請にはいくゝら要つて中に取り込んであるものもあるといふこと玉恵さんがもし男であつたら腹切らんならん所であると迄極言せられたそふである)

私は何も天理教について云ふことはありません。ただ一つ本部の大將が出て朝晩のお勤めの後に皆様御苦勞様で御座いますと其れを一言云つて呉れゝば其れで良い。後は何も云ふことはありません。当夜集つた人々は吉田家の親戚か知己かにあらざれば大抵皆な婦人の人格を崇拜して集つた熱心なる信者であつた。当日三島から行つたのは私と本部の福井君と湖東の井上君とであつたが井上君は暗くなつてから来た。

死はかつて播州の婦人に当てゝ手紙を送つて一身の去就についてお指図を求め手紙の余白に返事を書いて呉れと請求してやつた。普通の人ならば手紙の余白に返事を書いて呉れと云えば怒るのであるが其処は神様である。丁寧に返事を認め終に次の二首の歌を書いて送り返された。

其の一首は
神の心になるならばちゑがくもんをうちわすれねてもおきてもまごゝろばかし

もう一つの歌は
ふたをやををもうならちゑがくもんにべんきよしてかきよをたんせにはたらいてところのめいよになるをたのしみ

と云ふのである。
婦人は皆様に神様の御手紙をお目につけなさいと云われたけれども井上君は持つて来なかつたと云つて見せなかつた。其れを婦人は空のまゝ皆に話して聞かせた。

当時井上君は神の道に働くか学校に行くかについて思い迷つていた。其れで此の二筋の道を何れなりと選べといふ意味で此の歌を下されたのである。其の後井上君は両親と教会との意見に従つて学校へ行くことになつたが当夜はただ嬉し／＼で氣狂いの様になつてい

た。

お話が一通り済んでから身上事上に悩んでいる人々のために願いをかけられたが其の時婦人の手は炎が天に燃え上る如く燃り上つてやがてポンと音して両手が膝の上に落ちると神が降る。

問いに従つて病人には心の持ち様と薬の指図をなし、事情に苦しむ人には其れ／＼解決の方法を与えてやる。教祖も病人がお願いに来ると心の持ち様と薬の指図をされたが婦人の指図も全然教祖同様である。

二者共決して今日医者云ふ様なハイカラの薬は用いぬ。或は笹の根であるとか或は稲の穂であるとか或は黒豆であるとか或は頬突きであるとか或はバナハの皮であるとか云ふ様な廃物利用である。

其れに教祖在世中は時々力試しと云ふことをなされたが今の婦人のやり方と少しも変らぬ。二世の御神楽歌の中に、

六ツむかしにかわらんとすけをばすれどもわからんざんねんや
と云ふ節がある。事実其の通り昔に變らん助けをしているけれども今日の天理教徒には其れがわからないのである。

お願いがすむと当夜其の席に来ていた田中と云ふ人の子供が足が曲らぬで困っているから是非婦人に御足労を願いたいと懇願されて婦人は田中死の家に行かれた。其れが十二時頃であつた。

当夜婦人は旅館を出る前は腹が張つて／＼仕方がなく按摩にかゝつていたのであるが出掛けると良くなつたと云つていられた。

聞けば婦人は旅館に泊まると苦しくつて／＼仕方がないそうであるがこれは皆万人の悩みを一身に負われる大慈悲心のいたす所である。其れについて婦人の後先について回つて

「此の世の中に神の社となる程辛い事はない。外から見たら神の社になることはさぞ結好の様に思ふかも知れないがこれ程辛い仕事は此の世の中にない。私は神様に罰を当られたのだ」

と。

人は救世主の光榮をのみ見て其の心身の悩みの如何に大なるかに想到しない。私は此の人に依つて始めて万人の埃を一見に負ふて悶え苦しむ救世主の悩みを見た。而して何んとも云ふことの出来ない崇敬の念と同情の感に打たれたのである。嗚呼此の人をもつて誰か阿房とするものぞ！ 誰か狂人とするものぞ！ もし此の婦人をもつて阿房なり気狂いなりとせば（婦人は常に自分の事を阿房の気狂いだと云つて居る）世に聖者はないのである。私は世人が余りに偉人の価値を識別するの能力の鈍きを嘆ぜざるを得ないのである。

婦人が去つてから私共（池田、津田、福井、井上、楠原の諸氏）は奥の三疊で当夜の婦人の一言一行に就て語つた。津田、井上、楠原の諸氏は途中で寝に就いたが池田、福井の両氏と自分とは徹夜婦人のことを語り明かした。

翌朝（二十八日の朝）婦人等の一行の出発は七時何分である。予定の時間前に旅館に行くと既に一行の出発後であつた。急いで停車場に行く一行は汽車が一杯で乗れないで困つて居た。釜屋の番頭が色々奔走しているけれども効験がない。其処へ吉田氏（長兄）が行つて交渉すると直ちに駅員は応じて呉れた。（吉田氏は奈良市会議員である）後で神様は吉田氏を道具につかつて一行の便を計られたのであると却つて婦人の徳を賞讃するのであつた。

私は一旦吉田氏の宅迄歸つて福井氏と一緒に三島に歸つた。汽車の中には現在問題になつて居る松村教正が乗つて居たが私は氏に対する神様の判決。

「松村は管長から取るべきものを取つて自分の懐に入れて居るから勿論有罪である。刑期は重罪一ヶ年半である」

と云ふ言葉を思い出し何んとも云えない気の毒な感に打たれた。

婦人より吉田氏に預けられた池田津田の両氏は国に歸れと云ふ放免の辞令が出たので二十九日暇乞ひに来たのだと云つて池田氏が私の所を訪れた。ちょうど福井君が来ていた所なので三人が播州の話で持ち切つて居ると七時頃（午後）中学の佐伯専制が来た。此処でも亦四人が徹夜して二代教祖の出現と云ふ教界の一大現象について語り明した。

翌日（三十日）は山名の信徒だと云つて二人播州の婦人とは何んな方だかと云つて尋ねて来た。其れに対して三人が代る 自分達の知つて居る範囲に就いて説明した。然るに午後になつてもはや名古屋へ歸つたかも知らんと云つて居た津田氏が訪ねて来た。池田氏は津田氏と打ち連れてこれから湖東の詰所へ寄つて暇乞ひして国に歸るのだと云つて私の所を出た。

次の日（三十一日）午後楠原氏が今後の放心に就て神意を伺ふために教祖の墓前に三日三夜の断食と露営とをするために来たと云ふて寄つて呉れた。私は自分の考が間違つてい

るかも知らないが大切の借物を万人助けに使ふのなら善いが無理な願のために疲労させるのは何うかと云ふ事を語つて氏の無理な行を思い止まらせた。これは私の考が間違つてい
るかも知らない。然し婦人の言葉に
「三島へ行つても無理をしてはいけない。福井さんの所なり大平さんの所なり行つて泊ま
つたが良い。宿賃は此方で払ふから」
と云ふ有難い御言葉があつたそうであるから全く間違つた忠告をしたのでもなかつたと安
心した。

之れより先き私は前日即ち三十日の午後津田池田の二氏が立つてから普段うずいたこと
のない右の小指がうずいて仕方がない。別に耐え得られぬ程強いうずきではないがツン
と来る。私は何のためか知らんと思つていたが楠原氏と話している中に不意に心に浮
んだ。これは播州の親様の召び寄せの電報ではないかと其の事を楠原氏に話すと氏は或は
其うかも知らんと云つて私の考えを肯定して呉れた。

「私は兎に角播州へ行つて来うと思ひますが貴方留守居をしてくださらんか？ 厭になつ
たら表だけ締めて出て下されば良いから」
「米は米櫃の中にあります。醤油もあります。米櫃の中には塩引もあります。野菜が食べ
たければ何なりと買つて来て食べて下さい」

此う云ふ突飛な条件を楠原氏に向つて呈出した。所が楠原氏は早速其れを承諾して留守
居をすと云い出した。私は播州行と決めた。其う決心がきまると不思議に指のうずきが
止まつた。

「其んなら私は今夜奈良の吉田様の所へ泊つて明日奈良から立つことにします。夜具は押
入の中にありますから出して寝て下さい」

此うして私は始めて私の家を訪れた人（其れが私には兄弟以上である）に家を任して夕
方奈良へ向つて出発した。吉田様の所へ行つて播州行を話すと氏は

「其の指のうずきは奥様に何か心配なさつていふことがあるのでないで？」

と尋ねた。私は

「其れは家内にも安心しない所があるかも知れませんが兎に角播州にやらして戴くと決心
をきめたら不思議に指のうずきが止まりましたから一遍播州へやらして戴こうと思ひま
す」

「其れはお出でなさるのは差支えないが私は奥様じゃないかと思ひます」

兎に角其の夜は吉田氏の所に厄介になつて翌四月一日の午前七時半に奈良電車で大阪ま
で行き、大阪から土山迄切符を買つて未だ見ぬ土地に向つて走つた（大阪迄は吉田氏の兄
さんが一手に行かれた）土山へ着いたのは十二時前である。其れから一時間程経つて三木
行きの馬車に乗つた。馬車は田や畑や山や野や林や森やの中を縫うて走つたが所々に大き
な湖水のある所は其の昔米大陸を旅行していた時のやうな気持になつた。
同乗者は子持女が二人と若い女が一人に医学生と私とである。然し何れも途中で降りて其
の代り二人の老人が乗つた。知り合いの中と見えて中々話がはずむ。

大抵見当は極めて居ても要らぬ土地に行くことは不安なものである。凡そ三里程行つた
と思ふ頃私は同乗者の一人の老人に

高木村は未だですか？

と訊ねた。

高木村は此の次の村です。何んといふ内をお訪ねですか？

井出千太郎といふ人の所へ行きます。

其んなら其の家近くへ行つたら教えて上げます。其の家は亭主さんは鍛冶屋をしおか
みさんは稲荷様を信心して中々立派にやつています。良く当りますよ。貴方も見て貰いに
お出でゝすか？

其うです。

何処からお出でになりましたか？

奈良から参りました。此の間此の村の伊勢参りの団体と一手に奈良おいでになつたから
一度尋ねて参りました。

其うですか？ 一度行つて御覧なさい。中々良く当るから。

老人は厭く迄稲荷様だと信じている。

高木村に来ると此の老人は別当に

此の方が此処で降りるそうだから馬車を止めて呉れ

と親切に世話をし呉れた。私は橋の袂で降りて土手伝いに井出氏の宅をたずねた。いっ
てみると田舎には稀れな程小薩張りとした綺麗な家である。内では五六人の老若男女が入
り混つて陽気に騒いでいる。中へ入つて

神様は此方ですか？

と訊ねると正直そうな若い衆が出て来て

此方ですから何うぞお上りなさい
と云つて呉れられた。後で聞けば此の若い衆こそ婦人の子息であつたのである。

神様おいでゝすか？

と訊ねると

今日伊勢詣りの御下向で今鎮守様でお祭りをしています。もうすんだでしょうから迎い
に行つて参りましょう。

と云つて出て行かれた。

伊勢詣りの御下向！ 成る程其れで内中の人出入するのがわかつた。然し自分にとつ
ては全く意外であつた。何故なれば自分はもつと早く御下向の事と思つていたからであ
る。

播衆の家の造りは向つて右が入り口で広い露路になつている。上つた所が六畳で次が六
畳に四畳半二間になつている。神様を祀つているのは次の六畳で白縮緬の大巾の幕に日輪
と月輪とが画かれてある。これは

「人間は月日の下に住むから月日を書いて張つたが良からう」

と云ふ神託によつて拵らえたのであると云ふ。正面には火水風と書き中に心と書いて祀り
右には天照皇大神宮左には明治天皇を祀つている（これは婦人の説明を聞いて始めて明か
になつた）婦人はこれを称して手品の種だと云つているそうである。成る程手品の種に違
いない。

神前には二十一の三宝が三段に並べられ其れに一杯神饌物が盛られてある。

其の一段下の畳の上には四台の高膳が据えられ其の周囲には御馳走が所狭き迄に並べら
れていた。これは今日御下向の御祝らしい。

津田氏の話に依ると入り口に十二の菊花の御紋がついてると云つていたが御紋と云ふ
よりは寧ろ細工である。葉も枝もついている。

暫時経つと井出氏も婦人も祇園囃しに送られて帰つて来られたが鎮守の祝が利いたと見
えて井出氏の顔は大分色付いていた。お二人共私が来て居たには寧ろ意外の感に打られた
ことゝ思われた。

其の夜は所謂御下向の御祝で近所の人達や懇意の人さては鍛冶場の職人衆迄寄り集つて
飲めや踊れの大陽気であつた。自分は偶然此の芽出度い御下向の日に出逢つた計りでなく
親様（私はこれ迄婦人と云ふ言葉を用いて書いて来たがこれからは言葉を換える。何故な
れば婦人は確かに親様に違いないからである）の次の高膳で御馳走を戴いたのは恐縮の外
はなかつた。

酔の回るに連れて一列の人々が手拍子面白く祇園囃しを歌い出し親様迄之れに向つて和
せられて一座の陽気をお助けになつたが私が余りに黙つているので井出氏も親様も心配せ
られて二度も三度も

「此処は此う云ふ所だから悪ふ思つて下さるな」

と弁解されたには自分の無芸無能を恥づるより外なかつた。

蓋し人間が偉大なれば偉大なる程其の人的人格は圭角が少くなるのである。現に親様が
其うである。何処如何なる人にも調和して交際して行かれる所は神ならぬ身には出来難い
ことである。自分の様な融通の利かない人間も此う云ふ場合には困つたものだと自分なが
ら情無く思つた。

其の晩は親様も御疲れになつているから深いお話もなかつた。それにも係らずワザ／＼
私のために御自身炬燵を入れたり床を延べたりして下され

明日神様の話しましょうね

と云つて其れから私が寝てからワザ／＼

寒くないかね

と云つて肩を直して下された。私は何んとも恐れ多くてただ恐縮する計りであつた。

翌朝私が火鉢の側に座つていると親様は手水を使つて手拭を持つた俣火鉢の側においで
になり私を相手に話を始められた。

親様は口を開いて

「私見たいの阿房の処へ貴方見たいな雑誌を作る様な伶俐な方が何しにお出でなすつた？
」

「彼はただお道を研究して自分が正しいと思つたことを皆様に伝えるだけのものでありま
す。今迄は暗隅を手探りで道を求めて来ましたが後を見ても先きを見ても暗闇計り。こん
なに頼りないことは御座いませんでした。其処へ奈良で親様にお逢い申してから私の教を
聞くべき方は此の方より外ないと決心して上りました」

其う申上げるとサア親様はお泣き出しになる。

「神様遙々遠い所を尋ねて来て誠に嬉しい厚う／＼受取ると仰せになる。此う泣くのは神
様の魂が浮いて来てお泣きになるのですぞ」

とお聞かせになつた。其処で親様もお泣きになる。自分も泣く。其れが朝飯前である。側の井出様はさぞ気狂い同士が揃つたものと思われたであらう。

朝飯が済んでから話は現今の天理教に及んだが親様は「天理教は人間教理八分だからもう発達が止まつた。これからは教祖の説いたお道をひろめるのですぜ」

と仰せになり「貴方と吉田さん（岩次郎）とが本部立て換え二世の立て換への一の筆に上つているのですぜ」

と云ふ様なこともお聞かせになつた。自分はただ恐縮して聞くのみであつた。其の日は親様の道すがらと親様の道の上野残念話とで半日を費したが私が天理教信仰に入つた当時の実家の態度から現在の自分と妻との関係を申上げると親様の全身は全然湯上りの後の様に真赤になりイキがポツ／＼と上る。

「神様これだけ御慈悲深いのですぜ」
と仰せになつた。其れについて一度家内の実家まで行つてやろうかと仰せになつたけれども余りに恐れ多いので黙つていた。

暫時してから「其れは今にまとまりますぜ」

と仰せになつた。自分は一身一家の事情の如き他人の耳に入れることを余り喜ばないのであるが其の日は計らずも其れがために親様の慈悲を知る由縁となつたのである。

神の慈悲！ 凡ゆる人間を幸福ならしめんとして日夜神慮を回らさるゝ神の慈悲！ 人間の難儀を救ふためには如何なる艱難も厭わせられぬ神の慈悲！ 其れは言葉の上では知つていたが眼前其れを見たのは今が始めてである。

此の神の慈悲心を見た私は私一身のことについては出来るだけ神様に御苦勞をかけないやうにしようと決心した。

昼飯には下向振舞いに村へお招かれになつて出られた。出られる前に私だけ昼飯を戴いて居ると側に爛して貰つた爛瓶を見て

偉い氣の大きい方ですね
とお笑いになつた。

午後近藤おかく様を相手に話していると三島に留守居に頼んで置いた楠原氏がヒョットやつて来た。一晚留守居をして見たが何うも二人がなつかしくて居耐たまれずやつて来た
と云ふのである。

親様のお帰りになつたのは三時過ぎである。夜になると村のお婆さん達が六七人神様参りの来た。

親様は私と楠原氏とを前に置いて其の人達に向つて引導を渡された。皆様に前から云い渡して置いたでしょう。皆様今の中に百円づゝでも積んで置きなさいよ。今に世界からとられますよと云つて上げて置いたけれども皆様欲が深いから内にはドツサリ金をもつていても神様のために出そうと云ふ人がない。

今になつて見ると私のために千や二千の金は何時でも出そうと云ふ人が出来て来ている。神様の云われる通りである。

然し私が神様になつたからとて貴方方を粗末にすることはありませんぜ。又た私が何処へとられたとて怒んなさんなよ。

私が大和へ行く様になつても二十日は他処へ行つても十日は此処に居ますぜ。これは皆様が今迄神様／＼と云つて慕つて下すつた御礼ですぜ。

私は蓮華の花泥の中に玉があります。だけれども私一人だけ花で居りませんぜ。

貴方方は結好になりますぜ。今少し経つと鼻が高くなりますぜ。難儀するのは私一人と神様が仰ります。

私は前から皆様に云ふて置いたでしょう。若い衆でも寄来しなされよ。神様へ来なければならんぜ。女だけではありませんぜと幾ら一手も来るものがない。

裏の重さん。私は親が死んでも子が死んでも神様嫌いだ拝まんと云つていた。其の人が今になつて私のお伴をさせて戴きますと云つた所で伴は出来ん。今迄一度も神様へ来たことがないものが神のお伴が出来やう筈がない。

其れだから七八年前から子供にも云い渡して置いた（子息作太郎氏を前に置いて）誠の道に心を寄せなければ幾ら子供だと云ふても神様の側へ寄らん様になるぜと。其うでしやらう幾ら自分の親だと一手も私の側には道に功勞のある人の垣根で取り囲んであるから近寄らうと思つても近寄れなくなる。

実に偉大なる言葉！ 偉大なる精神である。神の道には親族はないと云ふのはかくの如き大人格者にとつて始めて事実となつて表われるのである。

之れより先き今より八年程前に親様が胸を叩いて云われたことがある。
「今大和には立派な普請が出来る。其の中に座る者は此の身上様一人かいな」
と。当時周囲の人達は何の事やら薩張りわからなかつたが今や其の 때가近いて来たのである。

不思議は其れ計りではない。八年程前に
「今に此処に汽車が出来ますぜ」
と云われたが当時夫の井出氏は
「其んなことがあるもんか。此んな所に汽車の出来る様なことがあるもんか」
と云つて居たのが今軌道を敷いて居る。二三ヶ月の後には恐らく開通するであらう。

凡て親様の予言して置いたことが其の通りキチンとなつて来る。
「皆様用心しないと今に神様を他処へとられますぜ」
と予言せられていたことも今や事実となつて表われかけて来た。当夜来て居たお婆さん達を始め播州の人には其れがわからぬのだ。此の神様が何んな神様やら身上様（播州では親様のことを身上様と呼んでいる）が何れ位徳の高い方だやら皆目わからぬのである。今度私共（池田、津田、吉田、楠原と自分）が行つたについて多少眼が醒めかゝつた様であるが未だ大体は五里霧中である。神様他処へ行く／＼云われるけれども何処へ行くものか位の調子である。

引導を渡されてしまふと聞いていたお婆さん達は順々に居睡りの競争を始められた。彼地でコックリ此方でコックリちょうど人形様の様である。其れでも神様少しも怒りはしない。

「皆気が休まつてるから寝入られるのだ！」
少しもお構いにならない。これは常人の到底真似の出来ぬ所である。
私も夕食を戴いてから少し睡むくなつたから火鉢の側にコロリと寝転んで居ると親様はワザ／＼毛布を持つて来て着せて呉れられた。其れ位親切なものである。

お婆さん達の帰つたのは十二時頃である。其れ迄は親様から皆様帰つてお休みなさいよ
と云われても中々聞かない。依然として居睡の行を続けてお居でなさる。其れが毎夜の規定だそうである。

親様は今夜も亦
子供が藪入りに帰つて来た！
と仰せになつて井出氏と二人で私と楠原氏の二人の床を延べて下された。
翌三日楠原氏は東京で待つているから早く帰らなければならないと云つて帰つて行つた。帰る時親様に願つてお歌とお授けとを戴いて帰つた。其のお歌は
とをくへだてゝゐるみはふびん
つきのかゞみをまつがよし

と云ふのであつた。私は未だ用があるのでもう一日滞在させて戴くことにした。其の日は朝から晩まで親様を独占してお話をウンと聞かして戴いた。次の話は即ち其の断片である。

「お伊勢様は淡路にお生れになつた。御夫婦共何うか人を助けたいと御考へになりもう一つ自由な島に渡りたいと云ふので但馬へお出でになつた。而して但馬の山奥でお助けをしていただけれども何うも但馬と云ふ所は人気の悪い所で仕方がない。其処へ神様のお知らせがあつて伊勢の方へ行けば助けるによいと其処で但馬を立つて伊勢へお出でになり二見が浦へついて夫婦共乞食の姿になつてお助けにお回りになつた。

ヤイトコセ、ヨイヤナ、コレワイセ、アレワイセ、ササナンデモヨイワイナ
と仰せになつて二見が浦の岩穴の中におこもりになつたが波が上つて仕方がないから桧木の山の奥に行き二人の杖を立てかけ其の上に菰を掛けてお住いになつた。其れから祝いから祝いことをヤイトコセとお教えになつた。其れを乞食がならつて掘立て小屋を始めた。今日になつてもお伊勢様の普請は掘り立て普請であるが何時になつても結好なお宮にして呉れるなと云ふ掟である。

ヤイトコセ、ヨイヤナは人間つくる事情何んでもこれよりよいものはないと云ふことである。今は改正になつたけれども昔は伊勢へ行つたら伊勢乞食と立てられたものである。大和に行きましても教祖の話は伊勢にましたる普請はしなと云ふのである。教祖も元は掘り立て普請から入つたのであるから桧二本を立てゝも世界を助けると云ふ充分のお心であつたが其れを贅沢な普請をするから普請ばかりが誠でも心の誠が定まらぬと私に教えて下された。これは夜のお話である。元伊勢は丹後の元伊勢と云ふ所である。

庄屋敷と云ふのは彼処に火柱が立つたから神の庄屋敷といふ名をつけた。
地神五代の頃奈良で始めて神様がお生れになつた。其れが始めである。今度の人間をつくる場所が庄屋敷と此処（播州）である。

天理教では伊邪那岐伊邪那美の神様が父親母親になつて九億九万九千九百九十九人を造つたと云ふことを云つているが其んなに沢山な人間が一度に出来たのではない。順々に天から神様がお降りになつたのである。其の中で伊邪那岐伊邪那美命此の二人の神様が一番早くお降りになつたのである。其れが人間の先祖ではあるが凡ての人間の親と云ふ訳ではない。

天理教で云ふ十柱の神も彼れは学者が古い本から寄せ集めて造つたものである。天には八百万神があつて人間から草木を守つて下されている。御空の星の数は神様の数である。中でも一番靈徳のあらたかなものが月日両神である。これが人間の実の親であるからこれだけ拝めば良い。

神様の御名前と御守護とを一々説き出すと高慢が出る。其れ計りでない十柱の神様の御名前と御守護とを覚えることは信徒にとつては容易ではない。其れでは助けが後れる。これからは成るべく早く助ける様早く助かる様にしなければならん。十柱の神もこれ迄永らく説いて来たのであるから消そうと思つても消されん。其れだから消すには及ぼんが説くには及ぼん。ただ月日両神を拝めば良い。朝起きたらお日様に向つて人民大切に願います其れを一言云えば良い。(或る人に向つては眞の火柱を守るには何うしても十人の人柱が要る。其れが即ち十柱であると語られたそうである)

本当は手を合せて拝まぬでも良い。人間の身の内には皆神がお宿りになつているのだから

神道の中でも天理教だけは拍手を四つ打つ。彼は人民大切に願いますと云ふことである。其れを今の天理教の人達は知らないで打つている。

これは十柱の紙と八つの埃で養われて来た今日の天理教徒にとつては全く青天の霹靂である。然しこれがわからない位ならば天理教の新信仰に入る資格のないものである。

由来信仰は一連の数珠である。此の玉をとつて彼の玉を捨てることは出来ない。ただ無条件で凡てを信ずる。其処に本当の信仰がある。私が二代教祖の所説に対する態度も亦其れである。

親様はなおも続けて語る。

「来世に一番先きに神様になるのは会長さんでなくて乞食である。彼の人達は日々人の与えるものに満足して青天井を屋根として石段や土面を床にして結好／＼で通るから其の結好／＼の徳が積んで今度の世では一番早く神様になる。昔から神様になつた方で皆乞食をしない方は一人もない。

天照皇大神宮様が人間でお働きになつた時自分のお子達を傍に置いて布を引いている所へ子供が汚物をするとクソイココタクの罪を払つて子供を大きくなさつたと云ふ位の方である故従つて御苦労下された。其の間にタントお子達が出来ても少つとも大神宮様の云ふことを聞かないから二見が浦から流された。其れが島々について其処の神様におなりなされた。

お子供衆は凡て七人であつたが中にも一に大黒と云つて大黒様が一番兄毘沙門様は讃岐について金平様となり弁天様は安芸へ流されて其処で神様になられた。

大神宮様の御兄弟では素盞鳴尊といふ神様が一番手に合わぬ神様であつた。一番聞かぬ神様であつたから一番遠い所へ流したのであるが力があつたから神の神となつた。

地神五代から奈良に都が出来、天神七代から京都に都が出来た。

人皇十五代から人皇四十八代迄は弘法大師が生れぬ。弘法大師が生れなかつた所はいや山で泣きなすつて仕方がないから屏風ヶ浦に捨てた。其れが善通寺の和尚さんが拾い上げた。賢いが性が悪くて仕方がない。大きくなつてから四国を巡つたが四国は広いことは広いがもつと広い所へ出て何かしたいと思つて奈良へ出て来て大仏様の柱にもたれて考えていると其の柱に埋木のしてあるのを見付けた。此んな柱に埋木をする道理がない。これは何か入つて居るに違いないと思つて埋木の中を調べた所日本に弘法と云ふものが出て来たからインドに渡つて来い。渡つて来たならば眞言秘密の法を譲ると云ふことを書いた書物が出た。

インドへ渡るにしても一人では行けぬから機会を待つていると稲荷様が二人と水切不動とがお伴をしてインドへ渡ることになつた。其の時百日の大風で物を食べることも出来ない。漸う／＼のことでインドへ渡つた。其の時弘法様はいろは四十八文字をつくつてインドへもつて行つた。其れで如何にも弘法大師であると心が寄り眞言秘密の法を譲つて頂いて日本へ帰り段々お助けをするが其う云ふことはないと彼地で括られ此地で括られた。其の時の天皇が桓武天皇である。眞言秘密の法を学んだなら極楽を見せよと云ふ御命令である。極楽は我が心にある。南無遍照金剛と唱えて白簾に座つた時天から天蓋がサツ下り宮殿一杯になつた。其れがために天皇より眞言秘密の法を拡めることをお許しになつた。弘法大師は何処におかれになつたかわからぬ。高野山はただ弘法大師がお籠りになつたと云ふだけで彼処でおかれになつたか何うかと云ふことはわからぬ。

昔から神様と名の付いたものは艱難苦勞をなされ息ある中に活きた神様となつたものはない。其れが近頃は段々人間が伶俐になつて色々な事に心を使ふ様になつたから病氣にならぬでも良いものが肺病と云ふ様な病氣になる。何うか此の心を広くもたして戴かねばならん。

地神五代の時奈良の春日様と八幡の八幡様とが心を合せ世界の広さは何れ位あるか調べて見たがわからぬ。又た今日様の上りなさる所を東としお下りなさる所を西としたいと二柱の神が心を合せて世界を回つたがわからぬ。最後に稲葉の山にお籠りになつて色々調べたがわからない。其処で春日様が八幡様に向つて申されるには「貴神は此の稲葉の山に居なさい。私は奈良の都に歸つて調べをしやう」と。其れから春日様は八幡様を稲葉の山に残して一人奈良へ歸り三笠の山からジツト眺め下された。或る日東の方と思ふ所がクワツと明るくなり其処へ今日様があらわれ其れと同じ時に鷗と云ふ鳥が十二羽パツとあらわれた。其れから鷗と云ふ鳥は何んでも人間に何か知らせる鳥に違いないと考え付いて稲葉の山にいる八幡様を呼び寄せお歌をつくつた。其れが百人一首には中納言行平と安倍の仲麿とになつている。

中納言行平（八幡様）

立ち別れ稲葉の山の峯に居る

待つとし聞かば今歸り来ん

其れが八幡の八幡様である。

安倍仲麿（春日様）

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも（月鷗）

二人共大神宮様の御家来となり此の世の事情をこしらえたと云ふ神様の御話でしたな。

昔から安倍仲麿が曆をこしらえたと云ふているのは十二の鷗から十二月を編み出したのである。

人間が伊勢へ参る時には春日様へ参り、其れからお伊勢様へ参る。大神宮様は人間生み下ろしの神様。又た春日様は月日を此の世に編み出された神様である。

其れから話が段々進んで今度は天竺の事をお説き出しになつた。

天には天竺と云ふ所がある。何んでも神にならうと思ふ者は天に昇る。偉い雨風の時辰が天に昇ると云ふのは力あるものは四足でも蛇体でも天に引き上げられる。けれども皆が皆迄一番高い天に昇ることが出来ないから途中で休息するために天と地との間に休息所が出来ている。其れが天竺（天宿）である。其処には八百万の神が居て神の行をしていなさる。其等の神様達が雨のいるときには雨、風のいるときには風を吹かしなさる。それより上の天は何時も晴れ渡つている。天竺から釈迦が下つたと云ふも其処である。

天理教では我が宗旨より尊いものはない様に思つているが其う云ふ訳のものではない。仏教でも神道でも皆神が銘々の氣質によつて心のきついものは仏法に入れて心を和げ気の小心なものは神道に寄せて心を陽気に持たせる。何地へなりと其の人／＼の氣質によつて丁度良い人間をつくる様に神様が其れ／＼お拵えになつたのである。其れを天理教では我が宗旨より宗旨はない様に思い世界中を皆な我が宗旨にしてしまおうと思つているけれども其うは行かない。

マア何ちにした所で南無と云ふ字に二字はない。南無は月日両神にかたどつてつくつたものであるから南無がつかねば有難いことはない。何事も南無と云ふ二字をつけてくれ。

只今天皇陛下が人民を大切に下さる所の御恩と云ふものは中々の御恩である。中には明治天皇の御恩と云ふものは勿体ない程の御恩である。其の御恩を忘れて自分は偉いものと思つて色々心をつくしつくらぬでも良い病氣をつくる。一厘の金をもつて国に尽し結好事情に心を寄せて行けとお教え下された。

昔から天皇陛下の数も多けれども明治天皇様より結好な陛下様はないのです。これより此の世に大きい神様はないのです。これが世界中一番大きな神様です。人民のために百迄寿命のある所を御縮め下さつたのですからこれより大きい活神様はない。寝ても起きても此のお方の御心を忘れぬ様にすれば何んな苦勞をしても苦勞ではない。其の勿体ないことを忘れただ天理を笠に着て榮耀榮華に暮らす様なら誠にすまないことである。

昔は神様と王様と天子様とあつた。王様と天子様とあつたがためにお天子様とお宮様となつた。転嫁と云ふのは所を云いますと国を裁いたが転嫁。宮様は神様だから其んなことには御構はない。ただ王様より貢いで戴いて神様になつていた。其れがために悪い者が出て仕様がな。其れがために神様が表われて此の世の神様となつて下された。又た世界中を御照らし下されるのは月日両神様と天照皇大神宮より外ないと云ふことになつてしまつた。其処が變つている。

神様幾ら偉からうと自分の力を出そうと出すまいとは各々の心の眞実。陛下様さえこれだけの御苦勞なさるのにと云ふ所に心を寄せて下されたら結好なものである。

只今は本部で天神様の風をし后様と同じ風をしている。風計り天神様の風をした所で心が成っていないから仕方がない。

天皇陛下は朝四時にお起きになる。其れを知らず、皆其の罪を私に着せるから私は辛くて仕様がな。天皇陛下は結好なお座敷に居られても障子が破れてはつゞくつてもやる。其れにも係らず榮耀榮華の普請をし勿体ないと云ふことを皆忘れてる。

月日はこれは実の親様又た世界にては天皇陛下より神はなし彼の方を真の神様として日々拝をしなければならぬ。

一番が天皇陛下、二番が世界、三番が自分の心
女には五心の徳と云つて五つの徳がある。

第一は親を大切にすること

第二は夫に貞女

第三は子を求め

第四は家の処帯を大切にし

第五は世界の鑑に載せられる。

これが五心の徳と云つて女にとつて一番大事な徳である。

男は功を尽しに来たものであるから功を尽せば良い。

これについて思い起すのは親様より吉田様夫婦に送つた歌である。

よし田こそとをくをわすれちかよれば

心よし田のおやのよろこび (吉田岩次郎氏へ)

ふじんこそ心こめたるまごころを

ふうふもろともおやのほところ

これろたのしみをとたいせつ (夫人へ)

後者は即ち今の五心の徳を読み込みたるものと解釈することも出来る。親様のお話。「正月には何処の内でも七五三飾りと云ふことをする。しても何う云ふ訳か訳を知らない。七五三の七と云ふのは人間七つ道具のことである。七つ道具とは眼、鼻、口、耳、両手、両足と男女一つの道具のことである。又た五と云ふのは五体のことである。五体と云ふのは筋、肉、骨、脈、皮膚の五つである。又た三と云ふのは水と火と風とである。水と火とは此の世の大將風は世界の誠(生命)である。これを人間について云ふと見分け、聞き分け、心のかみわけ、又た藁は穀物の草。其れに力を入れて七五三を撚り込み十五日迄天神に上げて祝い十五日に結好に払ふのであるといふ神様のお話。人間十五になつたら三つの心(見分け、聞き分け、心のかみ分け)も五体も七つの道具も使える。月も十五依るになれば満月になる。

此処の天理教の会長さんが昔から鶴は千年亀は万年と云つて居るが彼んな阿房なことはないと云いなさる。其れについて私の所の神様の云われるには其のツルは家の蔓で子供のことを云ふたのだ。又た亀は万年と云ふことは生きて居る亀のことではない。カメ(家名)が万年続くと云ふことである」

此う云ふお話を聞いていると全然教祖其の俣である。

此の偉大なる活神井出クニ子様の生れたのは文久三年七月二十四日天理教祖六十六歳の年である。其れについて親様の直話

「私が祖母の生れた所は播州笠井郡旧河原村神奈川元時と云ふ家です。此家は武田信玄の子孫でフケの宮と云つて釣鐘の上つた家である。其処には五三の桐の紋があります。其の家から播州の三木町字前田吉永と云ふ家に来られたのです。私の母はタツといつて其の連れ子です。お父様は播州口尾川字谷口小原勘兵衛と云ふ家に生れた人で伊藤博文さんが兵庫県で県令(当時五位であつた)をなさつていた頃一手にいた人で此の方と明治三年から六年迄一手にい。明治八年四十六歳の時死にました。三木町にいても何かの役筋計りをさして戴いて居りました。

お父様のおいでになる時は三荷の荷物でおいでになりました。

父の生れた小原家と云ふのは昔明石の殿様の御休みになる内で代々賢い人が生まれまし。ただ御父様の祖母様に当る人が七荷の荷物を持つて来たけれども気が狂つて打掛を切つて人に呉れたりなんかしたことがあるそうです。身上は昔から変らぬそうであります。

私の所(吉永家)は元大きな百姓で男衆二人女衆六人もつかつて暮らして来た家なれど親が其う云ふことをしているから貧乏してしまいました。其れから三木で砂糖を商して居りましたが中々元は良い助けをした打ちですぜ」

親様の母親は兵神大教会が元真明組と云つていた頃からの熱心なる天理教の信者であつた。而して亡くなる迄熱心に信仰を続けた。其れで

「お前も今に教会へ行つて鳴物を鳴らさなくてはならないから今の間かに琴を稽古してお置き」

と云われ親様は琴の師匠の所に通つて琴の稽古をしたこともあると云ふ。

然るに母親が其れだけの熱心なる信者でありながら其の娘の親様は一向に信神したことはなかつた。其れが母親が亡くなつた翌年か翌々年に神様がお降りになる様になつた。其れが今より二十二三年前親様三十一二歳の頃である。

其れから精神が次第に一変して今より十五年前夫（吉永源吉）と三人の子供（清太郎、平吉、作太郎）とを捨て、神様に連れられて今の井出氏の所に来る様になつた。井出氏も始めの程は余りに思いも寄らぬ突飛な出来事なので全く不審に思つていたが後に其の屋敷に因縁あつて神様がお連れになつたことがわかり漸く得心した。其う云ふ訳で今日表面では夫婦と云ふ事になつてゐるが其れは肉の夫婦にあらずして霊の夫婦である。

其れに不思議なことには普通ならば母親が其う云ふ道ならぬ家出をしては其の夫なり子供なり怨んで近寄らぬ筈なのに事實は全く反対である。先夫も其の子供も全く自分の内の様に往来して少しも怨恨と云ふ事を見出すことができない。これが不思議である。

其う云ふ訳で神様の降りかけたのは今より二十三年前であるが本当に神憑状態に陥つて助け一条のお話をするやうになつたのは今より九年前即ち明治四十一年旧三月六日である。

其の日は風がないのに不思議に前の笹藪がサッ／＼と音して一陣の風が井出家に吹き込むと思ふ間もなく親様の態度が一変し其の口よりクニの身体を二十年神の社として貸すか何うか？

といふ神勅であつた。其れを云つてしまふと親様の身体がバツタリ倒れた。

井出氏より出来ませぬと云つてお辞り申上げると

「貸さぬとあらば此の俣」

と云ふ神勅である。見れば身体も冷たくなり脈搏も絶えて居る。其処で驚いて

お貸し申します

と申上ると三遍念を押して井出氏の意向を確め神様お引きになると身体は元の通りになつた。其の間親様は昏睡状態にあること前後四時間程であつたと云ふことである。

其れから暫時経つて同年の五月六日より同年の十月廿六日迄殆ど半年ばかりの間は嘔と盲目と盲目と嘔の連続である。其の間に両手を引きつけること三回。

越えて四十二年の三月十八日に神命に依り家を建てることになつた。其うすると不思議なことには千円の金を貸そうと云ふものが出て来た。其れには村人三自由二人だかの請判がある。井出氏は其んな金は要らぬと断ると親様は

「其の金は己が借りて置く」

と云つてお借りになつた。現在の所は即ち其の千円の金で建てられたのである。（神様の預言に依れば二十年の間には此処に二十八棟の家が立ち今の家は薪小屋にすると云ふのである。今後の発展は蓋し見るべきものがあるであらう。）

けれども不思議は其れ計りではない。四月十日には頼みもしないのに村の人が百人計り寄つて来て日の寄進の地上げをし同四月二十日には石づきを済ました。

其うすると三人の大工が己にさせて呉れ／＼と云つて競争を始めた。競争の結果藤本定吉と云ふ大工が引き受けて普請をすることになつた。其れで二十一日に新始め五月十日が棟上げと云ふことになつた。

これも不思議の一つであるが其の藤本と云ふ大工さんが松の真柱を買いに行くと一本三円五十銭だと云ふ高いので買わぬで戻つたが外に適当な木がないので翌日又た行くと今度は一遍に一円五十銭づつ安く云つた。

六月十八日にはいよいよ建築落成家移りと云ふことになつた。

其の前に棟上が出来て壁塗りと云ふことになると神戸から一人の左官がフラリとやつて来た。其の左官は一日三円位の日当でなければ働かんと云ふ位の腕の良い職人であるが其れが頼まれもしないのにやつて来て壁を塗り終いに入り口に所謂十二の菊花を塗り上げて行つた。

いよいよ家が出来上つた頃今度は又た大阪だか何処だかの建具師が建具を車につけてやつて来た。

井出千太郎さんて方は此方ですか？

其うです。

私は建具を持つて参りましたが。

内じゃ其んなものを注文した覚えがありませんが。

其ら御注文にはなりませんが大抵要るだらうと思つて持つて参りました。折角持つて来ましたものですから箝まつたら一つお求めになりたいものですが。

其れで箝めて見た所がキチンと箝まる。其処で其の建具を買つて箝めることにした。

未だ外に不思議はあるかも知らないが現在の播州の神様の家は其う云ふ不思議づくめの中に出来上つた家である。

其の普請に要つた金が千円今は村の人の請判は止めて親様一人の借金になつてゐるが井

出様が其れを払ふと云つても
「井出さんに払わしては井出さんのものになるから」
と云つて神様が承知しない。其うして呼んで「神様の家」と云つている。不思議なことに
は今月は参詣人が少なかつたと思つても其の千円に対する利子だけはキチン／＼と上る。
其れで今迄一遍も月々の利子を滞らしたことはない。

同四十二年の七月十三日に警察へ始めて拘引せられ十日の拘留に処せられた。其れを手
始めに前後三十二回の拘留に処せられた。其れにも係らず天理教祖時代の様に未だ一度も
参拝に来て居る信徒を拘引せられたこともなければ祭つてある社に手を懸けられたことが
ない。たとい警官が拘引に来て神様のお話中はお話が良から中へ上つて拘引して行く
と云ふ様なことをしない。これは教祖の時代と偉い違いである。

同四十二年の十一月九日の村の人が相談して
「此う警察が厳しくては身上様が気の毒だから」
と云ふので豊前国企救郡東紫村大字徳力にある神理法の稲荷様の教導職を受けた。然し神
様は

「其んなものは要らぬ。此の神は他の下につく神ではない。すぐ返せ」

と云ふ命令であつた。

其れを村の人に云ふと村の人は折角身上様のためを思つて教導職を受けてやつたのに其
んなことを云ふ様なら構わぬと云い出した。其れやこれやで返さぬで居ると神理法の本元
から神理法を実行して居るか何うかを視察に来て神理法を実行していないのを見て免状を
取り上げて行つた。其れが四十三年五月である。

之れより先き四十三年の三月二十六日に播州から伊勢詣りの団体が立つた。親様も其の
中に交つてお居でになつたのであるが奈良へ行くと此処へ泊らうと云つて聞かない。元来
播州の団体はこれ迄奈良で泊つたことがないのであるが親様が強つて其う云ふので奈良へ
一泊することにした。

其うすると今度は三島に行こうと云い出した。其処で三島に行く人が三十人程出来たが
其の中の半分は汽車に乗り其の中の半分は親様のお伴をして奈良から三島迄歩いて来た。
最初先ずお墓地に参拝したがお墓地の柵の所へ行くと親様は柵につかまつて二時間計り泣
いた。人が柵より引き離そうとしても離れない。其れから神殿（其の頃は旧神殿）に参拝
したが神前に座ると其の俣ビュット甘露台の所まで飛んで行きクルリと此方を向いて

「皆様遠路の所遥々と御参詣下され御苦勞様で御座います。サア／＼帰りましょう」

と云つて其れから歸つたが丹波市の停車場までは唾。

其れに就て親様は当時の記憶を語る。

「今迄私共の所の団体は奈良へ泊つたことはないが其の時に限り神様が奈良に泊らうと仰
せになる。奈良へ泊ると今度は三島のお墓へ是非参詣して呉れと仰せになる。其れで行
くと云ふことになると一手に行くと云ふ人が三十人程出来た。其の中半分は汽車で丹波市
へ行き後の残りが私と一手に櫛本へ出で三島迄歩いて行つた。お墓に上る所迄行くと先き
手の人達は

ホイ／＼此方が近道ですよ

と云いなさる。私は

其ないに近道を行かないでも良いじゃありませんか？

と云ふと其れ限り私は唾になつてしまつた。其れから教祖のお墓へ参つてお墓の柵の所へ
ピタンと私の身体が其れにくつついてしまつた。其の時教祖の魂が憑いたのです。教祖の
仰るには

「マア私の状態を見て下さい。一寸見れば私程結好なものはない。甘露台も今石を並べて
居るけれども三島を眺めても誠の人が一人もない。広い世界を眺めても此の道を元に直し
て下さる方は貴方より外にない。何うぞ不憫と思つて此の道を元に直して戴きたい。頼
む。残念！ 頼む。残念の一点張りで二時間其処に泣き暮した。

其れから皆様と神殿に参拝に行くと神前に座つたかと思ふと其の俣甘露台の所まで飛ん
で行つてクルリと此方を向き

「皆様遠路の所遥々御参詣下されまして御苦勞様で御座います」

と云つた言葉が教祖の言葉。其れを一言云ふと又た唾になつて丹波市の停車場まで行きま
した。其れから教祖の魂が憑いて何ないにしても離れなさん。

天理教と云えば宗教の数も数ある中にこれ程悪い宗教はない。其の評判の悪い天理教に
力を入れないでも私は私で立派に一派の宗教を開いて行くだけの力があるのです。其れを
天理教の人達からは阿房扱い気狂い扱いされて迄此の道を立てゝ行くのは折角これ迄大き
くなつた宗教を此の俣果てさしてしまうのが如何にも残念なからです」

と。多分此の時であつたらうと思われる。一行が伊勢へ着くとちょうど其の日は天皇陛下
であつたか皇后陛下であつたか又た宮様であつたか兎に角高貴な方の御参拝日で警護の巡

查や兵隊で寸分の隙もなかつた。其の嚴重な警護の中をあたかも無人の境に行く様にツツツツと神前に行つて参拝し

「私やお伊勢のお払い箱よ……」
と云ふ様な歌を歌つて泣いたり笑つたりしている。其の声其の姿が一手に行つた人達の耳や眼にハッキリと入るのである。一行はヒヤ／＼していたが多分警護の眼には入らなかつたらう。元の如く一言も咎められずにススススと歸つて来た。一手に行つた人達はこれ程心配したことはないと云つていた。

同年（四十三年）の五月十八日に乱暴者が来てサン／＼親様に向つて悪口を云つた。其の時親様は 唐天竺は未だおろか

世界の果ての国々迄も
助け行くのが神の道

と云ふ歌を繰り返し／＼と踊つて／＼踊り抜いた。悪人も遂に施すに策なく歸つて行つたといふことである。

四十三年七月六日神命に依り日本回国に出掛けた。其の時の記念に立ち寄つた天理教会より証明を取つたのが次の日本回国帳である。

表 紙

明治四十三年七月六日
日 本 回 国

兵庫県美囊郡別所村内高木
吉 永 く に

明治四十三年七月七日当所参拝
兵庫県加東郡小野川
天理教兵神大教会
加 東 分 教 会 ■

明治四十三年七月八日
兵庫県加東郡社上町
天理教兵神大教会
社 分 教 会 ■

明治四十三年七月八日
兵庫県加東郡滝野村字高岡
天理教北大教会
青 野 原 分 教 会

■

明治四十三年七月九日
兵庫県下加西郡北条村
天理教兵神大教会
加 西 分 教 会 ■

明治四十三年七月九日
兵庫県神崎郡川辺村
天 理 教 神 川 分 教

会 ■

表記吉永くにナル者今般精神上ニ異状ヲ来シタル結果同国各分教会へ参詣を志シ来会シタルヲ以テ当会ニ於テ注意ヲ加ヘタルモ更ニ諾セズ記名調印ヲ依頼シタルヨリ茲ニ調印シタルモノナリ

明治四十三年七月十日

天理教北大教会
神 崎 郡
福 本 宣 教 所

当所ニ於テモ表記吉永くにナル者ハ精神病者ナルヲ思ヒ依テ説諭ヲ加フルトモ不可ナルヲ思ヒ同人ノ依頼ニ応ジ茲ニ記名調印ス

（註。これは生野分教会の評記であるが実は記名調印しない）

兵庫県美囊郡三木町ノ内福井町吉永くに明治四十三年七月十一日参会事情ヲ述ベ証明印
ヲ望ム種々注意ヲ致シ天理教ニ於テ日本回国ト云フ様ナル例ハナシ早ク帰国致サルガ宜敷
カラシ然シ参拝記念ノ為メ調印ヲ望マルニ於テハ別ニ差支モノナシト茲ニ記名調印ス
一 詰 員

但馬豊岡新屋敷町

天理教 豊岡分

教会印 かくの如く折角の日本回国も真に其の目的を理解するものなく徒らに狂人を
以て取り扱われた。中にも神崎郡の豊富宣教所の如きは物も言わない。次に掲ぐる手紙に
も充分其の間の消息が表われている。

七月十一日生野の銀山より教会の婦人宛に向つて送れる手紙

一寸申上候先日はまことにみなさまの御やくかゝりに相なりなにとともにしよのなきしだ
いなれどもどをどみなさま御ゆるし下され又このたびにかみさまにこのよなめにあわせられ
みなさままでしんぱいをかけじつにすまぬことばかりこのかみ三さんが一日もはよをはなれ
下さるならばまたみなさまにあうこととをいそいでをたのしみにしてをりまする
二 伸

天りきよかいわまことにみよな事もをしますはんもしるしもしやしませぬたゞうちいか
いり金を天りのかいちよさまにあげてじぶんのいゝねんをほどけ又かいちよ三のふくろも
ちをしてせじよをたすけまわれともをしますわたくしわもとより天りわきらひであります
わたくしわ天りのよをなよくの神三わきらいなれどもじぶんかんしよをこしてをゆうこ
とをしてしまうのはなにのいんねんかとをいそげまことにだんねんなれどそをもをしてち
いともはなれぬじつわたんねんまた内々をるときどなたにでもとをてもらうことがありま
すなれどこをしてくればたれにとをてもらう人わなしとをわからん天りきよかいのわ
たゞ金をあげとゆうばかりかみ三ちからがあるのかないのかなにもわからんぞやともをし
てしぬこととをけるかいることとをける天りをまわうてもこのわかりたものわなし
三 伸

わたくしみの上わどをなるともわからんみの上そでゝみなさんをちからいれて下されじ
つになんともみなさまにももをしよのなきしだいなれどもどをどかんになんして
下されいのちがあらばまたをめにかゝりをれいをもをしましよまづそでまでわづいぶんみ
な様御みたいせつになされて御くらしあそばされ又目にかゝらばはなしをしまする
又あすわたし十川ゆきます

く に よ

り

御 ぶ じ ん 中 様

翌十二日但馬国城崎温泉三嘉事村田重太郎方より夫千太郎氏に送つた手紙

一寸申上候わたくし今月きのさきゑまいりました神三のをかけでわたくしはゆにいりま
すなれどもあなたさまはさぞかつてわるうござりましよそれにたびすれば金もたくさんい
りますまことにあいすみませぬことばかりなれども金をこしらゑてをくり下されたのみま
すいはありますなれどもたびすれば金なしにはとをれませぬまたわたくしはいりま
すればとをしてもかやしますゆゑよろしく御たのみ申上候一日もはよをまわりかいらいます
二 伸

みなさまにもよろしく御つたえ下され又てがみ下さるならこのうわがきのところゑをこ
し下されなになりとも御しらし下され又いつてがみとりやりするかもわかりませぬゆゑど
をどてがみを下されたのみ上ます又みなさまにもそをゆうて下されたのみます又しよくば
のものにもみなよ／＼よろしく御もをし下されたのみます

なになら一ド御こし下されたのぬことたくさんあります又るいぶんぶじでくらしなされ
又神三よくまつりて下されわたくしはなにもわからんかみ三にとをてもがてんがゆきませ
ぬこれをはんじて下され
まつわあら

く に よ

り

千 太 郎 様

此の手紙が井出氏の所につくと同時に神戸の裁判所から令状が来た。其れで井出氏は早
速親様に向つて電報を打つた。

アスサイハンキヨゼヒカエレカエルカ

親様は帰つた。すると夫の井出氏は

「お前の様なものには金はやらないからお前がもし神様なら明日の七時半迄に裁判所に行
け」

と云つて家を追い出した。親様は高木村から神戸迄夜道を掛けて歩いて次の日の裁判の間に合つた。法廷に出ると予審判事が

「私に一つ力試しをさせてくれ」

と云つた。而して親様の手を握ると椅子に腰をかけたまゝツルと親様の側に引き寄せられた。其れで判事もスツカリ感心し

「貴女は實際天の徳を頂いた方です。これから私が引き受けるから自由にお助けをなささい」

と帰る旅費迄添えて帰した。其れから警察からはフツツリ来なくなつた。

警察の事情は其う云ふ訳で治まつたが内々の事情が治まらぬ。随分酷い責め打擲を何遍と云ふことを数えることのできない程夫より受けているが其の度毎に井出氏（夫）の身上に障りがあるか家に不思議なことがあるかである。

或る時は足蹴にせられたこともある。或る時は手打ちにせられたこともある。又た或る時は縛つて折檻せられたこともある。けれども井出氏が親様の身体を縛ると内中が地震の様に震動して再び縛を解くを常とした。親様の打ち明け話に依れば夫に打擲せられたこと何千度だかわからぬと仰せになつているけれども其の十分の一としても兎に角親様の身体に暴行を加えたといふ事實は井出氏も否定しない。

けれども内部に立ち入つて聞いたならば井出氏には井出氏の理由があつたであらう。第一内の役には立たぬ事第二人に施す一方にて井出氏が幾ら精出して働いても収支相償ふこと出来ないと云ふ様な点は井出氏に取つて多少不足の種であつたであらう。

今日では井出氏も多少悟る所があつて婦人の行動に関しては余り干渉せられない様であるが此の春頃迄は随分手厳しい反対をせられた様である。

神様からはこれ迄何遍となく天理の二字をつけさして呉れとのお頼みであつたけれども元来大の天理教嫌いの氏は断然今日迄其れを跳ね付けて来た。而して今なお其れを快諾しない。

こう云ふと井出氏が大変悪人の様に思われるけれども交際して見ると淡泊な詐も追従もない其れで居て慈悲深い善人である。其れにもかゝらず道に反対するとは神様は何か深い思召があるのであらう。

明治四十四年教祖二十四年祭の年と思ふが親様は六間の手紙に自分の写真を添え切手を三枚入れて本部の管長の所へ送つて来た。其の手紙は次の文であるが其の中には其れ迄に通つた道すがらが詳しく認められてある。依つて長文を厭わず此処に掲載することにした。

前文御めん下され。じぶんからいまださぶさきびしくあなたさまにも御きげんよろしく御くし（御暮らし）なされるかまるあめれとをどんじます（先は目出度う存じますの播州訛）……（切断）…… 二伸

まこと（切断）……のよなもの（切断）……さまのよをな御かたさまにねがいをかけるとわりつに（実に）あいすまぬ事ともをすることわよくわきまゑてをりますなれどもりつは（実は）このたびわせつぱにつまりをねがいもをしますゆゑとをど（何うぞ）たすけのためとわきまをつけてわたしのみの上をしとゞり（一通り）だけきいて下されねかたてまつります（願ひ奉ります）

三伸

じつはわたし（私）わまことふしぎに明治四一年旧三月六日のひよりなにか神三がわたくしにうつりをかけなされまことにわたくしわらんしんのごときじつにこまりをりましたをりから人三がありがたいともをしたすけ下されとゆうてをこし下されるなれどもわたくし日々わまことにふでまゆゑよをたすけをせんともをさば神三がたら（唯）たすけてくれとのねかいばかりそでに（其れに）わたくしがふでまゆゑゆるして下されともをさば一日わめくら一日わをしまた一日わてがひつてはなれんしじつにをそれいりましてせじよの人をたすけをしてをりました

四伸

さすれば四十二年二月となりますれば一日に人が六七十人ほどづゝわたしの内ゑたら（唯）ありがたいともをしてきますばかりそのためにふしきにふしんいたしました

五伸

さすれば旧七月十三日三木町けいさつよりこいとのことでまいりました。さすでは（さすれば）十日のこをじう（拘留）をうけました。そしてまた内かいでば（帰れば）人がたすけてくでと（くれと）もをしたくさんきます。またけいさつにわまたとがめますしそして神三になにかうけてたすけるほがあるならばなにほをなりともうけさして下されとねかいてましてわしわなにのしたにもつかぬとゆわれまするしじつにこまりまするともをしそしてまた人をたすけましたけいさついつきじつにこまりをるうちに村内ぐん三いん（郡参事員？）をつとめをなさるゆうおかたがせわをして下されぶげんの国しんじほ（神理

法) をうけて下されてたすけをしてをりましたがさすればまた

六伸

四十三年旧三月のすゑになりますればまたけいさつよりまたこいともをしましてゆきますればまたたすけをすることならんきよどを(教導)かやせまたよびつけてかやせたら(唯)よびつけてかやせ／＼のいてん(一点)ばりそでゆゑ(其れ故)たすけともをさばまためくらまたをしそれでわたくしわたとゑどをのか(牢の中)でしぬるともたすけがしたいともうゝち

七伸

旧五月十八日のひるから三んじとをもうとき年のころなら三十七八の男がみにわかすりのひとゑをきてちやじまのはかまをはきかをはひげをはやし神三うかゞいをかけてくれとゆうてきましてついにわよるの九りごど(九時)まであくこをばかりついにわたら(唯)あやまれあやまればかりそしてわたくしはあやまるばかりさすればその人がいゝしな(行きしなに)わたし内のしんぜんによそさまよりしんせつにいなりさまいたらき(戴き)まつりてをりますればそで(其れ)をくれとゆうてもちてかいりましたそをいたしましたあとわ

八伸

五月廿四日のひにわぶんぜんの国(豊前国)しんりのみちのほうからせんせがきましてこれはまことゝけいこをともしこゝわしんじ(神理)のきよかいにしてやろともをしみなしんじのかたがたをよせそをだんいたしみなさまそでは(其れは)けいこを(結好)ともをされなされたなれども神三はきよかいわいらぬわしわきよかいわせかいにたくさんあるとゆうてちよともしんじ(神理)のしたにつきなさらぬゆゑしんじ(神理)のせんせがじつにはらたてけいさつといしよに(一手に)なり人一人もよせつけんとゆうてけいさつよりじんさ(巡查)がはりばんをしますると(すると)神三ををせにわこゝでたすけができぬなら日本かいこく(回国)いたしてくれとのことゆゑでひなく(是非なく)そでゝ(其れで)心ど(こゝろ)をさゝめ(定め)五月廿八日に三木町やくばまいりこせきとをほんいたらき(戴き)ましてかいりのみちがけいさつゆゑけいさつによりましてわたくしわあすから日本かいこく(回国)にたします(立ちます)ながらくをせわになりましたとれいをもをしてかいりましたさすれば

九伸

ひるから三んり(三時)とをもうときとしころなら五十三四の女かまいり神三うかゞいたてゝくれともをしてたのむゆゑうかゞひたてゝをるうちに五月十八日きた男がきましてぜんにもちかいりたいなりをもちてきてさあこれをかへきさまわぜんにきたときもを人わたすけんとゆうたやないかそれにまた人をたすけをるふとぞけもの(不届者)ともをしさあをらに金をかせさけをのませかさねばしんぜんけりぬぐいろあくこをゆううちにまたもや五十四五の男がきてあいさつするよにいゝかけてたら(唯)さけのませ金をかせかさねば神三けりぬぐのまさな神三けりぬぐたら(唯)あくこをばかりゆゑけいさつよくとゆうばかりついでけいさつこくそをいたしついにわその人さいばんをくられ、それからわたしのみの上わ

十伸

とを／＼けいさつにをばされ旧六月一日に日本かい国(回国)いたしましたそのゆくさきどこなれば神三まもをせしことばには天りのみちをまもり下されとを／＼せあそばすばかりゆゑそらいかよをとたずねますればきよかいまわれとのことゆゑいかにも神のどをぐともいはじめてまわるわどことたづねますれば兵庫けん加東郡小野町天りきよかいをはじめといたししんでもをさば七月七日村かたのをかたさまに五十人もあくりてもらいしうたついたしました

また七月八日にわやしろきよかいさんけいしましたはその日あをの原きよかいゑさんけいしましたまた七月九日に加西郡北条町きよかいへさんけいしました

九日神崎郡川なべのきよかいゑさんけいいたし日本かい国(回国)ちよめんにい／＼もんくをかかれましたそしてやはりしんどをよしとみとゆう天りきよかいゑまいりますればたゞゑらそにゆうばかりうけつけてもくれませづいかゞわしよとをもたれどまたふく本日のけいさつのそちよ(署長)三のなさをうけててら前のゑきまでをくり下され七月十日にいくのぎんざん天りきよかいゑまいでば(参れば)またいかよをなことをもを／＼またちよめんにわる事をかきましたゆゑいかゞいたせばよかろをとをもわれしましたなれども神三どをぐのみの上ならはでひなく(是非なく)たしま十よを川(豊川)の天りきよかいまいりますでば(ますれば)十よをかわ(豊川)のきよかいわこゝろやさしきことばゆゑせけんをにわないとをいそして七月十二日にわたしまきのさきつきましてついでがみだしますれば七月十三日きのさきいづや方ぜんぼを(電報)がきましてついでみすれば(れば)十四日ごぜん七り(七時)三十五ふんのさいばんゆゑすぐかいて(れ)とのぜんぼを

(電報) ゆゑすぐさまかりそのよどをしてあるいてこをべいさんじました。

十一伸

十四日八りのさいはんにかゝりなにかわこをきをしらべにかゝりいろ／＼けいさつにも
わるいことあげてわをりますなれどもわたくしみにすこしもわること人にゆうたことなき
ゆゑよきはなしあ人三こそまことのみとくとをもいまことがかんじられたともをされ吉永
くにともをすものわ神のはなしをいたしなでさすりをいたし人をたすけさしてもらうとゆ
うてはんじ様しよめんをさいばん上下されけいこを(結好)たすけいたす内

よもふしきや

めすらしや

わたし内のさけい人(参詣人)村方をこしのその中に十三人も神のうつりその中七人こ
の人わよもめづらしいことばかり

十二伸

そしてわたくしにうつり下さる神三わけいこを(結好)たすけをするうちにまたふしき
やこのせつわ人をたすけたそのあいわたら(唯)神三のをせにわもいちど山といかいり
たともいちど山とへかいりたいあけてもくなくてもなくばかりさすれば七人のをかたが山と
のじばいともしよとたゞせきてたるばかりなりそやとまをして天りきよかいまわりにさや
(さえ)いろ／＼ちよめんにわるくちばかりしるされよをわたしゆゑわたしわ山とへさん
けん(参詣)いたしいかなるここもぶんいんねんとあきらめてをしますなれども七人のお
かたもしそゝをな事かありたならよも村かたにあいすまずそやともをして神三きゝいれな
しねがうわあなたたゞ一人たすけのみちの御かたゆゑードさんけいさして下されますか天
りこをしやにいらぬトさんけいでけませぬかあなたのなさをいたゞいてさんけいさして
いたゞきたへふびとをも(思ひ)下されまたさんけいしてわるければ御めんど(御面倒)
ながらしら(知らせ)下され

またわたし日本かい国(回国)したそのときうつしをいたるしやしんありますゆゑそで
(其れ)をながめてふびんとをもいどさんけいさして下されわるいことわしやしませぬ
わるいをしゑもしやしませぬ

てがみよんでふびんとかんがゑ下されいかなる神のはなしいたしせかいをたすけわたる
みの上まことにまをしかね候どもこのてがみつきしだいいかよなへんじをして下されなに
とゞ(何卒)よろし御たのみ上ますわたくしわさんけをしたとてもしてもきよど(教導)
をさげて下されともをしたにつけて下されともそのよをなむりはすこしもいゝませぬ神三
めんじをくわゑて下だけやさしきことばきかして下されたのみ上ます

またわたくしのしやしん一まゑをくりますゆゑこれは神三しうたつのときうつしをきく
らされ(下され)たしやしんこれをながめて下さりあり一日もはやくへんじ下されたのみ
上ます

ハリマ三木在高木村

吉永く

に子

御本部そをたいしよ

然し管長は多分これを見て狂人と思つたであらう。印紙まで入れてあるのに返事を与え
なかつた。

其れで神様より手紙を取りに行つて来いと言ふ命令で夜の十二時に寝巻の俣で土山迄行
き土山から寝巻を着換えて三島迄行き管長に逢いたいと云つても逢わない。ヤット此の手
紙と写真とだけ取り返して来た。

越えて明治四十五年即ち教祖二十五年祭の年に三下りの神楽歌と手紙と写真を添え用が
すんだら返して下され使いに来ましたと云つて写真が使に行つている。其れに三銭の切手
が三枚入れてある。其れ程神様丁寧なものですぜ。其れに神様賢いから書留にしてやつて
いなさる。其うして置けば先方で受取らんと云ふ事は出来ない。

其れ程にしてやつているのに管長の返事がない。

「管長も神の云ふ事を聞かんから僅か四五十で亡くなつてしまつた。彼の時神様の云ふ
事をきいたならもつと生きてることが出来たのである」

と。此の言葉に依つて想像すると其の時の手紙は多分教政に対する異見書であつたらし
い。

今年の二月になつて

「三十年祭には神が表へ顕われると云ふことを云つてある。たとい三日でも五日でも顕わ
れなければ神の言葉は詐になる。何うか其の方大和の本部へ行つて神殿に五日間姿を顕わ
して呉れ」

と神様に頼まれて神殿に五日間姿を顕わしたけれども本部の人達は気狂いだとか稲荷憑き

だとか云つて取り合わない。其の中にあつて此の人こそ真の神の社であると感じて播州迄
ついて行つたのが池田津田の二氏である。

其れについて親様は語る。

「池田津田の二人には待宜言房と云ふ稲荷が憑いている。
稲荷と云ふものは元は四足であつたが良く働らく。精出して働らく。今年も結構来年も結
構と長らく人間の姿に化けて長者の家の僕として勤めた。何んとも柔しいものであつたか
ら十五年たつとこれは人間と云ふ事情のものであると神様がお迎えになつて天にお引き上
げになつた。元は四足であつたけれども通力にかけては稲荷に及ぶものはないとしてあ
る。

教祖の時も始めは白玉大明神と云つて稲荷様が御つきになつて守護した。其れで始めの
中は教祖も稲荷憑き／＼と云われたが今度も二人の稲荷が憑いて離れぬ。其れで教祖がお
嘆きになる。右の袂には言房左の袂には待宜と払つても／＼払い切れない。庭に出れば庭
に付いて来る。表に出れば表に付いて来る。何うも仕様がな。其れで神様の仰るには

お前達が其れ程憑いて離れぬならば三年の間水より外戴くな。其の行が積んだなら道の
先手として使つてやる

と。其ら池田さんが三年間水と大根で行をしたと云つたであらう。彼の人には待宜と云ふ
稲荷様が憑いて居る。

待宜と云ふのは何事も待つが宜しと云ふことである。又た言房と云ふのは言房九位の神
と云つて言葉を継ぐ神様だ。二人共此の村に祠がある。其れが今年の春になつて

世界の行をする。

と云つて出て行つた。だから今袂には空ッポである。

凡て稲荷様と云ふものは道を拡める先手を勤める役だから何ふも仕様がな。今頃は二
人共一生懸命に方々で匂い掛けをしているだらう」

親様（私は井出クニ子様を自分の教の親だと思ふからかく云ふのであるが）には確かに
一時稲荷様が憑いていたに違いない。けれども其れは先手であつて主なる神ではない。主
なる神については神名を伺つてもお答えがな。

今に世界から名前をつけに来る

と。

「此の度池田さんに津田さんが来て此の神は天理王の尊に違いない。又た私の事を二代教
祖だと云つた。彼の人達がマア神様の名前をつけに来てだ」

之れ迄に神様から亭主の井出氏に向つて

「何うか天理の二字をつけさせてくれ」

と云つて頼んだが何うしても聞かない。其れで今日迄名前なしの神様で通つて来た。

其の代り神様は何んと云われても其うでないと云われない。

稲荷さん此方ですか？

ハイ此方です。マア／＼お上り

大神宮様此方ですか？

ハイ此方です。マア／＼お上り

何んで悪いと仰しゃらない。何んでも人の云つて来る通りの名でハイ／＼と云つてお助
けをしてやる。其れが不思議に助かる。

高木村と云ふ村は百二十軒計りの村であるが其の中八軒が天理教の講社で後は皆親様の
信者である。其の人達が婿をとると云つて伺いに来る。嫁をとると云つて伺いに来る。家
を造ると云つて伺いに来る。田地を買ふと云つて伺いに来る。株を買ふと云つて伺いに来
る。中に奇抜なのは西瓜の番人に迄神様を頼みに来る。神様人間のためになる事なら何ん
なことも丁寧指図をし願も聞き届けておやりになる。

播州には神様の降る人が十人程ある。其の神様が一々違ふ。従つて時々神様と神様との
意見の衝突がある。

「或る時其の中の一人の藤本と云ふ人の所に姑さんが来て、内の嫁は誠に邪慳で困ると云
つて嫁さんの悪口を散々並べてこれは出したものであらうか何うかと神様に尋ねた。する
と藤本と云ふ人の神様は

「其んな鬼見たいの嫁は早速出したが良い」

と云ふお指図を与えた。姑は自分の思わく通りのお指図なので早速帰つて出す手段に取り
掛ると今度は其の若夫婦が

「此方の神様は私の事を鬼の様な嫁だと云われたそうですが何処が鬼の様であるか聞かして
貰いたい」

と云つて神様に打つかつて来た。其の時親様の神様の返答が実に味深いものである。

「私は知らない。知らないが私の思ふには多分其の時のお前さんの心が鬼の様であつたか
ら神様が其う仰つたのであらう。けれども只今の貴女の心は実に結好だ。何うか其の心を

何時迄も忘れぬ様にしたい」

と。結局藤本と云ふ人の神様も傷めず又た嫁さんの心をも傷めずして当意即妙の答を与えられたのである。

親様の神様は切る事が嫌いの神様である。何んな事情の中をも繋いでやろうといふ大慈大悲の継ぎの神である。

十人の人達とは

横田	ミツ	神澤	ウノ
藤本	タケ	吉田	キサ
津村	ヒイ	近藤	カク
藤木	ツタ	近藤	八重郎
近藤	トキ	津村	イマ

の人達である。

親様を真柱とすれば此等の人達は真柱を守る十柱の脇柱である。

親様は

「私は神様八分人間二分である。眼をつぶれば神である。けれども神様になり切つては人間の付き合いが出来ないから人間二分を残して置いて下さるのだ。

身上（親様）は亡魂だけ。亡魂と云ふことは字で書いたら消えた魂と書く。身上は姿はあつても心は神様やぜ

と仰せになります。

外の人達は人間八分で神様二分である。私だけが人間二分に神様八分である」

と云ふことを私にお聞かせになつた。

二三年前に神様

「今少したつたら米国に行きやすぜ。其の時お伴をする人がない。彼地には金山（宝の山の意味）と云ふ山がある。其れは日本がとらんなん」

と仰せになつた。又た東京に吉原の大火のあつた頃

「東京へ行こうかな。東京へ行つてお助けしやうかな」

と云つてお居でになつたが又た去年あたりからは

「奈良へ行つて此の身を千円に売つて来うかな」

と仰せになつた。其れが今年になつて吉田一家がつき其の他有力なる信徒が出来て神様のためには千や二千の金は何時でも出す云ふようになって来た。

「何うしても天理の道がつかぬから世界の辻々に乞食になつて出て行つても広めにやらん」

其う云われたのが昨年である。其う云われるかと思うと又た

「今に天理教の本部から迎いに来る。私を置いて彼処に座るべきものがない」

と云ふ自信の語をもらされる。

其れでも播州がなお且つ離れにくいと見えて

「神様が何処が良からうと云ふても七人の人達が神様を大事して呉れるから其のお方の御恩を忘れられぬから此処にヂツとしているのだ。又た其の十人程の御方は何ないにしても此ないにしても苦勞が勿体ないから此処を離れることが出来ぬ。

私が大和へ行く様になつても行き限りにせぬ大和に二十日居れば此処に十日居る。其れが十人のお方の親切に対するお礼である。

と云ふ様な述懐も漏されてある。

此処の信者は大抵皆な上からついて来る。又た東からついて来る。これが天理教と反対である。其れにも係らず皆な欲の深い人達計りだから神様に上げるより神様からとつて行く方が多い。

待宜言房と云ふ稻荷様のいた頃は時々

「皆様参詣に来て神様御紀元が良かつたら其の俣庭からお帰りなさいよ。又た神様お機嫌の悪い時は中へ上つてお供をもつてお帰りよ」

と云つて教えた。其れを村の人達は其の言葉通りに信じて神様御機嫌の悪い時は中へ上つてお供をドン／＼もつて帰る。神様勃とお供を皆んな持つて行かれるから怒ることはできない。

けれどもこれは其う云ふ意味ではない。神様の御機嫌の良い時は其の俣帰り悪い時は上へ上つて御機嫌をとれと云ふことであるが欲の深い頭の鈍い人達にかゝつては仕方がない。其の意味をとらずに其の言葉其の俣をとるから。

親様の教は至極簡単である。嫁さんが来ると

「朝起きたら夫大切な水を汲みなさいよ。親に孝行しなさいよ」

姑さんが来ると

「嫁さんを大事に使いなさいよ。嫁さんを大事に使ふのではない。言葉を大事に使いなさいよ」

いよ」
と教える。其れだから高木一村姑と嫁さんの喧嘩がない。誠に良く治まつている。これも親様の徳である。

親様の教は何んでも世間と反対である。

「我が子は人の子と思いなさい。人の子は我が子と思いなさい。

急ぐ時にはジツト心を落ち付けなさい。苦しい時には楽みなさい。楽しい時には苦しみなさい。金が溜つた時は気を小さく持ちなさい。困つた時には気を大きく持ちなさい」

「人間には九つの行がある。

水と火と風

見分け、聞き分け、心のかみ分け、義理と情と堪忍

自分結好な様に思ふて人をいためると早く身上を返済しなければならぬやうになる。

人のものかりたるならばりがいるで

はやくへんさいれいをいふなり

人のものかりるは金でもなければ何んでもない。心に違いない。心を結好に尽くし下さるから結好に頂戴が出来る。

其れで早く返済と云ふことをしなければならぬ。其れは人を介ことである。人を介と神様の方から礼を云われる」

此等に一般の人間にとつて何人にも当て箱まる教訓であるが今此処に道に志す人特に天理教徒の耳を傾けて聞かねばならぬお言葉を一つ二つ拾つて見る。

「神様の御心は人の心の如く回つて行くものである。此の世界に住み人の心を晴天白日の如くにしやうと思つてもならない。其の日 人様のために助けて行こうと思ふが誠の道。其れを天理教を聞いた人は坊様が門に立つと己れは天理教だから出ませんと断る。其うすると天にある八百万の神様が一時にワツとお泣きになる。又た一銭でも二銭でも誠心を差し出すと天竺にいる八百万神が手を拍つて喜ぶ。これを仏教で云ふと乞食なり坊様なりが人の門に立つて

お手の内を願います

と云つて願ふのを

出ませんよ

と云つて断ると二十五の菩薩が一時にワツと顔に手を当てゝお泣きになる。又た一銭でも二銭でも誠心を差し出すと二十五の菩薩が手を合せてお喜びになる。」

去年の夏炎天で百姓の困つていた時親様ばダレシ香一斗五升肌帯二十筋巻二十筋をもつて難儀不自由な家を回り

「何うぞこれを買ふてくれ。お銭がなかつたら貸して置く」

と云つて其れだけ御振舞なされた。其の外神様の金を十五円お借りになつているが村の人には未だ其の有難いことが真にわからない。

「神様の楽しみ神様の仕事と云ふものは造ることが楽しみ造る事が仕事で一日の休みがない。

人間の仕事と云ふのは心を造ることが第一である。

虫虻一足でも神の種である。無暗に殺したり傷めたりしてはならない。」

「今の天理教は宗教の中でも一番大きい天理といふ道を教えながら一番糟を教えている。

只今の天理教は自分の道さえ可愛がつて貰えば良い。人様の道で可愛がつて貰わぬでも良いとてんでの道についている。

其れだから心が引けて生きていられぬ様になる。会長様（管長様）は生きていられぬ。

三十年祭にはせめて会長様が門を出て参詣して来た人に挨拶すれば何れだけ信徒が満足するかわからん。

其れをただ尽せ果せの一点張りで信徒から金をとることばかり考えて一つでも信徒を喜ばせることをしない。其れがために国々には何れだけ此の道に入つて神様を怨み会長様（管長様）を怨んでいるものがあるかわからぬ。其ないに信徒から怨まれて自分一人贅沢した所で何が結好。

此れはこの村の人ですが天理教の話を聞いて家屋敷売つて三百円拵つて教会に上げ自分達は教会の番人に住み込むことになつたが子供が二人あるのに喰ふだけのものが上がらぬ。其れでお爺さんにお婆さんは山へ行つて薪を切つて来たりなんかして漸う／＼暮らしている。家賃は二円の所に住んでいるが皆欲の深い人達ばかりだから一人前二十銭の家賃を出すの出さぬのと云つている。其れが月並祭には何かゞ幾らか上る。上つても其処で喰つたり呑んだりした余りは会長様が皆な持つて行つてしまう。余りに気の毒だから一度本部へ連れて行つて呉れと神様が仰せになるので今年の正月着物に白いものを添え足袋迄揃えてマア明日立とうと云ふ時行くと会長様に相談しなければ行かれんと云ふ。私は其の前に呉々も会長さんには何も云ふのでないと云つて置いたのにサアと云ふと会長様に相談

しなければ行かんと云ふ天理教の人達は其れ程会長さんには義理固いのです。其れを上の人程贅沢だ。けれども会長（管長）も信徒も皆同じ人間である。人間は一畳敷あれば良いと決つたものである。其れを自分一人大きな所に住んで信徒は寝る所もない様にして何が結好か。彼れは会長（管長）の家ではない。信徒の家である。

私が本部へ入つたら詰所は皆んな工場にして難儀している人を働かせ国々からお願いに来る参拝人は皆な本部へ泊めてやる心算だ！」

これを狂人の語として聞く人は厭く迄狂人の語に聞えるであらう。けれどもこれを神の言葉として聞くものには厭く迄神の言葉である。

「今の様にしては三島の人少しも喜ばん。喜ぶものはただ教会筋の人計りで他の人はチツとも助からん。

昨年高野に行く九十になる人が人に助けられて台の上に乗つて皆様に説教なされた。

天理教も自分の信徒計り大切にせず道に入つて居るものは結好。入らんものは尚更結好にしてやらんならん。而したら天理の方は結好やなど云つて信者でない方迄参つて来る様になる。其れを欲にかゝつて居るから其う思ふ者が無い。

私はこれ程湯に入つても人様に肩をながして貰わん。あの大きな風呂を拵しらせて戴きまして始めに一遍と終に一遍と入れさせて戴いているが皆様肩を流さして下さいと云つてお出でになつても勿体なくて今迄一度も流して戴いたことが無い。其れ位にしてさえ良い加減のことで御座んすからな。

津田さんの話に彼れ人は湖東で半年も風呂番をしていた。先ず会長さんが入らなければ誰も入れない。其れだから会長さんの肩を流しながら会長さんと云ふものは結好なものだ。己も会長さん見たいになりたいたと云つて不足計り積んでいたと彼れ人が云います。其れを其うしないで会長さんが肩を流して貰つたら

ア、御苦労であつた。私が上つたら今度はお前入つて呉れ

と云ふた所で入りはしないが何れだけ其れ人が喜ぶか知らない。

本部の大將等も天皇陛下が世界を回つて人を拝ましてやるあの心が少しでもありさえすれば天理が弘まる。其れを自分程偉いものはない様に心が上つて居るから段々世界から下に見られる様になる。

神の道上らば下る神の道

貴女が本部へ歸つたら此れを一言会長（管長）さんに言伝して下さい。」

其れから十柱の神様の話と八つの埃の話は度々お尋ねもしたし又た度々お答えになつた。十柱の神の話八つの埃の話は前にも掲げたが此処には前に書き漏らしたことを聞きもらしたことを書き添えて置く。

「天理教では十柱の神より神様はない様に説いているけれども神様の数は何百万あるかわからぬ。其の沢山の神様達が今日様から出る八十八筋のお息をお受けになつて居るから人間が生きて居られるのである。もし其の神様達がチョツとお緩めになつた時其のお息に當つたものが日射病になる。

其れだけ沢山の神様が居つて此の世界を御守護下されているのだから其れを一々説くと高慢になる。且つ其れでは助けの実が遅れる。だからなるべく早く人を助ける様にしなければならぬ。其れには十柱の神を説いては後れる。十柱と云ふのは火柱を守るには十人の人柱が要る。其の十人の人柱が十柱である。」

「八つの埃。此の世の中に生きて居るもので八つの埃のないものはない。草木でもある。雨のない時は雨が欲しいと思つて待つて居る其処へ雨が降ると喜ぶ。八つの埃は神様にもある。人間を助けたいと思ふ心は既に埃である。此れを取つてしまつたら人間生きらりやせん。だから八つの埃とせずして八つの楽として心を晴さねばならぬ。然し一番先きに誠の道と充分感じた人出も只今になつては色々な心につくして居る。穀物でも一杯成人しても後には其れが穂になつて実がとれぬ様になると同じこと。

八つの埃をとらうと思ふとむしかしい。自分の心でわきまえてわろこぶといふことをつくさねばならぬ。喜の中へ尽して行つたならば自然にとれてしまう。

私でも八つの埃の一つを持つて居る。ほんに可哀相な何うぞ誠の人にしたい。何うぞ誠の心になつてくれれば良いが、天理の道を立てくれればよいがとほしいをしいは私の一ですからな。其れを消すには心のわきまえて行けば良い。」

親様の言葉は何れ一つ無駄だと云ふものがないが就中次のお言葉の如きは従来の天理教の因襲を数つて最も痛快である。

天理教では一番先きにお話を聞かした人が親であるから良くても悪くても其の人につかんならんと云ふけれども其んなことをして居るから道が遅れる。何んでも早く偉いもんにつかなければならぬ。」

彼の音楽や彫刻や絵画の師匠すら名人を選むことは吾人の自由である。豈一人人道の教師のみこれを選むの権利なからんや。吾人は一日も早く天理教の愚劣なる制約を脱して偉

人について道を学ばなければならない。然らざれば幾度生を更うるとも真に人道の大義に徹するとなからん。

親様のお言葉に依れば

「日本で天の光輝を戴いた方は弘法大師様が第一で第二は天理教祖様私は三番目に戴いたのだ！」

と云ふのであるが古来日本に於て沢山の宗教の開祖があつたけれども一人として普通に神仏と交通した人がない。況んや天の光輝と云ふが如き大なる御徳をや。もつて親様の人格が如何に卓越せるものであるかを知ることができる。

教祖御親のお言葉に

「此の道には今に偉いものが出て来る。其れよりももう一つド偉いものが出て来る」と。

誠に此の人こそ其のド偉いものである。

私の見る所に依れば教祖は其の慈悲に於て其の低い柔しい心に於て古今稀に見る高德の方であつたけれども播州の親様は其れにもう一つ輪をかけた方の様に思われる。

其の証拠は教祖は家にあつて来る人を待つたが播州の親様は門に出て助けて貰いに来る人を待つていられる。又た其の腰の低いことも教祖以上である。即ち教祖は低い柔しい方であつたがな何処かに近き難い上品な所があつた。然るに播州の親様になると全く其れがない。何人に対しても全然自分の子供に接する如く馴々しくお話になる。従つて其の側に行くに慈母の側に行つたと同様に何時迄も離れることを知らない。殊に私は未だ人に肩を流して貰つたことがないと云ふ一事もつて教祖に比して如何に平民的であるかを知ることが出来る。

更らに苦勞をしたといふ点も教祖以上である。親様は教祖の五十年の道を九年で通つた中々の苦勞であつたでと仰せられているが其の苦勞の道すがらは村の大工に笑われたのが第一の節で断髪したのが第七の節（最後の節）である。其の断髪事件の起りと云ふは村の二三の者が村の規約を藪つて博賭を打つたのを村の人が発見して表沙汰にしようとするのを親様は例の慈悲心から兎に角正月と云えば内中揃つてお祝いしたいことは何処の内も同じことだからどうか許してやつて下さいと云つたのがいけないと云ふので親様にあやまれと云ふのである。其れで親様は髪を切つて次の手紙を添えて村の人達の所に出した。其の手紙と云ふのは

「一寸申上候

区長様

伍長様

しよぼを様

まことにわたくしはみなさまになにと申しわけなくことを

みつ川様や

津村様に

もをしましたるゆゑをいそがしいのにもかゝらずたび／＼あつまり下されなにと申しわけなきしぎいひらに御ゆるし下され井出様にあやまり下されともをさば三木町かゝれとゆゑいまいまかいるにすれば村内に金をかりてをりますゆみかいることわれけませぬゆゑ金ほんさえするまでみなさまのなさけにてこの村にをいて下されわたくしのよをなはしたなきものがみなさまにあやまるのわいとわねどわたくしもさいばんで人をたすけるともをしたすけをゆるしてもらいましたゆゑいまみな様のまゝであやまればせかいの人のたすけがでけんしばらく御まち下さればまたあやまるときがありますゆゑそれまでなさけをくわゑて御まち下されそのかわりにわしよぼを様もをしわけにわたくしのかみをきりますゆゑこのかみになさけをくわゑしよぼ様もわびして下され井出様にめんじあるかないかわしらぬども神様にめんじなにごとも御ゆるし下されどなたさまにもよどしく御たのみ申上候

くによ

り

区長様

伍長様

これが節の終りである。其れ迄の苦勞と云ふものは一言にして尽すことが出来ない。余り苦勞が大きいので

「マア此の苦勞は」

と親様が云ふと教祖様は

「私が生前に苦勞が足りなかつたために貴女に此の御苦勞をかけて申訳ない」

とお詫びになる。

これに依つて見ても親様の苦勞には教祖も一目置いて居る様に思われる。

親様は七十五代目に神様になつて生れたのだそうであるが自ら「私は天理を直しに来た神様である」と称せられてある。事実今日の天理教を救済し得る者は親様を措いてない。親様の神憑当時には日本に偉い神が表われたといふことを聞いて世界から色々の神様が力試しにやつて来た。中には天の天人マツコシヤウヨウブヨウの神と云ふ偉い神様が来た。熊野の日の天狗も来た。天狗の来る時は夜の丑満頃大の字なりにグー／＼と寝つてゐる時でなければ来ない。中にはお釈迦様の行列を踏ませて見る神様もある。其の外色々な神様が来たが兎に角力のある神様でなければ降つて来ることは出来ないと云ふことである。親様を中心として不思議を書き立てれば限りがないが今其の一二を拾ふて見ると今より五年程前に津村と云ふ熱心な信者が神様の所へ大根を上げた。其れが日を経つて腐りかけたので井出様が下ろそうとすると親様はもう暫時其うして置いてくださいと仰せになつた。其れで其の俣にして置くと三十日程経つて腐つた大根から芽が三本出て其れが二尺程の大きさになり垂柳の様にスラリと延びて其れに花が咲いて実がなつた。其の株の干上つたのが今親様の所に保存せられてある。其れからもう一つ不思議は美囊郡口老川村字益田の澤川直吉の井戸である。元來其の家付近は岩石計りで水野出る所がない。其れを神様のお指図に依つて一間余り岩を掘ると水が出る様になつた。ちょうど其の頃神様へ供えていた水壺より水が噴水の様に吹き上げた。此等は何れも常識をもつて判断することのできない奇蹟である。更らに身上事上の不思議なお助けの靈験は枚挙に遑がない。私は三日の夜泊めて戴いて四日の九時半頃お暇したが暇乞いに際し「今教会が危ない道を歩いているから早く行つて教会を助けてやつてくれ」と云ふ命令を受けた。其れについて「神の云ふことを聞かぬ教会は非時にする」とのお言葉があつた。更らにもう一つ私の頭脳にハッキリと打ち込まれた言葉は「神を助けてやつてくれ」と云ふお言葉である。これを思い彼れを思ふて身は益々責任の重大なることを感じた。出発に際して親様は私の昼飯として一寸の間に寿司を拵つて与えられた。又た貴女は一人だからおかずのない時はこれを喰べなさいと云つて切り昆布とお節句の祝に他処から持つて来た餅を分けて下された。お暇して出ると私のはいて行つた上等の古下駄の代りに全く新しい下駄が直されてある。私の下駄は？と訊くと其れをはいて行つて下さいと云ふことである。私は恐縮しつゝ其れを戴いて歸つた。親様はワザ／＼橋の上迄送つて下された。私は親様の偉大なる慈悲に感激しながら三島に歸つた。其の後三度目に又た志田様の宅でお眼にかゝつたが接すれに接する程其の人格の偉大なることが明かになつて来る。人は彼女を阿房だと云ふ。人は彼女を氣狂いだと云ふ。其れに見る人々の眼に依るので私の見る所に依れば今日の社会、今日の天理教を真に根本的に救い得るものは全世界に彼女より外ないと云ふことを確信している。従つて私は本部に向つて注意するのである。もし本部にして真に斯道の改良発展を望むならば一切の僻見（彼女が氣狂いであると云ふ僻見）と空想（今に本部に神が顕われるだらうと云ふ根拠なき空想）を捨てゝ此の大人格者を早く本部に迎えよ。もし此の際に於て彼女を迎えずば永遠に天理教再興の機会はないであらう。敢て天理教本部の細心なる密慮と果斷とを望む。（四月二十九日）

上田奈良糸様に呈する書

大平 隆平

上田奈良糸子様台下！
私の様な薄徳なものが貴女の如き高位の方に向つて突然御手紙を差上げることは誠に僭越至極の次第で御座いますがこれも道のためと思つてザット御目を通して下されたい。さて私の御願と申上ては外ては御座いませんが国々からお授けを戴きに遠い所を遥々歸つて来た子供に今日もお休みだ！ 又た今日もお休みだと云つて二日も三日もお待たせに

なることで御座います。これは何う云ふ訳か私は存じませんが亡くなつた御本席様の時代には随分重い病中を押して信徒に待たせるのは気の毒だからと申されてお授けをお運び下されたので御座います。然るに貴女様の時代になつてからは今日は厭だ明日も厭だと仰せになつて二日も三日もお休みになることがある。これは本部員の仕方がお気に召さないのですか？ 信徒の精神がお気に召さないのですか？ はたまた御自分の勝手な御用のためにお休みになるのですか？ 其れに何方らにしても信徒が一日お地場に滞在すれば其れだけの入費が要る計りでなく又た其れだけの手間を費しているのです。これは貴女にとつては何んでもないことでありましょうが五人も十人も信徒が二日も三日も遊んでいと云ふ事は信徒から云つても国家から云つても誠に不経済極まることゝ思います。

奈良糸様！

貴女にはお授け以外にお仕事は御座いませんけれども信徒にはそれ 職業と云ふものが御座います。其処を充分汲んでおやりにならないと云ふのは余りに同情のないお仕方かと存じます。

奈良糸様

かゝることを申し上げては誠に失礼なれど知りつゝ云わないのは却つて不親切の至りと存じ申し上げますが私が神様から聞かして戴きました所に依れば貴女様は前生に神の道で疑つて 誠を尽さぬお方とか其れを神様のお慈悲を以つて今生に一番大きな徳を積むことのできるところに引上げて下された。其の御恩をお忘れになつて御自分が偉いから此う云ふ風になつたと慢心なさつておいでになるから来世に唾になつて生れるとお聞かせになりました。私には其の真偽を見分ける力は御座いませんがこれが真実誠の神様のお話して御座いました。

奈良糸様！

私は貴女が果して慢心なさつてお居でになるか何うか存じません。然し今日は厭だ！ 明日も厭だ！ と勝手にお休みになると云ふことにチト我侷な行為では御座いますまいか？ これを天理の上より照しても助け一条の道ならば成るだけ信徒の便宜を計つてやるのが本当だと思います。其れを信徒に二日も三日も理由なしに待たせて平気でお居でになると云ふのは助け一条の道でなくて苦しめ一条の道ではないかと存じます。

前にも申上たる如く貴女にはお授け以外に御商売と申してなけれども外の人には商売があります。

其処を一つ汲んでやつて戴きたい。而したら信徒が喜ぶ計りでなく神様が何の様にお喜びになるかわかりません。何うぞお授けを戴く信徒に代つての御願いで御座いますが此所の処を何うぞお聞き届け下さる様に願います。

貴女様にも長々御苦勞をかけ申しましたがもはや此の先き長いこともなからうと思ひます。何うぞ今暫時の間お苦しくとも順当にお運び下さることをお願い申し上げます。

誠に失礼なことを申し上げましたがこれも道のため信徒のため貴女自身のためと思ふて申上げたことで御座います。幸いに私の意のある所をお汲みとり下されば幸甚の至りと存じます。

暴言多

謝

四月三十日

永尾よしゑ様諸井こし子様に謝するの書

大平 隆平

御両人様！ 先日はわざわざ御使を頂きまして有難う御座います。其の節のお話に永尾様にては折角これ迄に名を売るといふことは容易なことではないが此処で外へそれでは誠に惜しいものだ。天理教を調べるなら御筆先と云ふものもあるし又お指図と云ふものもある。其れを見ていれば沢山だと云つて寄る人も惜しがりますから私が教祖様の所から聞かして戴いたこともありますから私の知つてだけのことはお話さして戴きますからとのお話。又諸井様にては父が本部から聞いて来た大平は此の頃播州の方に箝まつて居るそうであるが本部へ来る時天理教より外に信ずる宗教はないと云つて来たのに其んな方へそれぢや初めの目的が何んにもならん様になると仰つてお居でになつて居るから何う云ふ風の場合だか一寸伺いたいと思ひましたとのお話でしたたが何れも此んなつまらない私の様なものをお思い下さるからの上の御忠告と御親切の程は厚く／＼頂戴致しますが私の如何にも残念に思ふことは永尾様にしる諸井様にしる実際の人物の価値をお確かめにならないでただ噂だけをお信じになつて御忠告であることです。これは良くあることで御座いますが人の頭に立つ人が實際自分で其の人なり其の物なりを見ないでただ噂だけを信じて彼れはいかんから近寄るなとか彼れはいかんから手を出すなとか忠告なさる方がありますがこれ

程親切な様で不親切な行為はないと思ひます。何故かと申しますと世間から氣狂いだとか阿房だと云われて居る人間に却つて世にも稀なる偉大な人物があることがあります。又た世間で彼んなものは二束三文の価値もないと捨てゝ顧みないものに却つて稀代の芸術品があることがあります。何んでも其の通りであります。身自ら見身自ら聞かないで人の眼で見たと云つて我が眼で見た様に取り次ぎ人の耳で聞いたことを我が耳で聞いた様に取り継ぐと云うことは實際馬鹿らしいことでもあります。今後の御忠告も私の様なこれは価値ありと信じたなら誰が何ん古と云おうが聞かない様な頑固な人間だから良いものゝ人の云いなり次第になる人間があつたら折角この偉人が表われて居つても其の人に接する機会を失ふ様になるかも知れませぬ。これは今後もあることで御座いますが人に忠告をお与えになら何事に依らず真偽の程を御自身にお確かめになつてからの上のことにお願ひ致します。

此う申上ては恩を仇で返す奴とお憎しみになるかも知れませんが私が常に頭を悩ますのは世の不徹底なる識者の其の実知らずして知つたか振りの言が如何に人間社会の進歩を疎外することの大なるかを思ふことの切なるためであります。決して悪くおとり下さらぬやうにお願ひ致します。

さて問題の播州の婦人で御座います。本部では専ら氣狂だとか阿房だとかの評判が専らで御座いますが私の見る所では其の腰の低いこと其の慈悲心の廣大無辺なることは教祖以上であるとも以下に落ちない大人格者であると思ひます。彼んな大人物を攫えて氣狂だの阿房だのと云つて騒ぐ人は一体何所に眼がついているのだらうと思ひませぬ。

此う云つたなら私迄乱心したとお考へになるかも知れませんが其ら構いません。私の名譽其んなものももし私にあるなら捨てゝ構いません。私は元來其んなものを求めるためにこれ迄の努力はして来ませんでしたから。私はただ眞の信仰を求めて来たのです。其れに余計なものがついて来て厭で仕様がなからぬのです。けれども幾ら払つても形に影に付きなう如く善かれ悪かれ其れがついて来るのです。私は名譽は嫌です。もし捨てられるものなら此の際奇麗サツパリ捨てたいものです。

又た永尾様のお話しにお道进行研究するにはお筆先と云ふものもある。お指図と云ふものもある。其れを研究していれば沢山であると。何方のお言葉かは知りませんが其れはランブもあるし瓦斯灯もあるし電氣もある。それさえついていけばお天道様は要らんと云つた様なものです。

たとい万巻のお筆先があり万巻のお指図があつても生きた教理は生きた偉人に接したければわからないもので御座います。昔から百聞一見に如かずと云つて居る如く文士の筆や画家の筆で海を想像しているよりも直接海を見た方が何れだけ印象深いかわかりませぬ。

今度出来た御神楽歌に

「やまのなかといりこんでじきひつまことをたづねでた。」と云ふお言葉があります。生きたお筆先や生きたお指図が其処にあるのに何も苦しんで紙に書いたお筆先やお指図を引つ繰り返す必要はないかと思ひます。

其れから山名の前会長様のお言葉だと云ふのに大平は本部へ来る時天理教より外に信ずる宗教はないと云つて来たのに其んな方へそれぢや始めの目的が何んにもならんと仰つていられるそうでありませぬが私の信仰と云ふものはそんな固定したものではありません。勿論天理教以前の宗教（仏教や基督教）に歸つて行くやうなことはありませんが将来天理教以上の宗教が表れた場合には何時でもそれを信じるのです。

元來今の本部員から始めて天理教は発達し切つたものゝ様に思つて居るが天理教は未だ全くの卵です。これから何んなに變化発展して行くかわかりませぬ。其れは月日両神が実の親であるといふこと天理は誠であるといふこと身は神の貨物であることと云ふ根本教理は變らないにしても其の他の時勢に依つて何んなに變つて行くかわかりませぬ。現に播州の親様の説く所等は在來の天理教より一步を進めたものであります。此の變化発達する所に天理教の天理教たる価値があるのです。其れを天理教と云ふものは万古不易なものであると思ふのはそもそも此の道は生きた道であると云ふことを知らぬ謬論です。其れは山名の前会長様等の眼から見たならば私が播州の親様を崇拜しているといふことは私の本来の目的を没却し外道の信仰に入つた様に見えるかも知れませぬ。然し私にとつては其れは信仰の進歩でこそあれ決して退歩ではないのである。私が彼女を崇拜したからとて私は何も天の親様の御恩は忘れぬ。又教祖の御恩をも忘れぬ。却つて益々強く其れを感じるのです。

幾ら私の信仰が墮落しても理を外れたものは信じませぬ。たとい私が播州の親様を信じて其の教を仰ぐにしても理の信仰と云ふ点には變りはありません。何うぞ其れだけは御安心下さい。

な お申上たいことも色々ありますが今申上た処でとてもおわかりないだらうと思ひます。何うぞ今三年お待ち下さい。其うしたら私の信仰の間違つていたか間違つて居ないか

も自然わかつて来るだらうと思います。現在の所折角の御忠告に背く様で誠に済みませんが信仰問題は其う容易く解決することの出来ない問題ですから何うぞ今暫時の時をお貸し下さる様に願います。

四月三十日

痴人の足跡

大平 隆平

第一巻 溪間の少年

私は明治十九年四月八日新潟県北魚沼郡上条村大字長島に生れたといふことである。(以下私が今日迄大宇宙に向つて印した自然の足跡に連絡す……………)

痴人の足跡を書かざる理由

大平 隆平

私は痴人の足跡なる標題の下に私の今日迄の自叙伝を書こうと思つていた。然しよく考えて見ると其れは最も愚劣なる行為であると共に又最も罪深い行為であることを悟つた。古来主我的の偉人はよく自分の自叙伝を書いて居るがよく考えて見ると其んな厚がましいことがよく出来たものだと思ふ。何故かと云えば人間は大宇宙に向つて書いて来た無形の自叙伝より完全なる自叙伝は到底書けないものである。其れを敢てしようとする上に就ては必らずや其処に大なる取捨選択が行われる。而して或る部分は非常に膨脹して書かれたかと思ふと或る部分は非常に臆病に書かれてある。其処に自然の直写と云ふべき公平なる記述がない。これは古今の自叙伝なるものゝ全てが其うである。其処で私は考えた。自然其の俣を直写することが出来ない様な筆をもつて自叙伝を書くことは二重の罪惡を作るのである。

人は誰でも自然を直写し得るものではない。人は誰でも自分が自然向つて書いて来た自己の自叙伝以外に完全なる自叙伝を書き得るものがない。しかもなおこれは自己の偽らざる告白であるとか真実の自叙伝であるとか銘を打つて社会に出すことは余りに自己に忠ならざる行為ではないかと私は思ふ。これ私が自叙伝を書くことを中止した理由である。かく云わば何事も側面から見なければならぬ皮肉家はお前が自叙伝を書かないのは人に見せることのできない秘密があるからであらうと如何にも私には欠点もある罪惡もある。然し其の中の一つとして人に語ることの出来ないものはない。又た其の中の一つとして法律上の罪に問わるべきものはない。

けれども私は考えた。人間が自分自身のことを語ることも程又た書くことも程当てにならぬものはない。と。けれども多くの人々は此の私の言葉には賛成しないであらう。何故なれば世間の人達は自分が自分自身のことを語りもしくは書く程誤謬の少ないものはないと信じているから。然し實際に於て如何。或る者は自分を価値以上に買い被り、或る者は自分を価値以下に見ている。世界の間人を引つ張つて其れに銘々の自叙伝を書かして見た所で此の二つの種類を出まいと思ふ。

私は其れが嫌いだ。自分を価値以上に買い被ることも嫌いなれば自分を価値以下に引き下げることも嫌いである。しかも自叙伝を書くとなると此の二つの欠点を脱することはできないのである。

されば私は決心した。

私は私の事に関して一切の証明をせざるべし。従つて自叙伝を書かざることを云ふまでもない。もし私の一生が真に後世に伝ふるの価値あるものであつたら人が私のために私の伝記を書いて呉れるであらう。私は何処までも他人の真価を発見し其れを後世に伝ふれば足るのである。

全て私自身の証明は真実ではない。私に就いて証明する人は外にある。此う云ふ理由に依り私は人のことを自分に引き受け自分のことは一切他人に任せてある。恐らく其れに依つて私は自画自讚の罪を免かれることが出来るであらう。

誠に人は大宇宙に向つて書く所の自叙伝より完全により真面目なる自叙伝は書くことはできない。其れを敢てすることは自己を汚すものである。私は自分自身について千万言の饒舌を弄する人より自分自身のことについては一言の言葉も発しない。沈黙の人を喜ぶ。其処に人間としての真面目さがあるからである。

以上述べたる理由によつて私は痴人の足跡を書くことを中止した。其れについて読者は

如何様に考えられやうが私は私に対する最も忠実な道をとつたものと固く信じている。而して此の自信を私は永遠に継続する心算である。(四月三十日)

読者の声

大阪 公正倶楽部

有志団

謹啓仕候
御社益々隆盛之段奉賀候之れ偏に貴君の御熱心なる大努力と察し奉り候備て愚生なる者
が貴兄の革命に就ては紙上御賢明な御判断を御事なれば実に幸福の次第に御座候今日天理
教内は永年堪えしやう前管長居り候申さずとも毎月の新宗教に連載なきに如く誠痛快に有之候
遠き英国へ動機如何なる一冊を以て天理教を布教せり。赤木鹿につつき第一の問題は布教費に候種
で世の人々は如何なる眼を以て天理教を布教せり。赤木鹿につつき第一の問題は布教費に候種
り色々の昇るが如き大勢力と云えり。實に人馬鹿につつき第一の問題は布教費に候種
義二郎、高見正一郎、赤木徳之助として各人にも多い少即ち毎月六円出た人もあり一円五
集會の決か信徒諸氏より布教費として取り立てり。部下と申しても僅か四十箇所よりなき微々たる大教会の
十銭、二円、三円と取立たり。部と申しても僅か四十箇所よりなき微々たる大教会の
勢力である故一致団結する訳に行かず或担任は裏面に於て大なる不服者も有之候一方の教
會は尽力する他の一方はせないと云ふ有様兎も角にも横暴なる且つ自分の目的が達せざん

を以て目的を達せんとする会長である故有耶無耶に三名を渡英さす事に成り候三名の内
の赤木徳之助と云ふ悪い知えの者と会長はぐるとなつてなせり。然るに一年にして赤木だ
け帰り其当時大教会と云わずわけのわからん屋の木部と云わず大いに優待せり。まるで昔
ならば大名の行列の如く皆頭を下げて居つた。英国の話でもすれば例の高慢を出し、大な
る権力を振り回して会長と共同して人を見下げ居り候。今より思えば実に言語道断に候。
後大阪此花町に関西英語学校あり。其校長はデビソンなり。それを入信さして以来益同盟
を致し、結果彼れをして再び英国へやる目的にして教師検定試験を妻と外一名の者と受け
さし本部に於ても非常に礼遇せり。船場詰所に於ても前会長、会長、妻等神様の如くもて
はやし且つ詰所も今日の如く普請も出来ておらず誠に狭あいにも係らず大なる間をあて
寝るも食事も別にし而して愚会長及び赤木は詰所に居る者に対しては実に犬か馬の如く
呼び且つ彼等に使にやられ候實に多数の大悪に対しては我々有志は四五年の星霜の間傍見
し且つ黙し居りし次第に候天何んで罪せん。遂に其の行為は神様の御目に触れ遂に法律の
網に掛り候。其行為は實に悪みて余り有り候。英国布教費と云つて集めた金を以て遊び大
教会のためにした赤木等が主となつてなせり。六円の債券を自己の教会(東船支教会)の
ために普請に仕様せり。宮川と云ふ男の娘は二年前迄は飯降政甚の妻たりしが獄に入れし
為離縁せり。此れも大教会の六円券を遊蕩に費い出せしたため堀川監獄におる者に候会長の
妻も宮川の娘に候又木村常七とか云ふやはり部下即横堀支教会横へ宣教所長のやつもだい
分費消せり。而して赤木は判決の結果法廷に置いて五年間の執行猶予となり出獄せり。其
のやり来りし行為に対しては一度口を開きし時は中々猶予所にあらず然るに弁に巧みの者
にして遂に判事の目を逃れり。証人として出頭せし者が甘く云つてやつたために獄中生活
を逃れり。畏れ多くも昭憲皇太后御崩御遊ばされし後恩典に接して減刑となり且つ又聖上
陛下の御大典に減刑され得々然として大教会を出入し会長とぐるになり知らざる人に対して
ては他の者が悪い／＼と云つてやはり自分を擁護せり。而して隙よりは会長を目して
「われはあんな会長の下に従ふべき者ではない」と云つて居るにもかゝらず会長は未だ
現今にしら目がさめない。あいかわらず共に酒を飲みに行つたり、遊びに行つたり實に世
界並の者より劣る行動をして部下より金を上げさして自己のために費消する等御教祖の精
神を以て居る者とは云えない。自ら教理を人に説いて居るなどは實に天理教内に立て入れ
ば其腐敗話に成らず候。たしか秋の大祭に有之候。客間に於て御膳立てに食事になし相変
らず信用して引き立て様となせし由会長の心中は實に動揺いたし居る事は疑を入れずとも
明かなり。幼少より苦勞なしに一躍して会長の椅子を占め自分の目的達せざんばわん力を
以てやる等其行為は野蕃極れり。我れは部下より金を取り立て銀行にあずけ安樂に暮し居
る等實に憤激に堪えない次第に候。デビ其の者はパーマ嬢を連れて帰り(当時新聞紙上
に書き實に天理教船場大教会の名の上がつた如く喜び居り候)船中に於て奇なる現象があ

待よしざる己に遠きや。発実べ名余居に又き聞す君の輿達次第に
きし而るに依りて道なれど其の質を戦て貴君に連日致す
厚ありて布おしは金ならず何れをんぞや。救ふに或るやつて居る等
手りて布おしは金ならず何れをんぞや。救ふに或るやつて居る等
より何れもその即ち如何の行はざるに志は失ふに御意に候。草々
本部は其のまじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
とは如何に其のまじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
種々は其のまじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
又その先の日々其のまじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
なし今日其のまじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
をなすは其のまじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
席をいじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
別座をいじりて居る何れも其の志は失ふに御意に候。草々
には所布て以て悪理中なせり。キリクリと居るに如何なるか。新宗教
祭にいて金と二人が如何に居るに如何なるか。新宗教
座へ行つたを聞かす。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
遷りては英話の如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
四月と分は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
年一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
三一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
正一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
大一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
候。一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
に一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
し一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
話一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
の一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
と一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の
つ一人は如き。今日由船場且つ食住を提げ乱筆と我々の

大正五年四月十二日

慨然として蹶起せし
有志代表六

名
新宗教編集部
大平隆平殿

誠に乱筆又秩序なき乱文にて失礼の段平にて御宥免下され度候備て現在大教会内を大革命
すべき時際して得々然と驚くべき利子を抽出して居る。而して金を出し多し
腹の中をくらえ月には驚くべき利子を抽出して居る。而して金を出し多し
りしか会長及び赤木のため候。如何なるか。今に革命せずんは此れより先は如何なる有様
部下に分け」と。此の言は如何なるか。今に革命せずんは此れより先は如何なる有様
だ極か有様になつたのである。嗚呼今に革命せずんは此れより先は如何なる有様
と状態とならざるや。此の言は如何なるか。今に革命せずんは此れより先は如何なる有様
○御手紙通りと致しませぬ。大教会の腐敗は驚くべきものであります。貴方方六人の方は
皆これ大教会の役です。何んとかんがえの道具衆であるから事情を詳述して本部へ訴えなさい。本部は其れが
を取り締る官憲の手が回りませぬ。其れも長いことではあります。其れも長いことではあります
い。道のためを思わば何ぞ奮つて御活動の程願います。（大平生）

京都府天田郡庵我村字笈巻
高橋喜太郎

氏
拝呈仕候私しは御道に付いては誠に浅い信者ですけれども新宗教誌の説は実行さして頂
く積りです。私の方々は山間の村にて僅かの信者を集めて集談所の形をさして頂いて居り
すが月並祭は十日ですけれども月の五日の夜に熱心な信者により教理の研究をして居
が今月はお生れに神様の御誕生日を天皇陛下の御誕生祭を説明しました。併し僅かの御供物をし
て是非大切な事を祝ふの事は重要の事と存じます。私しは氣付きませぬ。貴君の御蔭で御祝さ
して頂きました事を大平氏に感謝します。尚私しは会長さんや役員方になることはいやで

す。此んな地位になると信者から金取ること計りが本業となつて真実の御助けは出来ません。

(四月十日)

○天理教の教師も数ある中に自分が其のお方のために日々結好に通らして頂いて居る大恩ある教祖御親の誕生日を思い出す人がない。其の者にあつて貴方だけが教祖御親の御誕生日を記念なされたと云ふことは誠に篤志な行為と申さなければなりません。親様にも貴方のお志はさぞ厚う／＼お受取り下されたことゝ思います。ただ一言御注意迄に申上りますがお祭は旧でも新でも良い様なもの神様は凡て旧の方をお喜びになるから其う願えれば尚更結構です。何うぞ会長さんや役員さんの曲つた道をお踏みにならないで教祖難型の道をお通り下さい。頼みます。(大平生)

備前国上道郡九幡

一 森 雪 之 助

氏

太陽の表の火焰の暴風のやうな激しさはあなたが高きより更に高きへと求めて止み玉わぬ御労作の態度であります。

理解さしたい。理解し得ない。是は非常に痛ましい戦いですが然し愉快でしょう。私は次の語をつく／＼感じます。真人の昼は痴人の夜にして痴人の昼は真人の夜なりといふ語です。けれども底流は動き出しました。

第三の天啓人は徐ろに賓座に入らんとして其の隠栖の座を立たんとして居られます。

是の事はあなたにとつて万軍の援兵でございしょう。

私は此度私の弱い脳と未熟な思想とに映つた天理教を匂い掛けのために地方へ紹介して見たいと思います。其ためにあなたの御労作の結果を転載することを御許しが願いたいと存じます。

お雛祭が済んで平原の村はめつきり春めきました。小さい妹達が湿つた田へ下りて椎の台や雛草で人形を造つて遊ぶ時分となりました。

私は先き頃老父の九死に面して信仰が非常ににらがれました。然しまだ／＼未成品であります。ゆく／＼あなたの御教導が願いたいと存じます。サヨウナラ

雪 之 助

隆 平 様

○貴方は地方の新聞社におゐでの方とも思われますが如何にも第三の天啓人は徐ろに賓座に入らんとして其の隠栖の座を立たんとして居られます。否な既にお立ちになりました。お言葉の如く其れか私にとつて万軍の援兵であります。

小生の論説を新聞なり雑誌になり其の間御転載下さることは構いませんが中には私の論説を無断で改作して自分の説を加え私の談話として大阪辺りの新聞に出す人があつて困ります。其れさえお謹しみ下さらば何処に御転載下さらうとも構いません。先日差上げた返事には此の事を書き漏らしました故此処に改めて御返事申上ります。(大平生)

熊本市外黒髪村字坪井五校第二校外寮内
荻野文城

氏

拝啓

今日春休みを終えて故山を辞し錯雑紛糾した事件の為に襲われて得も言われぬさみしさのみなぎつた心もて再び当地の下宿へ帰りました机の上に置かれてあつた一冊の新宗教は正しく渴したるものへの一杯の甘露のやうでありました。

私は汽車のつかれもしらで読み出しました。前々号にでしたが大兄が痴人の足跡を出すやと仰つたので今度か今度かとそればつかりを楽しみにしてまつていたのでした。

大兄よ私はあなたが創刊号に於て「聖壇に立ちて」の一文を公にせられました時に於てあなたを最もなつかしき御方と思ひました。然して今又痴人の足跡の序文を読んで見て更にしたわしき先輩の只一人あつたことを嬉しく且つ心強く思ひました。私の生立ちのことは今更大兄のそれに似かよつていとてこゝに申しあぐるも厭わしい事でございます。

実はいつも／＼御手紙でも差上たい／＼と思ひながらついで学務の多忙に追われ勝ないので今日迄失礼致しました。今度の春休みにはぜひにと思つて筆をとりかけてみましたがどうしたものか如何にも気乗がせず強いてかけば不自然なものが出来上りはしないかと思ひましたのでそのまゝよしてしまつたやうなわけです。

大兄よ私が如何なる事を申しましようがあなたは之に対して怒ることもとがめることも出来ませんよ。何んとなれば只今私の全教育者はあなた一人ですから。

大兄よ私はあなたに未だ一度も御目にかゝつた事がございせんが嘗て自分は助成的な

男だと申されはよく瘦形以来私はあなたをこういふ風来の男だと想像して居ります。長はあま
り高い方は論議が一層つよきこえてくるのです。然し私はこう思つてみる時に
あなただの言論が昨年以來随分思ひつきつた革命の声を御吐きになりましたね。然し私は恐

れて居ります。これほど鋭利な鋒先を真向からあびせかけられてはたまつたものではない
神ならぬ天理教界の方々は瘦我慢の反抗心を起されまじうと私だつてこれだけ思いきつて醜
おに教界の改革に着手され面白過ぎるのではありませんまいか。然し私は美しすぎるのを悪い
悪を曝露されたり決して美し過ぎるのではありませんまいか。然し私は美しすぎるのを悪い

と思ふのではなくあまりに美し過ぎて今の俗人の眼には反つて昭かに写り難いのはあり
ますまいか思つて居ります。

大兄の言はるゝ処もし悉く真なりせば教界の墮落せること実に驚嘆の外はありません。
まんざらあなたを根も葉もないふその事は申されすまい。仮にあなたの革命の声を半分
にしてきゝましても私の教界に対する信用は全く地に墜ちました。

私は今日まで苟くも宗教家たるものは我が心の様に否宗教家ならざる我が心さえこの位
なれば宗教家となるれば更に更に美しい透明な心を持つていたものだと思つていました。聞
けば大兄に対する反抗はあらゆる手段のもとに表われているとの事でございますが大兄は
之が為に実に少からざる幸福を得られているであります。私が四月号を一読してすぐ
の感想は韓退之の柳子厚墓誌銘の

「然子厚付不久、窮不極、雖有出於人、其文為辞章、必不能自力以致必伝従世如今無疑
也」

の一節でございます。

大兄よあなたの研究は攻撃と共に益々進みあなたの言論は攻撃と共にいよいよ生きて来
ました。すべて喜びは悲みの中に表われてまいります。

私は思つています。あなたは只今大なる孤独のさしみの中にありて尚且つ言ふにいわれ
ぬ愉快さが横溢していることであらうと。

私も昨年烈しい攻撃を受けました。只今は周囲の事情如何ともしがたく外面だけはやめ
たやうによそおつていますが私は反つてその厚意を感謝するやうな気になりました。大兄
よ。天理教界の御方々はどうしてあんなに意地が悪いんでございましょう。どうしてもつ
とらるゝこと勿れ」とか一として嫌味たつぷりでない言い草はないではありませんか。

然し大兄よ。あなたにも一言質してみたいことがあります。先々月の新宗教誌上にて管
長未亡人中山玉恵子殿に与ふるの書中に「けれど御安心下さい。貴女の生きておいでの間
は貴女に逢いたいと思つて二度とお訪ねする様なことはありませんから。たとい貴女の方
で逢いたいと仰つても逢ひは致しませんから」と言われましたあなたにも似ず偏狭なこと
を仰るものだと私の幼稚な頭には考えられました。大兄はどういふ御考にてこの言葉を御
発しなさいましたか先方が逢つてやるとおつしゃつたら大兄も逢つてやつたらよいではあ
りませんか。

次に生れて二度目の教会のお祭まいりにて一寸感じたことを申しあげます。

御神楽歌には実に感じ入りました。讚美歌などから見れば実に 比較にならぬ程味い
があります。

後に或人の講演をきゝました。それは「互い助けあい」を樹木のことによつて例をとられたが
炭酸ガスのことを炭酸といわれましたが無知な信徒のみのことであり故やはり略せず
に炭酸ガスは炭酸ガスと云つて戴きたいと思ひました。

それから最後に似三人の新入信徒と教祖殿に参らして戴きました時に教会のお方が見事
な織物を示して之は今度更えられる教祖殿の畳の縁ですがこれで六円以上かゝりますと自
慢していらつしやいました。新入信徒の四十以上の男がお賽銭の持合せがなかつたと見え
て他の一人から借りて二銭ばかりをさももつたいらしくあげました。教会の人がいつそ全
くの無口でいらつしやつたら中の空気も神様の懐のやうな気がいたしましうに。殊に夜
分にしんとしまつた広間に一人か二人かづゝおまいりしておつとめをしている声をきく
時は実に何とも言えぬやうによいものです。

次には天理教が如何に上流の方に嫌われているかむしろ顧みられないか一例をあげてみ
ましょう。私が高等学校に入学致しまして第一時間目の修身の時間に演習題が課せられま
したがその第一問は今日までに最も余を感化したる事といふのであります。私はこれに
対して真面目に天理教入信のことを書いて出しました。この時までは未だ新宗教は見たこ
とはありませんので全く広池博士の著書に従つていました。担任教授は全生徒の感ぜし事
件を各種に分類して全体にわたつての公表と教授の意見とを述べられました。宗教の部に

至りました。何時天理教といふ言葉が出るかと胸をどき させてまつていますと仏教キリスト教神道とは申されましたが天理教のことは一言半句もでません。殊にあれだけ真面目に腹臍なく書きましたものに之でもつても天理教が如何に閑却されているかゞわかります。終りに望んで

- 私が天理信仰後獲得したる利益は
- 一 幼稚ながら思想が一通統一された事
- 一 自己反省の力が極めて強烈になりしこと
- 一 貧苦を苦痛と思わぬこと

- 私が新宗教の購読によりて得たる利益
- 一 天理は信仰してもよいといふ安心を得たる事
- 一 四方正面の生活を以て一貫せんと決心を起さしめた事でございます。

私は之等の・に於て私を始めて本教に導きたる布教師と新宗教の発刊者大平良平大兄に衷心より感謝の意を表します。またことにくだらぬことを長々とかきまして貴重なる時間を浪費させましたことを厚く謝します。御返事など決して無用でございます。さらば大兄よ。御健在なれ。乱筆御免下さい。

荻野文

城 拝

大 平 隆 平 殿

○御手紙拝見致しました。私のやうなものをその様に思召される御心否な私を思ふて下さるのではない。真理を其の様にお愛し下さる御心に厚く感謝致します。貴方がお待ち下すつた痴人の足跡は書くことを中止しました。其の理由は痴人の足跡を書かざる理由を御覧下さい。

人間は自己を真面目に考える時自然の足跡を其の俣に再現することが出来ない時は寧ろ沈黙するより外はない。其れでなければ自分は詐吐きにならなければならなりません。これが私が痴人の足跡を書くことを中止した理由であります。

貴方の私についての想像は誤つて居ります。成る程長は余り高くはありませんが五尺三寸五分あります。瘦形は瘦形です。然し其れからの想像色は白くわけた髪は漆のやうに濃い！ 違います。私は其んな気の利いた当世才子風の男ではありません。私は百姓の子です。野呂間です。阿房です。氣狂いです。武骨な人間です。

天理教界革命の声、彼れを皆様がきつ過ぎると仰しゃるが彼れでなくては最初は応えません。彼れ位きつく出てもヤット良い加減なものです。彼れが最初から毒にもならず薬にもならないことを云つて居たら一年の仕事は十年かゝります。物事は時と場合に依つて違います。成る程始めの程はお言葉の如く大分反抗心をもつた人が沢山ありましたが此の頃は革命の必要がわかつたと見えて氣早の教会は既に改革に着手致しました。言葉静かに説くべき時期はこれからです。

管長夫人が逢おうと仰つても逢わぬと私が云つたのは何う云ふ理由かとお尋ねですが別に深い理由もありません。彼の時の一時の感情から発した言葉です。如何にもお言葉の如く逢ふと云つたら逢いましょうね。何んな人にでも。

一寸これだけ御返事申上げて置きます。(大平生)

東京府下巢鴨町染井八七五
山中忠彦氏

左の手紙は天理教本部員権大教正山中彦七氏の子息(現今早稲田大学文科在学中)忠彦氏が四月号を読み父に与ふる書及び其の他をもつて不当なりとし

奈良県山辺郡丹波市町三島三百七十七番地新宗教社内
大 平 隆 平 様

として寄せられた反駁文である。

その後は御無沙汰計り平に御容赦下されませ。御貴兄様には益々御健祥に斯道のため御尽し下され殊に有難く存じます。さて四月号には小生が父に御寄書下され拝読仕りました。小生四月号を読みいさゝか感ずるところありその上近頃ない一種の苦しい心の悶えを得た故末筆ながら申し述べる事といたしました。御多忙中御暇をとるは誠に忍びませぬが私が書かざるを得なかつたこの書を一読下さるれば幸甚の至りです。私は足下の私の父に對しての寄書に付あまり云々いたしたいと思いません。唯々これだけを書いておきます。私の父は決して足下の思つて居られる様な聞くも恐ろしい吝嗇家一道德的罪人一でない

いふ事、私の甥の正義の死は足下への思われの態度はつていられる様な軽薄な点に起因して居るのでない
事、父の従軽薄と足下に思われの態度はつていられる様な軽薄な点に起因して居るのでない
この偏見は次々と何れに思われの態度はつていられる様な軽薄な点に起因して居るのでない
ならば自由なら足下を思われの態度はつていられる様な軽薄な点に起因して居るのでない
ある心を喜ばして下さいます。私には早く御返事をいたさうあります。終りにどうか此の
一文を御親展に願います。

山 中

生

大 平 様

大平兄足下！ 小生は近頃こういふ事を考へて居るのです。宗教的行為は絶対的愛から
出た行為でなければなりません。即ち普遍的無条件的愛である事を意味する
ので愛のたぬの愛でないといふ事です。例えばあの女は如何にも愛嬌で美しいから愛す
る、又あの人を助けておけば将来自分のためには有益な人となるから愛するとかいふ愛で
はありませぬ。可愛いそなたを見ればなれませぬ。その愛一絶対的愛一を心に感觸しつゝ神の愛を
動機となす行為は所謂助け一条の精神かと思ひます。助け一条の精神とはすべての人（生物を
向（愛のたぬの愛）がない事は勿論であります。助け一条の精神とはすべての人（生物を
も服務）可愛いといふ子心であります。基督教でいふ愛であると思ひます。私は御教祖の
説き下されし「ひのきしん」に於いて愛の極致の積極的行為を見出します。絶対愛の積極
的行為一ひのきしん一には欲はありませぬ。基督教でいふ謙讓の欲は愛に於いてはぐくま
れたる様に足下の所謂天理教の三条の教憲一朝起き、正直、働き（ひとしく吾々に大事
な教憲）一はこのひのきしんの中にはぐくまれて居るのだと思ひます。さて大平兄足下
よ。私は足下の故管長公奥様、山沢先生、諸井先生、宮森先生等に御寄書致されし文句を
再三再四繰り返し／＼読みました。又三家（御本席様の御遺族）に与ふる書を読みました
が然し唯々私には冷やかな考んじの痕跡が心にきざまれる計りでした。丁度蛇でも握つた
様な温みない冷やかな考んじでした。私はこの冷たい考んじのするものをさがして見まし
てひとしお悲観しました。それは正体の知れぬ裸の死骸でありましたから。死骸とは熱の
発散したる鼓動の止つた肉塊をいふのです。死骸の臭味がプンと香ふて鼻をつまらせ私は
温かな血の通つて居た時を偲びて死そのものがのろわしくなりました。私は生蛇の肉体を
温め様と思つても出来ない様に足下の新宗教雑誌に於いて読者に発表せられた諸々の寄書
はたとえ温かき愛情より出たものにして（思慮深き誠の足下としてはこの発表はふさわ
しく思ふが）しかもそれが一種のきらわしい偏向（後に書く）を有するならば私はこの偏
向を誠の愛の心から書かれたものとは察せられませぬ。この偏向は私のひがみかもしれま
せんが発表その事が誠の愛の証拠で外に個人的愛の心からの忠言を与えることが出来な
つたらうかと思ひます。これ迄足下の記載せられし凡ては真面目な信仰の発露で血もあり
肉もあるものでした。然し二月号以来のものは愛の欠乏から出た軽拳からして雑誌全体が
死骸同然になつた様に考んぜられてその記載が呪わしくありました。以上に述べた一種の
偏向とは何んであるか。それは外ではない足下の例証されし主人の娘と番頭との物語りに
つきて述べやうと思ひます。足下はよくもまあ番頭を非道德的行為者否それどころか娘の
所持金を掠奪する盗人となす事が出来たらうと思ひます。足下は娘の淫落を知りつゝ娘を
飽く迄弁護し番頭を如何にも悪物の様にするのです。娘は自分の淫落のために所持金ど
るか己が肉体も精神も浪費してしまつたのです。番頭は主人の遺言を忘れず主人の娘を諫
め自分の財を投じて娘を悲境から救わんとした道德的爺であつたのです。それにもかゝ
わらず娘は淫落に／＼を重ねて段々と谷底へ／＼と落ちてゆき多くの人々に大変な迷惑を
かけそれに口さがに第一番頭をのゝしり人々を呪い口から出ほうだいの事を狂人の如く雑
言して居るのです。番頭は日夜心をいためて色々と精神的に救い出す道を考えたが女の自
由を束縛し兼ねて彼れは途方に暮れて居るのです。亡き娘の父の魂はそがために地下にあ
りて極楽に行きかねて迷い飛んで居る。足下はこの娘の行為を正当であると思ひますか。
この娘をひいき目で見れば番頭のかくれた忠義を見とめはしませんか。足下よ。真に娘を愛
し正道に導こうと思ふならば先ず娘の心を足下の力強き力一真心一で救ふてやつてくだ
さい。何うも人間といふものは自分が悲境に落ち入る時は自分のために悲しんでくれる人
も妬むものですがとりわけ女の嫉妬は烈しいとしたものです。足下はこの女の愛にほだ
されて且つは女の巧言に弄せられて主人の娘を悲しんで居る番頭をひとしく罵るとは足
下の心がしれない。足下よ。何うかこの淫落の底に宗教上の熱烈なる御話しを聞かしてや
つて下さい。とりわけ娘の親父の苦心して通つて来た道すがらをとくとね。何うかお頼
みいたします。それが現在の足下の心がくべき点だらうと思ひます。精神的に墮落した娘

を誠一筋の道に救わずして番頭を罵つて居る時には娘は精神的に死んでしまいで下は足下は
の宗教的念であらぬ心格を慕いなり時対的（番頭も）き八ツ荒に悪にも一つ男はしか格墮す悪申れすと思
憎悪の念であらぬ心格を慕いなり時対的（番頭も）き八ツ荒に悪にも一つ男はしか格墮す悪申れすと思
結構でなせ銘を慕いなり時対的（番頭も）き八ツ荒に悪にも一つ男はしか格墮す悪申れすと思
思を忘却せ銘を慕いなり時対的（番頭も）き八ツ荒に悪にも一つ男はしか格墮す悪申れすと思
下娘ひいきを慕いなり時対的（番頭も）き八ツ荒に悪にも一つ男はしか格墮す悪申れすと思
否神格を慕いなり時対的（番頭も）き八ツ荒に悪にも一つ男はしか格墮す悪申れすと思
に何んなが義）をけなく可なりで軽薄の脚夫にその個人格を犯しては私（尊重は馬鹿げたと云われ
時対的（番頭も）き八ツ荒に悪にも一つ男はしか格墮す悪申れすと思

編集室より

大平 隆平

四月の八日本部の青年が山中さんの使だと云つて次の書面をもつて来た。御親切なる忠告は拙者意志のあ
拝啓陳者足下御著作の宗教雑誌四月号に於て拙者の事を掲載せられ御親切なる忠告は拙者意志のあ
万々難有候然る所拙者は未だ足下と親しく語り合せし事無之故足下に於ては拙者意志のあ
る所を知らず大に誤解せられては信徒に疑惑を致させ折角足下の御厚意も却つてお道のため
めにならず又は足下の不道德とも相成候故一応面会の上拙者意志のある所を篤と聞て貰い
度と思ふなり足下が三島の拙宅へ御越下さるか將亦拙者が貴宅へ参るべきか何分にも御面
会の上双方意志の疎通を謀り度候条此段申述候間至急御回答に預り度候早々敬具
山 中 彦

七

四月八日

大 平 隆 平 殿

私は早速返事を書いてやつた。其の返事の要点は拙宅へお出でを願ふことは勿体ないから一両日中にお宅迄伺ふからと云ふのであつた。其うすると其の翌日の午後私がちょうど奈良へ行こうと思つて仕度している所に山中氏

自身ノコ／＼やつて来た。

氏は先ず風呂敷包の中から新宗教のボロ／＼になつたのを取り出して弁解し始められた。

其の第一の弁護は私のことを敵だと云つた覚えはない。彼れは飯降氏が本部の大恩になつていながら自分の分限を忘れて松枝さんが鼯になつたと云ふ様なことを云ふのは甚だ不届である。彼の鼯云々のことは私しも始めて聞いたが（其の前に永尾さんの所で聞いたこととはお忘れになつていゝものと見える）彼れは永尾のよしゑさんが本部へ引移つて来た時自分が何もかもかき回そうと思つたのが松枝さんが居て自分の思ふ通りにならないから其れを怨んで彼んなことを云い触らしているのだ。其れを飯降君が聞いて彼んなことを云つてゐるが彼んなことを云わないで自分のことを云つて大に懺悔したら人の同情も買ふことが出来るだらうに……

私は此時飯降氏の品行問題は品行問題又た鼯問題は鼯問題其処はハッキリと区別しなければならぬ。飯降氏の品行が悪いからと云つて事実を事実として述べるのに何も差支へはない。其れは混合すべき問題ではないと云ふことを云つたが何にがさて喋り出したら人に一口でも云わせぬ氏の事だから自分勝手の論法を振り回して散々永尾さんや飯降さんの悪口を並べた後

「此う云ふ訳で飯降様をお道の敵だと云つたことがあるが貴方を敵だと云つた覚えはない。否な大に貴方の論説に対して同感して居る方である」

と。其んな問題は私にとつては何うでもよい問題だ。敵だと云おうが道の破壊者だと云おうが一向其んなことは構わないじゃないか。何にも飯降氏や永尾さんを引合に出して来る門だいじゃないのだ。

其れから第二の問題山中氏が溜める一方を出すことは嫌らいたと云ふこと。

これについては自分が儉約をして質素の生活を営んでゐるのは時代の奢侈を防ぐためであると云ふて現今の青年を嘲笑した俗謡を三つ四つ作つたのを見せなお自分は儉約ではあるが吝嗇ではない。証拠はこれだけの金を人のために出して居るのだと云つて半紙一枚を二つに折つて其れに出した金の金額が記されてある。

其の中の筆頭は島ヶ原の千八百円だがこれは最初貸す心算で出したのだから倒された所で慈善にもなるまい。こんなもの迄慈善の中に加えたら世間の金貸は何んなに大きな慈善をしているかわからぬ。

其の外村のポンプを買つたとか本部の普請に寄付したとか云ふ様なことが書いてあつたが其の内本部に関する事は本部員同列のしたことであつて山中氏一人したと云ふことは何にもない。特に怪しからぬものは飯降氏のために百円出したと云ふ様なことを書いてあつたが他処で聞いて見ると他の本部員は皆々百円出したが山中さんだけ百円出すと云つて五十円だけしか持つて行かぬ相である。其れから後になつて幾ら持つて行つたか其処どこ迄は私も知らない。

なお此の目録以外に金を出したことがあると云ふのだから何れだけ出されたか知らないが又何う云ふ方面に向つて出されたのか知らないが宗教家が千や二千の金を人のために出した所で何にも大袈裟に誇るべきものではあるまいと思ふ。況んや其の出所に於て殆んど慈善のために出したと云ふことのなきに於てをや。

其れも良いが氏が全財産を挙げて道のために尽さない理由を説明して

「私の子供の時は私の家は貧困で上納を納めることもできなかつた。其れで私はツク／＼金と云ふものゝ大切なことを知つた。私が自分の財産を一切神様のために上げないのは今日の様な時勢に其んなことをしたならば家族をかつて行くことができないからである」

と。これが天理教本部員権大教正山中彦七氏の蓄財の理由である。

私は慈善行為を標榜している宗教家が影で経済行為をやつて居るのは宗教家としての真面目ではあるまいと云ふことを云つたが腕を張り眼を光らせて例の高音を一層高く張り上げて滔々懸河の弁を振つて居る氏の耳には一向入らない。私も先方から弁解に来たと云ふのだから云ふ俣に云わして置いたが良いと思つて何にも云わない。

最後に永尾さんの所に入らないのは何も薄情でない。島ヶ原事件の起つた時債権者に家屋敷から家財道具迄全部差出せと忠告したのに芳枝さんは私は欲が深いから良うせんと云つたから私の忠告を用いない様な人間の処へ出入する必要はないと思つて出入しない

と。

これについて永尾さんの云い分を聞いて見ると

「其れは詐だ。彼の時山中さんが来て島ヶ原の証文も出してしまへ。中河の証文も出してしまへと云われたけれども其の証文を出してしまつたら借金は此方で払わなければならぬいわ金は一文も入らないわと来ては此方で何うすることも出来ないから其ら出来ませんと云ふと側にいた債権者が其れは奥様の云ふ通りだと云つたから氣まりが悪くなつて其れじや考へて置いたが良いと云つて歸つて行つて其れつ限り見えません」

と。何地が本当やら私は知らないが私は何にも永尾さんに以前毎日行つて居たものが島ヶ原事件後バツタリ行かなくなつたからと其の一事をとつて薄情だと云つたのではない。氏の日常の行為を総合して薄情だと云つたのである。其れを自ら薄情でないと思つて居るから其れで結構だ。

兎に角本部では奥様を始め皆これ唯我独尊の活き神揃い。これに向つて私はもう何も彼これ云わない。私もこれから宗旨換えだ。而して損しても得することのない埃の番持ちはやめて大に徳の番持ちをやることにしよう。

其うなつて来ると今迄は私が悪口の云い手で他の人は聞き手であつたが今度は人が悪口の云い手で私が聞き手である。但し教会全体の運命に関することはこの限りにあらず否な寧ろこれからが私共の仕事である。

三十年祭には神が表に顕われると云ふ御予言の通り神は表に顕れたが誰れも知らない。本部も誰も知るものがない。

然し時は必らず彼等に覚醒の時期を与える。けれども一日も早く来るべき神を見んと欲するものは心を鎮めて彼女（二代教祖）を見なければならぬ。

本号は此の紹介のために他の記事に及ぶことが出来なかつたが（この一篇は確かに教界の新記録を作るものである）六月号よりは必ずや面目を一新するであらう。

醒めたる者に残れる者を起してやれ。時は近いた。教界の春は此処に来たのである。

.

岩間を迸り出づる銀の様な水も末に至ると濁って来る。其の始め教祖の貴き唇より漏れ
出でた天理教の教理はこれに譬え云わば岩間を迸り出でた泉の様なものである。其れが
教祖の晩年よりやゝ濁りかけ程濁っている。全くと濁り出でた今日のは誰が見ても混濁たる濁水と変じ
てしまった。しかも其れが源に飲用水に用いること放任して其の善後策を講じなければ天理教
岩間より流れ出でた其の俛に飲用水のため其の健康を害するに至るであろう。否既に害せられ
ければならないようになつた。もし此の俛永く放任して其の善後策を講じなければ天理教
五百万の信徒は不良の飲用水のため其の健康を害するに至るであろう。否既に害せられ
ていのである。しかも天理教当局者は未だ此の点を字かすせず此の濁水其の俛を汲んで
世界の人類に飲ませ其の身体其の着物其の使い物道具を洗わんとしている。其の結果は如
何？ 其はあたかも泥を以て泥を洗うの愚に陥るであろう。かくの如くにして天理教本来
の目的なる人心救済は何時の世に出来るであろう？

普通天理教徒はさも芽出度いことでもあるかの様に十年祭は一つの節二十年祭は尚の事
三十年祭は大節と云っているけれども節とは何んぞや又如何なる節が目前に迫っているか
と云うが如き節の意義及び目前に迫っている節の内容を知らない。ただ三十年祭は大節だ
と云うから今に何か変わったことがあるだろう位に思つて現に其の待ち設けた大きな節が自
分等の上には差迫っていることを知らない。而して其の大部分は自分等は正しいけれどもち
ょうど政府や社会が誤解して或は難題を持って来るのではないかと云う内心の杞憂を抱い
ている。又た一部の人達は松村事件を以つて三十年祭の唯一の節と信じ三十年祭もこれ
で済んで呉れれば結好であると自分勝手の安心をしている。
けれども三十年祭の節と云うものはそんな無知な楽道家の樂觀しているような小さなも
のではない。今日迄本部を始め一般天理教徒が踏むべき教祖の道を踏まずして積んだ天理
人道に反した悪因縁の報を見る時が来たのである。増野の死管長の死松村の入獄此等は来
るべき大節の最初のかゝりに過ぎない。これからは教会の隅から隅まで本部員会長役員信
徒の端々迄道を潰した理を見なければならぬ。今度の節は大きい節である。住み々端々
迄神の掃除の手が入る。教祖の聴くものは立ち教祖に聞かざるものは教会も会長も役員も
信徒も誰彼の区別なく破滅の淵に沈んで行く。其れを知らず三十年祭は大節だと云つても
何か何処事であるかの様に平氣でいる。ちょうど阿房が自分の家の破産するのもしらず遊
び廻ると同じ様に。

私は繰り返して云う三十年祭の節とは天理教の腐敗墮落より外何物もないと。蓋し節か
ら芽が出るとは此の腐敗墮落より脱して新しき発展をなすの謂に外ならないのである。其
れを愚かなる本部員を始め一般信徒に至る迄三十年祭の節とは政府や社会より天理教に向
つて何かの云い掛りでもなきかと云うこと計り恐れている。其れは恐るべき第一のもので
はない。天理教の恐るべき第一のものは教祖立教の精神を没却して顧みないと云うことで
ある。これより外に恐るべき破滅の原因は何物もない。然るに愚かなる天理教当局者は今
日にして天理教の現状を打破して教祖に帰らなければ必然自滅の淵に沈んで郁子とを知ら
ないのである。恐らく彼等は余りに永く人間心の曲れる道を歩いて来た結果眞の神の道に
帰る道を忘れたのであろう。

かく云つても本部の人達は天理教は墮落しない腐敗しないと云い張るかも知らんが然ら
ば翻つて日に日に減退して行く信徒の統計を見よ。これ明かに人心が次第に天理教を去り
つゝあることを示すものにあらずして何んぞや。

實際今日社会に於ける天理教の信用は実に憐れむべきものである。試に教名を名乗つて
未信者に向つて勾掛けをして見よ。其の百人の中九十九人迄は天理教と云う名を聞いただ
けでさえユスリやタカリに出逢つた様に何かの辞柄を設けて逃げようとしている。これを
もつて見ても天理教が如何に社会に信用なきかを証するに足るのである。

次に天理教が信徒の間に信用を失いし最も良き実例は此の度の三十年祭である。これが
破竹の勢をもって発展しつゝあつた昔日の勢をもつた天理教であつたならば十万や二十万
の信徒は必らず参拝し其れを同額もしくは同額以上の献金は必らずやあるであろう。然る
に永らく待ちに待つた三十年祭だと云うのに五万や六万の参拝者に六万余円の献金と云
うが如きは今日の憐れむべき現状を曝露して余りある。

凡て此等の衰微原因は天理教当局者が教祖立教の精神即ち助け一条の精神を忘れて余り
に物質的、形式的、利己的、消極的、専制的、貴族的に流れたる結果に外ならない。此等
並に之れに類する種々なる原因は遂に相寄つて天理教自滅の素地を作つたのである。

天理教当局者よ！ 私が此処に述べたることは他人事ではない。皆な我が天理教のこと
である。宜しく此の際の頑冥固陋の意見を捨てゝ現在の天理教の悪弊を矯めもつて内は信
徒を助け外は全世界の全人類を救済する眞正にして眞実なる新宗教たらしめよ。これを殊

更当局者に向って深く／＼望んで置く次第である。(六月三日)

井出クニ子の人格と思想

大平 隆平

私は本誌の前月号(五月号)に二代教祖の出現として井出クニ子女史を紹介した。其れに就て諸所の新聞は種々な評を下し読者亦た其の所見を述べて二代教祖としての真偽の議論が高かった。けれども其の大部分は井出クニ子其人を見たこともなく亦た語ったこともない人達の間接の議論であるから真にこれかと思ふ程も発見することができなかつた。私の読者並に天理教当局者及び諸新聞記者に望むことは直接当の問題の人に接して其の人格と思想とを研究せられんことである。

井出クニ子の生れたのは文久三年七月二十四日である。三十歳迄は別に変わったこともなく過して来たが三十二歳の時病氣を患い昼の十二先より夜の十二時迄腹が痛む。其う云う重体が続くことが凡そ百八十日間である。遂には医者に見せても助からんと云う様の重態になった。然るに或る日眠って居ると白蛇と赤蛇とが上と下から小豆を覗うているところを夢に見た。其れから亦た何んとも知れぬ真白の坊様が出て来てコロ／＼ころんで仕方がない。クニ子は其れを死んだ母の魂ではないかと思つて居ると其の晩方にクニ子の口からスーッと魂が抜けて出て未申の方の海にはまった。と思つると其れがスーッと天に上って宵の明神と顯れた。此う云う不思議な夢を見てからクニ子の病氣は全快し永の患いのために瘦せ衰えて蔓の様になった身体は段々肉が付いて来る様になった。後で考へて見るとこれがクニ子の精神上に一大変化の起る前兆であつたのである。

其の一大変化とはクニ子に神が降つて居る／＼のことをお告げになるということである。其れから六七年経つて今から十五年程前に彼女は神に連れられて三人の子供と夫のある吉岡家を捨てて井出家へ来た。

これに就いては世間より大分非難がある様である。けれどもかゝる大人格者の行為は普通一般の世俗道徳をもつて判断すべきものではない。況んや神彼女を伴い千太郎氏と彼女との関係は全く靈的の夫婦たるというに於てをや。けれども世俗道徳の規範をもつて彼女を断ずれば非難は畜にこれのみではない。と云うのは彼女は賭博も打つた。酒も飲んだ。今こそ生れ変わった様に貴い人格の所有者に歸つたけれども元を洗えば莫迦女であつたのである。

けれども彼女の告白に依れば「自分は何もしたくてしたのではない。神がさせたのである」というのである。勿論此の言葉も人に依つて勝手な弁護と非難する人があるかも知れないが、彼女の言葉が虚言でない証拠は其れ迄の彼女は伶俐で勤勉で人の賞め者であつたので明かである。其れが急に性格が一変して生れもつかぬ莫迦女の群に陥つたのはこれに深い神の思召がある。其の思召とは即ち今迄天理教祖の通つた道は名家に生れ富豪に嫁し順境の中に四十幾歳を経たから如何に天理の美質があつても眞の苦勞というものを味うことが出来なかつた。成る程晩年の五十年は貧のドン底に陥り家庭と社会と内外両面の迫害攻撃の道を忍んで通つたが未だ「ドン底の人達の生活」を味うには至らなかつた。其れがために神は此の度井出クニ子をして教祖の通つた道と全然反対の道を通らせ如何なる「ドン底に生活して居る人間」でも助かるという雛型の道をお示しになつたのである。

此の事に関してはなお詳論する津もりであるか其れ迄に事の順序として彼女の略歴を紹介する。

クニ子が井出家に来た頃には井出氏(千蔵)の祖父が未だ生きていた頃であつた。(井出氏は早く両親に別れ祖父母の手に大きくなつた)井出氏の祖父と云うのは身台を酒で潰したという有名な大家家であつた。其の祖父の相手となつて機嫌をとつて行くことには一方ならず彼女は苦心した。

井出家は父祖の時代より鍛冶屋を業としたが(三木辺には鍛冶屋が多い。これは金物の本場であるからである)千蔵氏も亦其の跡を受けて幼より鍛冶屋を業とした。其れでクニ子も井出家に来ると夫千蔵氏を助けて取引のために遠い所に迄回つた。

然るに今より九年前即ち明治四十一年旧三月六日天啓があつて神とクニ子の夫千蔵氏との間に押問答があつてクニ子の身体は二十年間神の社として借り受けるということになつた。

天理教祖に始めて神憑のあつた時は中野市兵衛が媒介者となつて教祖の神憑があつたのであるが教祖の身体を神の社とするということについては神と家族との間に二昼夜にわたる押問答があつた。

クニ子の場合其れと異り前の藪に一陣の風が吹くかを見ると井出家は地震の如く震動し始めた。而して今迄何の変つた様子もなかつたクニ子の様子が急に変つて「クニの身体は二十年間神の社として借り受けるが亭主承知が出来たか何うだか？」

と云う神命であった。井出氏より其れをお断り申上げると
「不承知とあらば此の俣」
と云って四時間計りと云うものは死人の様に冷たく息を引き取ってしまった。其れではな
らんと云うので再び承知の旨御答えすると神は何遍も念を押してお引取りになった。
其れから暫時経って同年の五月六日より十月廿六日迄半年計の間は唾と盲で暮した。中
には唾と盲とが同時に来る日がある。其の間手を引きつけること三回。
其の中で唾の日は仕事が出来が盲目の日は仕事が出来ない。便所に行くにも人から手
を引いて貰わなければならない。しかも其の便所が外にあるので日光に当る。其れが眩し
くって仕方がないので傘をささせるのであるが一本では足りない。二本ささなければ歩け
ないのである。此う云う不自由の中にもお願いに来る人があれば唾は唾なり盲目は盲目な
りにお伺いを立てゝ助けてやるのであるが其れが不思議に助かった。其処でクニ子は始め
て自分がかよの試にあうのは病気ではない、人を介のが自分の天職であると悟った。
其れからと云うものは日に増し助けを乞う者が増加し最も盛大な時は日に五六十人より
七八十人或は百人以上の参拝者のあったことも稀でなかった。其れがために警察は無断で
人を集めると云う科でしばしば彼女を拘引したがたとい拘引に来て彼女の説教中は其の
話が良いので踏み込んで拘引すると云うことをしない。話のすむ迄表に待っていて其れか
ら拘引して行く。其れから不思議なことには天理教祖の時代には参拝者は勿論幣束や鏡や
太鼓迄没収したが此処では神様と参拝人には一切手を掛けたことがない。
彼女が警察に拘留になると熱心なる信徒は昼夜の区別なく警察の前に回り後に回って彼
女の身を氣遣っているが彼女が反って平気で
「警察程楽な所はない。誰も助けて呉れと云って来る者もないから井出さんに苛められる
こともない。彼処が本当の極楽だ」
と少しも警察を嫌う様子がない。信徒等は十日も警察見た様な所にお入りになったならば
さぞお瘦せになったであろうと心配して行くと却って平常よりも血色よく警察の門
を出て来るのであった。
然し余り警察の干渉が厳しいので彼女の信者等は相集って相談し豊前国企救郡東紫村大
字徳力にある神理法稲荷の教導職を受けた。其れが神様の気に入らぬ。
「私は人の下につく神ではない。免状は要らぬから早く返せ」
と返せ／＼の一点張りである。村の人達も夫の井出氏もクニ子のためを思うて教導職の免
状を受手やったのに本人から返せ／＼の一点張り故皆腹を立てゝ今後は一切構わぬと云い
出した。然して返さないでいると今度は神理法の本部から専制が来て神理法の教理に従う
てやっているか何うかを調べ実地其の通りに行っていないので教導職の免状を取り上げて
行ってしまった。其れが明治四十産年五月である。
此う云う問題でゴタ／＼している中に若い男がやって来て
「お前は稲荷降ろしをするそうだが私が教えてやる」
「イエ稲荷降ろしはせん心算です」
「其れでも良い。教えてやる」
と其れから段々言葉を荒くして
「汝は大和の三島の狸婆の生れ変りだ。汝の様な奴は生きて置く奴じゃない」
と怒鳴り立てるので鍛冶場の職人迄何事だと思つて出て来る。悪者は終いに
「朝飯を喰べさせろ」
と云う。
其れから胴衝くとか何んとか云つてもクニ子は黙って一言も発せぬ。其うすると悪者は
「汝は何んと云つても黙っている。人の口に風を吹かして黙っている。これからは稲荷降
ろしはせんと云うてあやまれ」
クニ子は悪者の云う通り
「これからは稲荷降ろしは致しませぬ。何うぞお許し下され」
と云って温和しくあやまった。
「其の代り稲荷をくれ」
其の頃は未だ村の人達が受けて来た稲荷が其処に稲荷が一對祀ってあった。
「其の方は今迄稲荷様を信心したか？」
「信心は致しませぬ」
「其れでも一つ置いて行く」
「イヤ／＼もう稲荷降ろしはせんから皆んな持って行って下さい」
悪者は其れでも一つ置いて一つ持って立ち去った。
其の後此悪者が先きに持って行った稲荷を買ってくれと云って来た。其れに悪者がもう
一人ついて仲裁する様なことを一手は金を強請ろうとする。其れを拒絶すると今度は悪者
と警察と結託して益々クニ子を圧迫する。遂に高木にも居憎くなって日本回国に出掛ける

ことになった。

其の時夫千蔵氏を始め村の人達が五十人計り小野宣教所迄送り届けて帰ってしまい夫千蔵氏と近藤おちかさんだけはクニ子を須磨迄送った。

須磨の浦白砂青松の連る所日本一の絶景を控えて上より下まで白い巡礼姿に装うた女救世主が天理教会の視察と救済との任を帯びて出発する所である。

夫の千蔵氏は

「助けを止めて呉れ。助けが止められん様なら帰ってくれるな」

と云い妻のクニ子は

「神様で助けさすなら帰って来るし助けをさせぬならば帰って来ない」

と。けれども結局夫千蔵氏より助けをさすことならんと云う最後の返答を聞き彼女は此処に決心して単独にて日本回国の途に登った。

始めの決心は日本全国の津々浦々の天理教会を訪ねて回る心算であったが但馬の城崎の温泉迄来ると神戸の地方裁判所から明日の午前八時迄に出頭せよと云う令状が来た。其れと相前後して但馬の城崎から出した手紙が到着する。早速電報を打つとクニ子は其の日の中に帰って来た。

千蔵氏は

「お前がもし神様ならば明日の裁判に間に合う様に神戸に着いて見よ。旅費は一文もやらぬから」

彼女はかくして一文の旅費も持たず徒歩して翌日の午前八時に裁判の間に合った。

裁判は三木警察署の報告と例の二人の悪者の証言とを元とし取調べたが最後に小田予審判事が

「貴女の身体には不思議の力があると云うことですが一つ私に試験させて下さい」

と其れから扇子を持たせて手の震えるのを試験したり椅子に腰掛けてクニ子の腕に何れだ

けの力のあるかを試した。其の結果

「貴女は確かに天の御徳を頂いた方である。私が保証しますから何うぞ充分に人を助けてやって下さい」

と裁判に立ち合った判検事三人が一円六十五銭の旅費を出して帰した。

一方クニ子を中傷した二人の悪者はサンザ胸衝かれた結果一人は一年半の懲役もう一人は六ヶ月の超過期に処せられたがクニ子は其れを見て

「私の心が悪かったために此の二人が此うなったのですから何うぞ許してやって下さい」

と悪人の罪を自分に負うて嘆願したが裁判の法でないとして拒絶せられた。けれどもクニ子が敵も味方も助けてやりたいという偉大なる精神はこれで充分徹底して居る。

此の事があって以来警察の迫害はサッパリ止まったが内々の擦れ合いは止まない。クニ子自身の話に依れば神憑が有ってから以来縛られたり叩かれたりしたことが何千度である

かを知らないと云うことである。けれども結局其う云う暴行を彼女に加うると家内が震動するとか身上に障りがあるとか云って中止した。

クニ子の身体は神憑以来市場震動し始めの程は内に入れ歯内外へ出れば外ポン／＼と飛び上ったが次第に落ちて着いてジッとすることが出来る様になったが其れでも始終手が震える

ので仕事が出来ない夫が幾ら何か命令しても決して手を出さない。但し人に頼まるれば何んなことでもすると云うのは神は人より命令は受けない。頼まるれば何の様なことをも

するという大慈悲者であるからである。

クニ子の逸歴や奇蹟に就いて述べれば長いことであるが其れは後日に譲ることとして、

此処には彼女の人格と思想とに就いていささか述べたいと思う。

凡そ人間の価値を評価するには其の人の財産や地位や名誉や学問や知識に依って評価するのは大なる誤である。此等のものは何れも従属的価値さえ有しないもので本当に其の人の人間としての価値を評価するには何うしても其の人の人格的価値を標準としなければなら

ない。

クニ子の偉大なるのは決して財産や地位や名誉や学問や知識があるためではない。其の人格の崇高偉大なる点にある。

世間では彼女が如何様に問われても

「今に世界から神名を付けに来る」

と云って神名を明かさない。ただ天理の二字を付けさせて呉れと願っても夫は元来大の天理教嫌いであるから許さぬ。其れがために彼女を稲荷降ろしか何かの様に思っているもの

があるが否現に彼女を知れるものゝ大部分多数は其う思っているのであるが一度活眼を開いて彼女の大人格を眺むるときは其れが何うしても天月日の代表者であるとするを否

むことはできない。

凡そ人格の大小高下を批判するには其の人が如何に大なる包有力を有するかを観察するにある。云い換えれば如何に大なる慈悲心（愛）を包造するかを観察するにある。もし其

の人が真に偉大な人出あればある程其の人の慈悲心は偉大である。クニ子の場合に於ては其れが殆んど神に近い。

クニ子は云う

「世間の人は神の社になることはさぞ結好なことゝ思うかも知れないが神の社になる程辛いことはない。私には皆世界中の人間の埃が集まって来る。其れで朝起きる時はだるうて／＼ならん」

と。此の言葉を疑う者は直接彼女に接して見たが良い。彼女の所へ頭の悪い者が助けて貰いに来る場合は彼女の頭が痛む。又手の悪い者の助けて貰いに来る場合には手が痛む足の悪い者の助けて貰いに来る場合には足が痛む。其れが一旦彼女の所に来てお助けをして貰うと病人は助かる代りに今度は其の病気が彼女の身体に表われるのである。

其の近き実例は奈良にある。先月の始め彼女が奈良に来た夜虫歯で悩んでいる一人の婦人がお願いに来たが翌朝其の婦人がお礼に来た時には其の婦人の咽喉の腫れはズーと引いてクニ子の咽喉は拳大にふくれていた。これぞ即ち我万人の悩みを負わんという大慈悲の救世王にあらざれば出来ないことである。

彼女は身分の上下に依って待遇を異にしない。又た敵味方の故を以って愛を異にしない。何んなものも皆一様に待遇する彼女は朝起きても神前に手を合わせるということはない。ただ太陽に向って人民大切に願いますと一言心の中で願うだけである。其れで彼女は人民大切に我が生命であると云っている。彼女の偉大なる点は此の絶対無限の大慈悲心にあることは云う迄もないが其の腰の低い平民敵の点は或は教祖以上ではないかと思われ。兎に角社会のドン底に迄陥って酸いも辛いも噛み分け人情の表裏に通じているという点は確かに順境に人となりドン底に陥ったとは云うものゝなお真のドン底の社会を覗くこととなしに此の世を去った教祖に比ぶれば更らに一段の苦勞人出あることだけは否むことはできない。

今此の二大婦人を比較するに教祖の与うる感は何処となく貴族的である。然るにこれは厭く迄も平民的である。其の人格も前者は静的にして後者は動的である。始終動いて止まない。且つ教祖には幾分悲観的分子を認めるが後者は全然其れを認めることは出来ない。徹頭徹尾楽天的である。勿論後者も生野の銀山にて教会より虐待せられた時の如き幾度か死のうと思つたということも自白しているけれども其れは性格より来た厭世悲観ではなくて寧ろ境遇より来た厭世悲観である。これを十二三歳にして剃髪を思い花の様な青春時代を觀経と念仏とに過した教祖の厭世悲観とは同日に論ずることはできない。

かくの如く二者の性格も亦其の履歴も殆んど正反対の様に思われるが相異は啻に其れのみではない。体格も亦全然反対な体格をもっている。即ち教祖は面長のスラリとした背の高い上品な婦人であったがこれはデブ／＼と張り切る様な肉付きで背は寧ろ低い方である。

此等の点を総合して見ると教祖の我々に与える感は何うしても旧式な日本婦人の代表者である。これに反してクニ子は厭く迄も現代的活動的の新真婦人の先駆者である。其の印象は寧ろ西洋婦人という感を与える。

此等は勿論二者の性格や体格の重なる相違点であるが其の思想の傾向も亦異っている。

例えば

「今迄は懺悔の世である。今度は勇み一方で助ける。」

とか

「八つの埃を払おうと思うと六ヶ敷いから八つの埃の正味を楽しんで行け」

とか凡て積極的／＼に行こうと云うのがクニ子の主義である。

其れで彼女の側に行くと急に真夏の太陽の前に立つ様な陽気な感を与える。

これは彼女の思想の特徴であるがもう一つの彼女の思想の特徴は天理教祖の思想が単純なる上に更らに一層単純なることである。

例えば十柱の神である。これ迄の天理教では十柱の神の御守護と云うことを第一に矢ヶ間敷く説いたが彼女はただ月日両神を説く計りである。其れだけ既に今日の天理教よりも一層未来教に近い。何故かと云うに今後は時勢が進歩するに従い時間に余裕がなくなる。其う云う時代にあつて社会を救済する宗教は勢い単純な宗教でなければならぬからである。

けれども今日の天理教徒はこれをもって進歩とは認めまい。否な寧ろ天理教は常に進歩する宗教であることを認めないのである。将来新天理教と旧天理教と衝突する点は此処であらうと思われる。けれども教祖の予言に

「だん／＼と日柄刻限経つならば道もだん／＼変りくるぞや

其の時は……天理誠で授けさす」

と云うお言葉がある。今日の本部員を始め一般天理教師で此のお言葉を記憶している人は何人あるか知らないが今其の時が来たのである。

即ち彼女の渡す所の授けは天理誠の授けである。其れはこれ迄のお授けの様に悪い払を九遍も繰り返すのではない。腹の痛む所齒の痛む所を撫で、誠の息を吹き掛ければ其れで助かるのである。又たこれ迄の天理教の教師は多く悪しきを払うて助け給え天理王尊と云えば先方の悪しきを払うて助けてやって頂きたいと神に祈願する様に思っていたが天理誠のお授けは自分の悪を払うて先方の埃を自分に貰い受けさして頂くと云うお願いである。此処に新旧のお授けの相違がある。

)のじゅの思想は彼女自身「我は天理教直しに来た神である」と公言している如く實際革新的である。けれども其れは何も教祖の宗教を潰して新しき宗教を立て様とするのではなく何処迄も今日の天理教の誤れる点を改造して教祖の宗教を復活せしめんとするにある。

例えば各教会を詰所である。教祖は一里四方は宿屋町と云って宿屋をこそ立つれ詰所は建て様とは思わなかった。其れを詰所と云う有害無益のものを建ったため八つやまとは豊年やの予言は遂に実現せられなくなってしまった。

これに対するクニ子の意見は自分がもし本部に入ったならば詰所は工場もしくは宿泊所にして土地の利益と天理教以外の参拝者の便を計るというのである。

勿論此等は末枝の問題であるが彼女が常に天理教のために嘆いている第一の問題は今日の天理教当局者並に一般教会長並に役員が教祖立教の本旨である助け一条の精神を忘れて下級信徒に尽し運びを強え其の力によって事故の口腹を膨らしもって事故の悪因縁を積みつゝあることである。

第二は天理という一番大きく通り良い道を一番狭い通り悪い道としていることである。

第三は教祖五十年の御苦勞を忘れて天理教は自分達一人の手になった如く誤解し栄耀栄華に身を壊しつゝあることである。

此等の問題は彼女の常に頭を悩ましつゝある問題であると共に彼女にあらざれば真に此等並に之れに類する天理教界の諸問題を解決して天理教界に復活の光明を照らし得るものはないのである。

然るに彼女の人格と精神と実力とを知らない本部の人達は彼女が本部乗取りの野心をもつて活動しつゝあるかの如く誤解している。けれどもこれは現に既決問題である。即ち今より九年前明治四十一年旧三月六日彼女に神憑のあると間もなく

「播州に十日本部に二十日」居ると云うことは天啓に依って決している。

其の後明治四十三年三月団体戸とともに伊勢詣りに行く途中三島の教祖の墓地に参った時教祖の霊より天理教の救済を頼まれ爾来神のため教祖のため五百万の信徒のため全人類のために艱難辛苦をし殊に最近二三年は教祖に頼まれた一言のために火の中にあるのである。其の苦衷は到底野心家を以って眺むる者や狐憑や狸憑を以て彼女を眺むる者の解することの出来ない点である。

試に考えて見たが良い。彼女にもし天理教破壊の野心があつたならば必らずや本部の廓清に力を入れずして播州の地盤の拡張を計るであろう。其うすれば彼女の人格と彼女の教理と彼女の実力とは必らずや天理教を凌駕する一大宗教を建設することが出来るである。然るに彼女の清廉なる敢て其れをせずして先ず倒れかゝつた本部を改革し一般天理教会の救済を計ると云うのは教祖に頼まれた一言を重んずるからである。かくの如き犠牲的行為は余程の有徳の士でなければ出来ないことである。次に彼女が狐憑きだということ。彼女がもし狐憑きであつたならば天月日の天啓に依って開いた世界無二の宗教の本部に座ろうと云うが如きぼうきよを企て得る道理がない。けれども本部に座ることは何も彼女の希望ではない。昔に天理教廓清の順序として勢其処に行かなければならない迄である。これ等の点を見ても彼女の志の尋常ならざることを知ることが出来る。

彼女は世界が逸迄経つても直路にならないのは下より上に向つて尽し運びを強いているからであると信じている。依って今度は今迄天理教の説いて来たと反対に上から下に尽せると云うのである。

今日の天理教では又た順序の理を楯にとって親教会の尽し運びお授け其の他の義務を強ゆるけれども彼女は全然其れを認めぬ。道の遅れるのは順序の理をもつて廻るからだと云う。

又た今日の天理教では始め句掛けをした先生は生涯末代の親であると説くけれども彼女は早く偉い者に就け／＼と云って道の発達を計っている。

此等は勿論彼女の思想と今日の天理教と相異の一二の例に過ぎないが天月日が実の親であること、天理は誠であること、身上は神の貨物であること、これだけは動かすべからざる一致点をもっている。又た之れだけもつていれば沢山である。

其れから彼女の大きな特色は彼女の人格でも思想でも生活でも徹頭徹尾陽気づくめであ

ることである。これは彼女に接したものの終生忘るゝことのできない第一印象である。これを要するにクニ子の根本教理は天理誠である。従って人は誠でなければならぬといふのである。其れは既に天理教というが如き理論の境を脱して実行の域に迫っている。誠や今は誠調への時代である。誠なるものは亡び誠あるものは栄える。二世の立て換えは実に此の天理誠の実現にあるのであろう。彼女をもつて狐憑きもしくは狸憑きと非難するものは先ず非難の前に彼女の人格と思想と来るべき時代の如何なるものなるかを研究した上でなければならぬ。然らば即ち彼女は狐憑きにもあらず狸憑きにもあらずして真に偉大なる新時代の新救世主たることを知るであらう。敢て江湖の刮目を祈る。

井出家の系図が掲載されているがテキストにできなかった

天理教界の根本的廓清

大平 隆平

私は先きに第一第二の天理教界革命の超えを書いて天理教界の廓清を促した。けれども或る者は嘲り或る者は罵り或る者は憎み或る者は笑うて真面目に聞く者が無い。けれども今は余の言の実現せらるゝ時が来た。本部を始め一般教会はもはや昨日の高慢を繰り返している余裕がない。もし強いて強情を張りもしくば知りつゝ誤れる教理に従うものは自滅が眼前に迫って来た。従って余はもはや何うせ此うせの指図はしない。銘々勝手に意見に従って事を決したが良い。其中天理に叶うものは救われるべく叶わざるものは自然に自滅するであらう。これ人の好意を拒める自然の罰であるから仕方がない。今にして天理教徒は知らなければならぬ。私の教界に対する忠告は天理教の欠陥を指摘するためにあらず天理教を破壊するためにもあらずして実に天理教一これだけに発達した天理教一の自滅を座視するに耐えずして絶叫した忠言であることを。

更らにもう一つ知っていて貰いたいことは余は何時迄も雑誌新宗教を発行して革命の声を叫ぶもではないことを。其の時来って神の筆止にあう時は余は書かんとして書くこと能わず読者は読まんとして読むこと能わざるべし。其の時誠あるものは余の旧稿より或る何仏かを拾うであらう。

読者よ！ 本部員よ！ 一般天理教徒よ！ 誠に其の時は迫っている。余はもはや永く紙上に於て諸君と相見えないであらう。何うぞ余の筆の続く限りは其れがたとい如何に失礼な言であつても心を止めて味うて下さい。而して言の取るべきものがあつたならば用いて救済の道を求めて下さい。これが私の唯一の願である。

さらば読者よ！ 本部員よ！ 一般天理教徒諸君！ 名残は尽きない。随分身心を大切に神の道にお励み下さい。さらば！ さらば！ さらば！

第一 教祖の生家を保存せよ

凡て根なくして何仏も成り立つものはない。然るに今日の天理教徒は此の根を忘れて花を見実を把らんとしている。これ天理教の次第に衰微する原因である。

そもそも天理教で根と云えば神であることは云う迄もないが表面に表われたる根は教祖である。而して其の着ようその生れた所はと云えば三味田の前川家である。此処に半七正信を父としきぬ子を母として誕生せられたのである。

もし貴き一粒の種が此処に落ちなかつたならば天理教五百万の人間は助からざるのみならず世界幾億の人間は助からないのである。其の大恩ある救世主の生家を月三円位の仕送り放つて置くとは余りに忘恩の大なるものと云わなければならない。しかも其れが前川家で本部の保護を仰がずに自活して行き得るならばまだしも家も屋敷も一切本部のものであり其の上何等一定の収入なしと云うに於ては如何にして活計を立て得るであらうか？ 然るに本部は此の窮境を知りつゝ前川家は天理教に謀叛を計った。彼は道の反対者である。かくなるのは当然の結果であると云って敢てこれを救おうとはしない。これ果して天理人道を標榜する宗教の本部としてとるべき正当の行為であらうか？

其れは如何にも教祖立教の投じは前川家は教祖に反対したけれども其れは中山家の存亡を思い教祖の将来を思ったからである。其の後前川菊太郎氏が本部を去つたのは其の原因は管長が自分の生家である梶本家の祖先を教祖の墓側に移しながら前川家の先祖を墓側に移さないと云う管長の依怙鼻負が動機となって自然本部と反対の行動を取らなければならなくなつたのである。其の他前川家の家族の中には教祖に一飯の飯を惜しんだというが如き者があつても其れをもつて永遠に前川家を呪うべきものではあるまいと思う。

殊に最も故管長の態度に対して吾人の憤慨に耐えないのは教祖が三味田に帰る度毎に「これは私の土産だぜ」

と云って持って帰った御筆先十数冊を唯一冊を残して全部本部に持って帰ったということである。天下何れの処にか自分の祖母なり母なりが土産として持って行った物を厚がまし

くも持って帰る者があるであらう。余はこれを故管長をもつて始めとする。凡そ何んな家でも年を経れば腐朽するのは自然の道理である。本部は自分の普請が忙し

いと云って屋根は陥ち廂は傾いても修理しようとはしない。たまたま内部の修繕でもあれば有り合せのものをもって来て間に合せて居る。これが果して天理教第一の宝物を保存する所以であらうか。

試みに国家が保護建築に手入れをする様を見よ。丁寧に念を入れた上に念を入れて原物

同様に修繕している。其れが宝物に対する自然の礼儀である。然るに天理教本部は嘗に間に

に合わせ物をもって埋め合せている計りでなく馬小屋の如き勝手に取りこぼっている。こ

れを見彼れを思うに本部が教祖の生家に対する尊敬と愛護とのなきにあきれ且つ悲しまず

にいられない。本部員（増野が主となつて破壊した）にして志あり管長にして心あったならば教祖の生

家に対してかくの如き暴行を加えぬであらう。惜しみてもお余りある次第である。本部が道の親の生家である前川家に対する態度が既にこの様である。其れに盲従する一

般教会の態度や推して知るべしである。中にも吾人の最も奇怪に思うことは故管長夫人玉

枝子である。彼女は教祖のお蔭をもって榮耀榮華を極めながら未だ一度も其の生家の門を

潜ったことがないと云う。往々前川家の者が訪ればこれを下男が下女の様に取り扱い炊事

場の飯を喰わして追い帰すという待遇である。これが少し気のある婦人であったならば人

に隠してどもいたわつてやるのが至当である。其れを殆んど親族の待遇をも与えずして大

恩ある教祖の生家の家族を追い返さずというのは人間の面を冠っている者の出来ないこと

である。實際肉親孫たる彼女並に本部員の精神は教祖の三十年祭だというのに前川家の誰

一人も呼びもせず折を一つ持たせてやったというだけで凡てはわかっている。けれども正

根の抜けた未亡人並に本部員は敢て其れが悪い事だとも気付かない。而してただ本部

／＼と云って本部を固めること計り考えている。けれども其うは行かない。成る程現在

の所一時は本部は榮えるかも知らないが（否今は現に下り坂の真中にある）天理とい

うものは何時迄も其う云う非道をす宥ものではない。前川家の滅亡はやがて本部の滅亡

であることを知らないであらう。これ根枯るれば枝枯るるの原理に基くからである。吾人

は一日も早く本部の人達の此処に注目せられんことを望む。

第二 飯降家を立てよ

今春正月の新宗教紙上に飯降政甚氏が故秀司氏の亡くなった時教祖は其の頭をころがし

て一滴の涙も出さなかつたこと及び夫人松枝子が死んで後嗣になつたと云うことを載せた

というので本部では其れを取り消せ其れでなければ辞職せよと訳も分らぬことを何時迄も

云い続けていたが其の外飯降氏自身の負債や現に關係している女との行き先き上本部に居

悪くなり自分自身より辞職して東京の女所に行き折角の名家は競売に付せられ而して飯

降家の正統は消滅したと同じ形になっている。これに関して私は本部に対して何も云うこと

はない何故なれば飯降氏には充分こう云う事情に立ち至らなければならぬ因縁を自分

自身に作っているからである。ただ問題秀司問題に関しては余りに事実を尊重するとい

う敬虔の念の欠けているのを憐れむ計りである。（飯降氏の家具を中山家のもので債権者

を欺こうとしたが其れは飯降氏の自白に依つて真相が明かになったという様なことはあ

つても）實際現在の飯降氏の精神では金を幾ら預けても駄目である。何故なれば彼は

小供の時から榮華の中に育つて金の有難さを知らないからである。而して今は其の価

値を知るに好都合の時である。もし飯降氏の将来を思わば彼に金を一文も与えないが

良い。其れでなければ彼は何時迄経つても人は額に汗せざればパンを喰うことができ

ない。又た此の法則がわからなければ彼の精神は助かる時期がない。従つて私は飯降氏

のために本部を始め一般教徒諸君に望む。何うぞ彼の精神に神の御恩、教祖の御恩、御

第三 中山梶本両家の祖霊を教祖殿より両家に移せ

私は何時も云うことであるが天理教は中山家の一家教にあらざと。しかも中山家を始め本部員達には幾ら云つても此の區別は出来ない様である。其の实例は中山家並に梶本家の本祖先の霊を御本席と同座に祀っていることである。成る程中山家には教祖という偉人が顕れて世界救済の活路を開いたが真に万人の渴仰を仰ぐべき価値ある人はただ彼女一人である。彼女の前にも彼女の後にも世界の人類を跪かせるに足る程の大なる功労を人類のためにしたものは一人もないのである。これは梶本家の先祖も亦同様である。然るに天理教が世界教であるか又た中山家の一家教であるかということをも區別することのできなかつた故管長は實際中山家乃至梶本家の私宅に祀って置くべき祖霊を僭越にも此の道の大功労者である御本席と同列に祀っている。これは中山家並に梶本家（故管長の実家）より深く世界人類の前に其の失礼を詫びなければならぬ問題である。

けれども問題は単にこれだけではない。彼の會計問題の如き御紋章問題の如き深く公私の區別を知らないから起っている。

もし両家に於て多少物の道理のわかっているものがあるならば速かに自宅に祖霊殿を拵つて移し戻したが良い。恥を知らないも亦甚しいと云わなければならない。

第四 詰所を廃せよ

教祖のお言葉に此の道が大きくなって来た暁には一里四方は宿屋町になると云うことがある。然るに事實は予言通りに運ばずして却つて詰所という変則なものが出来てしまった。

此の詰所があつて信徒の財布を絞り上げるがために三島の商人（詰所に入出する商人だけは儲つて）は儲からないで苦しんでいる。其れでは何時迄経つても八つやまとは豊年やの予言は實現しない。

然らば詰所と云うものは實際其れだけ信徒に便利なものであるかと云うに其うではない。拙い物を喰べさせられ、汚い布団の中に寝せられ、順序の理にしめつけられて窮屈なる思をして帰るのである。尤もこれが天理教の値打ちのある所であるといへば其れ迄であるが其れでは参拝者に真に樂々した参拝の気分を味わせることは出来まいと思ふ。人には其れ／＼身分というものが又た好みというものがあるから三十銭で泊まろうという人間は三十銭五十銭で泊まろうという人間は五十銭一円で泊まろうという人間は一円又たズーと下つて一晚十銭か十五銭で泊まろうと思ふものは其れ／＼の宿屋を選んで泊まらせたが良い。其うしたら参拝者は事務員に頭を抑えられる心配もなく樂々と参拝することが出来る計りでなく宿屋の方で其れで相応に助かるのである。又た宿屋が其れでやって行ける様になれば八百屋だとか魚屋だとか云う商人迄助かつて来る。現在の如く詰所と云うものがあつて各々其の城廓に拠っている様では信徒間の党派心を挑発する計り世界一列という同胞的感情を味うことは出来まいと思ふ。（勿論これは今日の宿屋にても味うことは出来ないが食堂を一室にするという様にしたならば女中の手も省け客と客との接觸を計る便があると思ふ）其れに特に捨てゝ貰いたいのは自分の教会の信徒でなければ泊めないということである。これは成る程詰所の管理上うるさいことかも知らないが其う云う人達も泊めてやるのが真の宗院であらうと思ふ。

けれども其れは余論である。私の疑うている所は現在の所参拝者を迎うるがために三十幾つの大詰所が果して必要であるか否やの問題である。

私の見る所では平日の参拝者は各詰所を寄せても一つの旅館を満す程多くはないであらうと。其れだけの参拝者のために大小幾十棟の詰所を建て置くことは不経済極まることゝ云わなければならない。と云うのは詰所があれば事務員も要る。青年も要る。台所働きの要る。又た色々の修繕費も要る。従つて大抵の詰所は其れ自身に獨立することができないうで多く教会に補助を仰いでいる。なお其れで足らないで信徒から色々な名目の下に意地費を捲き上げている。

しかも詰所が其れだけの便宜を信徒に与えているかと云うに其うではない。例えばお授けや別席や諸願書である。もし／＼詰所というものがあつたならば別席を運ぶためにわざわざ教会回りをしたりお授けを頂くために又た頂いたためにわざわざ教会回りをする必要はない。自分の所属起用かいから添書を貰つたならば直ちに其れをもつて詰所に来て詰所で万事扱つてやる。其れが詰所の役である。現在の如く詰所として、信徒に与うる便宜は殆んどないといつても良い。これでは有つても何の役に立たない。却つてない方が教会のためにも信徒のためにも便利である。

けれども此処に一つの異論がある。もし各教会に詰所がなかつたならば年二回の大祭の

時参拝して来る信徒を何うする？ とこれは容易な問題である。其の時は本部で空家を解放するか其れでなければ三島丹波市の民家に泊めて貰ったが良い。もし其れで足らなければ奈良へ泊めたが良い。彼処には五千や六千の人間は何時でも泊まることの出来る様に設備せられてある。殊にたった二回の大祭である。其れがために何も大きな詰所を建て、平国常は蚤や蚊の詰所にして置く必要はないのである。宜敷くこれを各種の工場としもって国産を産出せよ。然らばひとり三島の繁栄のみにあらずして実に全人類の利益であろう。其れを現在の如く本部も詰所も三島の商人もただ信徒の懐をのみ当にして居るから何時迄経っても三島は発達しない。

これを奈良もしくは京都もしくは大阪に見よ。奈良や京都は特別の国産というものはなけれどもそれぞれに多くの名所旧蹟をもっているから其の見物人だけでも相当に喰って行くことができる。けれども三島には其れがない。又た大阪には奈良や京都の様に名所旧蹟はないが商工業のために土地は常に繁栄している。けれども三島には其れがない。もし天理教本部並に詰所と三島の商人が此処に注目したならば第一に不経済なる詰所を廃してこれを経済的方面に使用し傍ら参拝者を宿屋に委してしまつたが良い。然らば即ち教会も助かり詰所も助かり信徒も助かり三島の人も助かるのである。これが真に万人助けの道である。敢て此の有益なる事業に参加するものはありやなしや。これは信徒未信徒を問わず深く研究すべき問題である。

第五 上に尽すな下に尽せ

今日の天理教会では何処に行つても上に尽せ 上に尽さなければ助からんと云うことを教えている。其れがために宣教所や支教会では自分等は喰わず吞まずでも一厘も多く親教会に金を上げています。

けれども此の道は其んな道ではない。上の者から下の者に施しこそすれ下の者が上の者に運ぶという道ではない。云い換えれば有たざる者は有てる者より施すことを教ゆる道であるが有たざる者より有てる者に尽し運びをさせる道ではない。

然るに今迄の天理教では其の反対に低い所の地を掘って高い山に運んでいるから高低の差が益々甚しくなる計りで何時迄経つても世界直路にはならない。其れを神の予定通りに世界を直路にするには何うしても高い山の地を掘って低い谷を埋めなければならぬ。云い換えれば金のある者は金のない者に施し、米のある者は米のないものに施し、着物を二枚もっている者は一枚も持っていないものに施すのが道である。

お隣に豆がない。持ってお出でなさい。お隣に鋸がない。持ってお出でなさい。其の代りに隣で木瓜がなればもつて来る。大根が出来ればもつて来る。其れが互い立て合い助け合いの道である。

然るに今日の天理教では互いに倒し合いを教えている。これでは道とは云えない。其れで私の一般天理教会並に信徒に望むことは上に尽し運びをしないことと上に尽し運びを強えないことである。もし此の教条を破つて下に向つて尽し運びを強える者があつたならば其れは教敵として又た社会の謀反者として自然の罰を受けなければならぬ。其れよりも最も残念なるは其れがために神の世界直路の理想が日一日と遅れることである。敢て本部を始め一般天理教会長役員教師諸君の深刻なる反省を求む。

第六 神殿を解放せよ

今日の天理教本部を始め一般天理教会では何うも異教徒の参拝を好まぬ風がある。(ただし高位高官貴顕紳士富豪は別)と云うのはもし天理教信者以外のものが本部の地内もしくは教会の内部に入り込んで来たならば彼等は必らず其の者をもつて天理教の探りか何かの様に邪推する。而して一時も早く立ち差つて呉れという態度を見せる。これが一般天理教徒の通弊である。

けれども宗教と云うものは其んなものでない。殊に天理教と云うものは其んなものではない。というのは天理教で祭っている天理大神は世界の神様ではないか？ 甲には扉を開いて乙には扉を閉づるといふ様な偏狭な神ではない。然るに偏狭なる天理教徒は天理大神は自分達だけの神様だと思つている。世界広しと雖も恐らくかくの如き馬鹿な宗教はあるまいと思ふ。

見よ妙見様でも稲荷様でも八幡様でも春日様でも金比羅様でもお前は何宗だから参拝してはならんと云う所は一ヶ所もない。皆何処でも来る者は拒まず去る者は追わずの態度を取つている。其れが当り前である。然るに一人天理教だけは天理教以外の者を探りか盗人かのかの様に小さい眼で見ている。これが天理教の小さい所である。将来世界の人達を本部へ寄せ様と思ふならばもっと大きな度量をもたなければならぬ。殊に神殿の如きこれは天

理教徒のみが参拝する所ではない。世界の人間の参拝する所である。然るに其の自由の参拝を隠に拒んで参拝者に不快な感を与えるのは天理教のために惜しむ所である。これ特に神殿を解放せよと絶叫する所以である。

第七 門を閉づるな

此の頃の本部は夜十時になったら門を閉めてしまう。これは盗人を恐れるのともう一つ十時頃になれば参拝者がいないからである。此の二つは天理教の信仰が既に地を払って去ったことを語っている。何故なれば苟くも神を説き神の守護を説く天理教本部にもし粟粒程の信仰があったならば盗人位を恐れて門を閉めるということはない筈であるからである。又た夜の参拝者がいないと云うことは其処に助ける人と助けを乞う人とのない証拠で天理教の衰微を語っている。苟くも天理教本部に偉大なる救世主が顕われ夜昼なしの助けをなす様になったならば門を閉づるの余裕はないからである。

けれども今日の本部は其んな黄金時代ではない。ただ一人の盗人を恐れている無信仰の時代である。もし本部に一片神に依頼するならば盗人のなすが俚に任したが良い。敢て門を鎖して信徒の自由参拝を制限する必要はないのである。吾人は本部にもう少し大宗教の本部たる信仰と態度とを望まざるを得ない。

第八 本部員も本部に当直しない様のことで何うする

凡そ銀行でも会社でも学校でも役所でも当直というものがあって定規の時間外の事務其の他一切の出来事を処理している。

然るに天理教本部では彼の大世帯を控えながら一人の本部員だに当直せず凡ては青年に任せている。其んなことでマサカの場合を何うする。上は神に対して下は信徒に対して申訳のない次第ではないか？

勿論今日迄の経験では夜間には何事もなかったかも知れぬ。けれども何時でも其れで良いと思っていれば間違いである。何時何時本部に何の様なことの起らぬものでもない。其の時に大切な本部を預っている本部員が一人も居なかった云って申訳が立つと思うか？昔ならば腹切って死ななければならぬ。本部員からして此う云うずるけた真似をしているから道は衰微する計りで少しも発展しない。

一体本部員は本部を放って置いて内へ帰って何をしている。何の用事がある。二十五六人も本部員があったら一人や二人本部に詰め切っていられないことはあるまい。其れが当然の事である。然るに二十五人が二十五人自宅へ帰って本部に責任のない青年に宿直させて置く様なことで何うする。無責任も亦極まるではないか？

宜敷く速かに当直を置いて不時の出来事に備うべきである。敢て本部の反省を祈る。

第九 教祖殿に行く通路を塞ぐ勿れ

本部では夜のお勤がすむと同時に神殿と教祖殿に通ずる通路を断つが此う云う窮屈なことも亦廃止しなければならぬことの一つである。

天理教本来の理想は

「鎖さぬ御代にするが一条」

である。其う云う理想を説きながら当の本部より門を閉じ其の上神殿と教祖殿との通路を塞ぐというのは誠に大なる矛盾である。

此う云う風に本部からして人を隔つる心があるから皆世界から隔って来る様になる。事は此の事計りだと思つてはならない。此う云う人を隔つる心は本部の全体にみなぎっている。これは第一に破らなければならぬ弊風である。

繰り返して云う。天理教の理想の始めに自由信仰のために夜の神殿と教祖殿との通路を塞ぐ勿れと。何故なれば本部の盛大はかくの如き閉鎖主義を捨つることに依って始めて得らるゝからである。

第十 順序の理に囚わるゝ勿れ

凡て天地間のこと一つとして順序のないものはない。けれどもこれを極端に乱用すれば却って大なる弊害を生ずるのである。天理教の如く一も順序二も順序と云って順序の理を乱用するが如きは其の弊害の最も大なるものといわなければならぬ。

そもそも順序の理とは天理教で説く様は教会の順序計りを云ったものではない。長幼の序君臣親子夫婦間の礼儀の如き皆なこれ順序である。又た汽車に乗る電車に乗る会場に入

るにも皆先着と後着との順序がある。然るに天理教では其う云う人間と人間との間の順序を説かずして教会の順序計りを説いている。曰く満席を運ぶ時には一々親教会を経ざるべからず曰くお授けを頂いた時には一々親教会にお礼せざるべからずとただ教会の利益になることにのみ順序の理を乱用し少しも人間としての教育を施さない。これは天理教に於てのみ見た最も弊風の大きなものである。従って私は云うのである。順序の理を乱用する勿れと。(勿論これは教会の順序にして人間と人間との順序ではないのである)何故なれば天理教の人達の道に遅れるのは此の不条理なる順序の理があるからである。

第十一 道は狭った

私が東京にいた頃天理教の信仰を人に勧めると其んな六ヶ敷い信心は私には出来ませんと云って良く断わられた。今日になって考えて見ると天理教の信心は実際六ヶ敷いとつく／＼感ずるのである。と云うのは何も人を助けさして頂くのが苦勞だと云うのではない。下らない人間が勝手に作った教理を守るのが六ヶ敷いのである。実際天理教の内部に入ると彼してはならん此うしてはならん又た彼せ此うせと下らない且つ誤った色々な規約があるって人間を絞めつけている。其う云う不条理の規約も頭のない人間には満足して従っていることが出来るかも知らないが少しく自由信仰の要求を感じているものには何うしても満足しては居ることのできない程窮屈なものになっている。けれども天理と云うものは元来そんな人の自由意志や自由行動を束縛する様な窮屈なものではない。もっと広い／＼楽々とした道である。然るに天理教では此の世界に於ける最も広い道を最も狭くして人を通らせている。これでは天理とは云えない。其れがために折角一度ついたものも自然に離れる様になる。これは教祖の教理が悪いためでなく実に天理教当局者並に一般布教師の罪である。もし将来天理教をもって世界の人類を助けんと欲せば、教祖の説いた純教理を説いて其の他の贅枝(人間の継ぎ木した)を切り放たなければならぬ。云い換えれば今日の如き人間心で狭め切った窮屈な天理教を捨て、広い／＼天理に帰らなければならぬ。其れでなければ人を救うにあらずして人を苦しむる計りである。其れでは助け一条の神の本旨が徹底せぬ。敢て賢明なる教会の諸員の御賢察を祈る。

第十二 早く偉人につけ

天理教では最初天理教の句掛けをしたものはせられたものにとって生涯末代切手も切れぬ道の親としている。けれども此処に一つの疑問は其の最初の句掛けをした人が非常な大導師ならば兎に角もし人の師とするに足らない様な不徳な人であったならば其の人を生涯の親として其の教を仰がなければならぬ人は非常に不幸な人と云わなければならぬ。勿論天理教では其れは其人の因縁の悪いのであると云うかも知らないが琴や三味線の師匠すら下手な師匠を止めて上手な師匠につくの権利がある。況んや生涯末代の理を教ゆる道の教師を選択するの自由を与えざらんや?天理教の如きことを云ったならば成る程不良教師の保護にはなるかも知らないが其れがために幾万幾億万と云う人が道に遅れるのである。従って私は全人類に向って告ぐるのである。早く偉人につけと。一日道に遅るれば生涯末代の損である。もし又誤って曲れる教師に付かば再び第一歩より出直さなければならぬ。これ私が一日も早く偉人について人道の正路を学ばれんことを希望する所以である。

初勤めの記

R O 生

旧の四月六日新の五月七日は播州でお初勤めをする心算ですから都合が良かったら来て下さいという吉田氏の話であった。其の後吉田氏からは何の通知もなく此方からも別に問い合わせもしなかったが自分はお勤めは第二として近々に国に帰るについて一度是非お暇乞いをして行きたいものだと思っていたから五日(旧四日)の午後福井氏を訪ねて一手に播州に行く約束をし翌六日(旧五日)播州行きの目的で奈良の吉田氏を訪ねた。吉田氏の宅には思いがけなく楠原氏が帰っていた。外に二名の同行者が出来て一行凡て六人土山駅に着いた。三木行の馬車に乗ると馬車屋が貴方方は奈良からおいでですか?

其うです。

彼処（親様）の話では八人来るからという話であったが

此の外に来るかも知らないが私共は六人です。

馬車屋はいささか見当違いの様子であった。兎に角馬車は途中何の故障もなく二時半頃高木に着いた。一行六人がドヤ／＼と親様の所に入ると親様始め沢山の方々が出て来て迎えて呉れられる。親様のお顔はと拝見すると何時もニコ／＼しておいでになるのが今日は大変のお勇みである。

「サアお湯がわいているからお湯へお入り」

と云われて思い／＼にお湯を頂いて休んでいると三時過ぎからボツ／＼雨が降り出してかなりの降りになって来た。一行は口を揃えて親様の御守護の偉大なることを感謝した。

何分今度始めてのお勤めだと云うので吉田氏と福井氏とが楽器を一通りはづんで神様に上げた。然し其のお勤めの人数はと云えば何れもこれも初心者計りでお立ち勤めの満足に出来るのは一人か二人であった。其れで一遍手合せをしなければならないと云うので其の相談をしていると親様は

「マア其んなに急ぎなさるな。御夕飯を喰べて此処の教会へ行ってお勤めの稽古をして其れから帰って内の稽古をしたが良いじゃありませんか？」

と云われる。

親様には實際此んな形式的のお勤め等何うでも良いのである。ただ子供が帰って来て陽気に騒ぐのが何より嬉しいのである。

其れで親様の云わるゝ俣に御夕飯を頂き一行は二三丁隔った天理教会に行った。教会と云っても信徒がたった五六軒しかないと云うのであるから憐れなものであると思つて行つて見ると仲々憐れ所ではない。東京辺なら何うしても支教会以上の格である。ちょうど留守居のお婆さんが留守なので一同上り込んで休んでいるとお婆さんが帰って来た。其の中にお勤めをして行こうじゃないかと云う議が出て良い加減にお手振だけのお勤めをさして貰ったが教会では親様の所へ偽の天輪さんが来てお勤めをするそうとか何んとか云つてくさして居ったというがもし此処に皮肉な天理教の教師がいたならば或は臭いと睨まれたかも知らない。一行は此処を引き挙げて親様の所に帰りそれぞれ勤めにかゝつたが

「今夜は神様の所にお勤めがある」

と云うことを聞いて露地も外も一杯の人であった。教会のお婆さんも今其の中に交つて様子を見に来ていた。

其の中に知らんがらに十二下りの半分位迄来た時急に玄関が騒がしくなつて来て親様始め其の方に出て行く。

「津田さんが来た／＼」

と誰云うとなく聞える。見れば津田氏ともう一人髯を立った三十位の教師らしい人が入つて来た。親様は自ら先に立って二人を風呂場に案内してお夕飯をすゝめられた。

これより先き親様には私共の来る前の晩に神様に向つて

「明日は何人参りましょう」

とお尋ねになつた。其の時神様のお答に

「八人来る」

と云うお言葉であった。其れが何うして六人だろう／＼と皆怪しんでいたがこれで神のお言葉通り八人になつたと云つて皆不思議がりつゝ悦んだ。

其の中に津田氏等（津田、池戸）のお夕飯もすんだので二人を交せて再びお勤めに取りかゝつた。而して何うか此うか十二下りを勤め挙げたのが十時頃であった。

其れから米村氏から前教祖のお話があつて今度は親様のお話ということになつた。其処にいる何十人と云う人達の心は今勇んでいる。親様は眼をつむりながら莞爾としてお話しになる。

「見分け、聞き分け、心の噛み分けということ三つは皆様御存じで御座りましょう。

人様が良いことをなされた時は自分の姿を見て私には彼の様なことはないかと見分け、聞き分け、心のかみ分けが肝心。

如何なることがあつても決して人を怨むでは御座りませぬ。我が身を怨むのではありません。

互い助け合いというのが人の道如何なることも忘れぬ様。

これ迄長らくの間話をさして戴きましたけれども貴方方にはまだしていない。今晚一寸さして戴きましようか？

神様は人間をお造りになつた。これが神様一条。神様が人間の身上をお建てになつた。これが真の普請一条で御座ります。

家に裏門と表門とが御座りましようがな？ 人間の身上にも矢張り裏門と表門とが御座ります。其れを境界するものは何で御座りましようか？ 私に解かして戴くと口中の舌が人間と解かして頂きます。この口中の舌によって違ふ。この口中の舌を結好に出入さして

戴くのが身上の徳で御座ります。

後のことはよっくりお話いたします。今晚の所はチョッと私がお話しさして戴きました」

親様のお話がすんで側へお引きになると今度は親様の身体に教祖が乗り移ってのお話である。

「此の世に生きて居る間は何んな苦勞をしても何時かは人に見て貰うこともある。けれども此の魂になつては何んな苦勞をしても見て呉れるものがない」

と後はただお泣きになる計りである。もしこれを天理教の人達に聞かせたならば如何な者でも心の底を抉ぐらるゝ思をするであろう。

教祖のお話がすむと今度は村の人達を歸しお授けのない者にはお授けをお渡しになつた。最後に楠原氏に天啓のお授けをお渡しになると今度は神様直々のお話になつた。

「一同には皆何れも御苦勞であつた。今迄は居住みに居住んでいたが今度は明るい路がチョッと見えかけて来た。皆勇んで呉れ。

亭主！」

井出氏が出る。

「今迄は御苦勞であつたな。今度は明るい路が見えかけて来たから喜んでくれ。

一同には御苦勞であつたな。

亭主御苦勞であつたな」

とこれが神様のお話の要領である。

其の晩は其れで別に親様よりのお話もなく休んだが翌日になると大変である。奈良から来た人達に上げて下さいと云うのでピン する様な鯛が四枚も五枚も上がる。酒が上がる。寿司が上がる。其の外何んな御馳走が出るやらわからんと云うのである。料理方には三木の黒田さん（婦人）が自分の内（内は料理屋）が日曜で急がしいのにわざわざ私共に御馳走をすると云って襷掛けで台所で働いている。其の外男女二十人計りの人が打交つて働いている。一寸見た所では婚礼か何かの様である。

其の中に近村の富豪で永らく正妻を嫌って出していたのが徴兵に行っていた一人息子が病氣になって神様にお願ひに来ると神様の云われるには

「お前の所には女がいる。其の女の心の休まる様にしてやらなければ息子の病氣は助からん」

其の頃は妾が既に死んでいるので富豪は

「其んなことはありません。私の家には女は居りません」

「其んならもう一度見て来る」

と云つて神様

「何うしてもいる。其れは死んだ女ではない生きた女だ」

「其んな筈はありません」

「お前は何んと云つても其の女は今お前の内の大黒柱に喰ひ付いている。其れを安心の出来る様にしてやらん内は何うもお前の息子を助けてやることはできん」

其処で流石に強情な富豪も子息が助からんと聞いて

「其れでは申し上げます。実は私に家内がありました。七年以前に出しました。多分其の女と云うのは其の家内で御座いましょう」

「其うだ。其の家内を内に入れなければ息子は助からん」

「でも七年前に出してしまつて其れから色々人が入つたけれども拒つて来たのに今更此方から来いといふことは出来ません」

「其れは神が良い様に取計つてやる」

其れで一先ず富豪も息子の命が助けたさに神の云うことを承知して歸つたが其の後中に入る人が入つて家内は戻る。其れと同時に重態であつた息子の生命が助かつた。けれども元來其の家内が嫌いなものだから息子の生命を助けたい計りに入れたが助かつて見れば厭で／＼耐らん。何時も台所から上に上らせなかつたが遂に納屋に押しこめてしまった。而して息子には姪に當る嫁を迎えたが始めの中は良かったが終いには其の若夫婦が旦那を嫌い出して家の中に居れなくなつた。其れで遂々今迄嫌つて／＼嫌い抜いた女房の納屋に行く様になつた。納屋に行けば女房だけなら其れで良いが自分が住むとなると其の俣では居られないので有金の十万円計り持つて出て其処に立派な普請をする様になつた。それで厭な同士が遂に大の仲良しになつてしまつた。

其の夫婦達と其れに付添の人が四五人やつて来た。

いよいよ昼になると私共八人は親様を正座にして別膳で大變の饗応である。料理は黒田氏の手になつたものだから手の利いたもの計り。余り品数が多いので膳には盛り切れないので五つも六つも畳の上に並べる。それから酒宴になる。充分戴いた上で休息し四時頃からいよいよ初勤めにかゝつた。其れ迄は昨日の雨がソボ／＼と降り続けていたが三時過ぎ

るとスッカリ上ってしまった。これも親様が前の日に云って置かれたことである。
「明日の三時頃になると晴れる」

と実際其の通りである。

一同は勇んでお勤めにかゝったが十二下りの全部済んだのは六時過ぎであった。其れが済んでから今度はお夕飯の御馳走であるが今度は村の人総出の饗応である。杯が回るに従って祇園囃しが出る。浪花節が出る。浄瑠璃が出る。中に無芸な人は万歳を称える。参拝の趣旨を演説する。親様は勇んで踊り出される。一時は家中がよすぶる計りであった。一同は陽気の中に御飯を頂いて床に入った。

此処で特に記して大方の注意を引いて置きたいことは何処の家庭でも村落でも外来の客を誠心より待遇するという所は少いものである。其れを誰が行っても皆親切に待遇して衷心よりの満足を与えて帰すと云うのは高木の人達が善良である計りでなく親様の日常の訓練がよろしきがためである。此う云う所を今日の天理教の人達に見せたならば大いに反省する所があるであろうと思われる。此の点に於て親様を始め播州の方々に親切を謝すると共に其の生ける良き実例を示されたることを一同に代って深謝するのである。

お勤めの翌日（八日）は気持の良い上天気であった。一同は特に井出家の世話で回された明石行の馬車に乗ってなつかしき親様の宅を辞した。然るに馬車が三木の町を通過して山路にかゝると親様の御令息が自転車に乗って弁当と夏蜜柑とをもって来て下された。一行は感謝の中に其れを戴いて明石より汽車で帰った。

此の日奈良に来ると今日はスミスの飛行があったと云う。京終の停車場に来ると前の汽車に乗り遅れた人一杯であった。福井氏と自分は「彼の人達は唯一瞬間飛ぶだけの飛行機を見に来ている。我々は永遠の飛行の術を学んで来た」

と語りつゝ三島に帰ったのは既に火ともし頃であった。

金原梅子夫人に与うる書

大平 隆平

金原さん

先日は誠に失礼を致しました。彼の日永尾さんからお使を頂いた時私の胸には貴女が永尾さんの宅に来ているということが直ぐに浮きました。其れで行けば人様の内で喧嘩しなければならぬし厭だなどは思ったが永尾さんは始終上って御厄介になっている内ですし、顔だけ出して来ようと思つて伺いました。案の定玄関に通ると女草履が一足脱いでありました。私は永尾の奥様に挨拶して貴女が来ているなら言葉が荒くなるかも知れんから此処で失礼させて戴きますと云っている中に貴女は奥から出て来られました。私は貴女の顔を見るなり胸がムカついて来たが外の内であるからと思つてジッと押えていました。其うすると貴女は私が貴女への味方であるが如く思つてペラクラと播州の親様（貴女は播州には親と呼ぶものはないと云われたけれども私は私の呼名に従います）の悪口を始められた。私は黙っていた。出来るならば終迄黙つて通そうと思つていました。然し余りな貴女の悪口に遂に私は黙り通すことができませんでした。

金原さん

貴女も虫の良い方ですね。今月の一日に貴女が私の所を尋ねた時親様の悪口雑言をサンザ述べてイヤ狐憑だの稲荷下ろしだのと親様を罵った時私の顔に青筋が立っていたのを今迄播州の親様に誑されていたのを口惜がって青筋を立てたものと誤解し大平さんはスッカリ変心したと布谷さんの所へ云つてやったそうですね。其れは大きな心得違です。私は何も播州の親様を怨んだのではなく貴女が奈良で彼れ程親様に好遇せられ貴女も自分の金の簪を上げる程心髓して居りながら一旦播州へ行って来ると手の裏を返えず如く先方の悪口を云う軽薄な態度を怒つたのです。然し彼の日は引越で忙しくもあり、貴女見た様な女を相手取つて喧嘩するのも大人気ないと思つて黙っていました。其れを見て大平さんはスッカリ変心した等は一体何んな眼をもって人間の心を眺めていられますか？ 恐らく其んな軽薄な心では播州の親様は愚か三歳の児童の心も完全に理解することはできないでしょう。

其れから黙つて聞いていると

「私は貴女の所へ吉田さんから電話が掛つたけれども貴女がお出でにならんかったこともチャンと調べて知っていますよ」

と云つて私が貴女の一言のために親様の呼出しに出なかつたとおとりになっている様ですが私は彼の電話が吉田さんから来たのだとは知りませんでした。又た親様が奈良へおいでになっていたということは夢にだに知りませんでした。

金原さん

彼の電話は何も貴女の考えている様に親様から来た電話だから切ったのでなく貴女から来た電話だと思っただけで切ったのですよ。これで私が彼の投げ何んな心で居たかおわかりになりましょう。

其れを見当違いに貴女の一言にスッカリ私が変心してしまっただけの如くに信じて又永尾さんの宅へ私を呼び付けて親様の悪口雑言を聞かせ様と思っても其うは何時迄も私も黙って聞いては居りませんよ。

金原さん

私は此処で播州の親様のお話と貴女のお話との黒白を分け様とは思いません。何故かと申せば私は其の場の実験者でないからであります。けれども詐か真か知りませんが六十越したお婆さんが嫁入りするのだと云って一里も二里も車の上で嫁入りの行列の稽古をさせいよいよ井出家へ着くと嫁だと云うので黙って上って床の間に座り込み何も知らない井出さんに面喰わせるなんかは随分子供じみていますではありませんか？ 其れも良いが祝儀として区長や消防夫や伍長や村の青年の迄包み金をするなんていよいよ正気な沙汰ではありませぬね。私はこれ一つ聞いただけでも金原さんは良い加減詐を云っているなど直ちに思いました。然し貴女のお話では何んなことをしても親様と黒白を分けて見せると云うのだから実際分けてお見せになったら良いでしょう。又た播州の親様が稲荷下ろしだと思っただけから思っているが良いでしょう。然し私の領分に入らな親様のことを出すことは待つて呉れの何んのと干渉がましきことは仰って下さるな。

私はこれ迄自分の信仰に対して人から指図を受けたことはありません。何処迄も独立独歩でやって来た人間ですから貴女に限らず随分自分と反対の意見を抱いている人の説も聞きますが其れは参考として聞くだけで何も賛成するものではありません。此の点は永尾さんの所で充分申上げた心算ですから貴女にも良くわかったことだらうと思えます。

其れから貴女に云って置きたいことは実行の神活き神の金原明善を後に控えて三十年間天理教を通って来たとか十五年間昼夜の別ちなく御筆先を調べさせて頂いているから何なりとお尋ねなさいとか云う様な下らない高慢はお止めになったが良いと思えます。

其れからも一つ云って置きたいことは自分のものでもない財産をさも自分のものであるかの如くに云い触らして歩くことです。これはお止めになったが良いと思えます。其れでないと貴女は至る所で嫌われますから（現に嫌われています。ただ貴女に向ってチヤホヤ云うのは何も貴女が偉いためではなく金が偉いためです）けれどもこれについてはもはや此の上深く申上るまい。ただ貴女の現在並に未来のために一言云って置きますが天月日の社をこぼちなされるな。貴女のような者が十人二十人こぼって歩いても月日の社は月日の社ですから。其れに余りに社をこぼつと現在に於て夜も寝られない不安に襲われる計りでなく未来に於て神のお側に近寄り難き理が出来て来ます。但し貴女が何処迄も稲荷下げとお信じになり天理教徒五百万のために迷路を断つと云うのならこれは又た別問題です。然し近き将来の中に貴女は本部にも捨てられ教会にも捨てられ家庭にも捨てられ頼るべきものは播州の親様一人であることを悟る時があるでしょう。其の時月日の社をこぼてる者は禍なるかなである。これを貴女のために云って置きます。

読者の声

東方暁潮

拝呈、桜花は散り去りて後何となく物淋しく覚出で候折柄恋しき貴兄御発行の新宗教五月号本日入手致し候、未だ忙殺され居る故詳細には見ねども一言一句皆吾等青年宗教家として殊に天理教の教理に一致せる計りを満載せられ皆血となり肉となるもの計りに候

小生は研究する事は数あれ共盲目信者や迷信者の間には理を離れて、有形に計り頼る様になり、吾等の眼光に照す時には見苦しくたえ兼ね候

丁度先般三日に御教祖様の三十年年期祭執行せるにつきて其の後で親教会の菊地会長二三日も詰め切りにて御研究被下しが其の要目は、一、各々は甘露台を築く事 二、悪しき払い 三、甘露台を冬に治むる等でありました。最後に、三日の昼頃に同会長が教祖の御殿を新らしいのと入替え致す節に見れば御神霊は切れ／＼となりて居りたという、其に依りて皆の者は早く、新らしいのを向える事をせないとつまらん、拝んでも拝むせいが無く有難くないと皆の古参の役員が言うから、私一人無形教会に一信徒にもなって居る私故に、教祖の御霊を向える事はせく必要はない、其れよりも教祖の霊は吾等しく無形の事ならば、幾ら立派なお印しでも心に入り込むで貰い導いて貰えるだけの信念がなくはならん者故に必要は今この処無であるらう。吾等の尽しただけ運んだだけの理は直ぐと受取り直ぐと返すの理であるから其の有形の目に見える所計りに見を付けて居るようでは無形なる否、無形というでもないが理に依りて動かされてあるのが御教理故何も心配するには及ぶまいと言った所が、其れではいけぬ拝む気がせんのですまんと思うのである、そんな学者

の言う事は分らんから止めよ、実地と理論とは異うから聞く必要なしと一口に抑え様とするのであるからな。お続け申した。

現今天理教の布教師でありながら郡中宣教室の神様より分教会、分教会より大教会という順序に有難さが違うだけに御仕分けも違うのだと云っている。

しかし神様は大宇宙内否外までも至る所に物の存する限り神様の御目は届き居る故に、便所の中にも宜しい、身上の時の助けにしても、懺悔の仕方によりては直ちに助けて被下るのでありますと申せば然しそんな事を思うからしてならぬのだ。

最も理論通りにはならんけれども、始めての御馳走故に、善悪なるにも限らず一応は胃袋に入れて更に消化して、養分のもと思ふ物だけとればよろしいのだ、其の上取捨するせんには関らずであらう、痴人の足跡もよろしくに願上ます、私は至って浅学無知な者であります、松山や道後高浜の往復の汽車電車中には車中説教をやり汽船にては甲板の上にてやり馬車に乗りても又歩行しても少し目立つ様な人に向ってやるのだ、先月三十日の事松山よりの帰途にて或青年に向い、世界最後の天理教なる小冊子を彼に与えて最後の教なるものを説きつゝあれば、鼻毛を生した、教師らしい者が六名程居ったが一人の髯は立って言う、然し天理教がたしかに世界の最後を救うべき価値あり任務あると云われるが、そんな事は如何なる宗教にもあるとてキリストの天啓マホメット等を並べられたかから、天啓には二種類ある事を考えたからして彼等は一時的ばかりであるに天理教の天啓は五十年余にわたってあった事を言うたら夫には感じていたらしい。

夫から泥海即ち新創世説とダーウィンの比較やら其の他教理について口論を戦していても、僕は何も進化せず退歩計りでも見込のあるものではないとやり込めた、死同様に火の様に夫には理もあろう、天理教が僅の間に大なるのは偉いと思う、所が髯先生は火の様に分る様な教理は少しもない、言わばキリストは高等宗教であり天理教然し吾等如き学者に近き者を救う教であらうと云われたで、たまらず然し君よ、克く研究は下等の動物に近き者を救う教であらうと云われたで、たまらず然し君よ、克く研究究せし後に言えよ、大宇宙の万事が天理天則によらずして何物か成立する、余り大きい言は言わしませんぞと言うと、其の先生は少し考えて居ったが、そうです私も天理教の人の親切なのとよく身体をおしませずして働く事だけには門外の私しにも能会得ができて居ります、と云うたので、そうでしょう私しは宗教学という様な学者ではありませんが凡そ宗教の目的位は知って居ります、教理はどんなに説かれても上手下手とかはただ方便であつて、夫れで実社会に応用して、役に立つものでなくてはならぬのであると云えば、然し君の説もよいかも知れんが私しは高尚な錦の教理がほしいのである。実地に応用はされるにしても、無学者の迷信者達と同席する気にはどうしてもなれないのだと云うので、神様の御言葉に、そこは各々のむねしだい、とくとしあんしてついでこい、とありますから何にもおあせりにならないでも宜しいでしょう。

私しが責下の如き中学の教師という様な学問のある人に対して説く所は神様が十億万年前より世界を作り始めてからの御心を思いますからして、天理教に入ると入らぬに関らず一応は各人聞く必要があり聞かすべき必要があらうと思ひますので申しますが、天理教には入らずとも天理を守らずしては一分間たりとも生存は出来まいと申しましたが、段々と仲直りが出来まして、もう郡中の停車場に下りてからも互に話し合つて居りましていよいよ別れんとする際に、貴君はキリストの先生ではありませんかと問いますと、そうですよ別れの末席に居りますが今夜は日曜ですから御出で下さいませと云うからそうですか私も此の町の天理教会の青年教師に過ぎませんが御尋ね下さりませと云うて別れを告げんとする際に、私しは郡中には色々の教会がありますが互に連合して研究仕合つて教勢の発達を図つてはどうであるかと云うと、彼はよい、私は夫は希望です何れ御拝顔の節に熟談いたしましよというて別れを告げたるもあつた。

それで私しはいつも何もおそれませぬ、本月の五日に徴兵検査（但し猶予）の折に天理教であらうが天理とはどんなものかとか、病気が治るかとか、郡長や連隊長が申したので堂々と村長の止められるも聞かずに先きのキリストの教師に対する様な事を述べた事もありました、其で私しはどうも此の大道何処へ出しても、憚る所の無い天理教を布告するのですから偉いものです、普通なら誤字期の対面でも恐れる位の私しが天理を説く節にはたしかに検事位の資格はあります。大平兄よ、私しの如き青年でもあわれみ給え、又幻灯伝道をやっているのに、親教会長は理も非も無しに止められるのがね、残念ですよ、幻灯伝道で即ち人心を救い上げるという様にはなれないが広い意味の句掛ともなり、荒木頭領でありますのよ、それを無にする会長はつまらぬのです。

此の春の木芽の燃え立つ如き信仰のある私しに対して、之を無理に抑制せよと云うのは神意に叶いましよるか私目のよりは分別ができませんのです。

又甘露台説も精神上の事であるのでしよう。

又貴君の二代の教祖も面白く或一面に於てはたしかに教祖の資格があります。

乞う、……私しは少しく脳が悪いから思想を十分に現す事ができませんが、私しの心底をお汲みあれかし、
五月十一日

天理教高知大教会部内
郡中宣教所青年会幻灯伝道部主任
東 方 暁

潮 拝ス

新宗教社々長
大 平 隆 平 大 兄

雪 之 助

父の如く兄の如く信愛する大平様
私はこゝに此の書信を認めざるべからざること悲し悲し
四月の月上旬私が書信の中認め申し候らいし宝座に入るべき第三の人は決して播州の神の
如く自ら宝座に直らざる前に自ら騒ぎ自ら説くの人に非ず深く隠栖の宿に黙せると雖も刻
限は必ずや其人を推して宝座に直らしめつるに相違なかるべく候
私は従来父の如く兄の如く信愛せる大兄に此事の秘相を告ぐる能わざるを悲しむと雖も
必ずや近き刻限は明瞭に此問題を解決すべしと存じ何事も語り申さず候
近隣に稲荷の巫黒あり今大師あり私の卑見に依れば播州の神強いて珍らしからず存申候
彼女の思う事言える事が大兄のそれに非ずして大兄の思う事言える事が彼女の不思議なる
心に映つるものと存ぜられ申候
ただ私は此の事のために過勞の末大兄の御健康に煩いせんかをただそれのみ氣遣い上げ
候かえすも御自重遊ばさるべく御祈り申上候 敬具
五月十五日夜
之 助

答 御手紙有難く拝見致しました。人各々見る所あり。私は所謂貴方の第三の天啓人の出現を待ちましょう。(大平生)

滋賀県 愛 読

者

拝啓時下暑氣之候に御度処以貴社益々御盛大之条奉欣賀し段々斯道の為御尽力被下誠に
難有数ならざる小生も實に感謝の至に不堪申候回顧すれば昨年六月以来貴社発行之雑誌に
依り暗黒たる本部の方々も大分に目の玉をむき出し少々よい面目に相成り掛け申候は是偏
に貴徳の御蔭にて吾々も大に喜び居り候就ては貴誌記載の天啓人井出クニ氏より更に偉大
なる天啓を受けて居られ候人は四五年以前より此大協かいの前会長茨木氏に御座候由承申
候間参考まで申上候委細は北にて御聞取被下様願上候現今本部も研究中とかや承り申候余
は後便に

答 此の茨木氏に天啓がある筈と云って四五年前騒いだこともありますが氏のは一種の精神病患者で天啓人等とは大違いに候。只今は一室に籠り人にも面会せられずにいる様な次第です。

(RO生)

大阪 森 伊 三 郎

拝啓初夏の候貴兄いよいよ御健勝日々御道のため格別の御苦勞様に相成りかたじけなく
厚く御礼申上候野生未だ拝眉を得ず候え共骨ある筆の後を慕い居る者に候も全く神様の御
蔭と感謝仕居候自分が道に付き候は全く身上に煩いを受けしために無之一昨年の夏季中行
届かぬ考に研究さして頂きし末信徒となりし次第に候え共其後教会に於ける総ての事物に
対して不満多く且つ理に合せざる点にしばしば遭遇し会長所長役員への注意等も勿論遂に
本部員等及教会制度の非事などを公然教師等の面前にて発表せし事も有之候まゝ反感を買
いし筋も御座候が当時全く目下の聞誤りか悟り違いよと一時惑い居り候ものゝ折に触れ勃
発するは免れぬ処に候時に昨年四月教会諸氏の勧告により教師の検定試験を受けし際三島
の書店で貴兄の心血に成る新宗教を見せ頂き従来執り来りし野生の主義や理想を決して
悲観すべきものに非ざるを信ずる様になり他の人々の御話に拘らず昼間は社務の余暇に志
す処に依り行動を続け居り候も濁れる内に居てはと本年二月中に宣教所の或る仕事を人に
渡して断然教会を脱し(信徒を脱退せず)天満に蛤の様な処なれど美しき自由の神様の温
き懐に住居さして戴き居り候其後大なる事情に迫られ候も却って結構と楽しみ居候は全く
貴兄の鞭撻に因るものと謝し奉り候

新福音号は残念ながら数日を経過して拝見し一度拝顔の上にて親様の御膝下へと考え候
え共前後を忘却して客月廿一日に御目通りを為候処親様は御親切に今度は土曜の晩から後
に来いと仰せの俣廿七日午後六時十九分大阪発午後九時（延着）土山着の汽車にて再び御
地場に帰らして頂き村方達の陽気勤めに打ち交り其夜慈悲の袖に包まれ候翌朝親様より手づ
から弁当を拵えて戴き雨上りの道を明石に五里靴履きて元氣良く帰阪仕り候段神様親様
の御守護は申迄もなけれど大部分が貴兄に依て生れて居るものと存じ候出立の朝に別紙の
如き生きた教に接し余り嬉しきまゝ失礼を顧みず申上候御一読被下候わば幸甚に候乱筆之
段は容赦相成何卒御判読被下度先は右御礼旁々得貴意候 敬具

六月一日
十番地

大阪市北区金屋町二丁目二

森 伊

三 郎

大平隆平様机下
廿八日の早朝は靄が深く何処も朧気にしか見えぬ八時頃には太陽が高く昇って雀が忙そ
うに飛び回って居る山の手の方から村人が二三人牛が逃げたと騒しい朝から井出氏の表口
方に声がして何か解らぬ事を早口に云いつゝ緩々と入って来た者がある（自分は首を延し
て庭の方を窺う様に見ると五十近い色の黒い瘦形の男が紺の筒袖姿で手には風呂敷の様な
ものを持って居る頻りに何か行つて居るが一向に要領を得ぬ事計りだ）親様は加味様の間
に御用があつて居られたのに其声を聞かれるや直様姿も確かに見えない否見ずに
「ア—おっさんが何ぞ呉れと云つてどれ／＼」
と上り口迄出て来られた其時には男が丁度庭に入り来つた時で御主人に何か頻りに御願
いして居るが物を呉れと云うのか病氣を助けて呉れと云うのか全く分らぬので皆が変な顔
をして居ると親様は早や錢入に手を入れて「何ぼうやの」と尋ねて居られる（此男は価の割
合に高い辻占売であつたのだが他の者には何を云うてるのか分らぬ様である）すると辻占
売が今度は比較的判然りと「一ツ二錢……」と答えた。親様は云うなりに銅貨を渡して「
おっさん一寸待つてゝや」と云い置いて次の間に居た自分の処へ持って来られて封を切ら
ぬ様に其辻占を引出して叮嚀に出し広げて「一寸之を読んで見とくれ」と主人と共に来ら
れた何心なく見ると大した事が書いてある其大体の意味は天地の間に雲がある其処へ日輪
が覆いかゝるの卦で中吉とある芽が顕れる人の為に苦勞すると書いてあつたので親様の其
旨を御取次ぎすると笑いながら元の様に上包の中に差込みつゝで「辻占と云うものは善く
合うものやで」と賞められながら座を立たれた辻占売に向うて「サ—おっさん返すで之を
又売つたら善いで良く合うたのやで」と云つて返された辻占売は頓首百拝して勇み喜んで
門を出た会話は僅か之だけで時間は然も十分に満たぬけれ共神の思惑あつて館となられる
だけの慈悲ある親様の一挙一動は迎も吾々の禿筆には物する事が出来ぬ思わぬ処に結好な
る生た雛形を目の前に見せて頂き不知／＼嬉し涙が出た辻占売が入つて来た卦が顕れた事
も皆神様の仕業で殊更に自分の如き薄徳な者の居る時に御差向けになつた事を深く感謝せ
ずに居られぬ之等は全く貴兄の誠の努力の賜に外ならぬと帰途三島の空殊に所在も知れぬ
大平氏の居所に向つて感謝の声を洩らさざるを得なんだ為に三木の町では人に笑われた自
分が道を明石に探つたのは其為である。

先月から二度（前日及前の日曜と）帰らして貰い其都度井出様より見せて頂く来信のこ
とごとくが新宗教の愛読者である其時も落付いて親様と膝を交える様に話を承ると口癖に
「大平さんは天理教の目の上の瘤や本部では邪魔になつて仕様がなと思つて居るけれど
皆本部のためや天理教のためを思つてしてる事や大きい仕事をしてゝ下さる」と非常に喜
んで居られます特に御伝えします益々御奮励を願うと同時に御自重を祈り升（五年五
月廿八日啓起生）

滋賀県 井上 貞

之 助

お許し下さい
先月は計らず親様の処にて御声音接する事が出来私は大変有難く感じさして頂いており
ます。其時には大勢様の人仲にてもあり又自分が病氣のため音声が枯れておつたから余り
多く話をさして頂く事は出来ませんでした。が私はあなた様のお顔を拝しただけで結構でし
た元々私は天理教は大変嫌いでありましたが不図したる動機によりましてあなたの御著わ
しになつておる人生の価値及意義と云う書物を拝借して讀まして頂き始めて天理の尊き事
を知り以後はあなた様の御著わしなされた書籍（教迄讀まして頂いたのは下の通りです）
及新宗教を拝読し本日に至つたのであります。又今度親様の処へ帰らして頂いたのもあな
た様の雑誌の御蔭です此くして信仰さして頂いて居る私は今迄あなた様の事を如何程慕う

り

新宗教社長 大平先生殿

答 貴方が播州の井出クニ子様を二代教祖とお認めにならないのは御自由ですが第三の天啓人は本部員で徳の高い方であろうと云う貴方の説には絶対に賛成することができません。もし本部に其んな高德の方があつたら本部も今日程墮落もすまいし私も何も本部の廓清のために苦心は致しません。次に本部員に天啓が下らなければ直轄教会長に天啓が下るであろうと私は此の説にも賛成することはできません。何うぞ此う云う議論をなさるならもう少し教会の事情を御研究の上に願います。靈界の事は貴方のお考えになる様な理詰め(本部員に下らなければ直轄教会長に下るといふ様な)には参りません。(大平生)

編集室より

今月号は国へ帰つたり旅行をしたりして予定の発行日に発行することのできなかつたのは読者諸君に対して申訳のない次第である。此処に厚くお詫びをして置きます。

今回飯降家が差押えせられたについて本部は急に飯降家の家屋を中山正善の物として保存届をしたそうであるが卑劣千万のことと云わなければならない。

本部では播州と云えば取るに足らない様に思っているが誠の人間が百人揃えば三島に押寄せて病める者を癒し悩める者を慰めて眞実の助けをしつゝ本部を改革すると云うのであるから其時が来たら如何な本部でも周章せずには居られまい。

五 月 号 正 誤

一〇頁 坪川は柳沢弥五郎氏の誤

五一頁 「貴方と吉田(岩次郎)さんとが本部立て換え二世立て換への一の筆に上っているのですぜ」は其の後楠原氏への天啓に依り「吉田が神様の一の筆で大平は吉田の一の筆である。吉田が神様に伺つて大平が書いて大平の手から世界に渡すのだ」とあつたに依つて訂正

一〇〇頁 八十八筋は八千八筋の誤

人は偉人と云うものには何時でも逢えるものゝ様に思っているけれども本当の神人と云うものには中々逢えるものではない。大抵の偉人と云うのは小偉人と中位の偉人である。

聞けば釈迦は其の涅槃後一万年経たなければ此の世に再来しないと其の他の諸神諸仏が此の世界に顕われて来るには何時の世であるかわからない。其れ程眞の偉人には逢い難きものである。

其の逢い難き偉人が現在播周の高木村にあると云うことを知らない者の多い事は實際遺憾の極みである。

私はこれを残念に思つて五六の両月にわたり此の偉人を雑誌新宗教紙上に紹介したが大抵の人達は其の眞価を認めることが出来ず狐憑きや稲荷下ろしの類と同視して進んで其の人格や思想を研究して見ようと思ふ者の少ないのは残念のことである。

凡て日本人の通弊として一寸変つた神秘的な人格が顕われて何等かの奇蹟を示す時は直ちに其の者をもつて狐憑きだの狸憑きだのと云つて其れ以上深く研究しようとしなさい。教祖の時の如きも世間は長く彼女を目して狐使ひの様に思つていた。これは明かに日本人の宗教心の幼稚なることを示すものである。

眞に宗教的に発達した国民であつたならば「彼は如何なる奇蹟を如何なる奇言を發するかを見る前に先ず其の人の人格と思想とを觀察するのである」。然し日本人の場合は其うでない。何か不思議なことをして見せなければ承知をしない。かくの如くにして人格と思想とは遙かに神秘とか奇蹟とかの後に驅逐せられつゝあるのである。

高木の偉人とは云う迄もなく井出クニ子氏のことであるが地方の人は普通彼女を呼ぶに高木の神さんと云つてゐる。

私が成せ彼女をもつて私の導師と仰ぐに至つたかと云えば其れは偶然の様で決して偶然ではない。と云うのは私は私の長き精神的過程に於て色々と自分の理想の人物を探してゐた。けれども世界より天才だとか偉人だとか云われる人達に逢つて見ると必ずや何処かに人格上の欠点を認めるのである。かくの如くにして私は長く理想の人物より遠かつてゐたがたまたま井出クニ子氏の神格に接するや私は直ちに彼女が人にあらずして神であることを感じた。これ私の魂に光明のさしかけた始めであつた。

私が彼女をもつて精神上の大導師と仰ぐには彼女の奇蹟ではない（彼女は實際奇蹟をわかない。其の奇蹟と見えるのは大神格者の力を信じないがためである）我が身を捨てゝ万人を助けんとする広大無辺の愛である。我が身を降して万人を立てんとする清廉潔白なる謙遜である。神のために一身一家を犠牲にして顧みざる大信仰心である。

私もこれ迄東西の偉人にも接し古今の傑物の伝記をも讀んだ。しかも其等の一人として私に生きた力を与えるものがない。かくして私は長き精神界の闇に彷徨した。其の時に當つて私の見たのは彼女である。私は彼女に依つて始めて前途の光明を与えられたのである。實際彼女の側にあると一切の煩悶苦痛を忘れて万物を育てゝ行く太陽の陽気に包まれた様の気がする。従つて何時迄経つても其側を離れる気が起らぬ。此処が確かに万人の母たる特性であろうと思われる。

彼女の伝記に關しては私は此処に何物をも語らない。何故なれば其れは五月六月の新宗教紙上に不完全ながら紹介してあるからである。私が其処に彼女に対する感想を書いたのは此の千載一遇の偉人に逢つた悦を万人に分たんがためである。

蓋し物を學ばんとせば良師を選ばざるべからず然らずんば決して其の物の奥義に通ずることが出来ない計りでなく却つて邪道に陥ることが多いのである。彼のピアノの如きパイオリンの如き一度未熟の教師について其の悪癖を學ぶ時は生涯其の悪癖を脱することが出来ず遂に眞の妙境に達することができない。これは書や画でも同様である。一度未熟の教師について未熟の技術を學ぶ時は紹介眞の書画はかけないのである。其れと同様に人道の教師も亦其うである。今日時代後れの僧侶や不徹底な各宗の教師等について居ては決して生ける天理人道を學ぶことは出来ない計りでなく却つて却つて思わぬ邪道に陥つて現世には眞の安心立命を得ること能わず来世には末代切ることの出来ない深い因縁の種を蒔くのである。

けれども眞に偉大なる人道の教師と云うものは絶えず生れるものではない。眞に千載にして始めて一度遇ふことを得るか否かと云う程稀なるものである。しかも何たる吾人の幸福ぞや其の千載一遇の偉神を現代に見ることを得るとは。吾人の幸福は殆んど筆紙に述ぶることが出来ない。

然るに灯台下暗しの喩の如く世の大部分は彼女の眞価を認識することが出来ないで徒らに稲荷下ろしか何かの様に思つてゐる。彼等の愚昧なる眞に憐れむに耐えている。殊に彼女が数ある宗教の中でも最も多大の同情を注いでゐる天理教当局者に於て最も其うであ

る。序に天理教界の迷信を打破して置きたいことは人の病気を助くることが直ちに人道の教師である様に考へていてこのことである。単に人の病を助けるだけならば医者も亦助ける。けれども人は彼をもつて人道の教師とは云わない。ひとり天理教にあっては病を助けられるれば先生と呼び自らも亦然か信じている。これは大なる誤である。仮にも我は天理人道の教師であると公然自称するものが病助けを専門として天理人道の普及を怠つて居る様では真に天理人道の教師とは云うことはできない。しかも此の種の低級なる教師が其の大部分を占むるに至っては實際遺憾の極みである。凡そ宗教界でも哲学界でも芸術界でも真に偉大なる天才の表われん場合に其の者に反対するものは比較的上流社会にある。不徹底なる宗教家哲學家芸術家である。此等の人達は口常に新宗教を称え新哲学を称え新芸術を称え各々其の天才の表われんことを呼んでいける。けれども一旦其処に真の天才の表われたる場合に第一に反旗を翻えすものは彼等である。此の千載一遇の偉神の表われたる場合も亦其うである。けれども天に妖雲の鎖す間こそ日月星辰皆其の価値を蔽われるれ一度其の戸張りの破れたる場合には誰も日をもつて月となし月をもつて日となすものなく其の真価を發揮して燦たり爛たるものである。彼女も亦其うである。現在の所は彼女の真価を認むるものが少いけれども遂には其の偉大なる価値を認識するに至るであろう。近頃私が新宗教紙上に此の千載一遇の偉神を觀たる悦を述べて此処に活きたお筆先生きたお指図がある。何を苦んで紙上のお筆先やお指図を繰返えす必要あらんやと云う意味を書いた。これに対して氣早の読者は私をもつて御筆先無用論者お指図無用論者と思つて真向になつて反駁して来た滑稽があるが實際に於て百聞は一見に如かないのである。如何に教祖の一言一行を蒐集して見た所で又た如何に巧妙なる教祖伝を読んだ吐露で其れはただ空想上の教祖で現実に見たる教祖ではないのである。従つて其れだけ教祖に対する印象の確實性を欠いてるのである。其れと同様に如何に高い理想人物を描いて見ても實際其処に現われて来なければ何にもならないのである。私が井出クニ子氏を見たる悦は私が日夜描いていた理想の人物を現実に見た悦である。之れを例えて見れば絵に書いた海は其れが如何に巧に描かれてあつても實際の海の如く生きた活動がない。私が活ける御筆先や活けるお指図をもつて紙上のお筆先やお指図よりも貴しとなす所以は此処にある。蓋し紙上の偉人や紙上の真理は何時でも見且つ読むことができる。けれども真の活き神には千年万年にして始めて逢うことができるのである。しかも吾人は其の千載一遇の好機に接している。苟くも道に志あるものに此の好機を逸して可ならんや。私が一度彼女に接見せんことを勧むる所以は亦實に此処にあるのである。

病より得たる教訓

大平 隆平

私は生来虚弱な體質で過去三自由年間に人間の煩う病は殆んど経験さして戴きました。其の中で重なる病気を挙げますと三歳の年馬脾風で瀕死の境に迫つたのを助けて戴いたのを始めとして赤痢、肋膜炎、気管支加答児、扁桃腺炎、胃腸病、神経衰弱、脚氣、虫歯、夜盲、夜尿等であります。此の外私の身に煩わなければならぬ病気の数は幾種あるか知らないけれども私はこれ迄我が身に経験さして戴いた病気の経験に依つて大抵の人の美容の苦しさに同情することができます。けれども本当に万人の病を助けさして戴くには未だこれだけでは充分ではありません。もっと／＼多くの病を経験さして戴かねばなりません。

私は常に此う云うことを思つて居ます。「真に名医は病身の人でなければなれない」ということを。これは宗教家でも同じ事です。本当に人を助くることのできる人は其の人の病気を一度身に経験したことのある人かもしくは其の人の病気を自分自身に貰い受けて相手の病苦を救わして戴こうという大慈大悲の人でなければ駄目である。其の他の人の病氣助けはただ口先の慰問に過ぎない。其れで病に當つて私の願わして戴くことは世界に私と同じ因縁に依つて煩っている人の病を何うぞ此の一身に貰い受けさして戴いて他の同じ因縁に悩める人を救わせ給えと。私は此う願うことに依つて自分の病に病み甲斐のあることを感ずる。此んな身体でも人様の役に立つことができれば此の上ない光榮であると思つて私は人の様に無病壯健で此の世を過そうとは思わない。出来るだけ多くの人の病を引き受けさして戴いて苦しみ抜いて此の世を果てさして戴きたいと思つている。私は又た人の様に万人の頭となつて人を使う身分になりたいとは思わない。何うぞ出来

るだけ多くの人の僕となって万人に使われることを希望している。

従って私は天理教の人達の云う様な

「信心が深ければ深い程無病息災になる」

と云うことを信じない。何故なれば実際に於て信心が深ければ深い程万病交同来り大難色を増して来るものであるからである。

教祖を知らざるものは彼の如き高德の士に至らば身上は煩の如き殆んどなかったであろうと思つてゐる。けれども実際はそれと違つてゐる。世に彼女位色々の病気に苦しんだ方はない。彼女は万民の煩のために一日と雖も身上に障りのないと云う日はなかったのである。其れ計りでなく産屋許しにせよ其の他の病気にせよ人を助くるには先ず其病を自ら経験せられたのである。これはこの度現われた二代教祖も亦同じことである。

私は元より此う云う方々とは違つてゐる。私の重々の煩は私の重々の因縁のためであるが精神だけは教祖並に二代教祖の如き精神をもつてゐる。

畢竟人は一度死ぬば二度死ぬことはない。従つて生ある中は人のために死かえ生なき時は何時何処で死んでも良いと云うのが私の死生観である。

従つて病は私に苦痛を与えるけれども煩悶を与えない。私は喜んで自己の悪因縁の決かを樂しみつつ出来るだけの善事を身に行わさせて戴いてゐる。何故なれば人は弱れば弱いなりに相当の善事をなすべきものであるからである。

巧を人に譲り罪を自分に受けるの精神

大平 隆平

家庭や社会に於て兎角紛騷の起る原因は多く自分一人が「良い子」になろうと思つてゐるからである。例えば夫一人が良い者になろうとして妻を抑え付ける。其処に妻は不平が起る。これに反して妻一人が伶俐者になろうとして夫を腰の下に敷こうとする。其処に夫に不平起る。其れが積もり積もつて遂に一家不和の原因となる。

これは社会に於ける個人と個人との間に於ても其うである。甲もしくは乙の団体が乙もしくは乙の団体の面目を踏み潰したとか又た利益を侵害したとか云う場合には直ちに二者の間に衝突が起り遂には血よ流す様な惨劇となることが往々ある。

これは最も厭うべき現象であるがこれを禦ぐには予め其の方法がある。其れは巧を人に譲り罪を自分に受けるの精神云い換えれば互い立て合ひの精神を人心に徹底せしむるにある。此の精神さえ人心に徹底すれば決して家庭に於て社会に於ても巧を争つと云うことはないであらう。

由来人間は名誉を好む動物である。殊に其の名誉心が病的に発達した人間になると自分は一指も染めずして他人の努力を奪いもつて我が巧の如く誇る者がある。普通の人間の名譽欲は其れ程極端ではないが自己の努力に対する相当の価値を認めて貰いたいという要求は先天的に具へてゐる。これは正当の要求である。しかも今日の家庭今日の社会では往々此の正当の要求をさえ蹂躪してゐる。

けれども眞の天理人道と云うものは其う云うものではない。始めより全然自己を没却して先方に巧を譲る自分は詰らないものとなつて一切の罪を自分に引受ける。これが眞の人道である。

これを一軒の内で云つて見ると夫は家庭内のことに就ては一切自己を露出せず自分が此うして社会に活動の出来るのも皆な妻が熱心なる内助の巧によるものとなし妻の巧を充分立てゝやるのである。而して社交上もしくは家事上に於て妻に多少の欠点があつても皆なこれ自分の不断の訓練の足らぬためと思つて妻の罪を自分に引き受けるのである。又た妻にしても夫がたとい鈍物や悪党であつてもこれを鈍物なり悪党なりと罵つて恥辱をあえたることをせずしてこれを夫ならば夫として立てゝ行く所に自然に家庭の和合が実現せられて来る。

仮りに下女下男に物をやるにも乞食非人に物をやるにも出入の者に物をやるにも妻の手を経てやる様にせよ。然すれば妻の巧が立つ計りでなく自分の志も通るのである。これを反対に夫と妻とが互いに一家の名誉を自分一身に負いつゝ出ようとするから家庭内に風波が起るのである。

凡そ此の世の中に於て最も危険なる精神は人を倒して自ら高きに昇らんとする精神である。此の誤れる精神のために家庭には風波を起し社会よりは擯斥せらるゝ様になる。其れを自分は始めより低い所にあつて人を高い所に挙げて置けば自分の落ちるといふ危険がない。且つ又た其れが自己を犠牲にして人を立てる人を助くるという人道の精神に合するものである。

之を要するに天理人道とは何処迄も人を善い者にして自分は悪者になるの道である。決して人を悪者にして自分のみ善い者になる道ではない。これを我人共に深く心の奥に刻ん

で置かなければならない。

天理教界の根本的廓清（二）

大平 隆平

第一 人間力の最も良き試験

天理教は教祖没後次第に神に対する信仰を忘れて漸次形式儀礼を貴ぶ様になり、医者薬を重んずる様になり、金銭物品を尊ぶ様になり、人位人爵を求むる様になり、知恵学問を崇むる様になり、権門富豪に媚び、政府や社会を恐るゝ様になった。殊に御本席没後其れが一層甚しくなった。

此の神に頼む心を忘れて万事人間心をもってやって行こうと云う傾向は以前より著しかったと見えて故本席在世中に

「本部員もよくも／＼マア此んなにぼけたもんだ」

と云う嘆声を発せられたことがある。もって今の一般を想像することができる。

然るに其の後間もなく御本席は此の世を去り神戸人との交渉が全く絶たるゝに及んで本部に於ける人間心の跋扈は実に甚しきものがあった。殊に故管長の如き故増野正兵衛の如き松村吉太郎の如きは其の人間心の最も大なるものであった。

けれども故管長の居る間は幾分なりとも本部員に遠慮というものがあったが管長の没するに至って狡猾なる本部員はひたすら其の未亡人に媚びて其の御高志に与らんとしている。其の腐敗其の紊乱せる状態は太閤没後の大阪城である。

しかも淀君たる未亡人は生涯一度も苦勞をしたことのない無学の婦人であるがために徒らに人の言に左右せられ其の己に媚びる者は近づけ、其の己に逆う者は遠く私情の婦人である。これに付き添う山沢は無能の土梅谷は倭弁家、山中は吝嗇家其の他の本部員は胸に何物かを蔵しながら一身の利害のために何事も云わない所謂日和見である。

本部の幹部にして、既に然り其の教政の如何は推して知るべしである。此処に於て本部革命の声天理教会廓清の声が起ったけれども何処迄も信仰を失った本部員等は其の理のある所に耳を傾けずしてひたすら其の声の抑圧にのみ努力している。けれども神は何時迄も彼等の不条理なる行動を許さない。此処に必然の革命が生じて来る。

第二 七月には奈良系様のお授けは止まり

故御本席の天啓に今日あることを予言して

「内もだん／＼おほませやそとからさきにおほませや」

と云うお言葉がある。今其の時が来たのである。

天理教本部が如何に醜態を隠蔽して現状を維持せんと努力しても周囲から段々覚醒して本部の廓清を迫って来るから仕方がない。

其の手段や方法や順序は今後眼前に目撃するのであるから云う必要はないが此処に一つ云って本部の反省を促して置かなければならない事は七月になると奈良系様のお授けが止まるということである。

第三 贗のお授けを渡す者は発狂する

其の時は本部に贗のお授けを渡すものが出来る。けれども其の者が強えて渡そうとする

と気狂いになる。又其の者より渡されたるものも気狂いになるというのである。聞けば本部では頻りにお授けの仕方を稽古している馬鹿者があるということである。もし其の者が人間心を増長さして神のお許しのないお授けを信徒に渡すようなことがあれば神罰は立ち所に其の者の身の上を襲うであろう。

これは勿論一般信徒に向って云うことではないが、贗者と贗者よりお授けを頂く者とに対する注意である。

第四 かくて本部は動乱の巷となる

けれども何処迄も欲と高慢とに募れる其の者は此の忠告に耳を傾けずして天の授けぬ授けを渡すであろう。而して其の者は発狂する。これが本部動乱の始めである。

其の後は本部員の中片端より身上事情のお手入れがあるであろう。けれども其れが本部廓清の珊瑚ではない。終には何うしても

第五 本部員の総辞職

をもって結を結ばなければならない。これ既定の事実である。何故なれば神は何時迄も神聖なる鏡屋敷を豚の檻として置くことはできないからである。

かくの如くにして彼等が如何に永久の籠城と決心しても内外の事情は決して彼等の籠城を許さなくなるのである。

第六 此の際腐敗せる本部を如何にして救うべきか？

蓋し吾人が紙上に於て又た実際に於て種々なる議論もしくは実行を計画する所以のものは一に本部を廓清して清浄なる鏡屋敷となし引いて一般教界を廓清せんとするにあるのである。

其れには現在の腐れ切った本部員を本部の地外に放逐し全国の誠の士をもって選りに選んで

第七 新神閣の組織

を企つるの外なし。けれども其れは人間力をもっては到底不可能の事に属すれども万事神の差配の下に着々として歩を進めつゝあれば吾人亦言を挟むの余地なし。

第八 首脳者の必要

けれども如何に閣員は新でも之れを統治者を首脳者（神と人との間を繋ぐ天啓人）を欠く時は或は現在の本部の二の舞を演ぜぬとも限らねども神は既に明主を選んで其の統治権を委せられたれば今後の本部は進歩はしても決して退歩することはないのである。

蓋し本部は神の屋敷である。（又天理教は天啓教である）一日と雖も神の天啓なくては成立することが不可能である。又た本部は助け一条の根本地である。云い換えれば最も神聖なる霊救の根本地である。其処に来るものに如何なる難病も助かって帰らなければならないのが至当である。然るに今日の本部には所謂霊救者のなきのみか更らに一段下って神と人との間を繋ぐ天啓人さえないのである。これ今日の本部が自ら信仰を失い同時に社会に信用を失った所以である。

従つて今度の本部の中心人物となる人は智者にあらず学者にあらずして神より選ばれて万人助けのために降された所謂霊救者でなければならない。もし其れでなければ本部は何時迄経つても御筆先に予言せられてある様な「夜昼知れん様に」はならないのである。

けれども天理教五百万の信徒は現在の本部員が全然本部の地外に駆逐せらるゝことを悲しむ前に教祖に次ぐ大霊救者と全国選り抜きの誠の士をもって本部が全然新たに切り換えられることを喜ばなければならない。

然らば此の度本部を救い天理教五百万の信徒を救う霊救者とは誰ぞや？

第九 本部を救う者は広い世界に井出クニ子氏を置いて一人もなし

其れは本誌毎号紹介しつゝある所謂播州高木の神さん井出クニ子氏を置いてないのである。

世人は彼女が教祖五十年の苦勞を九年に縮めて通つた彼女の苦勞の道すがらを知らず其の天理教（寧ろ世界人類のための）に対する偉大なる志を知らざるがために彼女をもって世の同類者と同一視しているけれどもこは余りに彼女の徳を知らざる者と云わなければならない。吾人は夙に此処に見る所あり穩健なる手段をもって本部に此の人を迎うるの得策なるを説いたけれども二十名の本部員中笑うて取合う者がない。けれども天の至上者に依つて選ばれた者は本部員づれの賛否に意を借すものではない。今に

第十 百人の誠の人衆の揃え次第に本部の立て換えを実行するのである

其の時来るは本部員が如何に反対しようが本部の夫人様が如何に権力を振り回そうが神の行う掃除を止むるの力はないのである。否な反つて大なる災害を身に招くであろう。

神は現在の本部員中一人でも助かる者は助けたいと日一日と日わ延ばしつゝある。けれども誰も其れを悟るものがない。

悲しいかな大家の正さに倒れんとするや一木の遂に之を支うる者がない。東西古今の国家もしくは団体もしくは家庭の倒壊史は皆な其れである。現在の本部の状態は正さに其れ

に似ている。けれども幸いにして之れを救う誠忠の士ありて再び神の靈地とすることができるのである。

第十一 夜昼なしのお助け

井出クニ子氏即ち二代教祖にしていよいよ本部に入らんか彼女は決して奈良糸様や故管長夫人の如く深殿に籠って人と交際を絶つ様なことはない。自ら参集して實際昼夜の区別なくなるのである。従って昼勤むる人との区別も出来る様になり夜は自然に門を鎖すことの出来ない様になるであろう。それが教祖の予言であり吾人信徒の前々よりの希望である。

第十二 真にこれ天理教第二の春である

天理教が他の宗教と異なる点は他の宗教は多く教理を元として立つに反し天理教は寧ろ天啓と靈救とに依って立っている。従って天啓なく靈救なき天理教は実際に於て半ば死んでしまったのである。今日の天理教が正さに其の冬枯れの時期に際している。けれども今や長き冬枯れの後に楽しき春は近づいた。これからは至る所の木々は新しき芽と美しき花とを着けるであろう。吾人が長い間の努力も亦この一陽来復の春を見んがためであった。今や其の希望は近づいたのである。吾人の喜び其れ如何計りぞや？

一粒万倍の理

大平 隆平

凡そ真理というものは解釈の仕方によりて天地の相異を来すものである。今日の天理教の教師及び信徒の中には一粒万倍の理ということ解釈して一粒の頃を人に施せば神様は其れを万倍としてお返し下さる。又た一軒の家を神に寄進すれば万軒の家を其の報酬として下さるといふ風に説き且に信じられている。

従って欲の深い信徒は一粒万倍の理と云うものが如き深遠なる教理を自分の欲心から眼に見える物質的方面にのみ解している。けれども其れは誤りである。

明治廿九年十月十日夜十二時三十分の刻限に

「種と云ふは種を蒔いても年によりて生へるもあれば又た生へんものもある。此の理を聞き分けて段々話伝へて呉れ／＼何も云ふ迄今の道と半年前の咄と事情心に一寸案じもある。蒔き流しは何うもならん。蒔いたもの修理する。彼地ら一人育て此地ら一人育て何処へ蒔いたやらと云ふ処より生えたもの。眺めて見れば其の道筋一粒万倍と云ふ。百石蒔いて百石とる咄しでは分らん。唯一つの理から出来て此の咄は深い心の話……

サア／＼今に百石蒔いて一粒まんばい取ること計り思ふてから何うならん。聞き分けて呉れ／＼云ふた計りではならん」

これに依って見ても一粒まんばいと云うことが彼の欲い信徒が説いている様な又た其の欲を利用して信徒に引き入れんとする狡猾な教師等が解している様な物質的利己的なものではない。

これは基督が

「一つの麦死なざれば百の麦生ぜず」

と云って世界の人類のために自ら進んで十字架の上に上った高潔なる犠牲的精神と相通じているのである。

即ち既に道のため人のために自ら進んで一粒の麦となる場合には自ら何等求むる所はない筈である。其れを反対に予め一軒の家と万軒の家と代えること計り考えて家や財産を教会に上げるから遂には神を怨み教会を怨み会長や役員を怨む様になる。皆なこれ自業自得である。（勿論教会や教師にも罪はあれど）

元来一粒万倍の理というものは天理其のものをさしたものであって此処に教祖という生ける一粒の天理があって理を其の弟子に伝うれば、弟子より弟子に伝って遂に万億万人の間に広まるのである。これを一粒万倍の理というのである。

其れを神のため道のため一粒の頃を教会に上げて置けば万粒の頃が返って来る様な狭い物質的利己的方面に解しているから何うもならんのである。

天理と云うものは其んな狭いものでは天理はない八方に広がるの自在力を持っている。従って教祖一度顕われて天理を説くに及んで道は八方に広まり其れに依って幾百万と云う人間が精神的乃至肉体的に助かっている。これが真に一粒万倍の理である。

なおこれについて一言の説明を加うれば一粒の頃は一人の口に入って一人の身体を養うに過ぎざれども一片の真理は人の口より口に伝わり心より心に伝わって尽くることがな

い。之れを云い換えれば物質と云うものは限りある。人を助くるに過ぎざれども真理というものは限りなき人を助くるのである。而して幾人の人に伝えても之れで亡くなると云うこととはない。しかも一度伝ったものが先々に伝わって尽くる所がない。これが真に一粒万倍の理である。これを曲解して一粒の頃を教会に上ぐれば万粒の米が自分の所に返ってくる様に説き又た其の云う教師の言を其の俣に信じて一粒万倍の理とは天理其の者に外ならざること知らざるは最も悲しむべきことである。

二代教祖の新平民観

大平 隆平

世界では新平民と云えば一種違った種類の間人か何かの様に思い社交上同等の待遇を与えることを惜しむ。これは彼等の職業が人の最も嫌う汚ない職業であったがために其の職業を嫌う心が直ちに人其の者迄嫌う様になったのである。而して今日彼等が穢多非人と卑しめられた時代より移って平民の列に加えられるに至ってもなお何時の間にか新なる文字を冠して隠に元の百姓町人と区別するのは最も悲むべき現象である。

由来新平と雖もも何等吾人と異なることなき眼鼻口耳手足を持って居る。殊に或る種の職業に至っては新平でなければ充分出来ない職業的天才をもっている。かくの如く彼等も亦社会生活を助くる以上当然社会の一員として待遇しなければならない。

元来日本人には人格に依って尊卑を分たずして職業に依って尊卑を分とうとする浅薄なる人生観が抜けない。此の野蕃なる人生観は未だ下女下男の人格をさえ認めないのである。其れが新平民となると一層甚しくなる。中には彼等を目するに犬猫同様に蔑視するものさえあるのである。

けれども其れは未だ人道的観念の発達しない俗人の見解として許すとしても身を宗教界に置く者迄が新平民に対し普通信徒と同等の待遇を与えないのは不埒千万と云わなければならない。

これに就て二代教祖は語る。

「世間では新平のことを穢多々々と云って嫌うけれども彼は穢多というものではない「寄った」と云うものだ。神に心が寄ったから「ヨッタ」と云ったのだ。其れを段々取り違いで穢多々々に云のは間違っている。

何故新平が彼の様に人間に嫌われる様になったかと云うに神様が此の世界をお造りになった時十人なら十人の人間をお拵らえになった。而して其れ／＼の人間に商売を割当てなされたが其の時籤引して牛馬の皮を製する役に落ったのが新平だ。

其の証拠に新平は平民よりも上にいる。此の村でも外の村でも新平の居る所は高い山とか川上とか云って平民よりは上に居る。

其れが段々終いになると新平は汚ない仕事をするから穢れている様に思って遠ざけて来たが明治天皇陛下になって新平と云うものがなければならぬというので同等にして下された。

良く考えて見ると神様の使う道具で新平の手にかゝらぬものは一つもない。太鼓も新平でなければできない。

今少し経つと此の辺の新平は皆宇治に出かけて行くが新平でなければ彼の熱い茶をもみきれない。彼の茶の中には皆新平のツバが交っている。

此処は新平が何んな破れた草鞋をはいて来ても足を洗して上げ神様より上に座らせて助けさして頂いている。

人に依っては新平の持って来たものは汚ないの何んのと云う人があるが新平が上げたら外へよけて置いて知らぬ人が来た時にやる。其うすれば新平だと云っても少しも怒らぬ…」

行く所まで行かしめよ

大平 隆平

世間では私が五月号に二代教祖の出現と云う一文を発表するや或る者は大平ももう駄目だ！と云い或る者は大平と云う男はもっと偉い男だと思ったがもうこれでスッカリ信用を落してしまった！とか賛成の声よりも寧ろ呪咀の声が多い。けれども私には私の考があつてしていることである。駄目でも駄目でなくても他人の与り知ったことではない。よし又た私が他の人達の云う如く駄目であったにしても私自身にとっては行く所迄如何なれば其れが果して駄目であるか否やと云うことは云い得ないし又た信じ得ない。

私は常に人にも語り又自らも信じている。

「よし其の者の行為が正しくても又た間違っているも其の者をして行く所まで行かしめよ」

と。人間は善悪共に行く所行って見なければ本当のことはわからぬものである。例えば彼の放蕩である。世間の親達や世の道学者先生は自分の息子や友人の息子でも放蕩を始めると頭からこれを止めさせようとかゝっている。放蕩息子は余りに干渉が烈しいので表面には実直に帰った様に装っているが其の実本心よりの改心でないからして陰に隠れて放蕩を続けるのである。

けれども私の考ではたとい其の息子の行為が間違っているもこれに対して脅迫的の圧迫を加えぬことである。何故なれば其の者がたとい表面的に実体を装うても真に内心よりの悔悟でないから何等の価値もないからである。たとい一言の干渉をしないで悟る時は悟るのである。勿論其の中で賢愚利鈍の差に依り始めより悪いという事を知って濁に染まぬ者もある。又た一回二回で悟るものもある。又た一年二年で悟る者もあろうし五年十年で悟る者もある。其の中で一番馬鹿な奴に財産をスツカリ蕩尽して乞食非人の姿になってやっとなつて悟るものもある。

けれども遊んで／＼遊び抜いて真に放蕩と云うことは悪いことであると悟った悟は真の悟である。

其れと同様に信仰も他処から見て間違っているがなあと思つても本人にとっては其の間違が真に心からわかつて来なければ駄目である。

然し此処にまた此う云うこともある。百人の中九十九人が己達の信仰は正しいと思つて残る人の信仰を排斥しても結局は却つて残る一人の信仰の正しいこともある。其れだから多数決とか輿論とか云うも良い加減に当にならぬものである。

其れで此の際私が反対者に希望して置くことは私の信仰が間違っているかいけないか又た私が駄目であるか何うか兎に角行く所迄行かしめよと云うことである。

人間と云うものは死んでしまわなければ駄目だとか駄目でないとか云えるものでない。又た個人の信仰も其の結果を見ない中は間違っているとか町がついていないとか云えるものではない。行く所まで行って始めて真偽の程が判明するのである。

私の今度の信仰は漫然とした根拠のない信仰ではない。充分信ずる所あつての信仰である。其れでももし私の信仰が間違っていて偽救世主をもって二代教祖として世人を欺いたということが事実上に証明せられた暁には私は社会に対する謝罪として腹切つて死ぬであらう。其の真偽の定まらぬ中は決して中途で変更する様なことはない。これを一言読者にお断りして置く。

二代教祖の「あしきはらひ」に対する新解釈

大平 隆平

従来の「あしきはらひ」のお手振りや意味の解釈は随分区々であつた。就中今度の二代教祖の解釈と最も異っている点は「あしきはらひ」と「てんりわうのみこと」の二つである。

あしきはらひ即ちあしきをはらうてという言葉は従来の解釈に従えば相手（病人）の悪を払つて助け給えと云う風に解して来た。けれども二代教祖の新解釈に従えばこれは相手のあしきをはらうのではなく我が身をあしきをはらうのであるというのである。

其れから天理王命と云う時これ迄は点親様をお招き申すのだと云つて天理で右手で招く形をし王の左手で招く形をし命で両手を返して戴く形をしたのであるが二代教祖の新しき解釈に従えばあしきをはらうで自分の埃を払天理王命で先方の埃を自分に貰い受けさして戴きたいと願するのである。其れで新旧のお手振の相違と云えば「あしきをはらうてたすけたまへ」迄は同じであつて天理王命というとき新方では天理で右の手で先方の埃を集める形をし王の左手で先方の埃を集める形をするのである。其の時旧型では天理王で上から下にお招きするが新しい型では埃をかき集めるのであるから両手で横より抱きかゝる様にするのである。

其れから「あしきはらつてたすけせきこむ」これも旧型では「一列」の時両手を揃いて左より右に向つてつこの字を画くのであるが二代教祖の型は一列で両手を真中から左右に分けて円形を画くのである。其れから「甘露台」も従来は高さが区々であつたが二代教祖の型はこれを頭より高く捧げて頂くのである。此の他御神楽歌やお筆先に対しても随分違つた解釈をもつていられるのであるが其れは追つて紹介することとする。

教祖の追憶

故 北田 嘉市

故北田嘉市氏は十七の年より信仰に入り教祖に仕うること三十有五年であって村田幸右衛門氏仲田サユミ氏と共に所謂三人衆と云われた人である。其の後教祖の昇天と共に本部のやり方に不満を懐き独立独歩教祖の遺志を奉戴して純天理教に殉じた清兼な人である氏は今より五年前の九月一日に出直しになったのであるが其の生前の談話は現在並に将来の天理教の趨勢に思い当る節が多いから特にこれを紙上に発表することにした。

私が此の道の信神に入ったのは今から六十年程前であるから本席等よりズット古いことは古いが教祖のお隠れになってからと云うものは何うも彼の人達のやり方が気に喰わぬ。其れで自分から身を引いて匂いの掛け流しの仕っ放しでこれ迄通って来た。其れで教祖のお話しを聞きたいと思つて来る方には眞実のお話をさして戴こうと思つて井りませぬけれども今迄其う云う方には一人もお目に懸りませぬ。

私が前々聞かして戴いて井りませぬのは安達照之丞様をお助けなさった前に未だ御座りませぬ。安達の隠居に油重／＼と云っていた水車屋をしていたました安達重次郎の子供が四つか五つになつても足が立たない。其の家内が私の所の子供は人が躰だ／＼と云うが本当に躰じゃないか知らんと大変心配していました。教祖様は其れを聞いて「油重の子供が足が立たんということだが気の毒なことだ。ちょうど種の兼ねも溜つてあるから行って向うでは払わんで良いから此方だけ払い歸りに子供を預つておいで」と内の者に仰つた。其れから其の油重の子供をお屋敷の中に置いて足の立つ様にし赤井花ごに紙付き草鞋をはかして歩かして歸らせました。

其うすると先方の母親は「人はいざりだ／＼と云うけれども全くのいざりでもなかつた」と云つた。其れが暫時経つと又た元の様にいざりになつた。

其の時教祖の仰るには「此方だけ誠は見せてあるけれども向の種の決算が出来ていようまい。其れが出来たら此の子の足が立つ」と仰つた。

此の話を聞いて實に其の行をするものがあるかと感心致しました。

御教祖様がおかくれになる前の予言に二派にたとえてあつた。

「此の道は世界始まってからいろ／＼大戸辺にもなり大食天にもなり弘法にもなって弘めようとしたけれども何うしても流しが出来ぬ。其れで今度私に天の將軍がお神憑りになつて道をお弘めになるのである。

此の道は先きになつたら世界一般のお助けをするなれど其の間に学力と兼ね力と知力とで一つ詐を云うて道を消してしまふ。けれども天理王命ということだけ詐をつきおらぬ。其れだけで結構だ。

今の中は何んぼ悪気でも天理王命の名を流して貰いたい計っかりに何んな道具も使う。けれども先きになつたら誠の人と我が心をつくものとを神が見分けて通る。

と仰る。其れから又た今の教会の出来ることも前々からお話があつた。

「世界の間人が今に講をこしらえ侯講元というものをこしらえて子でありながら兄弟を支配する様になる。けれどもお前等は決して其うするのやないで。掛け流しの云い流しにして通れよ」と。

其れで私の所では匂いの掛け流し助けの爲流しで淡路に二年行つていたけれども講社を作らない。

其の中に教会へ入つたら良からうか何うかと聞くものがあるから其う云う人には今では教会についてないと本部へ行つても取り扱つてくれないから何処でも好きな所にお付きなさいと云っています。其う云う風で塔の峯等も始めは私が匂い掛けをしたのだけれど今は春道についています。

教祖は亡くなる三年前に仰つた。

「私が生きて居れば此の道は煙草一服する間にズン／＼弘まって行く。けれども今の所は何と云つても己の云うことを聞く者が無い。其れで百十五才の定命を二十五年縮めて身を隠す。其の後は暫時人間のする通りに任して置く。今に見ていなさい神殿の普請をするから。けれども其普請はア一結好やなと云うて出す人もあれば彼の人から此う云われたから仕方がない出そうと云つてシブ／＼出す者もある。何んぼ立派な者を館も神は惜しみのかゝつた御殿には住むことはできん。今度本普請をする様になつたらたとい一厘錢でもきかなかでも喜んで上げたもので建てたら惜しみがかゝらぬ。其うやから私の普請をするなら世界一般成り立つてからしてくれ。

其れから中介では尽くせ運べと云つて下から錢や品物を巻き上げる。其ために私は彼云われるから義理にも出さなければならぬとシブ／＼出したものは神の受取がない。百姓

なら三反なり五反なりの祖先伝来の田地があり商人なら分相応の資本をもっていたら其れを一厘も無くしてくれてはならん。何うか神に上げるなら惜しみのかゝらぬものにしてくれ。」

これに就ても正月には色々の雛型を見せて戴きました。其れは或る所からお鏡をついて持って参りましたが何処／＼からお鏡をもって参りましたと云われん先から教祖は

「其れはムサイから持たして返せ」

と仰せになった。其れでも折角持って来たのであるから愚図／＼云つてると教祖は声を荒らげて

「ゴテ／＼云わんで返さんか」

と怒鳴られた。其れでも折角持って来たからと云うので煮炊場の方に回したが後で何故お受取がないかとお尋ねすると

「主は三升なり五升なり持って行こうと云うし内は其んなに持って行か要らんと議論が出来たものであるから神の受取がない」

とお答えになった。

其れから教会の出来ることについても仰りました。

「今に教会が出来其教会は何に使おうぞ。神がでゝはたらく場合には何うする。誠の塊計り出来たら教会は出来ん。此の大きな普請は質倉にしようか酒倉にしようか醤油倉にしようか。けれどもしよるぞ。普請をしよるぞ。皆な悪いことをして普請をする。けれども其の間誠を貫く人がない。けれども此の教理を聞いてジッと通る者が百人に一人と云いたいけれども千人に一人あろうかな。」

人間にも早生と中手とおくてと三段ある。今良い花を見るのはわせ。おくてと云うのは一番後に神が表に表われて働く時働く者がおくてゝある。其れ迄余り長いのでジットこぼれん様に持っているものがない。其れ迄にこぼれる者は可哀相だな。けれども親の積んだお徳は滅多に他には行かせんで。子に生えなければ孫に生える。マア其れなと楽しんで居てくれなければ何うもならんじゃないか。マア身上きりかえて行っても先きになって一つ鍋を喰うこともあるわよ。

けれども後になると誠の者が何んな枝先から出て来るかわからん。其の時は神と神との智恵比べをせんならん。其やけれども智恵比べをするものがあるだろう？ 其れはチト六ヶ敷いわよ

マア其れ迄何時と云う年限切れんけれども神の云う通りにしてくれたら私の二十五才で世間明るい道にする。これを守らんために年限がのびる。年限は何時と云うことは云われんけれども何時の何時迄も放って置かれん。

其の時は偉い神が出て来て本部に入り込む。何うしても入り込む。其の時本当のお授けを貰うのやで。其れ迄お授けを貰うのやないで」

と。其れで私の所では長い間信仰してるけれども誰にもお授けを受けさせません。と云うのは今のお授けは本当に神様がお許しになったのでない。彼をしないと金が懐に入らんから山本と平野と倉橋の上村とが相談の上の細工である。其の時神様にお伺すると

「其れはいかん」

と仰った。押して問うと

「何かのことは飯降伊蔵に任せて置くから然るべきにせい」

と云うお言葉であった。然るべきにせいと云う言葉は既に幾ら行っても聞かんから勝手にせよと云う絶望のお言葉である。其れを押し切つて今のお授けと云うものを始めたが云わば御本席は体よく彼等毒虫の餌となったのである。

「此の道はチョトつけかけたら木の葉の散る如く横目振る間も無い、其うなったら七分の人間は直きにつく。二分はしぶとい。後の一分の何うでも仕様の無いものが蹴落される。

其れだけ神は慈悲を加えたものだ。けれども云うても／＼聞かぬものは勘当する。

神様の駄賃は人間の駄賃より少と高いわよ。今は其れだけの身分でないもの迄梅鉢の紋に羽織袴を着せて先きの駄賃にしてやっている。其やから後で蹴落されたからとて決して怨むのやないぜ。

今に本部は草繁つて道見えぬ。枝先きの澄んだ所は雌松雄松云わん。心の澄み切った所に神が入り込む。其うなれば何んぼ枝先にいても元へ帰つて来るぜ。けれども誠心でついて来たものも谷底から急に上ったものは人に嫉まれる。其のために二の綱紀を出す。

これは平生神様のことをしたけれども蹴落される者もある。又た谷底から上った人には彼んな低い所から彼んな高い所へ何うして上ったのだろうと不審を打つものゝある時前生の因縁を知っているかと云つて聞かせる。良い手本と悪い手本と二派に出さんことには世界承知せん。其れを筆に書いて出したらパッと煙硝に火をつけた様にひろがる。

其の時迄金ぱくの魂はグット田圃の底に埋んでいる。

お前達金が良いか銀が良いか何れが良い？ 金ぱくの魂は何んなに濁っていても一つ撫

でたら元の通り奇麗になる。其う云う者には角目／＼の話をすれば直ぐ悟ってくれる。其れが十社十柱の魂だ。」

「其んなら私等は鉄の魂だか何の魂だかわからぬから信心は止めようか？」

「其うか十社十柱の神にならぬでもせめて其の代理にでもして貰う様にしなさい」

其れで又た信心を続ける。

教祖のおかぐれになる三年前に

「今に道が大きくなると上八十畳下八十畳の立派な家が出来。其処は十柱の神の休息所である。其の中八十畳は十柱の神の休息所で下八十畳は食堂である。

其の外未だ詰所と云うものが出来。役宅と云うものが出来。其の人達の紋は三寸の差渡しで裏は赤表は黒の十二の菊の紋一である。其れを背中の真中につける。

其の外に未だ三十六人の勤めの人衆がある。其れが世界の助けの人衆だ。其の人達がお地場を出る時一人が二千枚の紙札をもって出る。其の二千枚の札は一遍に重ねて上から判を押すと一枚は黒く一枚は白く写つる。其れがホンの拝みつけのお札だ。其れを御膳を貰った所泊めて貰った所に一枚づゝ置いて行き無くなったら帰って来る。

其の人達の出る時に小遣と云って一文もやらない。其の代り一里には一里の小遣二里には二里の小遣をつけてやる。又た内に居れば内にいるだけのものを与えてやると云うのである。

其うなると誠の足らぬ人間は本部の地内に勤めることできん、たとい下駄を揃えるにも便所の掃除をする役でも余程心の磨けた者でなければ入れん。其う云う人達が本部へ来て何うか何なりとさせて戴きたいと誠の心で願って来るのを断ったら其の者は木の葉の散るが如く散る。而して二度と頼んで来ても其んなムサイ者は入れん。其れ迄今の本部にいる者は充分の暮しをさしてある。けれども悪い事をして金を蓄めたものには皆其れ／＼因縁果す道が設けてあるで

と。

其の前に中津の元の会長で泉田と云う男が大阪で講を結ぼうとした。私は何遍も止めたが聞かないのでいよいよ大阪に止めに行こうと思つて北田の吉松の所迄来ると神様が大手を広げて道を塞ぎ

「人が何事云おうとも神が見ている気をしずめ」

と云つてお止めになった。其れで其の俣引つ返しましたが今此の道についている人達は大抵欲の深い人達計りだから今に猿が木からおっ放り出される様なことになるでしょう。

教祖御存命中には喰えよ呑めよで上ったものは充分呑み喰えをさしたものである。全く彼の頃には欲と云うものがなかったから随分気楽なものでありました。

私も古い者だから色々なことを見たり聞かせたりして戴きました。彼のお神楽歌等も第一にサヨミさんが節をつけて私が手をつけさせて戴きました。其れに就て此う云うお話があります。

其の頃私共は始終お地場へ行つてお立ち勤めの稽古をするのでありますが其れが何うした訳か向に置いて来たと思ふ紋付の着物がありません。其れで色々探しあぐんだ結果何うしてもわからんで教祖様の所へ行つて

「何うも私は着物を貴女の所へ持って来た様に思ふけれどもありませんかな」

と。すると教祖は

「其うかお前には眼に見えんか？」

「眼に見えんかって。ある位なら探しはしません」

「其うかえ其の二枚折の屏風にかゝっているがな」

実際其処は私も何度となく通つて探したのだが何うしても私の眼には見えなかった。其れで

「此処は何遍も探したが此んな所にある筈はないがな」

「神がかくしてあるのやで」

「私がこんなに探しているのに何故おかくしになりました」

「其の着物はムサイぜ」

「ムサイぜと仰つても私は何も盗んで来たものでは御座いません」

「取つて来たとも盗んで来たとも云うんでないで。着物は更の着物でせんならんのをお前のは古着やぜ。古着は神がむさい。木綿でも更紗でも構わんから其れだけ真更にせんならん」

而して半年もお隠しになった。神様のなさることは中々私共にはチョットわかりませ

ん。今は神殿の下になつていますが甘露台から五間程離れた所に井戸がありました。其の井戸は奇麗な水でしたが教祖様が其れで何かお染めになる時には

「今日はチョット水を汲むのを待ってくれ」

と仰って盥に一杯水を汲み其の中に木綿なら木綿を入れると赤に染まる。

「又今日は黒を染めるから一寸待ってくれ」

と云って其の水を訓で其の中におつけになると黒に染まります。

甘露台の地定めの時も私は行って居りました。教祖様が手拭を八つ折にして屋敷をお歩きになると足がピッタリ止った。其処を蹂って帰った。

「此処が世界の龍頭や。人間にたとえて云えば臍だぜ」

と仰せになった。

其の処を甘露台として少し掘って小石を置いてあったが其の下から始終水が湧いている。其れを参ったものはお神水だと云って戴いて帰ったが今は其の上をコンクリートにしたと云うことだが古いことをしているやろうか其れとも知らないでいることだろうか？

其れから甘露台と云うことも天から甘露が降るのでなく我が心に感動するということだと教祖はお説きになりました。

神殿の普請も教祖の仰せになったのは甘露台を北に八間離れて神様を祭り南に八間離れて勤め場所を建てるのだと云うことを仰せになりました。其うすると神様は南向きになる筈ですが今のは北向きになって居ります。これについても教祖存命中から

「今に見ていなさい。本部では北向きの大きな普請をするから」

と云って置かれましたが今になって見ると神様の仰せの通りだから實際心の底から恐れ入って居ります……」

播州より

渡辺 芳蔵

拝啓昨日は突然参上仕り御配慮に預り有難く奉謝始めて御照会を願ひ早速御交誼を賜り御高配を忝うし有難く深謝奉候何かと今後尚一層の御引立を御願申上候

陳は本日当御地場に参拝し親しく御親様の大慈愛に浴し居り候就ては御尊兄の御使命を親様に報告仕候そして御地の模様及貴兄の御奮励を報告致せし処親様には殊の外御機嫌麗しく御座候今後の考は世界の人々を救って貰いたいとの仰にて御座候

就ては小生ももとより一命は捧げ居る事故小生の如きものにも何か御用に立つ事も出来申候えれば何かと御用命の程御願申上候

末筆ながら親様には貴兄の御身体は御かわりはなきかと御心配の体に御座候一度御近々中に御参拝ありては如何に御座候哉待ち居り候

追って尚其の中親様の御様子も漸次御報告申上べく候

先は御礼■々御報告申上候 早々

十八日

御地場にて

渡辺 芳蔵

大平 隆平 様

拝呈仕候あなた様には日々御道のため御苦勞様に存じます私こと神様の御引よせと新宗教の御蔭様にて本月廿一日播州の親さまの許に参らして頂きいろ／＼結構の御話し聞かして頂き廿三日帰りましたが実に親さまの御人格に恐れ入りました。委しき事は後日申送りますが其せつ親さまより承り候えれば貴君様には少しく御不快の様な御咄しがありました貴君の様な御道の柱と御なり下さる御方は一層の身上大切になし下されたく先は承り申候まゝ葉書を以て御見舞申上ます。 不敬頓首

京都 北丹生

大平 隆平 殿

編集室より

R O 生

此の頃少しく腹下りで床についていると或る日のこと（六月の十句日か二十日）夢に播州の親様が本部の神殿の一角で頻りに大勢の人に向かってお授けをなさつている。而して側にいた私を顧みて

「もう大丈夫だぜ！」

と云ってニッコリお笑いになった。

これは親様が私に安心をさせようと思つて見せて下さつたのだらうと思つている。

其れから二三日経つと今度は子供を負つて遊びに出ていた婆さん（東京の人間）が慌て

飛び込んで来て「奥様不思議なことを見せて戴きました」
と云う。話を聞くとお婆さんが内に向けて帰って来ると本部の神殿の上に赤い雲が集まる
かと思うと其の中に旦那様が装束を着て立ってお居でになりました。余り有難くて私奥様
に其れは日暮後であるが私はちょうど其の時スヤ／＼と寝入っていた。元来臆病な家内は
其んなことをお婆さんから聞いて一人で便所へ行くことができず私が便所に行く時一手に
行くか其れでなければお婆さんを起して一手に連れて行って貰っていた。
此のお婆さんと云うのは少し足りない方であるがよく神様を見たの火の玉を見たのと云
うのである。其れがために私は時々安眠を妨害せられるのである。
礼を云っている。其れがために私は時々安眠を妨害せられるのである。
性質はごく素直な方で何んとも云われても怒るということがない。ハイ／＼と云って云う
事聞いて働いている。けれども根が馬鹿だから何遍も良く云って聞かせなければ駄目であ
る。其れでも時々とんだ失敗を演じるのである。
第一困ったのは穢いと云うことを知らんことである。と云うのは自分が毎日洗濯してい
て良く知っている子供のおしめバケツの中へ御飯やお汁を仕立てる柄杓を入れて平気であ
るから振っている。
其れからも一つ振っているのは鉄瓶である。私共がチリ／＼バラ／＼になっている間
東京で貸して置いたが持って着たのを見ると鉄瓶の中の錆がスッカリ剥がれて白光をして
いるお婆さんの考では錆が値打であるということはわからなかったから磨いてやって良い
事をした位に思っているのである。
此のお婆さん阿房の様な顔をして相当に欲がある。しかも其れが見えすいた子供見たい
の欲である。
二三日前に奈良に見物にやると大将新しい下駄をもってるのに下ろせば汚れるというの
で私の家内の下駄を借りては行ってしまった。其れが中々入念である。
お婆さんが本部に来る様になったのは此うである。私が先月東京を立とうとする時お婆
さんは私共の旅館である上野の山城屋に来ていたが急にお可笑な結構になり右手が振り出
した後で聞いて見ると神様が下りて
「今立つから後を宜しく頼む」
と仰ったというのである。然し其の後が少ともわからない。
「旦那様は今頭をつかっていて気の毒だ」
と神様が仰ったとか
「お甲子様の旦那様は間違っているけれども旦那様はチットモ間違がない」
と仰ったとかチットモわからないことを云っている。
兎に角お婆さんの様子がこれ迄にない様子であったから一度本部へ参拝させたり播州へ
連れて行ってやったりしてやろうと思って差当り五円を旅費として渡して置いて私共の後
から直ぐ来る様にといつて出発した。
其れが私共が三島へ帰ってから五日経っても十日経っても来ない。何んでも十二日目
十三日目にフラッとやって来た。
何故遅くなったかと訊くと古市さん（工学博士）で御飯炊きがないから来て呉れ来て呉
れるなら大平さんから貰った五円の金は即ぐ書生に為替を組ませ送るからと云われて大将
五円の金に目がくれて来るか来まいか余程迷っていたらしい。
お婆さんが来た翌日お婆さんを本部の神殿に案内した。所が神前で神様を拝んでいると
急に腹痛を起して七転八倒の苦しみである。私は早速お婆さんの身体を抱いて十遍程強く
撫でよやると直ぐ御守護を頂いた。
其れから教祖殿に行ったが今度は手が痛い／＼と云い出した。其れも三遍程迄グッと
引き延ばしてやると其れで御守護を頂いた。
其れから後に一遍本部のお勤めを見て来たが良いと云って出すと神前に行く急に気持
が悪くなったと云ってお勤めに逢わないで真青になって逃げて帰った。其れから子供を負
って神殿に行くがお障りが怖いと云って何時もお参りしないで帰るお婆さんの持病は癩癩
と癩であるが癩は私の所東京の雑司ヶ谷に来る様になってから良くなったと云って喜んで
いる。
けれども癩癩の方は中々直らぬと見えて時々突発する。此の間も奈良へ見物にやった時
癩癩を出して二時間も森の中へ倒れていたと云うことである。
お婆さんの云うことは少しも当にはならない。或る人には亭主は一度も持ったことがな
いと云うかと思うと或る人には一度判事の所へ行って子迄あったが判事が死んで子供は其
の姉が引きとったと云う。又た或る人には其の前にもう一度或る古着問屋とかへ行って其
れにも子供があったが亭主も子供も死んでしまったと云うかと思うと或る人には亭主も子

供も生きてると云う。何れを信じて良いかさっぱりわからない。自分は今迄奉公して来た出入の内
東京へ居ると七近の父親と一手に居るの事であるが自分の秘密金としてお爺さん
から金等貰つてお爺さんに出ると町にもお爺さんに教えたことはない。自分一人で勝手に引き越
は一つも呉れな引越すお爺さんは商売から帰る時々まごつくのである。
私の所へ来ると良く其れを異見するのであるが何遍云つて聞かしても馬鹿だから聞き分
けがない。依然として親を粗末にしている。
お婆さんの賞めると内は物を呉れる内である。私の所へ来ては良く家内を賞めるが私は
時々憎くいことを云うし家内は温和しく交際して物の一つもやるから
「本当に此地らの奥さん程良く出来た方はありません。旦那様も良い方だけれども奥様は
もう一つ良い方で御座います」
終いに余り家内の機嫌を取ろうとして
「彼れ程奥様と約束したのに上らんで申訳ないと思ひまして」
と云つて此の度本部へ来るのを遅れた申訳に云っているが其の実家内内に等一言の約束も
ないのだ。皆な私が来いと云つて連れ寄せたのである。
此う云う風に平時用の云う事やなす事にチットモ締りと云うものがないが根が馬鹿だか
ら悪意と云うものは少しもない。
而して神様のことと云うと何を置いても夢中になる。従つてお婆さんの願つてやった病
人は不思議に大抵助かっている。
お婆さんはこれ迄に教会に一年も居たのであるから普通の婦人ならば十柱の神や八ツの
埃や因縁の理等は覚えまいと思つても覚えるのであるがお婆さんは十柱の神様の名前も八
ツの埃もわからぬ（私も随分骨を折って仕込んだが一向覚えぬ）ただ天の神様と云うこと
と天理王命と云つて手を合せて拝むことを知っているだけである。これが又た神様の思召
に叶うものと見え時々神様が表われたの火の玉が見えたのと云うのである。
此う云う風に根が一体素直であるから人はお婆さんを馬鹿にするけれども憎むものは一
人もない。皆なお婆さん／＼と可愛がられている。これがお婆さんの徳である。
御神楽歌に
三にさんざいこゝろをさだめ
と云うことは何も知恵迄三歳児の知恵に帰れと云うことではない。又た帰れと云つても帰
れることではない。ただ三歳児の様に邪念なき天真爛漫な心にならなければならない。
お婆さんはこれを例えて云えば蕾の俛で花も咲かず実も結ばないで一生を果てる憐れな
女である。けれども吾人はお婆さんより学ぶべき所も亦少くない。
其れは其の愚や学ぶべからず其の三歳児の心や大いに学ぶべし
と云うことである。其れで編集室の余白を一寸汚した次第である。
これは別問題であるが近頃本部に於て大分矢ヶ間敷かった本部の青年福井氏の処分問題
も漸く解決がついた。
これには大分込み入った事情があるが要点を摘んで見ると本部には彼の様な雛型もある
のにわざわざ本部以外の人間（井出クニ子）を崇拜し天理教を捨てて邪教に心を寄せたと
云うことは本部の青年として許すべからざることである。此の際断然二心を捨てて本部に
謝罪するか其れでなければ本部の青年を免職させるからと云うのである。
これについて井出クニ子の人格も認めず本部を免職せらるれば生涯口が上ると思ってい
る所謂本部党の親戚身内が寄つてたかつて福井氏に謝罪を迫つたけれども福井氏は
「自分は少しも悪いことをした覚えがない。もし本部で私が播州の親様の所へ行くのが悪
いと云うなら免職でも何んでもさせたが良い」
と云つて頑として応じなかった。
其れでも親戚や身内のものはなおも本部に未練を残して免職せらるれば生涯本部に入る
ことは出来ないから今の中に辞職をして置けとすゝめた。何処迄も清廉潔白なる福井氏は
自分に辞職する理由はないと云つて頑として応じなかった。其れで遂に今回の結果を見る
に至つたのである。吾人は福井氏の何処迄も正を取って下らざる勇気を賞讃すると共に本
部にとって前途有望の一青年を失つたのを悲しむのである。なおこれに就ては色々云いた
いこともあるが其の日の来る迄黙つて何事も語るまい。
今月号には神殿の景を掲載したが読者はこれに依つて天理で云う真の普請とは何をさし
て云つたものであるかと云う暗示を受取られる筈である。
なお八月号よりは時間と労力との許す限り自分のこれ迄研究した材料に依つて新たに教
祖伝を起草したい心算であるがこれは其の時にならなければならないことはわからない。

明治四十年飯降御本席最後の御指図

今日の御神殿のなるには此う云う御指図に基いて出来たのである。然るに今日の天理教徒は此の有形神殿の成るやスツカリ精神上の普請を忘れてしまった。これが今日の天理教墮落の原因である。

明治四十年五月八日旧三月廿六日夜十二時過夜前刻限に屋敷の東西南北何間何尺計れとの事でありますから今朝間数計両閣下へ申上候処仰せには大図引けとの事故奥村へ申付てあるますがな御身の上速かなりませんのは何にかに御聞せ下さる事ありますか教長様始め一同揃うて居りますと申上

ウ……………

サア／＼ウ……………

サア／＼なああら／＼の話取り極りもふ地割しる要になつたらこれで十分である。又何う云ふものが身上とかなあこれも一ツ思にやならん。此の度皆々正月から此地らへズウト其の日／＼たゝかふで何ふでも此ふでも是日戦ふて来た。身上切なみある。何の事も知らし置いたるか

サア／＼何うでもマアこれから／＼一ツ始め掛けたなれど一時に此ふと云ふて行くものやない。他に一ツ中に又一ツもふ此ふしたら神の思はく神の屋敷神の世界これからとつて何処か神間になると云ふたらハイ／＼これを此ふ直せと云ふたらハイ／＼

サア／＼心に無理な事チヨツとも云はせん。永へて／＼古い事から山々の話伝えてある。あら／＼分かりたる何うでも一ツ今生シキリつからシキリ道何うでも此ふでも増さにやならん。これ皆承知して居てくれてあるやろふ。道は半端で何うもならん。余儀なく一ツこれは第一何うも話すに話せんで歸りてしまふなれど付け掛けた道の事である。何処から何処へ世界中はズート皆々全国は皆何時の事やろふと思ふて居た。隅から隅迄ついてあるであろふ。マア／＼何ふなろふか知らん。彼地らへ隠くれ。此地らへ逃げ彼地ら此地ら追い回され話し通りや程にマア何んにも案じる事要らん確つかり心に治めいよ／＼。廿六日夜定まつたといふこいを打ち揃ふて何うぞ／＼

サア／＼何うか／＼皆これだけ寄って居るもの。此処が此ふと云ふは神も充分の望み思はく。又たこれと云ふは答へるがよい

押して分りまして御座りますと申し上ぐ

サア／＼其んなら話し通りサア／＼話通りサア／＼もふ何も案じる事要らん。皆な水盛がしてあるできん事せいと無理事一つも云はせん

明治四十年五月九日旧三月廿七日朝五時半夜前の御指図続刻限

図面引いてくれ／＼まして引くねて／＼一遍や二遍や三遍ではいかんで。三年の間にチヤント極るで些細な事なら直に出来る。中々此度のはチヨトにはいかん。三年かゝつてするのやで。三年掛つて用木のお供すれば職人の音もするで。これからは全る三年掛つてくれ急いではいかん／＼

図面引かけてもチヨトにいかん。此ふして話し掛けたら無理な事せいとは云はん。心配は要らん。心配は一つも要らん。

サア十分彼地らからも人や此地らからも人やがな此地らも大きな声するで。今日から三年の模様である

サア／＼安心／＼安心せい。サア／＼れで道はつうとこふして綺麗なもの其ふした処席がまたやまたや此ふして席は席だけの事ある。これもチヨトつき／＼つき事模様も出来かけたるつきで／＼これもチヨト／＼なあ／＼其処までとねになつたで案じる事要らん／＼

サア／＼これだけ買ふて今日一日咄しする心をきのふ運んでくれにやならんでこれだけ楽しんで置く／＼

明治四十年五月十七日旧四月六日午前三時半同十二時頃より本席様御身上御障りの処三時に至り俄に激しく相成り教長様始め一同打揃ふて居ますが何か御聞かせ下さることが有ますか御願

ウ…一—さあ—／＼／＼／＼／＼ウ……………さあ／＼毎夜／＼の咄毎夜／＼の咄かけ一
条／＼さあ／＼もふこれ一寸一回は一寸一回話すむすばにやならふまい。一寸一回まあ

／＼さあ／＼前々より指図紋形ない処六ヶ敷い一寸印打つたるだん／＼の咄も運びどれだ
け何ふ此れだけこふ皆々だんじ合ひ一回のはじめとして一つ理始め掛けいつ／＼までまつ
ていたぶんにや何ふもならんさあ／＼もふ話といふものは一度より二度二度より三度の理
重れば咄はつくやろふいつ／＼まで此ふしていたぶんにや席は何ふもならん昼は昼といふ
てはたらく十分身も使ふ時々其れ／＼の理も運ぶこれでは何ふも遅れる。其処で今晚此咄
台として一回もふけて見るがよいよいよ考へ付かんといふ処又尋れば咄しせにやなら
ん。其処までの咄悟した十分の理悟るであろふ。

暫時して

サア／＼もふ一声／＼聞かして置くによつて何ふでもこれ大もふの事仮家といへど大も
ふの処そこではよふからよふいせにやならん心と云ふものジツとおちつけてかゝれば危気
はない。俄かに掛れば十分の事出来ん。十分と云ふは前からするが十分。そこで一回もふ
けてあら／＼の話しきまつてくれいく度やつても心得んといへば尋ねるがよい。此迄は一
つ働らかになろふまい

サア／＼／＼／＼／＼／＼長ひ／＼長ひ年間の中もふどふもならんから身をかくれたのやづ
うとかくれたのや。ない／＼かくれたなであろふまい。前々より古き咄と伝へ古き事も分
りて有やろふ。何様の中の咄サア／＼皆な良ふ思案をしてかゝれば危ない事はない。影は
見へぬけれども働らきの理は見へてある。これは誰の言葉と思ふやない。廿年以前にかく
れたものやで。なれど日々働いてある。案じる事要らんで。勇んで掛れば十分働らく。心
配掛けるのやない程に／＼

サア／＼もふ十分の道がある程に／＼

明治四十年五月二十日旧四月九日午前一時より御本席様御身上御障り激しきに付教
長様始め一同出席後三時二十分刻限の御諭し

ハ……………

サア／＼／＼／＼／＼ウ……………

サア／＼今晚／＼サア／＼今晚／＼の咄中になひ身のせつなみだん／＼話し掛ける／＼
サア／＼なあやう／＼サア／＼やう／＼サア／＼永へて／＼の道すがら／＼サア／＼道す
がら／＼何ふ云ふ事も道すがらで通り来たるばかりや昔の咄やあるふまい。遠い話やある
ふまい。皆心におさめて通りて来る長い年間／＼サア／＼処々へ皆な印を打つたる。印で
きたる。サア／＼印から段々日々にこれ一枚／＼の本をくるよふになつたるこれ何ふ事と
思ふ。二十五六年前後の年限思案をして見よ。何地らにも此地らにもなんにもなかつたで
あろふ。サア／＼ほつと心に思ひ／＼し理これから心に始めこれ長い年限の中である。
遠き処にも印あるふ。

サア／＼マア思案半／＼／＼である。まだ／＼思案半である。一つ事を見分けてくれに
やならん見分け聞き分けする中に又一つには台ともならにやならん。サア／＼今晚と云ふ
今晚実を定めてくれ実を定めて心を始めウ……………もふこれぜん／＼よりしかけ
た話何ふでも仕遂げにやならん

サア／＼三年／＼と云ひかけたる理何ふでも此ふでもやつてくれ／＼何んでもやつてく
れにやならんサア／＼あら／＼の取り極りあら／＼の場所さしわたしの所何んぼふ／＼何
れだけ分つてある。よふ／＼会議一遍の会議もうけた処攫まい所ない捕らまい所まい。会
議一会二会三会の会議では何ふもならん。此ふして付け掛けた道の理や細い道にした処が
付けてある。其処で一つ仮屋だち年限六ヶ敷いと思ふやない。会議も引続き三回四回五六
回の会議ももふけて見よ。此の位のものもつて居たら映るか。此の位のものもつて居たら
似合うかこれわかるやろふ。其処で道の理といふ処の会議とげにやならん。これ台として
たち屋一条計りだすとこのくらひのもの何ふどこから何処迄何間はつちやない。何処から何
処までとつたら何間はつちやないと云ふ処をはかり見よ。邪魔になるものはとつてしま
へ。をいてよいものは其の俣何うでやりかけたら一度や二度や三度で治まる事でけやせ
ん。サア／＼これしんとする。しんが知らしたる。しんの台動かすにも動かさせん。何
地らからでも踏んばつたるこれは何間何尺ある。これだけ除けたらなんぼふしかない。こ
れから地とりして行けばどれからどふなる。此のたゝ一つ此ふ直す。此のたちもの一つ此
ふやる。一つ／＼いふてもろふて出来る事ではつまらん。ドント心を治めんから何処へ何
ふして良いやら方角も分らせん。邪魔になる立ち屋取り除け其れから心を定め立ち屋だけ
は十分地所ある。これから地取りすれば出来るやろふ。

サア／＼皆々良ふ聞き分けにやならん。最初のかゝりも同じ事や紋型ない処から出来て
来る。又一つ／＼心で通ふり来る。皆これよふ思案して見よ。よふ／＼近づいたる。だん

／＼の悟しかけたる一条六ヶ敷いと思ふやない。何も案じる事要らん。成るものと出来るものと思案定めて見よ。もふ十分／＼十分の理に悟してあるで。ばかな事や。

恐れ入りますが御願ひ申し上げるや否や

もふ良い／＼／＼分つてある／＼。身も苦るしからふ／＼。身を助ける心になれ。何ふでももふ叶はん／＼と云ふ処二度三度通したる。何んでも彼でも此度は台になつてくれ。身の処案じる事要らん。身上のせつなみもふ二三日であるなれど面々から出りや仕様がなないで。何ふなるとも分らん。必らず出るのやない／＼。其処で居座れ／＼。何時迄も居座らにやならん。これより楽しみはありやしよふまい。

明治四十年五月廿一日午前二時半旧四月十日刻限咄し

ウー

サア／＼／＼／＼ウー

サア／＼／＼／＼又々今晚／＼又々今晚ウー

サア／＼何ふ云ふ話しかけるなら前々古い／＼／＼咄し今一時の処理一つ何も順序から悟さにやならん／＼。皆々寄り合ふた中である。古き事ほのかから一つ咄しかけた。今一時何ふ云ふ事何ふ云ふ事ならしゆんと云ふ。しゆんが来たから皆な待ちかねて楽しんでくれにやならん。二十年後と云へばこれだけの事見へてあつたのやなれど目には見へなかつた。しゆんを外さずしてくれな外してはならん。しゆんを外しては出来やせん。今の事此ふアーあー此一楽しいなあ楽しいなと日々所通り呉れにやならん。二十年以前見へてあつたなれど目に見へなかつた、一時は何ふしよふや知らんと思ふたなあさあ／＼／＼二十年／＼前の事心に思て楽しんでくれ。目に見へて来たこれより楽しみはありやしよふまい／＼。

サア／＼つくで／＼つみきりたる順序をくりて来た。其うと云ふたら此ふ。此ふと云ふたら其りや。サアと云ふたらあすこにある。此ふ云ふたら彼しこにある。これは心に止める事出来よふまいなれど順序の理通り一つ治めてくれ。咄の通りにさいすれば案じる事要らん。これだけ又一つ今晚の順序に悟し置こふ。

暫時して

サア／＼もふ一声／＼これまあ順序から諭する。マア／＼これまでの始まりも同じ事小さい事から云いかける。皆な唯此の道と云ふは始まりは四十五六年以前のもとは一坪から始めかけた。これが一つの始まり。其の一坪からかゝりて此ふといふ神が上に一つ咄し神が一つこたへば人間がはなす。人間がこたへば神が話す。これは古い筆先にもチヨト知らしたる。一坪から始まり一坪位何んでもないと云ふやろふ。かゝりはそんなもの。其れを引き受けると云ふたものは席が云ふた。皆な其の心になれ。一坪から始めかゝりいふて来てできた難儀の道も通り、何んな道も通り難儀の道から出来て来たる皆な処々一つ／＼の印できた。これ何処と云ふもの此ふと云ふもの一つもなかつたものほのかほのか／＼といふ二十五六年前より通り来る彼地ら此地ら其の中に又一つ苦労の道あつた。其りや云ふ迄やない。皆心に保つて来たる。これから大き積もれば一つあら／＼心に治めるよふ。何間何尺心につもつて居て見よ。普請のかゝりは小さいければ大きする。大きければ小さいふする。低くければ高くする。高ければ低くふする。一つの苦労もせにやならん。皆々承知して呉れるよふ／＼承知してくれたら何んな事もできる／＼。

明治四十年五月三十日旧四月十九日午後十時御本席様御身上又々激しく相成刻限御さとし

ウー ウー

サア／＼／＼／＼／＼続き／＼サア／＼前日の続きウー

サア／＼一寸一枚二枚三枚其れ／＼一寸図面始めかけ一寸一言此処なあ何処なあサア／＼一つ印できたる

三年の内にしよふか今の内にしよふか。今の内にしよふ。三年の内にする方がよかるるか。今の内にする方が良からうか。三年の内にしよふ。其れではたよりない。

何うか出来るだけの道はつけてある。ならんと云ふ其りやあるふまい。まだ一段の所仮屋と云ふたる。此度はまだ年限先々の年限今と云ふ心になれば何んな事も随分出来る。

サア／＼始めかけたなあ／＼たつぷりたつぷりやで

サア／＼西と東ずうとすつすぐに／＼づうと
サア／＼彼地らのふそくとりこみ／＼此地らのふそくとりこみ／＼真直／＼大望の事や
なれど長い年限の間先の年限今と云ふ心になれば何んな事も出来る。
サア／＼教会と云ふて立ち屋はじめかけたる今の有り形の様なもの。本の美しいなつて
ほんまと云ふたら甘露台はすうかりあまうたしのもものや。其ふ云ふた処が一時にはいか
ん。まとまる心かゝりかけたら心何時迄も確いかり結んでくれ。
一坪四方と云ふは前々にも咄したる。一坪四方からできて来た。南北何間、西東何ぼ
ふ。一寸いかんが人数にたとへて見よ。二軒三軒の家内程はちやなかつたもの。今は何ん
でもないやろふと云ふたら其れだけの事やらにやならん。今はもふすこし道もついたるや
ろふと云ふ精神さへもつたなら出来る。これだけと云ふ何間何尺定め 此ふした処教長
真柱すみかあら／＼の地面引きかけて其れから又事情。

まあすぐと云ふ処運ばして戴きますから御本席様御身上助けて戴きたいと御願

サア／＼もふ席は日々不自由して居る。耐へられん処一寸見たらづつなそふに見へる。
心と云ふものドント定まつたるに依つてはたから案じてくれてはいかん。何んな事ができ
たて神と云ふものは何処へもいかせん。

御本席様の御身上如何様にも運ばして頂きますから身上の処踏ん張つて被下度と御
願

サア／＼あら／＼これでとゆふ処ついたなら身上の処もこれでとゆふ様になるで

暫時して

又凶面其処へ／＼ひいてをつとりこれだけ／＼じよぎ定まつたらかりじよぎ定めてく
れ。何ふせん事にはいかん。一寸大層／＼。最初かゝりから四十四五年此の事見れば今は
勇んで飛び上つてする様なもの一寸困難／＼の筈や人が知らんから困難／＼の道なくば其
時見て先になつたら此ふなる。何処から何処まで
これだけなあ／＼追々にできたる。其の時から咄しある往還の道や。秋しもふたら楽し
んで此の秋やらふか／＼秋を合図に出て来るもふやろふか何ふやらふかゆい／＼ついて来
たるは今の道や。これさへ忘れねば案じる事要らん。良ふ聞き分けて勇んでくれ／＼勇ん
でかゝれば神が勇む。神が勇めば何処までも世界勇ます。

四十年五月三十日旧四月十九日午後三時御本席御身上嚴敷せまり刻限の御咄し。

ウー

サア／＼／＼／＼／＼

ウー

サア／＼なあ話しかけたら／＼／＼かりや一条／＼／＼何んで一日の日になつてから急
ぐ急がにやならん。日がでゝくる／＼／＼かやして／＼くどふ／＼／＼諭すに依つて必ず
あしと思ふてくれな／＼長い年限の中にもいかなる事ある。きよの日待ち兼ね／＼。

サアもふこれでなら得心やろ／＼ウ……

サア何から何迄でけてある／＼でけてあるで。

サア／＼／＼なあウ……さあ／＼此ふしてどん／＼話ししてる間は何も知らん／＼心抜
いてしもて神の心と入れかへて神が入込んでどん／＼話する。席の心何も知らん。神がじ
いと引く又身上が迫る何ふであらふ／＼／＼話通り纏ろか／＼と思ふ／＼心此の心ならん
事情其ふでなけにやならん／＼其ふでなけにやなるふまい／＼

サア／＼段々此ふして身上長らくなれば何ふもなあと思ふは無理やない／＼辛棒せへ
／＼。辛棒せへ踏ん張れ／＼踏ん張れ。

段々運ばして頂きますから御身上速か御なほり被下度事願ひますと平野氏より申上

サア／＼もふ話十分伝へたるよつてをそなつてもでけるに決したるかゝつてくれ／＼何
ふ云ふ事ある。此ふ云ふ事ある。中にでけるは不思議である程に。

明治四十年五月三十日旧四月十九日午前十二時半

御本席様中食膳の時身上御障り俄に激敷相成教長様始め一同出席直に刻限の御咄さ

とし

ウ.....

サア／＼／＼皆揃ふているな／＼サア／＼外々の事やない。一時／＼さとし置いたる処
順序の道を確認つかり聞きとつてくれ。

サア／＼何ふでチヨツトにいかん。チヨツトにいかんが心で今はいかん。なほいかんなれ
ど何ふでも精神と云ふ道なくばならん。皆な精神からできて来る。此の道もと草生えの中
からいへばしんどうの仕損と云ふは教祖や。何も楽しみなしに一日の日の遊山もせず
に此うしたはしんどうの仕損なれど、「年限の間に外の様
に説いたる事が今の処にチヨツト見
いてある。皆なかゝりといふはふは／＼したるものなれど年限追て組み上げた
るこれから見れば案じは一つもない。心の案じあつてはならん。今日の日待ち兼ねて／＼せにやなら
ん。話ある。身上迫れば何んでももふ何んとか話聞ける話があるふか何ふした
ものや思ひ／＼でまつて居るやうではならん。皆せつと云ふ。

面々此りや何うや彼りや此ふやどどのつまり尋ねてでるが良い。其処でチヨツト今日は何
んでも諭さにやならん。三枚五枚の絵図引かけ／＼せつから皆々考を付け三枚五枚引かけ
其処で何ふせへ此処は此ふせへと確つかりした指図に及ぶ。

此せつ／＼此せつ／＼とせつの図面引て見よ／＼。

サア／＼何ふじや／＼

何んでもない事や。思へば心寄せる引たからとてむだと云ふではない。此のせつなみの
程余程こたへるで。

サア／＼其ふしてあら／＼の図面三枚五枚の中からこれどふ彼れ此ふと此れから一つ纏
まる。又一つ絵図又引三ヶ年と云ふ其処からまだ思案ある。何ふするやろふと思ふちやん
としゆつたいのなる中まで皆思案の中からできてくるのやで。

サア／＼マア／＼引て見よ／＼引かにや分らん。なんぼう／＼何間何尺といへばよいよ
ふなもの。皆々の心寄せてつゝまつた処一日の日や。これだけ聞き分けてくれにやなら
ん。

押せ教祖様の処は東むきで有ますかと申上

サア／＼なあむきたちやの高さ何れだけのものといふ処一時諭し悪ひ。大半此ふして何
ふして三年四年のせつを立てゝ見るがよい。其処から一つの指図をするによつて。

暫時して

サア／＼／＼／＼

サア／＼なあさあ／＼一日の日を待つて諭しかけたる／＼かへ／＼諭しかけたる大半
／＼の処当分の内に早く／＼取り締り／＼。あら／＼の取り締りて置かにやならん。もふ
からかけたら其れから急がし忙しい。何ふでも此ふでも忙しいてならん。一時放つて置け
んによつてこれだけの図面引たら直ぐにもつて来るが良い。

明治四十年五月三十一日旧四月廿日午前〇時半御本席様又々身上せまり一同出席の
上前々

御指図読み上げの後の刻限御指図

此んな事しては何むならん。何時までも此んな事ではならんが何むならん。

こんどもふなあ／＼ウー

サア／＼もふ一言とめる。一言だんじ。皆かゝる様話して置く。サア／＼荒々の処屋敷
取り極まつた。あら／＼たちやもふ一頻りあら／＼づめん治つたるこんどこれだけとい
ふ。而して月並祭と云ふたら中に又歸つたるものに何ふ此ふの話も聞かしてやつて呉れ。
皆々の処の中其ふしてあと又遠く処談示せにやならん咄しもせにやならん遠い所何ふであ
るふとまつている処もあるによつて其れ／＼一だん一しきり皆の中に見立てゝあるから人
は一人二人又ふやし其れは何時と云ふ限りなしに取り締つて居る処チヨイ／＼運んでやつ
て呉れ。これが一しまりとめの話であるで。これ皆談示の理に治まる。何よの事も分らん
心もつて運んでやつて呉れる様

明治四十年五月三十一日旧四月廿日午前六時

御本席様御身上激敷苦勞につき教長公初め本部員一同出席の上刻限の御諭し

ウー一
サア／＼／＼一寸咄し／＼／＼
サア／＼何ふ云ふ続きかと思ふ一条普請かりやたちあら／＼伝へしきりと云ふたる。又
一つと云ふ何ふ云ふ事と思ふ。身上あすがなあ／＼と思ふ尚もなあとこりやをもう。
サア／＼此れも身のなやんでいる処／＼一寸もなあもふ永へての中よぎのふより何ふな
ろふと思う処明らか悟とすによつて身上の安心をさしてくれ／＼
ウ……………
サア／＼何ふでもこたへもする事でけず何ふ云ふ事ならづーから伝へて一つり何ふ云ふ
事なら順序早く一つ知らしてくれ世界の事まで道はかつて一々身のせつなみの処世界の処
これだけ悟したらわかるやろふ
手に一つ運んで此ふやと云ふ事を何うやと云ふ事も運んで満足さあ／＼もふ一時早ふし
て満足を与へてくれにやならん。よふ考へて見よ干に一つ運んで此の俣では何うもなあ尚
もなあ

医者 of 処と申上

さあ／＼早ふ／＼早いが良いで／＼早ふ呼びにやれ／＼

暫時して

さあ／＼此処とりのけ／＼

好村の外にもふ一人と云ふ処申上

さあ／＼せんにかゝりがあるに依つて其れを呼んで一人でいかにやそのものゝ心にあ
る。此の数多い中に其んな事まで尋ねて何ふするか息といふもの引く息吐く息戦の中終に
なつたら其の俣しまいやがなあ。
あまりながいのもふ退屈しているに依つて退屈せんよふ満足与へてやつてくれ何ふで
も満足より日をとる処ない。
さあ／＼万事取り計ふてくれるよふ／＼さあ指図の順序悪いに依つて小頸を傾げる心に
何も必らず小頸傾げるやないこれまでくどい／＼の咄し伝へたる長い年限の間ほのかに聞
いて居る事便りにして実をわかればそれより思う事ない。其れより頼りあるまい。これだ
け一つ忘れるなよふ／＼まだ／＼語りたい事ある。云いたい事あるなれども何ふもつまり
きつて／＼何ふもならん。言葉下しよふない。なれどこれだけこのくらいになつてゆわん
ならん事ある／＼。何程あるもわからん。これ暫時の処何かの処あら／＼道つけたる。そ
ふしたらつく皆のもの其地らも此地らも待つている／＼待つている処これもはや／＼
さあ／＼ふしんとゆふはかりや。かりやにかりやによつてかりやのつもりでかゝつてく
れ。十分と思へばでけんではない。かりやのつもりでかゝつてくれ。一寸一ことといたる
かんろふだいの場といふ。今はまなびしている地から上へぬけてあるものたちやの中へま
なびさしたるかんろふだいは雨うけのものこのはなしきいているものもあれば一寸もきか
んものもある。一寸筆の中へ組んで置かにやならん。そふやさかいにかりやふしんかりや
ふしんといふ。

明治四十年六月三日旧四月三日

午前一時より御本席様御身上御障りの処午前四時に至り御苦痛激しく相成教長様始
め宿直
役員一同出席後四時半刻限御諭し

ウ……………

ウ……………

さあ／＼ウ……………

さあ／＼二十年祭とゆふ話始める二十年祭二十年の間三十年祭三十年の間三十年祭何れ
も同じ事である／＼云ふた処後は年よりないしもふこれであら／＼に又できるこれであん
しんをしてくれ／＼

甘露台の方は四方面とゆふ事きかして頂き居りますが北の上段の間は人間でわか
りませ
んから何ふ云ふ事に成りますか御願

もうかりやだてと云ふ台を出したる一つしんは動かす事できん。あと、ゆふこなして後の処きまつたたちやまた将来の図面引く事もできん又はなしもできん。一つたてかたちがふによつてこれまた、いかんチヨトにはいかん。それは一つ理に背くによつてとらんほふがよい。チヨトもとらんほがよい。今あらためただけどふでもできる何にも心配は要らん。心配は一つも要らん

恐入ますが上段の間とゆふ事申上

まあ、高ふ、ゆふけど高ふはいらん通常には高ふせんならん。高ふつみあげでもよひ、積上てはいかんさあかりやと云ふても本普請しよつたなあと世界では云ふも道理や

上段の間ろく地にさして頂ました物でありますか

まあ今の処たちもの甘露台はしん大き広くはいらんつとめさいできりやそれでよい。一人のものでも上へ、あげてまんぞくさしてやれ。上に広ふとつてすぽつとしてあつてはいかん下の方をせぼをせではどふもならん上の方は広くはいらん

北の上段の間順をくりにさして頂きましたものか外でも祭らして頂きますものか御願

さあ其れは何ふなとゆいよふにしてをけ。かんろふ台とゆふは調子のちがはんよふにしてをけ。あれが台であれから始まつたものや。

明治四十年六月四日旧四月廿四日午後十一時御本席様御身上御障りに付教長様始め宿直役員一同出席後十二時刻限御さとし

ウ……………

さあ、ウ……………さあ、けふ一日の日なあたのもし、あれもできたこれもできた出来たといふ事でこれといふてしきつた事何もみゑよふまい。又一つみな、かへるかへつたものにはなしする咄しするは西も東も北も南も一寸もちがはぬよふすみからすみまでは方一寸もちがわぬよふ順序の理さとしてくれ。それからかゝるなら日々たのもしい。これだけすつきり話してをかにやならん。あちら何ふやこちらどうやと話し、仰、ではひまがいつて何ふもならん其処で云ふた話し一つと云ふたら一つ二つといふたら二つ三つといふたら三つ一つ理これ一寸もちがわぬよふ順序はかるなら日々頼もしい。八方広がる。何んなものもゆたか、日々思ふていたなあ、何処で何ふいふともなくしてみなゆふよふになる。其ふしたら一列に何ふ云ふ事できてくるともわからん。これをみへんさきからいふてをく。これまでみへぬさきゆふて置いた事見ゑて来たるやろふこれ話しのとめにしてをくぜん、くどふ、いふてをいたる八方から心一つによせるは第一てんのりであるでこれたのむから話した事をさめよふきいてをいてくれよ。しつかりといひつけてくれよ。ウ……………

明治四十年六月五日旧四月廿五日午前一時より御本席様御身上障り激しきに付教長様始め宿直役員一統出席の上刻限の御諭し

ウ……………ウ……………

さあ、どうウ……………さあ、さあ、とふてそれはゑらひ、十年を百日にならぶ日ではなし止めてしまふ。十年かゝる話百日でとどめてしまふ話。つどまる話。よほいでいかん。十年の働き百日でさした日これからみてなにかの事みな、心にをさめて奮発せにやならむ。これをくどう、に頼み置く。さあ、もふあんしんをしてくれ。これまで長らへての中内々の中の事上とんと何ふもならんだなれどをさめた理の中から治めてしまふた。もふこれからといふは何ふでもこふでも治めた理十分に治まつてくる。是れが誠の神の道であろふ。これだけ言葉の話に残し置かにやならん。さあ、重々に伝えて来た話何から何まで伝えてしまふ。これからの伝へは順序の楽しみをわす処一時よほいではいかん。それはチヨトにはいかん。これだけ何にかの処通り

にくひ処ある。つけかけたる道はながらへての事はない。つい／＼に結んである。何ふでもこふでも又一つ事上どちらから何ふせんこちらからこふせん。今日はチヨトしておく。今日はおまいでくれ。そふしたらかたいものやながらくの道は日もおくれきたるから何にかの処心配もせにやならん。どふであろふこふであろふとほそ／＼話せにやならん。順序の遅れて来る処これ委しく咄しておく。これで一時順序すつきりとめてをいて置く。

明治四十年六月五日旧四月二十五日午後十時廿分
御本席御身上苦痛又々激しく相成教長閣下始め本部員一同出頭後教長公へ御問答

ウ……………

さあ／＼一寸こへ尋る。こんどはさとすやない。尋ねるのや此間中よりだん／＼のへんぢ／＼つみきつてある。これですみやなるかならんか皆これで一つの心になつて居るか。

教長公より皆一つの心になつておりますと答

けつこふ／＼其んなら皆の処へ伝へるか

教長公より民々へ伝へる事になつておりますと答

そんなら其ふか其んならそふ

暫時して

さあ／＼其ふした処で又咄もふ一つする。是何ふでもせいでかゝらにやならん。もふ毎日／＼こふ云ふ事では何ふも日々けふで四日五日といふものはスツキリやすんで居る。是が第一ひとつどふもならん。話しかけるにも元をいさんでかゝらねば其処で通常席が身の障りと云ふ。何ふ云ふ事一時の心にうけとるものもあれば受取れんものもある。其れでは何ふもならん。中々と云ふ中にあんじと云ふものせにやならん。さああすは月の祭典さいてんあすあさ早天席はこぼす。こふして一つはなしをかゝれば席がいついつ席がなかつた其ふ云ふもの道のしんぱいはこゝにある。さあいささかにてもつなぐで。あすは早天にだすがよい

教長公よりそれでは有難う御座ります御請あり。
同四十年六月五日旧四月廿五日午後二時刻限

さあ／＼／＼／＼さあ／＼またそろ／＼同じ事を／＼今度と云ふ今度はもふなか／＼の思わく十分りまとまつたるまとまつたるによつてもふ咄しかける／＼ぜん／＼同じ事かへしてある。これが第一あちらでどふ此地らでこふ言葉と云ふりがかつては何ふもならん。其処で言葉の理まとまる。さきさきのさきのさきまで定まつたる言葉こんが第一の宝やで。宝までさとしたる処これやりとげにやならん。処々はしばし一つの宝がわかつたとこれだけどふ／＼いふておく。偉いものやと世界から一つこんどはさとし一つのりて心からそなへてくれる日があるによつて確つかりと聞きとつてくれ。さあ／＼日々もふ此の苦るしい中から何ふでもしん一つ心の事情からみな／＼の心に一つ理うつしてくれにやならん事である。これをよふとりそこないあつてはならんからこれをとりそこない様にしてくれ。

恐れ入りますがしんと仰被下処本部員だけ定めたものですかしん柱にはこぼして頂きますと
申上

さあ／＼もふ何ふでも此ふでも理とゆふもの一つである。誠に一つ理十年十年かゝる事を百日にたらずしてまとめるはなほ第一の事、其処で何遍も同じよふな事くどふ／＼かへしてをくのや。ならん事せいとゆふのやない。なるだけの事それからそれへと理がをさまつてくるによつてこれをしつかりきゝとつてをけ。
さあ／＼もふ何から何迄万事の処委細承知したとゆふ処みな揃ふて一言述べに來い／＼

明治四十年六月五日旧四月廿五日午後三時前々御指図に付会議中いよ／＼御身上御

苦痛激

しく相成教長公始め一同出席刻限の御諭し

ウ……………

さあ／＼／＼話／＼話はもふ幾度／＼充分幾度の話つめきつたる。さあみなのものこれだけこふしたら十分であろふ。身上がなあ／＼又候／＼身上がまだ治まん／＼身せつなみ又とふであろふ／＼といふだけでは一足もたれといふ。一つの道理である。一足もたれと云ふたら何ふいふ事にとるかさあ／＼一言さとしは二言にとり二言さとしは三言にとる。其ふすればせつなみの処三日のものなら二日といふ。二日のものなら一日といふ。これを早くきめてくれ／＼もふ日々みなのもの何ふであろふか／＼もふかいなあ／＼といふてあちらこちらこふしたるこれが気にかゝる／＼。月々そこでこれなら大半こふといふ処定めさしづのふてもあつてもふてもこふと定規を定めてくれ／＼つかれきつてしまふたら容易やないで／＼さあ／＼早ふ／＼

別席の方も普請の方も大凡極りもつき尚種々と御指図の上より教長様の方へ相談に伺ふ会

議を致し居りましたが御身上の程も烈しいので伺ひました次第で有ますが御身上御苦痛の

処暫時御猶予被下度御願申上

おびき後教長公に向ふて小音にて

けふで三日やどふもならん／＼ねる事でけんのどがつゞかん／＼

教長公より何ふもおこまり被下れますなあ

もふ其れでも暫時は踏ん張つて貰らわにやならんなあ／＼どふやろふかのふ

教長公よりそふですとも踏ん張つて貰らわにやいきません

こんどはまつた／＼とふでもこふでもちつと踏ん張らさにやいかんで／＼何んなくさりもつけつけ一年二年三年たつたらひとりできてくるしるしうつたる

いかんじやない／＼何ふもこまる。それさへこしたらそりや何ふでもなる。何も案じる事いらん。

教長公より是非御踏ん張りの程願ひます。続て一同より同音にて申上

手を打つて御喜びの上御言葉

さあ／＼これや／＼結構／＼アオーイカハ―やれ／＼うれし／＼

明治四十年六月五日旧正月廿五日御本席様御身上昨夜より苦痛不正に付教長公初め一同大

神様へ御用の間々身上御らくに成し下されと祈願して御本席様の前へ出席の後午前八時半

刻限の御諭し

ウ……………

さあ／＼／＼／＼ウ……さあ／＼もふ一こと／＼ウ……さあ／＼もふ一言云ふは何ふ云ふ事と云ふ。サア／＼誰れにも云はず彼にも云はず皆ななあ中の中であつて一つ事上をふいにこんなの場合／＼ゆふは何ふ云ふ事である。をもふ中の道がつかん／＼さあ／＼／＼のち／＼ぜん／＼一つ事上に一寸尋ねる事上であつてさとしたる処もある一寸の事情にいかんと云ふたる中に一つ事上これだけの事何ふ云ふ事である。大半何ふであろふ。皆な思ふている。をもふているはづや。これもあざやか／＼の話つける。あざやか／＼事情つけるなあさあ／＼一つ別段に何ふ此ふと心をあらだてるやないで。心あらだてゝはいかん。何ふでも此ふでもひそかにして心をなためあらだてるやない。道は今大事の処である。

暫時して

さあ／＼何にもかもの話一条事上でかけたら何ふでも此ふでも治めにやならんならんで

こふなるかでこふなる。この心は一つももつのやない。何ふでも道と云ふ理から心を定め
てくれ／＼皆な彼地ら此地らみな一つの中である。ほつと思ふなにと思ふ心では何ふもな
らん。其ふ云ふ心ではいかん。この半ばに一つ事情を治めてくれにやならん。そふ／＼の
中であるによつてほつと思ふ心はちがう。一つ事中の一つをもひの理をはらしてやつてく
れよ。

わかりまして御座ります此事充分はこばして頂きますと申上

さあ／＼何時何ふ云ふ咄しするとともにわからん。其処で身上もふやろふが／＼なれど何ふ
もいかん。身上速かなれば五つのもの二つはつちやまとまらん。それでは何ふもならん其
処で身の障りからすれば何ふでもなんでもみなをもふて心といふもの一時にはこぶから万
事運びの理でゝきてくるのや

又これをことばの中にだん／＼身上がこれではとにんにとつては心とゆふものわすれよ
ふにもわすれられやせん。きのふよりきよ又一つあるいてみればあるきよふなあどふも
日々の心いさむ処やない。心いづんで何ふもならん。これも一寸はなしせにやならん。な
か／＼の年限である年である。若きものとはちがうによつてその心で順序みてやしないと
ゆふものはこんでやつてくれにやならん。一つかたづけば一つ二つ片付けば二つ身上かる
き／＼やぶんなあやぶんいさめばよい。席順序の上はにんの心は何ふでもいづむ。心ばかり
りやもふあすはなあ／＼と思ふ心十分満足をあたへてやつてくれよ／＼。

明治四十年六月六日旧四月廿六日午後十時

御本席様御身上苦痛激しくに付教長公御出席下され一同付添ふ。

教長公より御苦しふ御座りますかと申上下され

御本席様より御苦勞様で御座ります

席はんぱと思ふな介錯してやつてくれ。(奈良糸様のこと)明日朝席は一席位運ばして
くれ。とふふんはぶさいくのものや。半期位の事や。今日の型通りにして明日朝九人運ば
してそれを運べたら又三人五人ふやして二席位にして運ばしてくれ。事情の処は願通りす
みやか許るすと云はるればよい。あとはそれでいゝ／＼

わしも食事たべられんので又食べられるよふになつたら運ばして貰らう。食事食べられ
んからそふ思ふてもらわんならん。

今晚それだけや

まことに／＼

教長公初め一同手を御打ち下され
御本席様よりやすんでもろふてくれ

明治四十年六月六日旧四月六日午前四時半

御本席様御身上苦痛激敷

オ……………

何ふも／＼指図はできぬぞよ

ア……………オ……………

同じく五時頃

教長公より何の御知らせ下さる事有ますかと皆々揃ふて居りますからと御願申上

口が語る事できん／＼ウウ……………

御本席様御手にて百日とおかきになり

教長公より皆々心配致して居ますから何か御指図下さる事御座りますなら御聞かせ
下されませ

御本席様御手にて胸を撫で

教長公よりせつなみ御座ますと申上

からお 教長公より御願ひ申ます。眞之助がいくらせつなみを受けましても宜敷御座ります

じいのせつなみの処御助け下され

しんどへわよふ……………
理ははんぱではないでよふ
もふ二ケ年間みにくい
一寸たのしまし一寸ゆうべからじいと
理ははんぱやないで身ははんぱやで
さぶい……………

教長様御身上御撫で下され

なにい……ウ……ウ……ア……………
六時なるウ……ナ……………ウ……………
ウア……ウ……ヤエ……ウ……………
ア……………ア……………

教長公と飯降との御手を御握り遊ばされ

みな／＼よい／＼
偉らかつたわよ一ゑらかつたわよ一
一寸いゝぶくせへ／＼ゑらかつた／＼

御本席様より教長公へ御挨拶被遊それに対し教長公も御挨拶遊ばされました。手を合はせて
下され色々仕方も遊され
教長様より小供の処私引受けて居りますから御安心下されませと申し下されば

御うなづきあそばされ
さづけーてんの順序やで（奈良系様のこと）
手伝やで／＼最初は不細工やで
日々かわりさせるわでとふぶんはぶさへくなものやだん 十分になる。

教長公より奈良系さんに勤めさせるので有ますか

御うなづき下され

教長公より奈良系さん呼取まさんよふと申上下されば

よびとりてもよびとらいでも同じ事やで（と御言葉有）
今日から十分の授けを渡す
詳しい事いらん。あしきはらいのさづけや。今日から十分さづける。あとはせんのかた通りや。

教長公より只今より運ばせるので有ますかと御尋ね下され

よるが始まり／＼よばんでよい
きよはこれにて
ふんばつてきたのふ／＼偉らかつたのふ／＼一同大きに御苦労

と挨拶下されて

かたの荷がゆりたよゝかつた／＼
これで一日の役がすんだなあ／＼
きよはいつ日やなあ

教長公より廿六日と御答へ下され

あはー
あ……………

今日は廿六日や。今日は元始まり一日の日であるで。なれどもふ一寸の処がなあ
あ……………それで又時を転じかへる／＼／＼
今日の日／＼
あは……………

◎手を丸く仕方遊ばされ◎

教長公より三棟の事で御座りますかと

御うなづき下され
何があつてもものふても三棟のものやそれはこふどれはどふと三つに分ける事いらせん。
すんでいるものゝものや。きよふはこれでをく

教長公始め一同へ挨拶下され
教長公初め一同引取り後又出席の上

もふこれでけつこふやあとはもふ一日もふこれはけつこふ
けふ廿六日きつしよふや
十分の満足やあとはひとりでもよい
みな／＼揃ふであは……………
同じ事やによつてなあみないつしよふにこれからは何日むこふになる。これで満足や
不足なしや

明治四十年六月七日旧四月廿七日午前三時大音にて

をい／＼よい／＼そりやいけよふほいけ
よい／＼そりや／＼そうーそりやよい／＼
そりや／＼わふ／＼万世の世界一列

教長様御出席教長様よりつがふ御座ますか

本席様より毎度／＼御苦労さん
もふ一日いたらなあ

教長様より一先踏ん張つて被下様願ひます

本席様より何ふでもこふでもふみとめよふと思へば甘露台へ願ひをかけてくれ御手を合
せられ
神の事してみにやどふもならん

教長様より皆揃ふて願ひ甘露台へ参ります

本席様より一時も早よふ

教長様始め一同甘露台へ御願ひに御出被下。あとにて御言葉。どれ／＼もつとゆ
け。教長
様より只今甘露台へ願ひかけてきました

本席様より「ありがたい」

せへしんありがたふ。よふなつてもどふなつてもありがたふ／＼これで／＼ありがたふ
皆処へもをちなく届けて貰ひたい。何うかもしもの事あればはんぱと思ふやろふ。これ
はせん／＼にも云ふて置いたる百十五才定命二十五年縮めた事思ふてみよ。
今日の運びすんで
今日の運滞りなくすんだら案じる事いらん。

教長様より皆の所へ心配して居りますから一先踏ん張つて被下ますよふ

さあ／＼一年なりとゞ思ふは席の望みであるなれどいつ　までもきりはない。これが
一つ精神皆々精神うけとりている。案じる事いらん。

教長様よりもふ一先踏ん張つて被下度と申上るなれば

さあ／＼もふ一寸／＼
席の事は
ありがたふありがたふ／＼もふこれでけつこふ／＼

明治四十年六月七日旧四月廿七日午前九時
教長様より各分教会長も帰り居りますし本部員一同甘露台へ今夜十時より十二下り
御本勤
め致しまして身上を速になつて被下よふ御願ひ申上ます

それは充分で充分の充分であるがながらへて踏ん張るといふよふにいかんつい／＼の事
上に踏ん張らしたる。そふしてこんどは一日の日否なぢきにでる道になつたつた
席から見ればさいわい五年十年望む処何ふも其ふ云ふ事にチヨトできがたなひ其の心で
いてくれ

どふしよふ少し踏ん張るとした処たしやでやる事できんでこれもいふておく。まあこれ
だけ一点うつてしるしてくれ。後は身が耐えられんからできんといふのや。もふよひから
あつちへいてくれ

明治四十年六月九日旧四月廿九日午前九時
昨日分支教会長普請の事に付会議開き
御本席様の御身上も普請の上から御苦しみ被下事であるから部下教会長一同草鞋の
緒もと
かず一身を粉にしても働をさして頂き、毎月さしよ

一寸ひとこと／＼何ふ云ふ事聞かすなら是まではじまりからだん／＼年限あふてある。
此道皆な思案してみよ。一寸もちがわん十分のみちあたへたる。もふ一としきりの処辛
棒。大抵それ／＼のこれでならと思ふ処理おさまつたる二十年の間うんとかりや普請と云
ふてそれだけのあたへは十分にあたへたる。此んな事かるい事やで。何にも心の心配は一
つも要らん。心の理おさまつたれば案じる事いらん。何ふでもきるとゆふ事これだけ皆な
に聞かして置こふ。これでなけにやいかん。これでなけにやならん。二十年の間ほんの聞
いただけにて目に見ゆる事なしにきた。二十年の間云ふて置いたる事でできたる道のもの
はみな見て知つているやろふ。これだけ一寸知らして置こふ。

みな想像思案なくばならんみな／＼力なくばならむ。此の理皆なしつかり伝えておこ
ふ。

教長公より「有難ござります」（と申上になり）

もふ充分の満足をしている。席は満足をしている／＼又今一時席身上の処さしせまり何
ふであろふ。此ふであろふと困難の中で皆な心を合せ。もふ一度十年何んでもといふはな
か／＼の精神其の精神といふは神の自由用受取りたる精神も皆な案じてくれる事いらん。
とくと心を慎め皆々心勇んでくれ

（終）

千古の教訓

此の一篇は井出クニ子氏が世の人々のために書き示されたる千古の教訓である。人間一切のことは此の内に説き明かされてあるから何人も心を静めて精読玩味しなければならない。（大平生）

井出 クニ子

にんげんみのうちにわなにが一ばんたいせつとおもいなされますか。天よりさづけくだされしまことの玉しいが一のたいせつ。そのたいせつの玉しいおむぎにつかおてわなりません。その玉しいお人さまにあがめてもらおと人さまにわられろとまたわはだ（腹）おたてさそおとそこが玉しいのつかいよを一つであります。その玉たいせつにつかうのにわだいにわうちおたいせつにしてみなのものをよろこばしてまことの心おもてばせかゑの人がそれおみなみてよろこびます。それが天りの一のおこなゑになります。さすればせかいの人が天りはまことのみちやあのうちむつまじうくらし（す）おみなされ。天りのおしゑはよきおしゑでありますともおしてせかゑがみなそれにみならゑをします。なれどもだらいま（たゞいま）の天りののおこなゑわうちにわふそくそとにわをしゑがちごておりますよをおになりましたゆえそれはなで（何故）ともをせばまことによくがつきましたゆゑであります。そのよくわうちにほこりをたくさんためとゑてよそのほこりはらうのが一のよくなります。

天りとゆうよをなよきみちを人さまにはなしをすれば一にわかみさまにまごころをつくし二にわうちをみな／＼まことにくらし三にわせかいをたいせつにいたすのが天りのおしゑれ（で）あります。

それにいまの天りのおしゑはうちをふなかにしてもせかいの人にどれほどわらわれてもかみさまにどれほどくをかけてもじぶんさゑその日をわたりさやすればよいとおもうのが天りのみちのよをおもうゆゑもつたいない月日にくろおかけます。それがたすけのみちにはめゑません。

天りのたすけとゆうものわじぶんそのひをまことまごころになりましてせかいなんぎふじうをたすけてくらしまたわ人さまにじぶんのまことをきいてもらうのが天りのだいにわ月日のいりこみのはなし二にわみのうちはなしをして三にわうち／＼むつまじうくらすはなしおして四にわよのなかのはなし五にわ五りん五たいのはなしをして人さまの心ろをやすらげてまことのみちが天りのみちなりとおしゑおすれば（すれば）みながいさむ。みながいさめばかみもいさみをかけてせかいのたすけがじゆぶん（で）け（で）まするゆゑにんげんみのうちに五りん五たいわどこにあるとおもいますか。その五りん五たいのあるところがわかりさやすればよくのはなしわでけんものとおもいます。わからんのもかゝわらずよくのはなしおいたしますれば（れば）じぶんの心にさわりがつきます。そのさわりがじぶんれ（で）さんぎ（懺悔）つかんときがきます。そのときじぶんわるいとおもわづにたら（たゞ）月日のふそくそれが月日にわらんねん（残念）ゆゑそれゆゑにまたこのたびまごころたづね月日いりこみじうぶんおしゑおすれどもそでにも（其れにも）きづかづたら（たゞ）うたがうことばかし月日あるとおもうものあれば三下りのあのかぐらうた（二世の御神楽歌）お心わきまゑかみさままことのおしゑをせなならん。まごころをつくさなならん。その月日のをしゑた三下りのかぐらうたをよめばなにごとよくわかります。それをわきまゑば月日のまことおとく人がどこにあらわで（あらわれて）くらさるにわちがいわないとゆうてたずぬる人わまことの人れ（で）あります。それにうたがう人わ天りのみちおまもるものとわちがうかとかみわそおをもいなされます。

註 五倫とは眼と口と鼻と耳と頭（魂）

五体とは手、足、男女一つの道具、肛門、胴。

これを揃うた人を十人前の人と云う。

神の御守護と人間生活の二種相

此の世界は夜あって昼あり、明あって暗あり、冷あって熱あり、積極力（押す力）あって消極力（引く力）あり男あって女あり天あって地あり凡て異った二つの者が合いつ離れつして活きた活動をするのである。これが皆月日二柱の神の御守護である。

之れを人間生活に当て箝めて見れば男のみにて生活することが出来ない如く又た女のみにて生活することが出来ない如く休息なくては眞の活動は出来難ない。此の理は人間生活の凡てに通じて眞である。昔より

勝つこと計り知って負くことを知らざるものは害其の身に及ぶ

とか

急がば回れ

とか云う事は皆此の理より割り出されたる真理である。

いかに進めば良ければとて野猪の進みは遂に身を亡ぼすものである。従って何事にかゝらず出過ぎると云うことも良くなければ引き込み過ぎるといふこともよくない。よく時と処と人と物とをわきまえて時処位に応じた活動をしなければならない。

左に掲ぐる井出クニ子氏の教訓は実に此の間の消息を明かに人間に向つて示されたるものであるからよく／＼玩味して日常生活の上に応用せられんことを望む。(大平生)

井出 クニ子

にんげんみのうち月日のいりこみわなにのごしぎよをとをもいなされますか。らいー(第一)にわいきのしよぎよれす(守護です)。つくいきは月様ひくいきわ日さま。そのひくとつくとれ(で)このよのわたりをしたします。

うち／＼にいたしましてもつくとひくとがあらばこそにち／＼がわたれます。

そのつくとひくとをわきまゑばどのよをなことも(でも)わきまゑがつかますゆゑこれがこのよの一のたからにしてにち／＼をくらし心いさんれ(で)その日たいせつにしてよをわたりなされませ。

井出クニ子氏の真精神

大平 隆平

天理教では井出クニ子氏に何か本部乗取りの野心でもあって蔭で秘かに計る所あるかの様に思っているが実際クニ子氏の真精神を解剖すれば其んなさもしい精神は微塵もない。

彼女の真精神は何うぞして本部を助けてやりたい天理教を助けたいの誠心がある計りで本部に入ろうの教界を自由にしようのと云う野心はいささかもないのである。従つて本部を始め一般天理教会がクニ子の真価を認め真に心から敬服してお迎えするというのならば兎に角決して彼女自身進んで本部を乗り取ると云う様な野心は毫もないのである。もし彼女に其う云う野心があつたならば何も九年間ジツとして苦勞はしないのである。其れを九ヶ年の間名利を求めず誠をもつて人を助けて来たと云うのは実際胸に野心ある人の能わざる所である。

彼女の目的は何も天理教位の小さな助けに満足しているものではない。全世界を助けたいと云うのが彼女の真精神である。彼女の一生の目的と云うのはただ其れより外何物もない。其れを暴力をもちいる迄本部に入ると云う風に解しているのは誤解の最も甚しいものである。彼女は其んな暴力を喜ぶ者ではない。ただ天命之れに従うの人である。而して次の談話は恐らく彼女の真の使命を語っているものと思われる。

「人間と云うものは何も男だから女だからと云つて違つた所は一つもない。男子には功を尽くすの針一本女には結好な着物を仕立てゝ内々を助ける針一本を天から授けて貰っている。其の針の穴だけの魂を使うて通れば結好なれど其れを身体一杯に使う故道が歪んで来ている。

此の世の中で人間程貴いものはない。其の貴いものを貴きに立てゝ貰おうと思ふのは心の使い分け一つである。其の心は神様より授けて戴いているものであるから神様の御恩を思つたなら其のことを思わねばなりません。

其れから明治天皇此の方は此の世に何れだけ御苦勞をなさつて下さつたかもわからん。御自分は九十才も百才もある寿命を縮めて人民を大事になさつて下さつたにもかゝらず自分等が一人手に偉くなつた様に思っている。そやから明治天皇の御苦勞を神様は何れだけ大切なものであるかと云うことを一つ誠をもつて充分に世界の人民に教えなければならない。

昔は人間が沢山いては食わずになる様になるかも知らんと云うので皆んな山へ放かしたり川へ流したりした。明治天皇になりては人間という大切なものを其んなことをしてはならんと心付き其れを止めさせ又た国々と取引して互いに便利を計り外国迄も誠にしたいものや穢ろしいことをしない様にしたいものやと明治四十四年の間と云うもの何れ程御艱難をなさつたかわからん。其の御恩を知つたものは一人もない。何れもこれも皆な自分計り勝手に暮らすことを考へている計り。

神と云つて此の世にあらわれたならば明治天皇が人民大切にして下されたことも考へなければならない。

何うした所で其れだけを云い渡すには先ず第一に天理教に云い聞かさなければならない。中々明治天皇の御苦勞というものは教祖の御苦勞所ではない。中々の御苦勞ですぜ。

其の事を云わずに天理教のこと計り云っても道の広まる筈がない。

私が何んば二代の教祖と云うても明治天皇のことを世界に知らせなければ勿体なくて二代の教祖と云う訳には行かん。

一体明治の明と云う字は何ういう字ですか？ 明治の明と云う字は月日（字は右から読むから日月と並べて書いても月日と読む）と云う字ではありませんか又た治ということをつけたのは月日が此の世を治めるとのことなのです。即ち明治天皇には月日がお入り込みになって此の世を治めた方です。其れだけの悟りがなければ天理教は誠の道ではない。

月日と書いて明かと読む其れだけはわかっていても明治の世になって月日が治めると云うことを一人も知っている学者がない。其れがわからん位だから天理教と云う宗教が何故明治の世に起ったかと云うこともわからん。

今迄は神の道と上の道とを別々にしていたけれども何地も人間助ける道である。其の証拠に何れ程悪いことをしても帰りしなには小遣をやってこれで治まりなされよと云うてお帰えしになる。其れと同じく神の道でも天の月日に何れだけの不都合を致しましても誠心にさえなれば助けて下さると云う道に二つはない。其の結好を知らぬから天理教ということに計り心を尽して誠の道と云うことを少しも知らぬから困る。

私は天理教位のチツチャイことを思っているものではない。世界中一般に明治天皇は天の月日の入り込みであると云うことを知らして誠の心になって下されと云うのが私の使命である。

又大正ということは大いにあらわれるといことである。善は善悪は悪と云うことがあらわれる。其れで三十年祭の建て換えとなるのです」

之れに依って見ると彼女が此の世に月日の代理として表われ来った所以の理が明かになると共に天理教の因って起らざるべからざる必然の原因も明かになるのである。

然るに天理教の人々は今後の世界は月日が治めると云うことを知りつゝもなお明治と云う年号に迄其れを表わされつゝあることを知らないために政教二元の誤解に陥り真に一列一体に月日が治める世の中になったと云うことを理解することができなかつた。

けれども政教は鳥の両翼の如く、車の両輪の如く元一致せざるべからざるものである。其れを中古以来政治は政治宗教は宗教と分離して考える様になり其の結果二者共に完全なる働らきを失うに至つたのである。

此の際に於て井出クニ子氏の顕るるあり明治天皇の事業と天理教祖の事業は同じ月日の入り込みによって成れるものなることを説き真に根本的に政教一致の実を説く又た偉なりと云うべきである。

そもそも明治天皇の事業はただ単に日本一国の事業であるかの如く考えて居るものが多いけれども明治と云う文字の示せる如く月日が治めるのであって其の事業は全然世界的のものである。ちょうど天理教祖の事業が世界的のものである如く。此の間の消息を真に理解せざれば明治其の者の意義も天理教其の者の成因も真に理解することが出来ないのである。

従つて今後の天理教徒の信仰と事業とは単に教祖をもって月日の使命であると信ずる計りでなく明治天皇も亦同時に月日の使命であることを知らなければならぬ。ただ一方は精神的方面を司り他は政治的方面を司りたるものにして等しくこれ生き神である。

（天理教で云う表大工に裏鍛冶屋と云うことを更らに一層大きく世界大にしたものである）

此の二個の生き神の精神と事業とを説きもつて天月日の深遠なる大意思を世界の人類に紹介するのが彼女の新しき使命である。

思うて此処に至れば彼女の事業は彼女が常に人に向つて公言する如く天理教位の小さな助けではない。実に全人類の救済にある。疑うものは彼女が日々万人の埃のために苦しむ救世主の悩みを見よ。彼女が世道人心を迷わす偽物であるかはた真物であるかは此の一事をもつて了解することができるであろう。

天理教界の根本的廓清（三）

大平 隆平

（一）囚われたる天理教徒

天理教信徒は社会を教養し人心を救済する前に先ず自分自身に於て

一 人は天理教信徒たる前に先ず人たらざるべからず

二 人は天理教（人工教）を信ずる前に先ず天理（自然教）を信ぜざるべからず

の二問題を解釈せざるべからず。今日の天理教徒の迷蒙は一に懸つて此の二問題に対する自覚を欠くにある。

(二) 人と天理教徒

今日の天理教徒の陥れる第一の誤解は人は人たらざるべからずと云う人生の第一律を忘れて人は何人も天理教徒たらざるべからずと信じ過ぎせし点にある。其れがために自然に定まれる天理教人道を信ぜずしてひたすら教会に於て勝手に定めたる教会の規約に盲従することをもって人間としての資格を獲得した様に信じ教会より除名せられることを以て人間としての資格を失墜せる様に思っている。従つてにちじょうの生活に於ても人工的の教会の信仰をもって標準として人生を眺むるが故に其の人生観は固陋にして虚偽である。これ天理教界に革命の聲の起つて来る所以である。

(三) 天理と天理教

今日の天理教徒の陥っている第二誤解は天理と天理教とを混同していることである。天理とは天然自然の動かすべからざる宇宙の法則にして天理教とは其れに向つて幾多の人工を加えられたる所謂人工教である。今日の天理教の教師及び信徒は此の間の区別を全然忘れてゐる。而して今日の天理教が即ち教祖御親の説いた無上無等々の天理其者であると信じてゐる。これが天理教徒をして家庭と分離し社会と衝突せしむる原因である。そもそも天理というものは真に縦横自在の宇宙の大道である。然るに今日の天理教徒はこれをもって一番狭く一番窮屈な道としてゐる。現に今日の天理教徒を観察するに中には世界並以上の有徳な士のなきにあらざるも其の大部分は天理と天理教との区別を知らざる無知の信徒に外ならない。しかも教界有徳の士と称せられる人々も亦純天理の如何なるものなるかを自覚せず現在普通の天理教道徳を修め教会の規定を遵守することをもって唯一の理想とするに至つては教会の迷蒙も又た憐れむに耐えて居る。そもそも吾人にとって飽く迄も遵守せざるべからざるは天理教にあらずして天理である。これ天理教徒をして天理教を捨て、天理に帰れと勧むる所以である。

(四) 天理人道の行者

之れを要するに吾人々類の唯一の義務並に目的は天理教徒になるにあらず仏教徒になるにあらず又た基督教徒になるのでもない。ただ天理人道の行者たれば良いのである。何故なれば天理と云う根は世界の凡ゆる宗教の根本であるからである。従つて此の世界に於ける第一の行者に日蓮にあらず御嶽にあらずして実に天理人道の行者たることを自覚しなければならない。

蠶と求道者の苦

大平

隆平

昔から艱難汝を玉にすと云う言葉がある。又た玉磨かざれば光なしと云う言葉がある。此の言葉程 nay to man, or nay to god 人に成る道もしくは神になる道を明かにした不易の真理はない。けれども人生の艱難苦勞は人に依つて(上流社会)経験されずに済むことがある。ひとり病難のみは上は王侯貴族より下は乞食庶民に至る迄一人も経験せずに済むと云うことはない。凡そ艱難苦勞の種類は多々あるが其の与うる所の苦痛は病苦の痛切なるに及ばない。これ信仰あるものには其の中より深き人生の真理を感得する所以である。けれども人は歡樂と苦痛の間に生れたものである。従つて艱難にあらざれば病難何れか其の一を経験しなくてはならない。蠶一神虫一の蛾になるや一眠より漸次二眠三眠四眠と経ていよいよ五眠目に至つて食を止め菌をつくつて蛹となる迄の苦勞と努力とは並大抵なものではない。先ず一眠である。一定の日数を経れば卵を藪つて此の世界に出た蠶は所謂一つ眠と云うものは行ふ其れは今迄の旧皮を脱して新皮にかわる時である。其の間の約一昼夜と云うものは蠶は食を止めて頭を上げ苦しうに旧皮の脱けるのを待っている。

私は考える。人間が身上事情（特に身上）に罹った時は此の様なものではないかと。特に私は此の苦しみを求道者の苦しみに比較するのである。

此処に一人の求道者がある。彼は病を得て病床に苦しんでいる。けれども彼は自分の病源は那邊にあるかを究知して今日迄の精神を懺悔し其の懺悔の結果に依って彼は再び健康体に回復した。けれども凡そ生あるものゝ常として常に健康体たることは出来ない。彼は第二回第三回の病を経験して益々深き悟道に到達する。其れがちょうど蠶が第二眠第三眠第四眠を重ねて益々成育に近く様なものである。吾人は重き身上に罹る毎に先ず蠶の更生の苦しみを思わなければならない。

蓋し人間は一度煩えば其れだけ神に近くのである。けれどもこれは求道者にのみ真理である。世の俗人の相関する所ではない。

然し失敗は成功の基と云い、一度手を焼けば二度手を触れぬが人間の本能である。俗人等は病に依って宇宙の真理を悟らぬ代り他の方面の失敗に依って臍げに人生の如何なるものなるかを悟る様になる。これが人間発達の別路である。

何れにしても艱難や病難は吾人にとって厭うべきものではない。又た厭うても／＼終迄これを避け得るものではない。何んとなればこれ即ち運命なればなり。吾人はただ自分の上に天より課せられたる難問題を實際上に解決して益々無限向上の一路をたどらなければならない。最も良き雛型は蠶の一生である。

彼は一定の時を経て来る更生の苦しみを忍びつゝ人間社会に大なる貢献をなして其の一生を終るのである。

凡そ昆虫魚鳥畜類の中にも人間にとって有害なるものと有益なるものがある。人間社会に於ても亦其うである。善人と悪人とあって一は創造し一は破壊しつつある。これを昆虫に就いて云えば蓋し蠶の如きは優良種族中の優良種族である。彼は昆虫の王である。神虫である。これ私が平常の理想として、

「虫になるなら蠶の虫になれ
人になるなら真人間になれ」

と心の中に念ずる所以である。（大正五年七月二十八日）

藤見の一日

奈良 吉田 廣輝 記

奈良市北室町田中速満氏が子供の難病を即座にお助け貰い喜びの余り本年五月十二日藤見の案内せられ吉田方にて朝食済み次第寄合の方々と共に奈良公園御料地の藤見と出られたり

親様は藤の花の立派を御覧になり皆さん／＼藤の心になりなはれや藤は何時も下へ心に向けて花を咲いているから如何なる人間でも皆上を向いて上がめて居ますぜ

それより田中様の持参のお弁当を開かれたり

親様は皆さん藤の心になりなはれとのお勇みから親様が先導して伊勢おんど初まるそれより一同手をたゞきて大勇みとなる皆寄合の方もそれぞれ十八番が沢山出た

（親様は）

そろた／＼ごらく人がそろた
すゑははなしのたねになる

（田中速満）

不二の花見てだ勇むる子供等の
心見て喜こぼる親の心

（吉田廣輝）

今日こそはほこりわすれてこのゆかい
いつ／＼までも藤の心で

（布谷ツネ子）

親のこころと今日の藤
知らずに暮す人ぞふびんや

（親様）

君のため心写すはかどみなり
見れば勇むる藤の花ぞや

（吉田廣輝）

さがり藤神の教へを聞分けど
道の教師は解けど守らず

（金原むめ子）

はる／＼と親をしとうて今日の日や

(親様の短話)
三人が谷底から藤野花を取って山を登るを見られて
(たにその藤野花持って帰って行く人は世界の喜び元を尽す)
世界のしらぬ処に立派な花が咲いてあっても皆しらぬそれを皆さんが藤野花の如く世界
へ出して世界の人を喜ばし下さるのやとの短話あり
(金原むめ子)
(上句) 富士の山すぐにかすみはかゝれども
(田中速満)
(下句) 不二の花にはかすみかゝらん
(親様より楠原正良氏へ与えられし歌)
まいるより頼みを掛ける春日様
花のお山で心うれしや
(吉田廣輝)
世界中どこさがしても今日の藤
親子勇ますまことまごころ
(前田梅造)
春日野のもゆる心を親様の
手引でいたゞく藤の景色を
(楠原正良)
国に出られしあらはれし
井出くに月日此名万世
(田中速満)
不明出る時やなみだで出たが
今は不明のそばもいや
(不明とは湖東奈良集談所の町名を云う)
(吉田廣輝)
不明出る時妻子を忘れ
帰らん心で出たわいな
(田中速満)
てんにんはけしの千かぶをながめて下る
こゝの雲人藤の花にぞ
(吉田廣輝)
十柱の神は勇みて藤の花
のこし置くぞへあとの子供に
(楠原正良)
この先はどうゆふ事と思ふかな
万づ互ひに勇む斗りや
御馳走もお酒も無くなったので閉会してそれより春日二の鳥居へ出た。親様は
山道で道端の草を見て之れは風邪薬之れは腹薬之れは腫物薬と教示に多忙極めらる
それより二の鳥居の春日の白鹿水のお手水鉢前で
(布谷ツネ子)
春日様使ひものこそ鹿にけり
かいろ／＼となくぞ親様
(親様)
杉になりたや春日の杉に
藤に巻れているわいな
(田中速満)
手水やの水の心になりぬれば
世界のの人ぞ皆ぞおさまる
(親様)
春日様灯籠の数は多けれど
子供の数は深く思ふぞ
奈良物産陳列所前の鶴を見て
(親様)
玉恵さん
百万両の金に心を入れるなら
玉の光が消えてくもるぞ
いつまでも鶴が(蔓が)続くと思へども

玉がくもれば鶴は（蔓は）消えるぞ
それより大仙前を通りて布谷方へ来る。城法部下奈良集談所澤瀬先生が歌を見て
（澤瀬先生）

春日野の神のお行きに洩れたれど
おくれはせにてあふぞうれしき
（親様より金原むめ子氏へ）
ごくらくはまゆげの下のさがり藤
あまりちこうてめにはかゝらん

（田中速満）
（上句）人は皆こきよに錦と云ふなれど
（親様）
（下句）ならぬ所がまことふびんや

読者の声

愛知県渥美郡田原町字田町
白井友

吉

前略御免下され度候誠に恐入申ますが一寸御尋ね申上候私事は親様の信者にして時計商
を致して居る者に候へ共會長様の申候には大神様へ毎月最初に有りし収入を献じ且又毎月
七、十七、廿七の三日間必ず集合所へ参詣致す事又月々集合所の灯明料を献ず事右の事を
大神様へ御願ひ申して商売繁昌する様にと申せし故それに従ひ約束を相違致さずして居り
ますそしてより早や一ケ年にも相成り申可候が別に商売は繁昌致しませぬから右の事は廃
しに致しては如何なる理由のものに候や會長様の申すには約束をちがふてて献しねば悪る
いと申して居りますが私事目下如何致した方よいかを困りて居りますが此度友人の所にて
新宗教を拝見致せしが誠によい事と思ひます故右の情をお尋ね致しますから何卒／＼御教
示下され度右偏に御依頼申上候献奉致す者は集合所の方へあげます。して斯様な事をお
尋ね致し誠にはつかしき次第なれども何も知ら無き者故合せて御伺申候再拝

答、商売繁昌の秘訣は朝起き、正直、働らきの外はありません。幾ら毎月最初の収入を
神様に上げたり月に三度の教会参りをしたり灯明料を教会へ上げたりした所で此三つの行
が出来て居なければ商売繁昌の仕様はありません。これを迷信と云ひます。又其う云ふこ
とを云つて人を欺して教会の便利を計る會長なり先生なりは体の良い一種の詐欺師です。
信仰も何もあつたものではありません。

今後は毎月最初の収入を教会に納めるも要らないし月三度の教会参りも要らない。又灯
明料を上げるも要らない（其等は貴方の商売繁昌と何等の関係もない）ただ精出して正直
に働いて御覧なさい。其れでも商売が繁昌しなかつたら天理教の教祖様は偽吐きな方
です。

弘前市品川町坂本写真館隣
棟本徳衛

拝

前文御免被下度候大平様此の月の新宗教がおくれたのでどうしたのかという／＼心配致
しました種々なる周囲の人々の雑言を聞き捨てにしても捨て難き新宗教私はいろ／＼と想
像しながら本紙を待ちました三十頁の一名残りにはつきない云々の一節を見さして頂き限り
無き悲しさを感じました。大平様去年の今日此頃貴殿の御膝下に在つてい／＼御仕込を
頂いた当時を思ひ出して私は何ともかともいへないなつかしさを感じるのです貴殿に接し
ない人はあなたをい／＼悪ざまに申してまし夫れと等しく私は未だ第二の親様に接しま
せん従つて之れについては何等申上ませんたゞ今後の成行を見て居たいのでし。大平様私
はいろ／＼妻の爲めに心を乱しました之れについて第二の親様に御尋ねしましたら有難き
御言葉を頂きました其一節に（前略）夫婦の中を別れて迄で神三を信神せいれもよろしか
と思はれまし此の世の中てば親切なには何が一番であるかと思ひなされまし私は一には
親二つには妻三には我子四には世界の人夫れ程大切な妻に別れてまで人を助け度いなら誠
に家業を働いて世界の人を助けなされ云々、私は此の御言葉によつて教会に於て不満の日
を送らんよりもと思ひ申上兼ねますが再び妻子を引つれて二重的の生活に落ちました、し
かし将来について迷てましどうしたらよいのでしやう。

答、将来のことは私には訳りません。明日のことは明日思ひ煩へ。今日の苦勞は今日に
て足れりではありませんか？ マア其う思ふて自分の思ひ通りにならない将来を思ひ煩ふ
より現在の状態に満足し静かに来るべき運命を待つたが良いでせう。遂ひ身上や事上の為

めに御返事延引致し一寸誌上を以てお答へさせて戴きます。

静岡市本通八丁目
山 田 福

蔵

(前略)

予は素より新宗教愛読者否むしろ天理教革命論者の一人にし此程来は其程度を高め殆
ど所属に絶たざるやむなきに達し申候幸には予の一人にし此程来は其程度を高め殆
加し大勢等君が宅に大感あり然かも同者様は皆相の為め否革命論に同情者小生三名に増り
捨て置き氏に面会を求め度きと宅すへつゝあり方のは出来なきやもし出づれば御立より下され
遺憾の至り非凡秀才な君よ程よく其なし井出云々のみは玉に傷とする処ならん尊親愛なる
くも五六人は革命の聲に懇篤なる信仰は致しませんとするが故に我を去るいふならば去ら
君尚公明的小生如得るが為私井出クニ子氏を信ずるが故に我を去るいふならば去ら
答、元來を信じます。信仰の道は連れがなくて歩けぬやうな淋しい路とは違ひます。
は元來を信じます。信仰の道は連れがなくて歩けぬやうな淋しい路とは違ひます。
山田君！

折角の御忠告は有難いが私をして行く所まで行かして下さいます。 暴言多謝

井出クニ子様へ接しての所感

京 都 喜 楽

生

私は五月の福音号を見て真に親様（井出クニ子）に接したいと思つて居ながらも心な
らず延々となつて六月二十日にいよいよ播磨に行く事に決めた道程は二十四五里あるが私
の所よりは不便で汽車も連通してない徒歩で行く積りで出掛けた出掛けから雨模様で在つ
たが午前八時頃からしと／＼降りかけた益々烈風となつて前から雨風と争ふて行くのであ
るから身はぬれ鼠の様になつて是では行けないと思つて其処らに宿屋はないかと尋ねれば四
里程行かねば宿屋はないと云ふ幸ひ思ひ付いたは半道程後へ戻れば妻の親戚先がなる其処
へ泊ることにしたそれが午後二時頃であつた其翌日廿一日は今日は振るまいと思ふて出程
立したが又々午前十時頃から降り出して中々降りだが今日は雨だけで風がないので昨日程
には困難はしなかつたが三木辺まで行く迄降り続けた素より徒歩にて草鞋の紐をしめつゝ
行くのであるから大分湿れた。此の間に自分は斯んな事を思つた斯ふして行つてもし欺ま
されでもするのなら馬鹿げたものだけれども私しは親様を信じて行くのではない三下の神
楽歌の中に含んである真理をたよりに大平氏が新宗教に是迄書かれてある彼の文字に現わ
れた人格とを頼りにするものであるから欺かるゝ筈はない斯うして道を研究しようと思ふて
何でも誠の道を求むる私しの心は天の親様が見て下さると思つて勇んで行つた午後六
時頃に井出様方に着した門戸を入ると湯上りが見えて浴衣を着られた五十過かと思しき婦
人で顔は丸い方で肥太りて背は余り高い方ではない方がニコ／＼顔してヨウまあ遠い所か
ら御苦労様サア／＼御湯が沸いているから直にお湯に入りなさいと云はれた之れが親様で
あると云ふことは直に察せられた私達は三人連れであつたが直にお湯に入るとめい／＼に
浴衣を着なされと云つて浴場に持つて来られたが親様であつたそれから御飯を頂いたが親
様と同席であつたが中々の御馳走であつた御酒も頂いた私しは常々物に遠慮する癖がある
のにもどうしたものか少しも遠慮心が起らない自宅で飲食すると同じ心持がする主人井出氏
も同じ席で食べられたが吾々は初対面の人ばかりであるのに恰も家族団欒の中で隔心が少
しもない此れが親様の不言の人格であると感じた神は人間の親である人間は神の可愛い子
供であると教祖は説きなさつたと云ふことは聞いて居たが真に親様なる神に近づいたこと
はなかつたが実に親様は神の社教祖は斯くの如き御方であつたらうと何となくなつたか
が心の内に湧いてきた其時に親様はハ／＼と泣いて居られた私しは其理由は問はなかつた
が見れば腹立で泣かれたのではない人間可愛と云ふ慈悲の心から泣かれたのであらう
それから夕方となつて写真や色々の物を出して御説明になつたが御話のときも吾々を上
据へて御自分は下にさがつて居られた少しも高慢の心はない月日には人間ほど貴いものは
ないでと云はれて吾々を神様のやうに待遇せらるる所は今日迄に吾々の接したところのない
人格の高い方である夜にならんと太鼓がなるすると間もなく男女の方々が参りて来られた重
いに青年であつた是が吾々の天理教と反対である私し共が協会へ参つて見ると女や年老が多
いのには茲では男が多いしかも青年其の人たちは皆御つとめがすむと八社さんと三下り（此

と申されました。私は此の言葉に依つて再び悲しまずに居られません。之に依れば何れ雑誌の発行を中止せらるる様に思はれます。都会ならばイザ知らずホンの片田舎に居ては實際毎月の雑誌配達を受ける程嬉しい事はないのです（大平殿御発行に係る雑誌は特別に）又是程光明を得るものはないのです。然るに「何時迄も雑誌を發行して云々」など云はれるのは何たることでせう。大兄よ！そんな事を云はずにお道の発展と共に尽きることなく發行して下さい。私は常に斯う思ひます。大兄は實に神の思召に依り天理教の内部に立ち入り天理教当局者の欠陥を補ひ以て一日も早く目的の地に到達を計らんが為めの神の使者なりと。故にお道の続く限り努力して下さい。而し近頃は非常に忙しい様ですね、播州へも行かなけりやなるまい。雑誌も編輯せなけりやなるまい。教理も研究せなけりやなるまい。おまけに暑くなつて来る。其他私事もありませう彼此思ふと御身の上も察しられます。けれ共世の為国の為道の為何卒末永く奮発を願ひます。五月号の二代目教祖の出現を書かれてから大分読者諸氏から八ヶ間敷云ふて来る様に思へますね。四五年以来天啓があつたとか神憑があつたとか云ふ様な人はチヨイ／＼聞きましたが之等を信仰するとせぬとは各人の自由なので大兄が此度播州の親様を御信仰遊ばすのも決して他から何や彼やと云ふに及ばぬ事です。播州の親様の事に付ては既に誌上を以て御報導せられたので略々其大人格なる事を認めました。大兄は此結構なる大人格即ち親様を深く厚く御信仰遊ばされつゝあるから此上他に結構な御馳走があつても箸をお取りになりませうまいから無理に箸をお取りなさいとはお進めしません。なれ共兼々大兄の申さる通り生きて教理は其当人に接しなければ解らぬものであるから御志がありますなれば其当人に接して戴きたいのです。それは或は御承知でせうが大正三年八月十五日の大和新聞に左の如き記事が載つて居ります（御参考迄に）

天理教二代目教祖

天理教本部所在地なる山辺郡丹波市町三島の東大教会の信徒詰所の前に去る七月中旬よりに不思議なる事を称道する一人の怪男子が現はれた。表門口に水色と白だんだらの幕を張り東西両端に水色と白と一本づゝの幟を立て入口の左の方一間の金看板が釣してある。曰く「明治四十二年七月十二日午後十一時世明神意正に天授其声すがはら五年目今日初開大正三年七月十二日島田喜蔵」と記してある一見何の事やら訳が解らないから這入つて聴き正して見ると此喜蔵三十九年といふので今から五年前即ち明治四十二年七月十二日神憑りがあつたと云ふのであつて喜蔵は三十年程以前より天理教の信仰を始め敷島大教会の信徒に加盟して追々信仰の進むに従ひ教職をも受けて天理教の教師と成つたのである。然る内に或時御本席飯降伊蔵翁が御言葉に本部の内は草が繁茂つて道が見へぬ又枝先の澄んだ処へと云ふ言葉を彼は深く心に感じつゝ成程教祖御在世中の時分とは変り今では大本なる此本部を草が繁茂つて道が見へない事実枝先の間の方が澄んで働いて居る神様には本部員だとか枝先の教師だとか隔てして見ては居られぬ神様は心の清い者の処へ御守護を下さるものであると大いに悟つて以後益々道の為めに働く様に成つた処から丁度前記の看板の日の午後十一時頃喜蔵が店の間の火鉢にもたれ西向に坐つて居ると左の耳にすがはらと明に声がする。それと同時に彼は全身に冷水を浴せかけられた如くなつて諸々の迷想は忽ち消滅して心身すがくしく只聞くは何の事だか理解しかねる不思議の言葉明に耳に残つて彼が日頃念じて居る濟世救人の方法に対し大いに合点の行く処を得たと云ふ。喜蔵は尚言葉を以てこうじやと明に説明する事は出来ない之は自分の信仰であつてかふしてお祭りしてある。社の内には此すがはらと云ふ魂が祀つてある。マア簡単に言葉だけを説明して見ると数多き人々の穢き汚れたる心を一日も早く取除いて神様に美しき腹に同化せよさすれば幸福は立所に望み得らると云ふのである。喜蔵は三島に近き在の生れにして今から十五年以前即ち明治三十二年頃より三島なる本部前にて菓子商を営み居りし者なるが天啓の声を聴いてから家を畳んで諸諸方方を伝道に歩いて居りしものなりと。（完）

私は昨年三島に滞在中或人の手引に依つて此島田先生に三四回お目にかゝり御教理を拝聴した事が有りますが中々の大人格なお方です。先生の御履歴なども承知して居りますけれ共此処では余り多くは語りませぬが御教祖に次いで之の艱難苦勞の道を御通りになり御教祖の雛形を充分お通りに成つて居られるそうです。

神憑後満五年目即ち大正三年七月十二日神告に依り門前に看板を掲げられたが其後敷島大教会及び本部よりの嚴談に依り親の云ふ事を聞き入れますと云ふて目下は其看板は取除いてあります。其他予言なども時々あつて本部の神殿新築の際足場が倒れた事及び遷座祭の延期せられ

た事なども予言せられたといふ事であります。斯ふ云ふ風で三島地内にも天啓に接したお方があると云ふ事丈けを御知らせ申した次第です。

御都合に依り一度先生に相接し下さらば幸の事と存じます。

二伸 次に最一つ御願ひ致し度いのは外でもありませぬ雑誌の初めの頃は随分おさしづやおさとし及御言葉等の眞の御教理が沢山載せられて誠に結構でしたが順を重ねるに従ひ之等の御言葉が載せられてない様ですが之よりも何卒載せて御教理を授けて下され度次におさしづの研究等も順を追つて毎号に載せられん事を偏に御願致します。

先づは折角御健全に

答、御懇篤なる御手紙有難く拝見致しました。私も御さしづの研究や御神楽歌の新研究や其他色々書きたいものもあるけれども唯今は寸暇がなくて仕方ありません。何れ余暇を得て本誌なり単行本なりにして発表したいと思ひます。

休刊広告

都合に依り暫時休仕候

大正五年八月

新 宗 教 社

身をさして云われたものでもある様である。

兎に角御神樂歌の深遠なる所以は意味を二つにも三つにもとれることであつてこれは此うだと遽かに断定し難いものがある。如上の「わし」と云ふ言葉も一人称であるか三人称であるか単数であるか複数であるか云い換えれば教祖御自身を指されたものであるか其れとも世界から寄つて来る信徒を指されたものであるか又た教祖もしくは信徒の一人を指したものであるか或は多数を指したものであるかゞ明かでない。最後に例を挙げた

「どうでもしん　　するならば
　　かうをむすぼやないかいな」

の如きも厳密に云えば散文と違い名詞もしくは代名詞が略せられているから教祖自身の声ともとれよば或は又た信徒の声ともとれるのである。

之れを要するに御神樂歌の著者を歌中の人称に依つて定めることは困難である。然らば一体御神樂歌の著者は誰であるか？　神か教祖か或は他の人かこれは何も其う頭を悩ます問題ではない。

教祖の著書となつているものは此の御神樂歌でも御筆先でも一つとして教祖自身の頭より創造せられたものではない。凡て皆な天啓に依つて成つたものである。教祖は要するにただ其れを記録したと云ふに過ぎないのである。

其の証拠には天啓があると教祖は夜中でも昼でも筆を取る。しかも暗夜灯火のない所で筆をとる。其れを昼明るい所で見れば昼御書きになつたものと少しも筆勢並に字形が異らなかつたと云ふことである。しかも其の間の出来事は多く記憶がない。

昨夜此う云ふものを書いた
と云ふて出されるものを見て云々のことが書いてありますと申上ると始めて

あゝ其うか
と気付かれる様子であつた。

此等の事実によつて見ても教祖自身が書かんとして書いたものではなく全く天来の声に相違ないものであることを信ずることが出来る。

其れにもう一つ教祖の著書が教祖自身の創造力に成つたものでない証拠は彼の御筆先である。彼れは明治二年より明治十四年にわたつて十二年間の著作であるに係らず其の内容を研究するに事件の発展と云ふものはあつても思想の発達と云ふ点はない。もしもこれが人間の労作であつたならば其の始めと終とに於て必らずや思想の変遷がなければならぬ。其れが見受けられないと云ふのは即ち神の著作たる何よりの証拠である。其れと同じく此の御神樂歌も神の胸の中に長く孕まれていた思想が因縁の時に来て生み落されたに過ぎないのである。従つて御神樂歌の中に教祖の思想が混入していると云ふ説は全然誤つてゐる。これは疑ふべくもない天啓の声である。教祖は即ち其の記録者に過ぎなかつたのである。従つて御神樂歌の著者はと云わば云ふ迄もなく神自身であると答ふるをもつて至当とする。

然るに此処に説をなすものあり。御神樂歌は神の著作にもあらず教祖の著作にもあらず橋本清の著作であると。これは勿論其の時代の状況を知らざる者の憶測に過ぎない。何故なれば教祖に御神樂歌の製作のあつた頃には橋本清の如きはお地場を覗いたこともない人間であるからである。これは当時お地場に居つた何人に聞いても明かなことである。且つ其の内容に就て観察するも此の深遠なる御神樂歌が到底一個人の力に成り得べき性質のものではない。其れは後世御神樂歌に擬して偽の御神樂歌を擬作したものもあるが其の構想と云い其の用語と云い到底真の御神樂歌の脚下にも及ばないので見ても明かである。

其れから又た此の世界無二の聖典が心学道話より引用せられたものであると云ふ者があるが其れが浄土和讃か神樂歌からかとつたものであると云ふなら未だしも縁のない心学道話から取つたといふことは全然御神樂歌の内容を鑑賞批判することの出来ないものゝ云ふことであつて取るに足らざる僻説である。

御神樂歌は以上述べたる如く教祖の著作にもあらず勿論橋本清輩の著作にもあらず実に神自身の著作である。教祖は即ち其の筆記者であるのである。

此の一読して明瞭なる事実を名瀬に殊更此処に問題として論じたかと云えば此の聖典を教祖の著作とすると神の著作とするとによつて御神樂歌解釈の標準に大なる相違を生ずるからである。其れで以下本書の御神樂歌の態度は何処迄も天啓の声神の著作として解釈す

るのである。

第二章 御神楽歌製作の年代

御神楽歌の製作は慶応三年正月に始まつて八月に完成せられたものである。其の間に於て絶えず筆を執られた訳ではなく徐ろに一下りもしくは二下りづゝ筆をとられたのである。而して凡てが何回に書き上げられたかと云ふことは直筆を研究したらわかるかも知れないが現在の所これを明かに断言することはできない。

けれども御神楽歌が何回に書き上げられたかと云ふことは吾人にとつて余り必要なことではない。ただ吾人は其の内容を研究すればする程それは一氣呵成に書き上げられたものではなく神の頭脳の中にて精練に精練を重ねられたる結果教祖の筆端に文字となつて表われたることを知れば足るのである。

慶応三年と云えばお道も眞の細道を通り抜けて道の前途に光明を認めるやうになりかけた時代である。即ち文久より元治にかけては此の道の元老である辻、仲田、山沢、山中、飯降、榭井の諸氏が信仰に入り飯降氏の発起で小さいながら勤め場所も出来道は益々前途に光明を認むるに到つた。其れがために大和地方の僧侶や神官の嫉む所となり種々妨害を加ふる者も多くなつた。慶応三年七月京都の神祇管吉田家の配下に属して布教の許を得たのは其う云ふ妨害を避くる一時の手段であつた。此等の事情を総合して見ても当時如何に膨張しかけて来たかを知ることが出来る。

更らに之れを当時の日本の国状に見るに寛政享和の頃よりしばしば外国と接触する機会が多くなつた鎖国主義の島帝国は嘉永安政にかけては諸外国の通商貿易を乞う者頻りにし遂に安政元年米国の仮条約を締結してより尊王党の幕府の横暴を鳴らす者多く国論は二派に分れて長い間葛藤を続けて来た。其の中に十四代将軍家茂が薨すると間もなく光格天皇も亦相續いて崩御になつた。其れが慶応二年十二月である。国民は其う云ふ不幸の中にあつて不世出の英主明治天皇の御踐祚を迎えた。其れが慶応三年正月である。

教祖はかくの如く道から云つても世界から云つても最も多事多端の際に万国万代の憲法となるべき聖典御神楽歌の製作を始められた。其れが日本の空前絶後の大革命家明治天皇御踐祚の当月であると云ふのは偶然とは云え其の間何等かの意味がありそうである。

思ふに天保九年十月二十六日教祖の天啓があつて根の教、元の教、だめの教、止めの教を啓ませられ始めてから此方明治維新の大業のなる迄の間は日本一国にとつても世界にとつても最も意味の深い時代であつた。

即ち日本はこれ迄長い間縛られて来た封建政治、専制政治を捨てゝ漸次立憲政治に向ふ端緒を開いた。と同時に世界も天理教の創立に依つて靈界一新の時機に到達したのである。

しかも其れが色々の事情で行き悩んでいたのが天理教は御神楽歌の製作に依つて確固不拔の基礎を定め日本は明治天皇の踐祚に依つて万代不易の基礎を定めた。従つて慶応元年正月は道にとつても世界にとつても最も意味の深い正月である。

第三章 御神楽歌製作の目的

御神楽歌製作の目的はちよつと憲法を定めて国家万代の基礎を定むる如く万世の世界一列を統治する新政の大憲章として新たに起草せられたものである。

殊に其の露頭に於て創世の神意より説き起して靈界の正月の到来せることを宣示し次第に新しき理想の世界の創造に及んでいる点はちよつと憲法が建国の精神より説き起して万代の国是を規定しあると同一筆法である。ただこれは其の目的万代の万国を統治する根本道徳であるから一国の憲法と異つて其の意味は一層普遍的であると共に更らに一層根本的である。

御神楽歌一篇の趣旨これは元より広大深遠として計り知るべからざるものである。とは云え其のこれを起草された目的はと云えば今迄隠れたる神の創世創人の目的を明かにし以つて今日迄の罪惡と欠陥とに満ちたる世界を全然改造して精神的にも肉体的にも乃至物質的にも健全にして幸福なる理想の世界を実現するにあるのは云ふ迄もない。更らに之れを詳しく云えば理想の新人、理想の新仮定、理想の新国家、理想の新社会を実現せんとする目的を歌つたものである。従つてこれを小にしては修身、齊家の座右銘となり、これを大にしては治国平天下の無上の法典ともなるのである。されば信者未信者を問わず苟も人間なる以上必らずや一本を座右に備えざるべからざる人類共通の宝典である。

以上は御神楽歌一篇の大体の目的を語つたに過ぎないがなおその詳細にわたつては後章に於て一段の研究を試みんと欲す。

第四章 御神樂歌の地位

古来人間生活の羅針となつて来た宗教の教典中重なるものを挙げれば仏典、聖書、コーラン、四書の如きは其の主なるものである。

此等の聖典の著者並に宣伝者は或はインドに生れ、或はユダヤに生れ、或はアラビアに生れ、或は支那に生れたけれども其の聖典の中には一人としてインド人はかくの如く生活せざるべからず、ユダヤ人はかくの如く生活せざるべからず、アラビア人はかくの如く生活せざるべからず、支那人はかくの如く生活せざるべからずとは規定しなかつた。何れも人間は如何に生活すべきか？ 人生の意義及び価値如何と云ふ人類共通の大問題に向つて疑問と解決の歩を進めたものである。

けれどもこれを彼等の生れた時代と数千年隔たつた現代人より見れば其の人生に対する疑問も甚だ幼稚である計りでなく其の解決も至極単純であつたために彼等が生存して居た当時人間はこれで満足して居つたかも知れないが今日に至つては到底現代人の深刻なる疑問を解決するの力がない。これ仏教なり、基督教なりマホメット教なり儒教なりが過去の情勢に依つて現在なお形の上の存在を保つて居るけれども其の實際に於ては何人も顧みざる所である。

これは必ず宗教に計り通じた現象ではなく人生百般の事凡て其うである。一例を挙げれば正宗の名刀も今日の如き砲弾との交換軍艦と軍艦との戦争に対しては殆んど用途がないと同様である。

天理教の教典御神樂歌は此う云ふ文明の程度の発達した現代に於て最も新しき人生の羅針盤として生れたのである。

然らば如何なる点が最も新しい人生の羅針盤であるかと云えば其の文字簡素にして他の聖典の如き煩瑣の説明を欠くと雖もしかもなお明瞭に神の新世界建設の理想を語つて居る。其の新世界建設の理想と云ふものは今日迄何れの宗教の教典にも説かれなかつた人間創造世界創造の地場（根源地）即ち大和の庄屋敷に宇宙の根本實在の神が顕れて所謂地場中心とせる世界一国家族の理想の世界の建設を歌つた点にある。

更らに其の形式より論じても従来宗教は室内に閉居して幾度も繙読せざれば其の教典を暗記することは愚か其の意味さえ充分に了解することの出来ない程枯掘且つ難解のものである。然るに天理教の聖典御神樂歌は耳一度これを暗記すれば山であらうが野であらうが海であらうが川であらうが内であらうが外であらうが随時随所に於て感興の湧くが俚に歌いもし考えもすることの出来る様に節奏と振りとが陽気に面白く付けられて居る。其れ計りでなく御神樂本其の者も決して難解の文字を用いるゝことなくいろはと数字とを知れるものには何人と雖も読み且つ理解することの出来る様にできている。かくの如く眼の見えぬものも耳の聞えぬものも口の利けぬものも皆なそれぞれ与えられたる器官を通じて神の意志を尻且つ行ふことの出来る様に組立てられて居る点は実に其の用意の周到なる至れり尽せりと云わなければならない。

殊に世界が文明になればなる程人間は複雑難解なる教典を研究している暇はない。其の点を達観して仕事をしつゝ真理を研究することの出来る様に簡単な俗謡の形式を選ばれたのは従来宗教の企て及ばざる特殊の地位を占めるものであつて真に新世界の理想の聖典である。

なお御神樂歌と御筆先との関係、御神樂歌と古神樂歌の関係、御神樂歌と俗謡や和讃との関係は章を追ふて研究すべし。

新時代の象徴人

大平 隆平

凡そ此の宇宙間にありとあらゆるものにして一つとして変化をしないものはない。例へば空に漂ふ雲のたゞずまひも地を流るゝ川つ瀬も一刻として同じ所に止まつてゐるものはない。たとひ一見して何等の変化なきが如く見ゆるものも仔細にこれを観察すれば必ずや何等かの変化をなしてゐるのである。これは自然界に於て其うである計りでなく人間界に於ても其うである。

今試みに紀元十億三十七年十二月大晦日の夜の銀座の一角をとつて研究せよ。其処には来る可き正月を待ち焦れてゐる少年少女もあれば来る可き正月を如何にして楽しむべきかについて考へつゝある青年男女もある。これ丈けならば大晦日の夜の銀座は至つて平和なものである。けれども社会は而かく単純ではない。更らに其れ以上多くの人々が歳末の勘定に苦心しつゝ往来しつゝあるのである。行く人来る人其の中には債鬼もあれば債鬼に苦しめられつゝ逃げ廻る人の子もある。凡て此等の人間が相交錯して大晦日の夜の銀座は希望と失望と歡樂と悲哀との劇場である。

然るに一夜明けた元旦の朝の同じ銀座の一角を見よ。其処には昨日の債鬼も債鬼に追はれた人の子も顔の相好を直して新春の気分には酔ひながら右往左往してゐる。吾人の日常生活の上には常に大晦日と元旦程の大なる変化はなくとも昨日の世界と今日の世界、昨日の人と今日の人との間には眼にこそ見えなないが大なる変化が表はれてゐるのである。

人は或は考へるであらう。昨日此処を歩いて居た人、昨日此処で働いて居た人、其れは成程影も形もない。又た昨日の雨と昨日の風と昨日の塵と昨日の埃とは此処にはない。けれども軒を並べて立つてゐる建築物と我が現在立つてゐる敷石のみは昨日の俛ではないかと。これは大いに誤つてゐる。如何にも肉眼をもつて観察すれば凡て此等のものは昨日の俛であらう。けれどもこれを細微な顕微鏡をもつて観察する時は其の間に何等かの変化を生じてゐるに違ひない。其の証拠には去年の春建てた新築の家屋は今年の春に於て決して同一の新しさを保つてゐないのに見ても明かである。

凡て変化は世界の常態である。其れは自然界にも起れば人間界にも起り、物質界にも起れば精神界にも起り、主観界にも起れば客観界にも起る。釈迦は此の宇宙の変化相を見て有為転変の世の中とも無常迅速の世界とも云つた。

今之れを最も卑近なる物質文明の上に徴するに彼の灯明である。太古に於ては今日の如く灯明もしくは灯火と云ふものはなかつた。日月が即ち灯明であり雪や螢が即ち灯明であつた。其れが人智の発達するにつれて自然に灯明もしくは灯火を發明する様になり夜の焼火が發明せられた。其れから自然の必要上野外灯では松明が發明せられ、松明が提灯となり、提灯が手提灯となり、手提灯が懐中電灯となつた。又た室内灯にては焼火が暗灯となり、暗灯が蠟燭となり、蠟燭がランプとなり、ランプが瓦斯となり、瓦斯が電気となつた。これは物質文明の上に起つて来た変化の一例に過ぎないが変化は物質界にのみ限られては居ない。更らに其れ以上の大なる変化を精神界に引き起してゐる。今日は即ち其の空前絶後の大変化期に際してゐるのである。

天理教では教祖出現迄の世界を一世の世界と云ひ、教祖出現以後の世界を二世の世界と云ひ、其れ自身を二世の建て換への教と云つてゐる。

一世の世界とは即ち旧世界を意味するのである。二世の世界とは即ち新世界を意味するのである。天理教は即ち旧世界の生んだ凡ゆる文明を破壊して全然新しき新文明を創造するにあるのである。

天理教の第一の特色は陽気な宗教であるといふことである。凡そ一つの物もしくは一つの場所もしくは一人の人より得る所の気分は其の物其の人其の所が真であるとか善であるとか美であるとか云ふものを感じずる前に先づ明るいとか暗いとか陽気だとか陰気だとか云ふ気分を感じるのである。これは宗教とか哲学とか芸術とかに於ても亦其うである。

吾人が今日迄呼吸して来た旧世界の空気は何となしに陰気な重苦しい空気であつた。と云ふのは人間に水中生活や穴居生活の習慣性が残つてゐたからである。けれども今日は神の所謂「明るいところへ出た」のである。従つて其の思想迄明るく陽気になつて来るのは蓋し自然の要求である。

天理教の第二の特色は積極的であるといふことである。積極的と陽気とは同一特色の様に考へられるけれども陽気と云ふのは気分を指したものであつて積極的と云ふのは力の方向をさしたものである。

天理教の第三の特色は活動的であるといふことである。過去の宗教はやゝもすれば消極的、隱遁的、觀照的、冥想的であつたが天理教の特色は既に／＼其れ等の境を超越して真に活動の境に入つたのである。これは實に天理教の特色である計りでなく、来る可き新時代の特色である。

天理教の第四の特色は向上的であると云ふことである。これは前代の頹廢的気分墮落的分子の反動である。

天理教の第五の特色は進歩的であるといふことである。これは前代の思想が進んで人格の改良社会の進歩を計らうとするよりは寧ろ退いて自分一身の一時の安全を計らうとする退嬰的気分保守的分子に富んで居つた。けれども来る可き時代は其う云ふ亡国的思想に生くべき時代ではない。更らに大いに人生の向上発展を計らなければならない。この進化の思想を引提げて生れて来たのが天理教である。

天理教の第六の特色は創造的であるといふことである。天理教が創造的宗教であるといふのは今日迄の旧世界の文明を破壊して全然新しき第二の世界を創造するにある。これは従来宗教の何れも多少持つていた特色であるが天理教の如く而かく根本的に第二の新世界を創造せんとする宗教は未だ曾つてなかつたのである。

天理教の第七の特色は建設的であるといふことである。これは天理教の所謂「限なし普請」の理想が最もよく表象してゐる。

「限なし普請」とは不完全なる自己不完全なる社会を破壊しては創造し創造しては破壊して真に完全無欠の神の社（自己、社会）を建設するにあるのである。これを称して「第一

義の限なし普請」と云ふ。「第二義の限なし普請」とは地場即ち大和三島天理教本部の神殿の不斷の建築である。

天理教の第八の特色は現実的であるといふことである。従来の宗教はやゝもすれば現実を離れて理想に傾く傾向があつた。これは宗教ばかりではない。哲学でも芸術でも倫理でも道徳でも其うであつた。けれども今日は時代が一変した。今日は理想を理想として貴ぶよりも理想の現実化云ひ換へれば理想的の現実を貴ぶ様になつた。この氣運の先驅者として生れたのが天理教である。

天理教の第九の特色は實際的であるといふことである。

天啓の聲に

「論は一寸も要らん／＼。論は世界の理で行ける。神の道には論は要らん。誠一つなら天の理。実で行くが良い」

従来の宗教は教論に重きを置いて其の實際的方面を閑却していた傾向があつた。云ひ換へれば証拠より論を重んじた傾向があつた。けれども天理教は其の反対に論より証拠を重んずる宗教である。此の論より証拠を重んずる天理教の特色は現代並に未来の特色である。

天理教の第十の特色は実行的といふことである。これは前二者の特色と血縁の関係にあるのであるが天理教が実行教である何よりの証拠は世人が奇異しつゝある御神樂のお手振りである。彼れは人間は凡て心と口と手の三つが揃はなければ完全な人間でないといふ点より心に思い、口に唱ひ、手にて舞ふのである。この実行を重んずる点こそ新時代の思想の一角である。

天理教の第十一の特色は天理教は生産的の宗教であるといふことである。

教祖の言葉に

「働きなさい／＼。人間であつて働かない者は我が教の子ではない」

と云つてあるが無為徒食することは天理教の第一の厭む所のものである。

天理教の第十二の特色は平民的であるといふことである。これは天理教の特色であるばかりでなく実に近代文明の特色である。将来世が進歩すればする程此の平民的思想が勃興して来るのである。

けれども此処に一つ誤解してはならぬことは貴族的といへば直ちに上品を連想し平民的と云へば直ちに下品を連想することである。これは貴族的とか平民的とか云ふことを真に理解しない為めに起る誤解である。平民的と云へば「低い心」と云ふことであつて全人類を一律平等視するところより起つて来る思想なり、態度なりを指して云ふのである。従つて天理教は平民的だと云ふことは過去の宗教の如く階級的でないといふことを意味するのである。更らに平民的と云ふ第二の意味は實質的内容的であるといふことである。即ち貴族的と云ふ言葉の与へる暗示は繁文褥礼、形式儀礼、虚儀虚礼、虚飾虚偽、誇大負誇といふ意味を連想せしめる。平民的と云ふ言葉は其の反対に正直、実直、勤勉、素朴と云ふ様な意味を連想せしむるのである。之れを古い言葉で云へば剛毅朴訥仁（眞実、自然）に相当するのである。又た貴族と云ふ言葉の内容は「巧言令色鮮いかな仁」に相当するのである。従つて天理教が平民的だと云ふことは天理教が實質的だと云ふことを意味するのである。この平民的特長こそ実に近代文明の特長である。

天理教の第十三の特色は普遍的だと云ふことである。凡て平民的と云ふ言葉の中には一般的もしくは普遍的と云ふ意味を含んでるのであるが此処では其れと別種の意味で普遍的だと云ふのである。即ち此処に普遍的だと云ふのは世界的とか人類的とか云ふことを意味するのである。其れは勿論全世界を大日本国にすると云ふ天理教の終局の理想より見れば特殊的にも見えるであらう。けれども其れは形式上の論であつて其の内容は全然世界的人類的のものである。

天理教の第十三の特色は通俗的だと云ふことである。従来の宗教が兎角難解の辞句を並べて人類の求理心を妨害せしに反し天理教は極通俗平易の大和の時代方言をもつて述べられてゐる。これは実に教祖の

「固いものは若い者が食べても老人や子供は食べられぬ。柔らかいものは若い者も食べる事もできれば老人子供も食べられる」

といふ言葉に表はされてゐるが如く学不学、識不識を問はず凡てのものに理解せしむるをもつて目的としたのである。然るに時代の進歩するにつれて此の通俗平易と云ふことが益々必要になつて来た。何故なれば時勢の進歩は次第に難解なる辞句の為めに多大の時間と労力とを費す余裕がないからである。天理教の通俗味は実に此の時代の要求に適したものである。

天理教の第十四の特色は實質的だと云ふことである。此の實質的だと云ふのは「外の錦よりも内の錦」と云ふ神の言葉に尽されてるのであるが凡て無用の装飾や無意義な儀式の為めに時間と労力と精力と物質とを費すことは天理教の極力反対するところである。こ

れがやがて近代文明の底を流れてゐる新しい潮流である。

天理教の第十五の特色は単純だと云ふことである。これは近代芸術の最もよく表してゐる時代相であつて凡て創造期に通ずる特色である。

天理教の第十六の特色は社会的だと云ふことである。即ち従来の宗教は多く社会と離れて社会生活とは没交渉な隠遁的生活を送るをもつて理想としたが天理教の理想は山の仙人（不生産的人物）より里の仙人（生産的人物）をつくるをもつて理想とするのである。此の一つ既に新時代の羅針盤として充分の価値がある。

天理教の第十七の特色は家族的であるといふことである。此の家族的と云ふ言葉は天理教が他の宗教よりも特に家庭生活を尊重すると云ふ計りではない。実に世界一列が一家族として結合せんとするところにあるのである。此の特色は基督教以外の過去の宗教の何れにも見ることの出来ない天理教の特色である。

天理教の第十八の特色は平和的であるといふことである。近代文明の主潮は一二の例外例はあつても大体戦争よりも寧ろ平和を愛する傾向を有するに至つたのは悦ぶべき現象である。天理教は実に此の平和の使徒である。

けれども東洋人の通弊として一口に平和と云へば無念無想無作為の状態を想像すれども天理教で云ふ所の平和は其ういふ希望もなければ生命もない無活動の状態をさして云ふのではない。人類相互が平和の關係を保ちつゝ各自の天職に向つて勤勉する積極的平和状態をさして云ふのである。

今日の戦争論者は何んな議論を述べるにした所で人生といふものは結局平和の状態に入らなければならぬものである。何故なれば戦争は決して人生の終局の幸福を意味してゐないからである。

天理教の第十九の特色は楽天的であるといふことである。凡そ宗教の数も数ある中に天理教程楽天的宗教はない。此の楽天的と云ふこともこれを浅く解釈するものには浅薄なる享楽派に墮ちる憂はあるが天理教の楽天主義は人事を尽して天命を楽しむといふ点にあるのである。天理教の楽天主義は人間は悲しむも楽しむも結局成る様にさへならぬと云ふ断念的態度より来たものでもなく又た泣いたところが悲しんだ所が泣く丈け悲しむ丈け損であると云ふ功利的運命觀より来たものでもない。神が人類を造つたのは人類の陽氣遊山を見て楽しみたいといふ意志に基くこと並に人生一切の事は凡て神意の発現であるが故に人事を尽して天命を待つと云ふ信仰上の主義から来たものである。此の楽天的と云ふことは新思想の一つの特色である。

天理教の第二十の特色は相互扶助的であるといふことである。これは必ずしも天理教特初の初説の真理ではないかも知らない。けれども人生は今日迄の所謂生存競争と云ふ残忍な動物的世界を脱して真に相互扶助の世界に入らなければならぬものである。従つて相互扶助といふことは新人生の内容であらねばならない。

天理教の第二十一の特色は日の寄進的であるといふことである。日の寄進といふことは日々の誠を神に寄進するの謂であるがこれを実生活の上より云へば日々結構に通らして戴く神の大恩に対する感謝の一念より生れた利害觀念を離れた献身的労働をさして云ふのである。来るべき新人生は正さにかくの如くあらねばならない。

天理教の第二十二の特色は科学的であるといふことである。科学的だと云ふことはやがて又た実験的、實際的だといふことを意味するのである。即ち今日迄事実を無視した空想の跋扈に対する反動である。

天理教の第二十三の特色は一元的であるといふことである。これは神と人と人と人との關係が一元的であるといふ計りでなく全人類がこれ迄もつて来た異つた風俗習慣地理歴史政治を全然手一つの理に統一せんとするのである。これが新時代の必然の要求である。

天理教の第二十四の特色は地場中心的と云ふことである。これは新人生の空間的焦点である。

天理教の第二十五の特色は神靈中心的であるといふことである。今日迄の人類生活は或は法律を中心とし、或は芸術を中心とし、或は哲学を中心として生活して来た。云ひ換へれば人間中心であつた。けれども来る可き新時代は必らずや神の絶対理想に統一せられなければならない。云ひ換へれば信仰中心の時代に到達しなければならない。

以上は天理教と旧思想との比較研究の上に成立する天理教の大体の特色であるが更らに之を實質的方面より觀察すれば天理教の齋らせる新しき特質と使命とは過去の宗教哲学のなさんとしてなし得ざりし精神的革命を根本的に完成するにある。云ひ換へれば過去の宗教哲学の荒い熊手を逸したる小埃即ちほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、かうまんに満ちたる現在の人類社会を根本的に清掃して塵一点も止めぬ清浄潔白の甘露台世界 黄金世界 を此の地上に實現せんとするのである。此の新時代の特色と使命とを負ふて生れた新時代の象徴人こそ人類の原母伊邪那美命の後身と称せられつゝある天理教祖中山ミキ子である。

釈尊（宇宙の根本現在の神国床立命の化身）在の世の予言に
我が歿後の世界には正法世に住すること一千年像法世に住すること更らに一千年、其の間に月光菩薩が表れて仏法を説くけれども奸悪なる世は之れに向つて耳を傾けるものがない。為めに正は蔽はれて邪ははびかる。けれども其の後に弥勒の世界が来る。弥勒の世界が来たならば正法は復活して世界は根本的に改革せられるであらう。

と。
思ふに月光菩薩の出現とは基督の降誕をさしたものであらう。而して天理教祖の出現こそ将さに吾人の待ちに待ち倦ぐんだ弥勒菩薩の再来なりと信ずるのである。

教祖在の世の予言に
「此の道を世界中に附け通したならば百姓は蓑笠要らず。雨が欲しければ雨を授けてやる。多ければ預つてもやる。又た百姓の仕事の邪魔になる様な時には雨は降らさぬ。月六斎に雨降らし、風はそよ／＼と吹かせ、地震もなければ海嘯もなく、噴火もなければ地這りもなく、大風もなければ洪水もなく、旱魃もなければ飢饉もない。四時の気候が調和せられて厳冬もなければ酷暑もない。外へ行くにも提灯要らず笠要らず小遣錢要らず。尚ほ人間の徳が進んで行つたならば病まず死なずに弱りなき様にしてやる」と説かれてある。誠にかくの如き黄金世界の到来は人類が長い間望んでゐた所の理想であつた。而かも其れは早晚此の世界に実現せられて来るのである。其の時来らば此の世界には一人の貪婪者もなければ一人の吝嗇者もなく、一人の邪愛者もなければ一人の憎悪者もなく、一人の怨恨者もなければ一人の憤怒者もなく、一人の強欲者もなければ一人の高慢者もなくなる。凡てが同胞兄弟として相親しみ教祖の所謂「提灯要らず笠要らず鎖さぬ（夜戸を）御代にするが一條」の世界が宛然に此の地上に実現せられるのである。

教祖の降誕

教祖の降誕日について今日伝はつてゐる所説に二つある。其の一つは寛政十年四月十八日説であつてこれは今日普通伝はつてゐる所の説である。最う一つは四月四日説であつてこれは古い戸籍簿に依つた誕生日である。今日何うして四月十八日説が一般に用ゐられてゐるか云へばこれは生前教祖の誕生日に就ては無頓着であつたものが教祖歿後に至つて憶測によつて定めたものらしい。これはよくある例である。殊に戸籍法の不完全なる時代にあつてはかくの如き誤謬は往々免かれないのである。けれども私は此処に戸籍に依つて四月四日説をとるのである。

凡て釈迦の誕生にせよ基督の誕生にせよ不世出の偉人の誕生には必らずや一種の奇瑞を伴ふものである。教祖の誕生にも亦此の種の奇瑞を伴ふてゐる。

伝説に依ると教祖の降誕日即ち寛政十年の四月四日の朝旭日の昇天する頃教祖の生家なる大和国山辺郡三味田の前川家の家根の上には五色の雲が棚引いた。其れと同時に家内には赤児の泣声が聞えた。かくの如くにして此の新時代の救世主は生れて来たのである。

幼少年時代の教祖

揺籃時代の教祖は泣いて両親を困らせると云ふことはなかつた。夜はよく眠り昼は温和しく母の懷に抱かれて只管成長を待つてゐる様であつた。普通の子供では四つになつても五つになつても汚物の世話を親にさせてゐるが教祖には二つの時から其れがなかつたといふことである。

三歳にしてよく物事を理解し四五歳の頃には生来の慈悲心が発芽して来た。即ち食物を貰つても其れを自分で食べて了ふといふことなく近所の遊び友達に分配して其の喜ぶのを見て自分も喜んだ。

七八歳の頃には花だの蝶だの鳥だのといふものゝ形を切つて友達に与へたり又た編物や袋物を拵つて子供に与へて喜んだ。

近所の母親達の忙しい時なぞには自ら其の子を預り朝から晩まで色々な玩具を取り換へ引き換へて子供の守りをして遊ばせてやつた。将来全世界の母たる所謂親心は既に此の時に芽組んでゐたのである。

寺小屋に通つたのは七八歳より十一二歳頃迄と伝へられてあるが其の頃のミキ子は他の小供の様に家を離れて遠く遊ぶといふことはなかつた。多く両親の側にあつて其の細かい用を手伝ひながら家事を見習ふのを唯一の楽しみとした。かくの如くにして十二三歳のミキ子は裁縫にせよ料理にせよ糸機にせよ婦人一人前の仕事は充分出来たといふことである。

凡て一技一能の名人は早くより其の天才を顕すものであるが教祖も亦早くより其の宗教

的天才を顕はしてゐる。

前川家は元來浄土宗の信者であるがミキ子は早くも其の浄土和讃の全文を暗誦して朝夕両親と並んで之を仏前に唱へることを此の上ない樂みとした。それが年と共に発達して十一二歳の頃には剃髮して尼にならうと云ふ決心を小さな唇より漏らす様になつた。

教祖の結婚

十二歳の秋官幣大社石上神社の大祭に父 前川半七正信 に伴はれて隣村庄屋敷村の親戚中山善右衛門方へ行つた。之れを機会に中山家と前川家との間に縁談が開始せられたのである。ミキ子は此の縁談に対しては敢て進んで同意するでもなかつたが又た強めて不同意を表はすでもなかつた。唯

「結婚後觀經和讃を許されるならば」

といふ世にも珍らしい条件にて両家の間に婚約が結ばれた。

中山家では始め此の条件は少女の口より出た無邪氣の戯談として受取つたのであるがミキ子にとつては決して無邪氣な戯談ではなかつた。彼女にとつては真に真面目なる宗教心の要求より出たものであつた。其の証拠に結婚後ミキ子は

「中山家の嫁御は氣が狂うたのではあるまいか」

と善悪なき村の賤女の噂に上つてゐるのにも耳を傾けず朝夕の觀經和讃を実行したのに徴して明かである。

ミキ子と善兵衛氏との正式の結婚は或は十三歳とも云ひ或は十五歳とも云はれてゐるが当時両家の縁談を立ち聞きしたミキ子は母に漏らした言葉に

「嫁なら行くし子なら行かぬ」

と云つたと云ふ言葉より推測して見ると両家の間には一二年の間は養女として貰ひ受け改めて一定の年齢に達してから正式に結婚をさせやうと云ふ下相談があつたらしい。其れを聞いてミキ子は此の言葉を母に対して漏らしたものと思はれるが兎に角十三歳の時中山家に行く時は養女として行つたものではなく嫁として五荷の荷物をもつて行つたことは明かなる事實である。

(大和地方では嫁の身分を示すに荷物の荷数によつて定める習慣がある。五荷の荷物と云へば上の部である)

花嫁時代の教祖

教祖は元來蒲柳の質であつたが其れにも係らず中山家に嫁してよりは朝は家族に先つて起き夜は家族に遅れて寝ね暫時も身体を遊ばせて置くと云ふことはなかつた。往々内の雇人等が眼を醒して起き出やうとすると

「お前さん達は昼の働きで疲れて居るからもつと休んでお居でなさい」

と云つて休ませて自ら焼火から朝飯の用意をするを常とした。又た夜休む時は一同を寝せてから自分は家人の氣附かぬ様に起き出で、昼仕残した仕事をした。殊に常人に出来ない事は其の臥床前の三十分乃至一時間は両親の身体を按摩せず床に就いたことはなかつたといふことである。

後日教祖が人に語つた言葉に教祖のしなかつた仕事は荒田起しに溝掘り。此の二つを除く外の仕事は何んな仕事でも手につかない仕事は一つもないと云ふことである。而かも一旦仕事に従事するや天性の器用と生得の熱心とは常に常人の二倍の仕事をしたといふことである。

両親を始め夫善兵衛氏は余りに教祖の過激なる労働をするのを見て屢々其れを止めたが教祖は常に之れに向つて

「身体は使ふ為めに神様がお貸し下されたのを今迄は余り大事にされ過ぎた為めに却つて弱かつたがこれから確つかり使はして戴かうと思ひまして」

と答へるのを常とした。

かくの如く彼女が両親や夫を始め下女下男に対する態度が何処一つとして非点の打ち所のない鮮かな勤め振りであつたから結婚後五年即ちミキ子十七歳の時両親より一家の世帯を任せられた。もつて彼女が尋常一様の婦人でなかつたことを知ることができる。

主婦としての教祖

庄屋敷では安達金持ち善右衛門様地持ちと云はれた程の豪農であつたから召使の者も一人や二人ではなかつた。ミキ子が其等の雇人を使ふ方法は世間の所謂使へば使へ得と云ふが如き無法の使用法ではなかつた。使ふ時は充分使つてもいたはることも亦充分にいたは

つた。殊に祭日とか休日等には弁当迄持たせて遊びに出したといふことである。
ミキ子が中山家の主婦となつた二年目即ちミキ子十八歳の時一夜中山家の綿倉に一人の
綿盗人が入つた。が幸か不幸か其の盗人が綿を一荷ウンと盗み出さうとした所を内の下男
に発見せられた。盗人は其処に荷物を投げ出して心得違ゐを詫びたが中山家の隠居善右衛
門氏は将来の為め代官所へ引き出す様にといふことを下男に命じた。其処へミキ子が出て
「此の盗人も貧の盗みで腹からの盗人ではなからうと存じます。此処で此の人を代官所へ
出せば罪人となつて一生人中へ出られない人間となります。将来の為め心得違ゐの所は充
分申し聞かせますから此の度は私に免じて免るして戴きたい」と願つた。善右衛門氏もミキ子の殊勝な心掛けに感じて之れを免るした。其処でミキ子は
盗人に向つて其の不心得を説き聞かした上更らに一重の綿を添へて
「サアこれをお持ちなすつて下さい。これは何代か以前の内の先祖が貴方に借をして置い
たものですから遠慮なく御持ちなさい。又此の綿は之れは利息だと思つて持つて行つて之
れを資本にして堅気の商売をして下さい。これが私の頼みで御座います」と
と詫びられる人が却つて詫びて傷を附けずに其の盗人を帰した。其れから再び両親の前に
出て
「誠に今程は有難う御座いました。就ては誠に御両親に申訳のないことを致しました」
と云つて盗人の盗んだ綿と尚ほ其の上に綿を添へて帰したことを述べ
「其の代り私は木綿物は一生着るだけ内から貰つて来て居りますから其れで通らして戴き
ますから」と云つて両親に謝した。両親もミキ子の英断を賞讃して
「其れは良い事をなさつた。今後も決して心配に及ばんから内のものを使つて下さい」
と云つて其の場は首尾能く治まつた。其の後二三日経つと前の盗人がボテ振りになつて来
て
「私も彼れを資本に此う云ふ商売を始めましたから今以後共に宜敷く御願致します」
と云つて礼に来たといふことである。此の真心をもつて人を愛するこれが彼女の一生を通
じて変らない唯一の感化法であつた。
其の頃孫見たさの両親の寝物語に
「内の嫁は申分のない良い嫁だけれども何分子供がなくて困る」
と語り合ふ声がミキ子の耳に入つた。ミキ子も成程子供がなくては先祖に申訳がない。こ
れは剃髪して尼となつて衆生済度の傍此の家を立てる様にと決心して其の意志を近隣のあ
る懇意なお婆さんにほのめかした。お婆さんはミキ子に向つて
「貴女マア其う短気をお出しになるものではない。十九や二十で子供のあるもないもあり
ません。マア最う暫時お辛抱をなさつたが良う御座いませう」
と云つて止めた。ミキ子も其の言葉に力を得て出家を思ひ止まつたといふことである。
こう云ふことが動機になつてミキ子は益々仏法に親しむ様になり遂に文化十三年二月勾
田様の善福寺で五重相伝を受ける様になつたのではないかと思はれる。
其れにミキ子をして最う一つ仏法を頼らしむるに至つた他の動機があつた。其れは夫善
兵衛と下女かのとの不正の関係である。

妻として耐へ難き苦痛の経験

或る書では夫善兵衛とおかのとの関係を中年の恋の様子に書いてあるが彼れは誤つてあ
る。此の二人の関係は善兵衛氏とミキ子との間に子の無い間而かも両親在世中の出来事であ
る。
ミキ子は此の二人の間の不正の関係を知りつゝも決して世の常の婦人の如く嫉妬に気を
狂はして常規を逸した醜態を演ずるといふことはなかつた。否寧ろ其の反対に二人の關係
が密なれば密なる程皆なこれ自己の不徳の致す所と足納して静かに二人の迷夢の醒めるの
を待つていた。然るに凡婦の浅間敷さにはおかの教祖が柔しくすればする程増長して教
祖殺害の悪心をおこし一夜教祖を刺さんとして果さず、更らに毒殺せんとしてこれも失敗
した。
本人の教祖はかのの悪計によつて一旦毒は嚙下したが幸ひ吐瀉して了つたので身体には
何の障りもなかつた。其の時周囲の人々はこれをかかの悪計と知り表向きの沙汰にせうと
したが教祖はこれを止めて
「これはかのが悪いのではない。私に何か心得違ゐの所があるから神様が私の腹の中を掃
除して下さい」
と云つて二人に対する態度は聊かも従前と異なる所はなかつた。凡婦には出来難いことであ
る。
然るに善兵衛もおかのもこれに依つて自分等の關係が道ならぬ關係であつたことを自覚
し遂に教祖の前に今日迄の罪を謝するに至つた。

其の時の教祖は弥陀の精神其の俛両人の心よりの懺悔を納受しおかのには尚ほ半年の間行儀作法等仕込んだ上嫁入の仕度迄して相当の家に嫁せしめた。此の敵も味方も一視同仁の教祖の至誠に感応して今迄仇敵であつたかのは改つて教祖の無二の味方となり終生中山家に入出入したといふことである。此等は教祖ミキ子が青春の色香もさめぬ新妻時代に残した世にも貴き不滅の足跡であるが此処に止まつて暫時考へなければならぬことは教祖ミキ子に依つて示された絶対道徳と世間一般の相対道徳との区別である。

絶対道徳と相対道徳

今日の一般の婦人の道徳は夫夫たらざれば妻妻たらず夫夫たれば妻妻たることである。(男子の場合も同じ)即ち相手の態度の善悪に依つて自己の去就を決するのが今日一般に行はれてゐる婦人道徳である。けれどもミキ子の通つた絶対道徳は

夫夫たらずとも妻妻たり

夫夫たるも妻妻たり

と云ふのである。即ち相手の態度の如何に係らず終始一貫眞実をもつて貫く此処に絶対道徳の權威がある。

前者の道徳即ち相対道徳は一見合理的の様に思はれる。けれども其れは眞に自己並に社会を治める所以の道ではない。何故なれば他人が我に向つて善をなしたるが故に我も亦他人に向つて善をなし、他人が我に向つて悪をなしたるが故に我も亦他人に向つて悪をなすならば此の世界には悪の亡ぶる時がない。此の欠陥を救ふものが天理教の所謂絶対道徳である。

凡て凡夫凡婦の手にて授けられたる瓦は聖者の手より再び凡夫凡婦の手に帰る時は既に玉と変じてゐるのである。而かも此の眞実自然の絶対道徳は一身の利害を中心として進退を決するものにとつては不可解の道徳である、けれども此の不可解の道徳を万人に理解せしむるのがミキ子の使命である。

母としての教祖

文政三年に隠居の善右衛門を失つた中山家は翌年の七月二十四日に長男善右衛門(後秀司と改む)を挙げミキ子は始めて人の子の母となつた。これで結婚後長い間教祖の胸を痛めて居た子供の問題は解決せられたのである。

之れより先き夫善右衛門氏を失つた善兵衛氏の母(姑)は大病で五体の自由を失つたが教祖は妊娠中に係らず之れを負ふて其の好む所へ行つた。

教祖の精神

蓋し教祖の精神を解剖すれば彼女には人を喜ばせる人を樂ませると云ふより外何物もなかつた。従つて人を喜ばせ人を樂ませる為めには自分は如何なる難境に立つも敢て辞する所がなかつた。これが眞実の愛である。此の眞実の愛は後に我が二人の寿命と我が寿命迄天に捧げて人の子を救ふ大慈大悲の善行功德とはなつたのである。

教祖が一生の中に経験した最大の愛

教祖は文政四年に長男善右衛門を挙げてから同じく八年に長女政子を挙げ、同じく十年に二女安子を挙げた。教祖は出産の度毎に乳が沢山あつたから隣家の足達源右衛門の息照之丞の乳の不足なるを憐れみ引き取つて養育してゐたが文政十二年の四月に疱瘡にかゝつて十日目には黒疱瘡に変じた。近所の医者と云ふ医者にかけて見たが何れも皆匙を投じて了つた。其れで教祖は最早や人力の如何ともすることの出来ないことを悟り一夜氏神に詣で

「もし照之丞の生命をお助け下さるならば長男を除いて二人の子供の寿命を捧げます。もし其れで足りない様ならば我が寿命迄も捧げます」

と云つて一心籠めて祈願した所忽ち靈感あつてさしも危篤と伝えられた黒疱瘡が薄紙を剥ぐ様に本復した。

此の事あつて以来間もなく二女安子は歿した。其れから天保二年に三女春子を挙げ、四年に四女常子を挙げたがこれも三年目即ち天保六年に歿した。最後に生れて来たのが末女小寒子である。

天保九年に教祖に神憑があつて刻限／＼のお話に

「此の世に何が可愛いと云つても我が子程可愛いものはない。其れを二人迄も天に捧げ尚

ほ其の上に我が寿命迄も上げて人の子を助ける精神と云ふは元人間を生んだ伊邪那美命の魂であるから。其れを天より見澄して天降り万人助けの道を授けるのである」

と。又た二女安子の死について

「いかに覚悟の前とは云へ一時に二人の子供を引き取つては気の毒故一旦安子一人を引き取り其れを常子として生れさせてこれも引き取り其れで二人の寿命を天が受け取つた」といふ天啓があつた。此の常子の魂が生れて来たのが後に「若い神様」と云はれた末女小寒子である。

此処に吾人々類が心を鎮めて学ばなければならぬのは教祖の絶対無限の愛と云ふことである。

世人は往々愛と欲とを混同視して愛即ち欲欲即ち愛と思つてゐるけれども其の間には天地の區別があるのである。欲とは取ることである。愛とは与へることである。教祖の愛には欲はない。唯純粹無垢の愛がある計りである。而かも我が子二人の寿命を与へ尚ほ其の上に我が寿命をも与へると云ふことは愛の極致である。

凡そ大なる価値を得んと欲せば大なる犠牲を払はなければならない。教祖に神憑があつたのも偶然ではない。誠や此の絶対無限の愛なればこそ今日並に今日以後万人の母として尊敬せらるゝのである。

天啓の聲に

「サア／＼これを良ふ聞き分け。価と云ふものも与へる心なくばならん。与へのない処へ何も価はあらせん。これだけ心にもつてくれにやならん」

我に与へる心あつて天に与へる心あり、我に施す心あつて天に施す心あり。価は即ち与へである。与へ即ち人に慈悲善根の愛がなくば天の価は決して我に下ることはない。

「我が身捨てゝも構はん。身を捨てゝもと云ふ精神もつて働くなら神が働らく」

のである。

教祖九十年の生涯其の間有形無形の所有物を人に施与した慈悲善根は数へるに違がない。けれども此の眼目はと云へば我が子二人の寿命を与へ尚ほ其の上に我が寿命迄も与へた偉大なる愛に如くものはない。此の一事は実に教祖伝中の花であり、実であり、核である。

神憑

教祖に神憑があつたのは天保九年十月二十三日教祖四十一歳の時である。此の日麦蒔きに畑に出て居た長男の秀司が小昼過ぎに足が痛いと言つて畑から帰つて来た。中山家では人を長滝村の修験者市兵衛の元へ走らせたが市兵衛は恰度中山家の隣家の乾家に亥の子に招かれて来て留守であつた。其れで使を再び隣家に走せて市兵衛が来て祈禱の用意に取り掛つた。其れが恰度二十四日の夜明前であつた。

(秀司氏にはこれまで七八回も同じ様のことがあつた。其の度市兵衛に祈禱を頼んで全治した。今度市兵衛を頼んだのも其れが為めである)

然るに其の日は何時も市兵衛の加持台に立つ勾田村のおそよと云ふ巫女が矢張り亥の子に招かれ出て行方不明であつたので臨時ミキ子を加持台に直して祈禱に取り掛つた。暫時するとミキ子の容貌態度が一変すると見るや一人の神が降つた。

市兵衛下つた神を尋ると

「我は天の將軍である」

市兵衛もこれまで色々の神に接したが天の將軍と云ふのは始めてゝあるから

「天の將軍とは何方様で御座います」

と尋ると

「天の將軍は月日じや」

「根の神実の神である」

「此の屋敷は世界始めの元の地場世界一列助けに天降つた。皆が心得」

其の音声と云ひ態度と云ひ恰かも三軍を叱咤するの漑があつた。其処に居合せたる人々は其の威厳に打たれて思はず平伏して居ると神は其の宣言を水の流るゝが如くに述べて行く。

「よつてミキの身体は神の社と貰ひ受ける。異存はあるまい」

善兵衛を始め其処に居合はせたる人々は余りに思ひ掛けぬ突然の要求なので返答に困つてゐると

「今云ふたこと異存はあるまい。今云ふたこと不承知あるまい。主人返答は何んとある？」

」

其処で善兵衛よりミキを神の社とすると仰せられても彼女は五人の母でありますから差上かねますと云ふことを申上ると

「神の云ふこと聞き入れぬとあらば家は断絶。当屋敷を一矢の中に黒焦にする」と云ふ強硬な宣告である。

此の云ふ問答が神と人との間に続くこと二昼夜。其の間ミキ子は水一滴飯一粒口にしない。其の様子を見るに見兼ねて漸く二十六日の朝に至つて承知の旨を申上ると「満足／＼」

の二語を残して神は退参になつた。これが天理教の立教日である。

天理教成立の由来

此処に注意して置かなければならぬことは天理教成立の由来である。

天理教々典には人間の徳が進歩して所謂、靈淵に一瑣滓なきに至れば神明之れに授くるに救世の大任を以つてすと云ふ様なことを云ふて居るが天理教の成因と云ふものは徳さへ積みば誰でも濟世救人の大任を授けられる、其んな単純なものではない。屋敷に人間始め元の地場と云ふ深い因縁あり、教祖に人間最初宿し込んだ元なる親と云ふ切つても切れぬ因縁あり、瞬刻限（時節）と云ふものがあつて始めて天理教と云ふ世界最後の宗教が成立したのである。従つてこれを以つて在来のありふれた宗教と同一視することは出来ないのである。此の点に於て天理教々典の如きは全然天理教の立場を誤解して居る。

天理教々祖としての中山ミキ子

世間では今日の天理教は始めより今日の如きものであつたと考へる人があるかも知らない。又た天理教の教祖も始めより晩年の教祖の如く神秘不可思議な天啓人であつた様に思ふものがあるかも知らない。けれども其れは皆誤つてゐる。

天理教は始めより三百万四百万の信徒を有した天理教でもなければ天理教祖は始めより晩年の教祖の如き精神内容をもつたものでもない。皆小より及ぼして大に至つたのである。

お言葉に

「道の発達は世界の発達」と云ふお言葉があるが初期の天理教は其うではない。寧ろ道の発達は教祖の発達と云つて良かつたのである。

天啓後の教祖は凡そ二期に分つことが出来る。

第一期は物質的救世主としての教祖である。

第二期は精神的救世主としての教祖である。

第一期の物質的救世主としての教祖は四十一歳に天啓があつてから以後夫善兵衛氏の歸幽後迄約二十年の間であつて此の間は専ら物質をもつて社会を救済した。教祖の言葉によると六十になつて始めて神の世帯をもつたと云はれてゐるが眞の意味の救世主としての活動は六十歳以後である。其れで天啓以前の教祖を救世主として第一期の準備時代とすれば天啓後六十歳迄は救世主としての第二期の準備時代と見ることが出来るのである。眞の意味の救世主としての活動は晩年の三十年である。

貧のドン底

天啓後間もなく教祖の受けた天啓は

「世界助けの爲め谷底に落ち切れ其処から本道が見えて来る」と云ふことであつた。

其れで教祖は先づ自分の手廻りの物から施を始めたのである。其の施をなすにも教祖の施は世の所謂慈善家と異つてゐる。

彼女は先方より襤褸を纏ふた寒相な人間が来ると先づ其の人の行く先きに廻つて着物を置いて置く。其の人が正直な人なればこれは内のものではないかと云つて届けて来る。其の時教祖は

「これは内のものではありません。其れは貴方へ授かつたのだから遠慮なくお持ちなさい」

と云つて持たせてやる。其の人が

「其れを有難う御座います」

と云つて持つて行けば其の後姿を見送つて手を合せて

「御苦労様」

此う云ふ風に食ふ物がなければ食ふ物を持つて行つてやる。着る物がなければ着る物を持

つて行つてやると云ふ風に成らん者不自由なものに施して自分の実家から貰つて来た五荷の荷物は忽ちの間に施して了つた。

其れから段々中山家の金銭米穀を施してやる。其れも限りあるものであるから何時かは尽きる。今度は田地畑に手を附ける。其れを拒めば直ちにミキ子の身体は病氣になつて了ふ。止むなく夫の善兵衛も黙つて見て居たが段々内の財産が減つて行くにつけて世間では色々の噂さも立つ様になり親類よりも注告されるので神に誓つた誓言も忘れて一夜教祖を先祖の位牌の前に座らせて来し方往く末のことを語り聞かせた上もし狐狸の業ならば此の止め度もなき慈善を止めて呉れ止めぬとあれば先祖への申訳にお前の生命を貰はねばならぬと云つて先祖伝来の刀に手を掛けて迄嘆願したが教祖はこれに対して

「貴方の仰せは尤もでは御座いますが最う暫時の御辛抱を願ひます。神様は一粒万倍にして返して下さるから」

と云つて手をついて夫の前に謝した。夫も人に物を貸しても催促もし得ない様な善人であるから其の場は其れで治まるが其れも永くは座視するに忍びない。其れで度々異見もし反対もした。此の間にあつてミキ子の経験した精神上の苦痛は善兵衛の経験した其れよりもより以上に深刻なものであつた。即ち神の云ふことを通さうとすれば内々の者が反対する。内々のものゝ云ふことを通さうとすれば神の言葉を無にする様になる。遂に煩悶の結果死を決すること前後三度其の度に彼女の耳に聞ゆる神の声

「短気を出すな。今暫時の辛抱」

強めて決行せうとすれば五体が縮つて動くことが出来ない。其れで仕方なく思ひ返して自分の不心得を神に謝すると再び身体が動く様になる。

此う云ふ具合で天啓後の中山家は一家の心が個々別々で統一と云ふものを失つて了つた。従つて傍の見る眼は随分哀れに陰気なものであつた。けれども其れにも係らず神の思はくは着々実行されて天啓後十年には中山家の財産は殆んど施して了つた。けれども神は其れでは満足しない。更らに家を毀つて施せと云ふ神命であつた。

其の家を毀つ時には人は中山家の零落するのを気の毒がつたが一人教祖のみは大勇みで「サア／＼皆さん祝つて下さい。これから世界の普請にかゝるのだと云つて神様は大喜びで御座います。何もないけれども祝つて下さい」

と云つて手伝に来た人達に酒肴の御馳走をして其の労をねぎらつた。此処に教祖の偉大なる精神が遺憾なく發揮せられてゐる。

天啓の声に

「天理王命と称する源由は元無い人間無い世界を拵へた神である。サア神の社になることは小さい百姓家より大きな百姓家へ来た様なものである。」

と云ふ言葉があるが此の時の教祖は最早や何処から観察しても中山家の主婦中山家の母ではない。

世界の主婦万人の母

である。彼女が自分の家の毀されるのを見て大勇みに勇んだのは彼女にとっては最も自然な行為である。

夫の死

中山家が毀たれた屋敷の跡に雑草が生えるのを見て夫の善兵衛は亡くなつた。其れが嘉永六年教祖天啓後十六年目である。

其の頃の中山家は貧の谷底に落ち切る真最中であつて一家族が塩と水とで通る様なことも往々あつた。其の間にあつて教祖は道を宣伝する傍賃機を織つたり賃糸をとつたりして衣食の資を得長男の秀司は薪や青物を町に売つて生活を支へて居た。又た末女の小寒子は仕事の傍母を助けて布教に従事した。（此の頃は二人の女は既に他に嫁してゐた）此の二人の兄妹が神命を奉じて始めて大阪に布教に出たのも此の年である。

最初の産屋助け

産屋の理を説けば長くなるが婦人が七十五日産屋にあると云ふのは人間の母親伊邪那美命が七十五日かゝつて人間を全部生み下ろした御恩報じの為めである。けれども此の度人間元生み下ろした元の親が表れてだめの教（世界最後の宗教）を始める証拠として七十五日の産屋の不自由を三日に縮め三日目より常の如く働かしてやると云ふのである。其う云ふ理由で初期の天理教では天理王命のことを特に産屋神様／＼と云つて方々から願ひに来たものである。

凡て産屋助け計りではない。病人の救済で貧人との救済でも教祖が身自ら一度実験しないと云ふことはない。教祖が貧の谷底に陥つたのも人間は難儀不自由をして見なければ難儀不自由な人の苦勞がわからぬ。難儀不自由な人の苦勞がわからねば同情と云ふものが無い。同情がなければ眞の助けと云ふことは不可能である。其れで神は教祖を一旦貧の谷底に落して貧苦の味を経験せしめ更らに産屋助け病助けの実験までなさしめたのである。

第一回の産屋試しは教祖神憑後四年目自分自身に産屋試しの経験を受けられた。其の時は分娩後自分で一切掃除して何時もの如く立ち働かれたのである。第二回の産屋試しは安政二年教祖五十八歳の時三女春子の出産の時産屋許るしをなされて安産させた。これが親戚に産屋試しの始め

第三回は安政五年六十一歳の時隣家の百姓惣助と云ふ者の妻お雪といふ婦人に産屋許るしを与へられた。これが他人に対する産屋許るしの始まり。

爾来神を信じてお願ひに来るものにはお助けがあつた。今日大和地方では未信者でも難産の時は天理教へお助けを戴きに来る。其れでも不思議にお助けを戴いて軽るきは生むと直ぐ重きは三日目より常人の如く働くことが出来るのである。これが為めに庄屋敷の産屋神様と云ふ名が一時専ら地方に喧伝せられたのである。

最初の病助け

教祖が始めて病助けの靈力を天より授かつたのは天啓後十年目である。

一日一家は朝来の断食の為に空腹を忍んでみると表より杖に縋つた一人の病人が「庄屋敷のおみき様といふのは此方で御座いますか」

と云つて入つて来た。

「私は人から庄屋敷のおみき様へ行つて願へば病気がよくなると云ふことを聞いて参りましたが私の病気をよくして戴けますまいか」

其の頃のミキ子は未だ病人助けの経験はなかつたから

「私はミキで御座いますが其れは人違ひで御座いませう」

と云つて見たものゝ兼ての天啓に

「貧の谷底に落ち切れ。其れから先きは珍らしい助けをさす」

と云ふことを思ひ出して

「マアお上りなさい」

と云つて病人を上げ、胸に手を当てゝ考へて居ると

「あしきを払ひ助け給へ天理王命とこれを三遍づゝ三遍唱へて病人の身体を撫でれば助かる」

と云ふ天啓に接したので其の通りすると不思議にも其の病人は即座に癒され帰る時は杖を捨てゝ歸つた。これが病助けの始めである。

道の発展と社会の迫害

此等が原因となつて元治慶応にかけてはボツ／＼信者が出来て来た。其れと同時に神官僧侶の間に反目嫉視するものが出来て一難去れば一難来る、教祖の一身は全く火中に包まれる様の悲境に陥つたのである。殊に明治七八年より明治二十年教祖昇天に至る迄の間は官憲の圧迫甚しく一人の信者でも屋敷の中へ引き入れゝば直ちに罰金もしくは拘留に処せられたのである。其の為に一時は宿屋兼空風呂の鑑札を受けて信者の便宜を計つて居たが何処迄も教祖を誤解して居る官憲は其の空風呂の中に薬品を投じて迄罪に陥れんとした、其れ計りでない御簾を飾れば御簾を取つて行く鏡を飾れば鏡を取つて行くこれを今日より論ずれば当時警官が天理教に対して用ゐた法の乱用は随分問題になるのであるが如何にせん当時の天理教は四面楚歌の中にあつたので如何ともすることが出来なかつた。

巡查が拘引に来ると教祖は

「サア／＼又来たで／＼子供にや何うも仕様ない」

と云つてサツサと仕度をして何処かへ客にでも行くかの様にイソ／＼として出て行くを常とした。

警察や監獄へ行つても警官や獄吏に対すること子供の如くであつた。最後に櫛本署に十五日間の拘留に処せられた時の如きは巡查の苦勞をいたはる為め表を通る菓子屋を呼び入れて買つてやらうとして付添人に注意せられ始めて警察署なることに氣附いた様であつた。

彼女に取つては至る所これ我が家逢ふ人これ我が子であつて人の様に自他の區別はなかつた。唯監獄もしくは警察の飯のみは不浄の飯だと云つて一粒も口にしなかつた。其の間の飲食物と云つては唯水あるのみ。

当時官憲の彼女に加へた暴行は随分甚しいものであつた。或る時は頭より水をかけたり或る時は親指と親指とを縛つて天井に釣るして拷問したとさへある。而かも如何なる暴行を加へられるも神色自若として毫も動ずると云ふことはなかつた。かくの如くにして彼女が警察もしくは監獄に監禁もしくは拘留せられること前後十八回罰金もしくは科料に処せられたこと数を知らない。

昇天と昇天の理由

今日の天理教界では彼女の長男秀司氏も末女小寒子も共に一身を捧げて教祖を助けた様に云つて居るけれども實際は其うではなかつた。成る程末女小寒子のみは身装も構はず母を助けて神に仕へたが其れも晩年には教祖の止むるをも聞かず梶本家へ嫁入して死んで了つた。秀司は始めの程は善かれ悪かれ教祖と生活を共にして来たが晩年松枝子を娶つてからは兩人共教祖に反対して余程彼女をして苦境に陥らしめた。殊に松枝子（松枝子は明治十五年教祖に先つこと六年前に死んだ）の欲深い歪んだ性質は事毎に教祖の感情を害する事多く為めに五十年の後半生中真に一日と雖も心の休まつたと云ふ日に逢はずに明治二十年正月二十六日百十五歳の定命を二十五年縮めて昇天した。これについては色々の不審を抱くものがあるが彼女が定命を縮めて昇天を急いだのは「何時迄此うして居ては傍も分らん。世界も分らん。助け一条遅れて了ふ」と云ふにあるのである。宜なるかな彼女の昇天と共に世界の天理教に対する圧迫も止み翌年二十一年には教会を設置して公然布教が出来る様になつた。

天理教祖の理想

天理教の理想は「谷底をせり上げ高山を見下し世界を直路に踏み平らすといふことにあつた。之れを詳しく云へば今日の世界は上流下流の區別があるが将来は人類の人格的価値を向上せしむると共に其の生活の程度も向上せしめて人類間に上下の區別を根絶せんとするのである。此の理想を具体的に表現したものが地場中心主義である。地場中心主義とは御神樂歌の十下り目に示されてある一ツひのもとしよやしきの かみのやかのぢばさだめ二ツふうふそらうてひのきしん これがだいゝちものだねや三ツみればせかいがだん／＼と もつこになうてひのきしん四ツよくをわすれてひのきしん これがだいゝちこえとなるの所謂人間始め世界始めの元の地場大和庄屋敷天理教本部甘露台霊地を中心として不老不死無病息災の道徳的理想の世界を実現せんとするのである。■■の理想の世界を称して甘露台世界と云ふ其の時来れば全世界には一つの歴史一つの地場一つの風俗一つの習慣一つの言語一つの文章一つの宗教一つの政治に統一せられるのである。而してこれ■■一するのは實に日本人 神の長■■ の先天的特権である。日本見よ小さい様に思たれど根が表れば恐れ入るぞやだん／＼と何事にも日本には知らん事をばないと云ふ様に今迄は唐（外国）や日本と云ふたれどこれから先きは日本計りや

信ずべき人格と信ずべき宗教

世間では天理教と云へば愚夫愚婦を迷はす愚民の宗教の如く信じ天理教祖と云へば愚夫愚婦を迷はす妖婆の如く信じてゐる。けれども其れは其う信ずる人自身に真に宗教に対する批判力人格に対する批判力の欠けたることを証明するものである。天理は明かに愚民を迷はす愚夫愚婦の宗教ではないのである。もし天理教を利用して愚夫愚婦を迷はすものがあらば其れは天理教其の者が悪いのではなく天理教を利用して邪欲を充さんとする教師が悪いのである。此の二者の區別を明かにしなければならぬ。次には教祖の人格である。古来何時の世にか生命土地財産名誉を捨て更らに其の上に最愛の夫に反き最愛の子供を捨てゝ迄万人の為めを計つた悪人があるか？ もし其れをしも悪人と云ふならば此の世に善人と称すべきがあるであらうか？ 吾人は未だ曾つて其う云ふ者のあつた例を聞かない。天理教■■をもつて愚夫愚婦を迷はす妖婆の如く毒言するものは正に此の種の黑白顛倒論者である。何故なれば人は皆日の寄進をなさざるべからず

人は皆互ひ助け合ひをなさざるべからず
人は皆朝起きをせざるべからず
人は皆正直ならざるべからず
人は皆働かざるべからず

と教へ且つ自らこれを實行した彼女の思想生活はこれ天理であり、天理に合した生活であつて些の非点を打つべき性質のものではないからである。否な／＼今後の人類は是非共かくの如き思想を有しかくの如き信仰に生きざるべからざるからである。

新時代の象徴人

古来宗教の数は多い。又た偉人の数も多数である。けれども今日は人生の定義が變つた如く人の定義も亦變つた。今日並びに今日以後の人間は家庭を離れ社会と斷つた遊離的人物不生産的人物であつてはならない。家庭の一人社会の一員として活動する活動的人物生産的人物でなければならぬ。云ひ換れば今日並びに今日以後の人間は所謂「山の仙人」であつてはならない。「里の仙人」とならなければならぬ。更らに詳しく云へば今日並びに今日以後の人物は

第一に朝起者ならざるべからず
第二に正直者ならざるべからず
第三に働き手ならざるべからず

これが天理教祖の画いた新時代の理想の人物である。而して彼女は此の新時代の理想を具体化した新しき象徴人であつた。

けれども此処に一つ注意しなければならないことは天理教祖の教へた朝起きと正直と働きのをもつて利己的の方便として同一視せざらんことである。何故なれば彼女の教へた朝起き、正直、働きの決して一個体の盲目的欲望を満足させる為めではなく其れ自身が人生の眞の目的であつたからである。わけて働きの意義については注意しなければならぬことは世人は屢々働らきの意義を誤解して利己的労働と同一視するからである。

けれども教祖の教へた働らきの意義は傍樂即ち周囲の人々を安樂ならしめんが為めの活動を云つたのである。これが即ち彼女の所謂互ひ立て合ひ助け合ひ」である。此の「互ひ立て合ひ助け合ひ」の教理と表裏の關係を有する教理に「日の寄進」がある。これは日々の眞実を神に寄進するの謂にして其の本体は正直其の者に外ならない。従つて今日並びに今日以後の人間はかくも定義することが出来る。

第一 新時代の人間は相互扶助主義者ならざるべからず
第二 新時代の人間は日の寄進主義者ならざるべからず

之れを縮めて誠の人（真人）と云ふ。

奸悪なる世界と幼稚なる社会とにあつては天理教は愚夫愚婦を迷はず淫祠邪教と誤解せらるゝであらう。又奸悪なる世界と幼稚なる社会とにあつては天理教祖は愚夫愚婦を迷はず妖婦と誤解せらるゝであらう。けれども

人は互ひ助け合ひをせざるべからず
人は日の寄進をせざるべからず
人は朝起きをせざるべからず
人は正直ならざるべからず
人は働かざるべからず

更らに云ひ換へれば

人は誠（眞実）ならざるべからず

と教へた天理教祖の言葉を其の言葉を自ら實現した彼女の人格と生活とは眞実である更らに偉大なる眞実を人類を生子且つ育てゝ今日人類に迄発達せしめた計りでなく更らに彼等をして眞の幸福に達する道を教へんが為めに一身の利害を忘れ有りと凡ゆる人生の難苦を通つて根の教、本の教、実の教、止めの教を実伝した偉大なる眞実である。此の眞実こそ今日は知らず将来の人類より永遠に感謝せらるべきものである。

教祖歿後高弟飯降伊蔵を通じて語られた天啓の声に「雛型の道より道はないで。何程急いだとて／＼行きやせんで。雛型の道より道はないで」

と教祖は實に神が人類の為めに下した新しき典型人であつた。今日迄天理教に反対した人々並びに将来天理教に反対する人々も最後の終局には神が人類の為めに示した此の最後の雛型の道を通らなければならん様になる。これは世界の進歩と神の予言とに徴して明かである。

（紀元十億七十七年

一月六日）

「生れ故郷は其の俣置いて置くのや」と神様が仰せられますから其の俣に致して置きますけれども雨漏りだけでも直さないぢや何うもならんと管長様（前管長）が仰せられますから雨漏りだけ普請させて戴いて居ります。

教祖様も始終生れ故郷／＼と仰つてな暇さへあれば此方へお居でになりました。

此の家はこんな丸天棒で御座います。只今は皆んな立派な家が建ちましたけれども昔は此んな丸天棒で立てたのは中々立派な家で界限でも此んな家は御座りませなんだ。

神様が

「生れ故郷は其の俣置いて置くのや」と仰りますから大地震にもあひますしな大風にもあひますしなそれでも此の家は何うもなりません。

私は教祖の姪になりますが矢張り此の家には生れました。九つの時中々の大地震が揺りましてな。其れからチヨイ／＼地震が揺りますけれどもほんの埃見たいのもので御座います。

其の時は中々内へ入つて居られん様で御座りました。其の時向ふの灯籠がこけてかけた俣で建てゝあります。此の間も管長様が御いでになりました。

「彼の灯籠はこけてゐる。危いなあ」と仰りました。

唯今は方々から本部／＼と云つて皆様が集つて参られますが

「早う此の道についての者程因縁ある者や程に」と神様が仰ります。

未だこれから先き何処迄拡がりますか分りません。私共三つ位の時からお叔母さん／＼と云つて教祖様の所へ参りましたが年のゆかん頃から

「お前達は何も知らんで居るけれどもな此の神様は何も無い所から人間を拵らへかけた元の神やでこれから先きは何んぼ端々の国でも近うなつて戻つて来るで」と仰りました。

私共は未だ其の頃此んなになつて来ることは分かりませんから其の頃江戸 今の東京のことを江戸／＼と申して居りました。へ行くのもならんのに何うして其んなことになるのかしらんと不審に思ふて居りました。

「唐やな唐人やと云ふてな皆んな恐れて居るけれどもな唐や唐人やと云ふたとて皆んな此方へ従つて来るのやで」と云ふこともお聞かせになりました。

此の屋敷は教祖様のお生れになつた時も私共の生れた時も同じことで御座りますが東が十二畳の米倉で西が十四畳の綿倉其れに納屋や隠居所と倉計りも七戸前も御座りました。

倉から納屋迄はゾーと木一本なく裏を通り抜けると又た裏で其処に何か作つてあります。此の屋敷は「屋敷に因縁ある故に」と仰せられますが此屋敷一軒限りぐるり道になつて居ります。

其れから教祖様のお父様のことも聞いて置くが宜う御座ります。教祖様のお父様と云ふ方は矢張り神様の御魂で御座りました。先き御教祖様の御父様が御生れになりました。

其れから教祖様がお生れになりましたので御座いますから世界並に御生れになつたのと違ひます。

御兄弟は五人御座りまして一番兄さんが杏助其の次が教祖様。教祖様の次に女の子が二人ありまして一番末に出来たのが半三郎と申して私の父で御座ります。

此の半三郎と申しますのは女の子供が二人ありましてから九年目に出来たので御座いますから同じ兄弟と申しましても教祖様とは九つも違つて居ります。

教祖様のお出でになりました家は立派な家で御座りました。其れを神様から神の館にするから皆んな毀つて了へ／＼と仰やるけれども杏助と云ふ方が此の家だけでも残さんと先祖に対してすまんからと矢釜しく云つて守屋筑前此の方が神様に詳しい方だから此の方を連れて行つて神様と問答させても終ひには神様に従つて戻つて参りました。

其れで此の兄様も神様がなさることやから人間業では仕様ないと云つて皆んな毀つて了ひました。

本部で一番最初建てましたのは勤めの場所で御座いますがこれは毀つて了ふとが出来ませんから教校の所へ建てゝ置きます。彼れを建てました時国床立命から十柱の神様のお面を拵ふ様に此の兄様に仰せつけになり雛型を此の兄様がお造りになりました。

此の兄様が九日の患ひで御崩れになりました時教祖様は御帰りになりましたなチヤント御自分で此の兄様の身仕終ひをなされてな

「此うして置けば明日御葬式をして良いのやさかい」と云つて御帰りになりました。

此の間管長様御帰りになつて
「此処の叔父様も巧者の人やつたな」
と仰やりました。

教祖様と云ふ方は色の御白い口元と眼元の柔しい白髪な奇麗なお方で御座いました。八十幾つかにおなりになつても腰も屈まずスラツとした御方で御座いました。

お召しは赤衣をお召しになつて居りましたが毎月御換へになりました。其れをお下げになりますと御守り様になります。

教祖様のお引き取りの時は私の四十二歳の時で御座いました。

此の琴も彼地らにかゝつてゐる開き手の鍵も教祖様の遺品で御座います。(了)

別鍋

伊賀名張 細川 なほ子

直子様は教祖の妹お桑様が忍坂の西田様へ嫁して一番末に挙げられた方である。若い時には教祖より深く愛せられて始終往復をしてゐられたといふから色々と古い事を知つてお居でになると云ふことを聞いて昨年の秋永尾氏と態々伊賀の名張迄出掛けて行つて御面会を願つた。此処に掲げたのは其の時の談話の一節である。

私は今年七十一で御座います。七つの年から二十歳の年迄は度々庄屋敷へ参じました。其の頃は教祖様のことをお母さん／＼と云つて居りましたが教祖様もチヨコ／＼おいでになり(忍坂へ)私も宇陀に縁につく迄はよく参じまして三十日も五十日も止めて戴きました。

中山家と前川家とは代々親戚の間柄です。お叔母さん(教祖様)の姑さんて方は前川から行つた方です。其の前にも前川から庄屋敷へ行つて居ります。ですから中山家と前川家とは二代の親戚関係で御座います。

私の所(忍坂の西田)では勇助が一番上で西田の跡をとりました。其れから藤助は一時庄屋敷の小寒さんの所へ養子に行きましたが三十日程居て帰つて参りました。其の時教祖様から七十より下で死ぬことはないと申されました。

小寒さんと私とは七つか八つ違ひましたが行けば姉妹見たいに心易くして居りました。

善兵衛さんには妹が一人ありましたがこの人は不仕合の人で森本へ行つて五人も子供がありましたのに庄屋敷へ帰つて参りました。

お伯母さんに神憑のありましたのは小寒さんの二つの時でありました。其れ迄は田地も三町余りあつたといふことでしたが皆んな売つて了ひました。母家は私の九つの時まででありましたが其れもバラ／＼に売つて了ひました。其れも皆人にやつて了ふので始めより売らんならんで売つたのではありません。

其の頃の本家の前には堀がありました。何んでも家の間数は大分ありましたが玄関はあつても門はありませんでした。倉は西にもあり北にもあり綿倉だの米倉だの何んでも六戸前もあつた相で御座います。

家を毀つた跡に甘露台だと云つて棒を一本立てゝ居りましたが私は未だ子供の時分で御座いますから其れを抜くとお伯母さんは

「棒は幾らもあるから其んなものを抜くのやないで」

と仰せになりました。

私の前に姉さんが一人ありましたが其の姉さんの死んだ時母は女の子がないと云つて大変悲しんでゐると教祖様が私の母に向つて

「其んなに女の子が欲しくば授けてやる」

と仰りましたが私の母は

「此んな年になつて其んなことはない」

と云つて居りますと二月三月経つと身籠りまして生れたのが私で御座います。

私の生れたのは弘化二年で母の四十四五の時の子で御座います。其の年お伯母さんは四十八になつて居りました。

末の子で御座いますし身体も小さかつたので何時迄も乳を呑んで居りましたが七つの時お伯母さんがおいでになり

「此うして何時迄も乳を呑んでも仕方がない庄屋敷へ連れて行つて育てゝやるから最う一遍乳を呑ませてお呉れ」

と仰つて呑み納めに乳を最う一遍呑んで庄屋敷へ連れて行つて戴きました。これが庄屋敷へ行く始めて御座います。

其の頃はお伯母さんの云ふことを誰も信じるものはありません。私が宇陀へ行つた頃よりつく様になりました。其の頃は豊田のサユミさん(仲田)と云ふ方が来てゐました。

お伯母さんの兄弟は一番兄が杏助で二番目が教祖、三番目が私の母、四番目がお力さんと云つて朝和村の竹内へ行かれました。五番目が半兵衛さんで御座います。

西田にはチヨコ／＼おゐでになり南半国の出張り場所と仰りました。

文久の夏私の一番の兄さん（勇助）と小寒さんと秀司さんと又次郎（勇助の弟）と四人が太鼓と鈴とをもつて大阪へ布教に参りました。其れが私の十九の年で御座います。

其の日の小遣いが当百六枚あれば良いのですが其れ丈けの小遣ひは秀司さんが賭博場へ行つて儲けて参りました。所が七八日経つて欲になつて其の日の小遣は儲けたのに最う一儲けしようと思つて行つた所が今度はスツカリやられて帰る時は腹を空かして帰りました。其れを教祖様は内へお居でになつてチヤンと知つて居られました。

其の頃は庄屋敷では何もかも売つて了つた後で何も御座いません。私の小供の時分庄屋敷へ参りまして

「此んな家は結構が悪いや」

と申しますと

「又たお金が出来ると大きな家を建てるのやで」

と仰りました。

私の身体が小さいので何うして此んなに小さいのだからと申しますとお伯母さんは

「身体は小さくても寿命さへ貰つて来れば良いのやで」

と申されました。同じ兄弟の中でも六本木へ行つて居る兄は身体も大きゅう御座いますが私と藤助は小さう御座いました。

私の十九の時の七月十七日。其の頃は私は宇陀へ嫁附いて居りましたが忍坂から男衆が来て庄屋敷のお伯母さんがお居でになつてお直さんと呼んで来いと仰るから直ぐ来て下さいと云つて迎ひに来ました。行くにしても髪も結はんけりやならんから髪を結つたりなんかしてゐると十七日には行けませんから十八日に立つて忍坂へ来ました。

其の時私は始めて別鍋と云ふものを炊きましたお伯母さんの仰るのに

「お地場では小寒が炊き此処ではお前が別鍋を炊くのやで」

と申され別鍋と云ふものを炊きました。

別鍋と申しますと御飯と御汁と御副食物とを朝から三遍昼から三遍夜一遍一週間の間炊くので御座います其れを一粒残らず召し上りました。而して三品共内の人とは別にして雪平で炊くので御座います。御米も一遍に洗ふことはなりません。一度一度に洗ふので御座いますから朝から晩まで御飯拵らへにかゝつて居りました。私には何う云ふ訳か分かりません唯炊けと云はれるから炊いて居りましたが其の間何もなさりません。七日経つて打ち明けの日風呂へ入つてお帰りになりました。其れが私の十九の年の七月の二十六日の晩で御座いました。

お帰りになります時夜分だから車引きでも頼もうかと申しまして聞かずに歩いてお帰りになりました。提灯を上げやうかと申しまして

「私の先きには火の玉が行くから提灯は要らない」

と仰つた其の頃は私も未だ若い時分で御座いますから

「火の玉が行くなら怖い」

と申しました。お帰りには小寒さんがお伴をして帰られました。三仏庄から細い道になりませんが水溜り等ありましてドン／＼お歩きになりまして夜の十二時頃お帰りになりました。其れからお粥等暖めてお上りになりました。其の頃から匝線蝶の紋をつけてお居でになりました。

お伯母さんの云はれるには

「夫婦と云ふものは同じ魂寄せるのやぜ」

と云ふことでありますが私のお爺さん（夫）の魂は先代多吉と云ふ人の魂で御座いました。其の連れ合ひはお民と云つてじんらく寺から来ましたが多吉さんが子供を一人残して亡くなつたから其の弟の勇助と夫婦にしました。其れで位牌には勇助と一手にしてありました。其の多吉と云ふ人の生れ変りが此の間亡くなつた内のお爺さん（次郎）で私がお民で御座います。其う云ふ訳で前には忍坂で夫婦でありましたが今度は宇陀へ来て夫婦になりましたからつまり二代の夫婦で御座います。

私の母（お桑様）は一寸も信心は致しませんから

「お伯母（教祖）さんがお前は長生きすると云つても何時死ぬかも知れんから当てにするでないで」

と云つて聞かせましたが未だに此うして長生きして居ります。

今の西田の主人（伝蔵）は顔面に大きな痣がありますが彼れは生れて来ない中にお伯母さん（教祖）が

「何も悪い事はないけれども祖父に悪いことをしてゐるから面体に印をもつて表れる」

と仰つて置かれましたが彼れは彼れの人が私のお父さん（伝蔵）に粗忽をして其の俣納まつ

てゐるから表はしたのだと仰せになりました。

庄屋敷へ行つて居た時は時々染め物を致しました。其の時は小寒さんが井戸から水を汲むお伯母さんは側で早く入れろ／＼と云はれるから手早く入れると梅鉢でも何んでもチヤンと表はれました。

お政さん（教祖の長女）つて方は何時迄も嫁附いても又出て来てブラ／＼してゐましたがお伯母さんは何時迄も其う気促にさして置いてはならぬと云つて勝手に八木へ行つたのを迎ひにやり秀司さんが迎ひに行く

「今行かうと思つてゐる」

と云つて来て其れから豊田へ嫁に行きました。

お政さんの嫁に行く時は何もありません。夜具が三枚ありましたが其の中一通りはお春さんにやり一通りはお政さんが持つて参りました。

お伯母さん（教祖様）が嫁入りなされたのは十三の時御座います。其の時福知堂のお叔父さん（教祖の父の弟）が媒介者で賞ひに来るとお伯母さんは其れを蔭で聞いて

「お母さん私子なら行かん嫁なら行く」

と云つたと云つて私の母は姉さんは可笑な人だ十三やそこらで私子なら行かん嫁なら行くつて云つたと云つて居りました。十三の春庄屋敷へ行き十六の時入籍しました。

十三の時嫁入する時には空で参りました。十五の年泊りに来る時鬻に結つて帰りますとお母さんから

「お前未だ其んな鬻になぞ結ふものでない」

と云はれた相で御座います。

十六の年お母さんから念仏をして賞ひ、十九の年に自分で五重を受けました。

三味田と庄屋敷と忍坂とはお互ひに前々から親類で御座いました。即ち教祖のお父さんの一番姉がお久さんと云つて三味田から西田へ参りました。二番目の女の人が庄屋敷の善右衛門様の所へ行きました。これがお伯母さん（教祖）の姑で御座います。三番目の女の人はこれは櫛枝に参りました。四番目が教祖さんのお父さんの半七さんで三味田の跡を継ぎ五番目が福知堂お叔父さんで御座います。其れから教祖のお兄弟は一番目が杏助さん二番目が教祖さん三番目が私の母四番目が竹内へ行つたお伯母五番目が半兵衛で御座います。

お伯母さんは小供の時分から違つて居つた相で御座います。何んな子供とでも良う遊ばされた。

内に居てもコツソリして居てチツトとも何んとも云ひなさらぬ。外の小供はお母さん何か欲しいと云つても教祖様はチンとして

「お前も行け」

と云はれて始めておいでになりました相で泣くなぞと云ふことはなかつた相で御座います。

寺小屋へ参りましたのは九つからで九つ十、十一、十二の四年で御座いました。裁縫は内で習つたので嫁に入つてから教へられたのではありません。縫ひ物は中々達者で針は一針でもかゝりません。私子供の時行つて見るとよく鳩を拵らへてお呉れになりましたが其れを上げると羽がパツと広がり下げると縮まりました。袋等もよくお拵らへになりました。

お伯母さんは私を可愛がつて始終此処へおいで／＼と仰やるけれども私は何んだかお伯母さんが恐くて側へ行く気になれません。其れで寝る時には小寒さんと並んで寝るので御座んすが其れでも眼を醒すと何時の間にか教祖様の側へ行つて寝て居りました。

（教祖様は本宅にお休みにになり私共は長屋に休みました）

其の時お伯母さんの仰るには

「お前私と寝るのを厭だと云ふけれども神様はお前を好きだで」

其れでもお伯母さんを恐れ人と思ふ感は年頃になつて嫁に行つてからも變りませんでした。其れで庄屋敷へ行くと帯の紐でも襷の紐でも小寒さんの手と私の手とを縛つて一手になつて寝るのだけれども朝になると何うしても教祖様の側へ行つて居りました。

何か下さる時にも教祖様が食べてから私共に下さいました。

教祖様には前申した通り別鍋でお上りになると云ふことはなされたけれども断食なさると云ふことは御座いません。唯氣に入らぬ時はデツと目を塞いで何も上りません。

御酒は御上りにならず味淋を一杯位御上りになりました。

神様がお下りになると教祖は

紙筆！

と仰やるから直ぐやるとスラ／＼とお書きになるが遅れると抜けて了ふ。其れで側に居るものは何時でも紙と筆の用意をして其らと云つたら即ぐやる様にして置かなければなりません。

私には十八歳の時神様から棒寄せと云ふことをお授けになりましたが何か分らないこと

があると火箸でも何んでも良い棒を一本づゝ両手にもつて分らんことを伺ふと其うだと云ふ時は合ひ、其うでないも云ふ時は離れて合ひません。又た道中をして何処／＼まで何里と云ふことを伺ふ時には何んでも良い其の辺にある棒を二本拾つて天理王命の名を唱へて御伺ひをすると一里なら一つ二里なら二つ打ちます。所が私の母が

「私の所だけ其んなことをしてはいかん」
と云つて返して了ひましたから残念だと思ふて居ると其の晩
「何も心配することは要らん。水で助けるで」

と云つてお水のお授けを頂きました。
お授けを戴かない先きは御筆先を讀んで聞かして貰つて居るうちに良くなりました。
教祖の亡くなられたのは私の四十三の時御座います。其の前に忍坂へおいでになつた時鏡と延紙とを戴きました。延紙の方は使つて了ひましたが鏡の方は戸棚へ放り込んで置きました。此んなこととして置かんで蔵つて置いたら良からうと人が云ひますので半分は京都の細川七郎（直子様のお婿）へやりました。未だ外に帯も貰つて居りますがこれは私の母が貰つたのを私が母から貰つたので御座います。（文責在記者）

人が望めば神も望む

永尾よしゑ子

私の所で此の道に入り始めはお母さんの産後を助けて戴いたのが原因で御座います。お母さんの産後が何うも良くないのでお父様は前裁の側で産薬を買ひに出た途中で人から庄屋敷の産屋神様に参つては何うかと云ふことを聞いて其の俣西に行くのを東に向いて庄屋敷に来て御願すると

「無い寿命でも心次第で踏ん張つてやるからこれをもつて行つて上げなさい。而して三日たつたら又おいで」
と仰つて御供を三服下された。其れを戴いてお母さんに吞ませると三日目に元の俣と云つても良い様になり四日目に夫婦共御礼参りに庄屋敷へ参りました。其の時教祖様は
「思はくの大工が出て来た」と云つて八方の神が手を打つて喜んでゐる」
と云つて喜ばれた。

其れから何んでも嬉しい／＼一点張りで神様がお喜びなさるからと云つて半期位詰め切つて内へ行かぬことも御座いました。

其の頃は天理教と云へば人が馬鹿にしてゐる頃でありましたから風呂に行くとき櫛本の大工が来るからと云ふので早くから集つて周囲から鬻り物にすると云ふ風でありました。

然し未だ其の頃は全然庄屋敷へ詰め切ると云ふことができませんから仕事をしながら通つて用をさせて戴いて居りました。

彼れは明治何年頃だつたか覺へて居りませんが兎に角私共の大きくなつてから二階堂村の前裁の博勞の家を畳建具附千三百円で請取つて仕事をした所が唯つた二百円呉れた切りで後はスツカリ倒されて了ひました。貰ひに行くとき

「此の牛を売つたら渡さう」
とか云ふが中々渡す所か一文も呉れやしません。其れで私と母と政甚と政枝とが仕事見たいに通つたがとう／＼倒されてしまいました。

此方では其れを貰ふ筈にしてゐた所がスツカリ当が外れましたから年の暮になつて掛け取りが来ては払はりやしません。けれども掛け取りに来る人は内の人で正直な人だと云ふことを知つてゐるから其んなら負けてやらうと云ふ。お父つ様は又たお父つ様で几帳面の人だから負けては要らんと云ふ。其れを後から掛け取りに来た人が聞いて居る。

これは此処の家では払ひが出来ない■と思つて入つて来る。矢つ張り払ひが出来ないから其の人も負けてやらうと云ふ。お父つ様は負けて要らんと云ふ。其れで勝手道具迄払ふ様なことが出来ました。

博勞は其う云ふ事をして其の家に入りは入りましたが半期程入つた計りで人に取られて粉もない様にされました。其れでも私所の家は何うなり此うなり煙を立てさせて戴きました。

其の頃の私共は職人が十四五人も居りまして忙しいから私も学校へ行かないで守りをして内におました。

其の内に私の母の鼻に瘡瘍が出来ました。医者に見せると牛を食べると云ふ。牛を食べなければよくならぬと云ふ。其れで牛を食べると顔中に瘡瘍が一杯に拡がりました。其れから神様の所へ来て願ふと直ぐ御守護を戴いた。

教祖様の仰せになるには
「お里さん此方が手不足でならんから早く彼地を引き上げて来てお呉れ」
「有難う御座います。何れは寄せて戴く心算で御座いますけれども子供も大勢御座います

から小遣でも少し出来ました上で寄せて戴きます」

「其んな欲なことを云つたつて何うもならん。早く来て呉れ」

「寄せて戴きます」

と云つて帰るが又々二年程誑まして其の俛延び／＼になつて了ふ。

兎に角千円も偉い目にあつてゐるから小遣儲けに一寸煮売りみたいのことをしました。内が内だから職人が来るが其の中には一寸酒屋の通を貸して呉れ呉服屋の通を貸して呉れと云つて品物を取つて金を寄来さない。其れで其の時もスツカリ損をして店をしまいました。

神様（教祖様）櫛本にお出でになつて笑はれた。

「皆んな落し紙かせんち紙のやうなことをして喜んでゐる。神には深い／＼思はくある。

何んなことも成るか訳らん。其ら放つて了へ。これも放つて了へ」

ふと云つてサン／＼笑はれた。其れで商売を止めて了ふと何うなり此うなり優しになりました。

商売を止めると教祖様も御機嫌が宜い。其れで今度の正月は寄せて貰ふと云つて又た行かない。又た身上に御異見を戴き父は一夜の中にスツカリ盲目になりました。其れから眼の玉は梅干の様になつて白も黒もない。

「これでは乞食するより外仕方ない」

と云ひながら神様へ来て願ふと

「其んな先きの見えないことを何時迄もしてゝは何うもならん。早く帰つて来な」

と云はれる。

スツカリ助けを戴いて盆の関丈け済まして寄せて戴きますからと決心しても亦明かない。其うして居る中に又た政恵が一晩の中に風眼で潰れた。人が寄つて来て医者連れて行けと云はれたが医者へ行かずに神様へ連れて来ると一週間の中にスツカリ助けて貰つた。助けて貰ふと又心が後へ戻る。

「子があるさかい／＼」

と云ふて送り／＼してゐるうちに又たお父様が櫛本の神田といふ内の仕事を受取つて仕事をしてゐると木片が右の親指の肉と爪との間に入つて何うでも抜けぬから又た神様へ参つて願すると

「ウカ／＼して居ては何うもならん。私に一人何時も任せて置くから何うもならん。」

と仰せになつたが直ぐ抜けた。抜けた跡に傷も何も行かない。勿体ないことだと思ひ

「普請を済ましたら歸らして戴きます」

と云つて歸つたが愈々庄屋敷へ越さして戴かうと云ふので其の事を鍛冶屋のお父つ様に話すと鍛冶屋のお父つ様が

「彼んな庄屋敷の様な所へ行つたつて仕様がなから止めなさい」

と云はれるので其の時も其の俛になつて了つた。

明治十三年に何んでもない紺屋の■壺の廂を直す丈けですから樽桶を台にしてやつて居ましたら落ちて腰抜けになり立つ事も出来ないから櫛本から戸板に乗つて来て七八日置いて戴いた。其の時神様は

「何んぼ来い／＼云ふても聞かなければ何時迄も此うして置く」

と云はれ愈々懺悔をして

「今度は寄せて戴きます」

と云つて教祖と物語して助けて貰ひ一週間目に歸つた。

これから愈々庄屋敷へ引つ越すと云ふので顧客先へ暇乞ひに廻ると顧客先では

「何んだつて庄屋敷見たいの所へ行くのだ。乞食しても庄屋敷見た様な所へ行くな」

此うなる。其うすると

「此んな細かい子供があるのにな」

と考へる様になる。其処へ来て顧客先では

「内が狭ければ大工の手のものだから建てたが良い」

「金がありません」

「金がないれば何うにでもしてやる」

と来られるから其んなら子供が一人前になる迄待たうかと云ふことになる。政甚が五日か六日物を言へない様になる。其れから又た身がすくんで起きない。其処で神様へ行つて

「何時も詐計り云つて済みませんがこれを助けて戴いたら寄せて戴きます」

其れで御守護を戴くと其の俛になる。

明治十四年に政甚も政恵も目の縁が腫れて牡丹餅見た様になつた。其処で十四年の旧十一月の十七日か十八日頃と思ひますが寒い／＼時に二人連れて庄屋敷に母が来られました。

而して政甚と政恵と二人が加減が悪くてお願ひに上つたことを申上げると神様は

「お里さん政次郎のことを知つてゐるかい」

「ハイ知つてゐます」
「知つてゐるのなら良いけれども知らなければ確つかりしいや」
政次郎と云ふのは五つの時人に迷はされて死んだのであります。
「ハイ有難う御座ります」
「早う来ておくれ」
「寄せて頂かう／＼と思ひますけれども櫛本で惜しがられますによつて」
「人が望めば神も望むで。人の惜がる人間は神も惜しがる。人が望まん様になつたら神も望みやせん」
と云はれる。又た
「寄せて戴きたう御座いますけれども子供が細かう御座いますから最つと大きくなつてから寄せて戴かうと思ひます」
と申上ると
「子があるから神の方も楽しみだ。親丈けなら楽しみあらせん」
其れで其の低居て明治十五年の正月の朝に
「一日丈け休ませて貰ひに歸つて来た」
と云つて歸つて来ました。其の時お父つ様の云はれるには
「お里こんな所でも行くな／＼と云ふ人があるから止めにしやう」
けれどもお母さんは
「私盲目になつても行きます」
と云つて日歸りにした。チヨト一ヶ月計り居て櫛本へ行き
「神の方で何もかもするからあるものは皆な人にやつて了へ」
と神様が云はれるからと云つてあるものは皆な人にやり二月の八日にお地場に引つ越さして戴きました。彼の時辛いからジツとしてゐたら春が遅れる。
何も持つて来るなど云つても着物丈け持つて来ないじや直ぐの間に合ひませんから着物と錠前障子四枚と鍋釜夜具蚊帳お膳等一通り持つて来ました。
明治十五年には私が十七で妹が十政甚が七つか八つで御座んした。私身体は小さい妹や弟は未だ子供ですから全身の着物は一枚もあらしません。神様は遠慮なしに何んでしたが良いと云はれるが其の頃はしたくても出来やしません。
其れ迄は中山家で空風呂と宿屋をしてゐられたが四月の一日から宿屋と空風呂とを伊蔵の方へ任せました。
其の頃私共が櫛本から持つて来た鍋釜は中山家で使ひ中山家の道具は損料で貸す。スツカリ南と北とに分けて了ひました。これを分けたのは松恵さんですが私共が此方へ参ります時神様は一つの所帯一つの家内と云はれたのを松恵さんが今云つた様に南と北とに分けたから神様が
「南と北と分けたのが神の残念。神の云ふ事背いたら何んな事になるやら知れんで」
と云はれました。
松恵さんは私共が寄せて戴くと間も無く亡くなりました。
其れから其の年の九月十九日に道の上に大節が出て慈福寺の認可が取り消しになりました。教祖様始めとして監獄へ七人行きました。教祖様が明日か明後日お帰りになると云ふ日に私の所のお父つ様も監獄へ引かれる様になりました。其の頃私の所では宿屋をして居ましたから警察で止宿改めに来るのですが音松と云ふ弟子の寄留届がしてなかつたので引かれました。其の日お父様は明日か明後日教祖様が監獄からお帰りになると云ふので御召しになる赤衣を丹波市の岩井に誂らへに朝の八時に出て行きましたが十時になつても十二時になつても歸つて来りやしません。此方も忙しいから見に行けない。止宿人拳げの届けに丹波市の警察へ行つて飯降伊蔵は何うなつたかと尋ねると
「飯降伊蔵見たいのものは監獄へ送つた」
と云ふ。其れを聞いてビツクリしました。然し明日は教祖様監獄から出られるでせう。だから人から教祖様のお召しになる赤衣をとつて貰らひ監獄に居るお父様の所へ差入れもしやうと思つて次の日奈良の監獄へ行つて尋ねると
「飯降伊蔵見たいのものは監獄へ来てない」
と云ふから南の門から出て行くと向から腰縄で来るのがお父つ様です。其の時梅谷四郎兵衛さんが私と一手に行つて呉れなされて
「芳枝さん御父つ様に何か云ふことがあるなら云ひなさい。私頼んでやるから」
願つても
「余計な事は云ふはいらん」
と云ふ。其れでお父つさんは
「私の来る迄に音松を外へ預けて了へ」
と云つた限り引かれて監獄へ入つて了つた。

御父様前の晩何処へ止められたかと云へば帯解の分署へ一晩止められた。帰つてからお父つ様の云はれるには「分署には天野さんと云ふ人が居て私が腰縄付きで入つてるのを見て伊蔵さんお前の様な人が何う云ふ事で腰縄で来る様になつたのか聞かして呉れと云つて来た。私は実は弟子の音松と云ふ男の寄留届がしてなかつたから此うなつたと話す天野さんは私が丹波市の分署へ居るなら此んなことはしなかつたのに御夕飯は食べたか？
イエ食べません
其れじゃ己が持つて来てやるからと云つて其の人が持つて来て呉れて夜の十二時頃御夕飯を食べた其れから其の人が食べた其の俣にして置きなさい。私がとりに来るからと云つて後から取りに来た。
父は何処へ行つても受けの良い人であつた。
其れから私は教祖様が監獄から出ておいでになつたのをお髪をすかして戴いて一手に帰らして戴いた。
所が一方丹波市の警察の方では何か落度を見附けて父を罪に陥れ様と思つて「空風呂に薬を入れてないか」と云つて調べて来た。
「入つて居ません」と云ふと「入つて居ないなら良い」と云つて行つて了ふ。又四つ日目に尋ねに来て釜の中を見「入つてなければ良い」と云つて了つた。其れが教祖の歸つておいでになる晩である。
所が何うかしてお父つ様を罪に陥れやうと思つてゐるから行く時コツソリ薬を釜の中へ投げ込んで行つた。其れを後から芦津の役員で善吉といふ人が見附けて「何んでもこれは薬を入れたに違ひない」と云ふ。其れから大騒ぎになつて竈の火を引けと云ふので火を引かして釜を明けチアンとした所へ巡查と刑事が六人計り入つて来た。もうチアンと空風呂はしまつて了つたから向ふでも当が外れた様の顔をしてキョロ／＼見て「愈々おみき婆さんも帰るから急がしいだらう」と云つて出て行つた。彼れを彼の俣にして置けば薬が入つてゐると云つて難題云つて一本やる所であつたが神様の御守護でチアンと了つて了つた後ですからのが外れた様子で歸つて行つた。
其の後足達様が区長をしてゐたから私の父の身元を尋ねに来た。「伊蔵さんは何処に非難を入れる所はない。天理さんのお婆さんに続く人だ」と云つてお爺さんが私に聞かした。「彼んな好い人あらしません。天理さんのお婆さんか貴女の所のお父つ様かつて云ふ人だ。其やから十日もたつたら歸つて来ますで」と云つて行きましたが其の通り十日計り経つて歸つて来ました。其の頃は警察が偉いことで何時調べに来るか分りませんので夜もロク／＼休まれませんでした。
其の中に明治二十年の大節が来て教祖様は身をお隠しになる様な偉いことになりましたが其の前に神様から御神楽勤めをせ／＼と云はれるけれども皆警察へ引かれるのが怖いからしないであると神様からは「勤めしてもかゝる。せいでもかゝる」と云はれるので勤めをしても勤めをしないで警察へ引かれるなら勤めをしろと云ふので（当時の人々は神様の言葉の意味を取り違ひて居た。これは教祖昇天の時期の迫つたことを指されたのである）勤めにかゝつた。
其の頃は縞の着物を着て其の俣御勤めをしました。私共は襷掛けで台所に働いて居てお勤めをせいと云はれると襷を外して袷天着て何時でも警察へ引かれる様にして勤めにかゝりました。而して十二下り目の大工の人衆も揃ひ来た
と云ふ所まで来ると兵神の会長が教祖様が息をお引き取りになつたと云つて知らせに参りました。其れが恰度昼の十二時頃で御座いました。
其の前に二十五日に一遍息をお引き取りになりましたのが一旦御吹き返しになりやつと安心した所へ遂ひにお引き取りになりました。彼の頃の事を思ふとまるで夢の様です。
附記 永尾よしゑ様は御両親（御本席御夫婦）と共に早くよりお地場に御住み込みになり当時の事情に最も良く通じて居られる一人であります。此の度感謝と記憶とを

出すについて特にお話を願ふ筈であつたが御一門に御産があり取り込んでおめでになり伺ふ暇がありませんので以前からズーと聞かせて戴いて居た談話の一節を抜粋して掲ぐることに致しました。文責は元より記者にあります。此の文を此処に掲げるについて一応述者並に読者に対してお断りを致して置きます。(編者)

新真婦人の典型

大平 隆平

「新しい女」と云へば一時思想界の流行語であつた。けれども当時の新しい女と云ふのは西洋では三四十年前乃至五六十年前にイブセンだのシヨーだのズーダーマンだのと云ふ人達に依つて書かれた所謂机上の新しい女を気取つて見たと云ふ迄で何等深刻なる自覚と云ふものはなかつた。

イブセンでもシヨーでもズーダーマンでも成る程婦人問題の喧しかつた当時にあつては面白い問題であつたに違ひない。けれども人類の自覚の進歩した今日から見れば彼等の所謂舞台上の技巧を除いて思想問題として見る時は誠に浅薄皮相なものたるを免かれない。其の浅薄皮相な思想を思想上の教養の乏しい日本婦人が模倣するのだから其の氣障さ加減は見られたものではなかつた。勿論これも或る古い時代より或る新しい時代に到達する過渡時代には必ず共に表はれて来る共通の現象であるから昨日の問題は昨日の問題として更らに深奥なる婦人問題に就いて研究の歩を進めたいと思ふ。

凡そ如何なる問題に係らず真に公平に其の問題を解決せんと欲せば判者は須らく周囲の輿論より超越して公平なる観察と偏らざる判断とに待たなければならない。殊に人生問題の殆んど一半を領して居る婦人問題の如きに於て最も其うである。

イブセン、シヨー、ズーダーマンに依つて提出されたる婦人問題並に我が国の青踏一派の婦人連中に依つて提出せられたる婦人問題は何れも近世の婦人問題として初期の婦人問題に属す。彼等に真の婦人性とは如何なるものか？ 又た真の意味の婦人生活とは如何なるものか？ と云ふ様な最も緊要なる實際問題に対しては何等の自覚もなく唯今日迄造つて来た女性に不利なる風俗習慣に対する反抗の声、破壊の声を挙げたに過ぎなかつた。

凡て一個の新しい家を建てんとせば古い家を破壊しなければならない。新時代の女性が婦人にとつて不利なる風俗習慣を破壊して真に自由の天地を創造せんとする企ては元より自然の要求である。けれども只管旧道徳旧習慣旧風俗の破壊にのみ熱中して真の婦人性と真の婦人性に従つたる自然の生活の如何なるものなるかを忘れたる所謂「新しい女」達は男女同権を唯一の信条として男が料理屋へ行けば料理屋へ行き、男が酒屋へ行けば酒屋に行き、男が女郎屋へ行けば女郎屋へ行き、男がマントを纏へばマントを纏ふ。其れで自ら新しいと思つてゐた。けれども男の食ふものを食ひ、男の衣る物を着、男の行く所に行つたからとて其れは男性に対して詰らぬ反抗をして見るだけのことで其れが為めに真の婦人性は聊かも進歩せず真の婦人生活は聊かも発達してゐないのである。否却つて此の自覚のない反抗の為めに如何に深く婦人性は傷けられ如何に大きく婦人生活が害せられてゐるか彼れ等は知らない。

殊に彼等にとつて最も憐れむべきことは世界は二つの同一物を要しないといふことに就いて全然無知なることである。もし彼等の信ずるが如く男女が同一の生活をなし同一の事業をなすべきものならば男女の區別は始めより必要がなかつたのである。其れを神が男女に造つたのは此う云ふことは彼等は信ぜぬかも知らぬが男性には男性の天分があり女性には女性の天分があるからである。此の男女両性の天分の區別を没却して全然男子と同一生活を営まんとするが如きは最も憐れむべき幼稚の考である。

教祖は男女同権主義者

教祖は

「男も女も寸分違はぬ神の子供である」

と云ひ

「此の木いも雌松雄松の隔てなし如何なる木いも月日思はく」

と云ひ、明かに男女同権論者の最新先駆者であつたが然し彼女は一面に於て又た

女には女の道がある

と云つて明かに男女両性の天分の差を認めて居る。

「女には女の道がある」

これは女性の生理的組織を見ても明かなることである。婦人は即ち男性と自ら異つた天分

と其の天分を生かすべき先天的義務があるのである。即ち妊娠、分娩、哺乳、育児の大任である。これを婦人特独の天分として一切の微細なる仕事は婦人の天職に属するのである。

今日の所謂「新しい女」は此の婦人の天分を没却して居る。これ彼等の思想が聊かも徹底して居ない所以である。

先づ愛を解決せよ

今日の婦人は男女両性間に利害の衝突があると直ぐ彼等の持前の武器である男女同権を振り廻して自己の権利を主張したがる悪癖がある。

これは彼等が徒らに自分一身の利害観念のみ強く他人即ち夫もしくは子もしくは親に対する利害観念の全然欠乏して居ることを証明するものである。云ひ換へれば利に敏くして愛に疎きことを証明して居るのである。

けれども此処に注意しなければならぬことは両性間の愛と人間としての愛とを混同視せざらんことである。

普通夫婦の間に愛があるとか愛がないとか云ふことは恋愛を指すのであるが恋愛は決して夫婦間の第一戯的愛ではない。夫婦間の第一義的愛は先づ人間として互に相愛することである。性的の愛は寧ろ第二義的のものである。

例へば人形の家ノラである。彼女はイブセンに依つて新しい女の第一の雛型に使はれて居るが彼女は元来其んな気の利いた女ではない。彼女の本来の性質は夫を愛することの出来る女に造られてゐる。けれども彼女の家出が本当の自覚から出たものでない如く彼女の愛も本当の自覚から出た愛ではなかつた。もし彼女が夫と子供に対して相対的の愛でなく真に絶対的の愛をもつてゐたならば彼女は決して夫と子供とを捨て得なかつたであらう。其れを敢て捨てたと云ふのは彼女も亦夫と同一の利己主義者であつたことを証明するものである。

愛と欲

世間では自分を愛する者を愛することを愛だと云つて居る。けれども其れは利己的の愛であつて真の愛と云ふものではない。誠の愛と云へば我を愛するものも我を憎む者も同一の愛をもつて愛することを云ふのである。

更らに最一つの誤は真女なるが故に愛し善女なるが故に愛し美女なるが故に愛すると云ふことである。これも本当の愛ではない。本当の愛と云ふものは偽なれば偽なる程悪なれば悪ある程醜なれば醜なる程愛するものである。これが超人の愛であり、神の愛である。

例へば此処に不品行の夫がありと仮定する。普通の女ならば直ちに嫉妬の炎を燃やすかもしくは直ちに離縁して他に理想の夫を求むるかど普通である。けれども真に絶対の愛を自覚してゐる婦人のみは其うでない。彼女は夫が如何に自分に対して無情であつても其れを聊かも怨とせざるのみならず却つて如何にせば夫をして真に幸福ならしむべきかについて考慮するものである。これが真の愛である。夫が我を愛せざるが故に怒つて去るが如きはこれ全然利害観念より出たる欲の行為であつて真の誠心より出たる愛ではないのである。

嫉妬は利己心があるから

古来嫉妬は婦人の共通の欠点である計りでなく男子にも共通の欠点である。其れは男なるが故に嫉妬心弱く女なるが故に嫉妬心の強いと云ふものではない。利己心が深ければ深い程嫉妬も亦深いものである。

凡て此等の婦人問題に対して真の解決を与へたものが天理教教祖中山ミキ子である。

若かきは若かきの雛型

教祖の言葉に「若きは若きの雛型になれ」と云ふ言葉があるが幼女時代の教祖はこれ幼女の雛型、少女時代の教祖はこれ少女の雛型（模範少女）であつた。「泣かぬ子」「温かい子」「親の手数をかけぬ子」「真面目の子」「上品な子」「大人げな子」と云ふのが彼女の幼少時代に持つてゐた特徴であつた。殊に「大人げな子」であつたと云ふことは彼女の性格が早くより円熟の境に入つてゐたことを語るものである。

教祖には娘時代がない

彼女の伝記が世界一般の婦人の伝記と異つてゐる第一の点は彼女には所謂娘時代がなかつたといふことである。あつても其れが非常に短かつたといふことである。従つて娘時代（処女時代）の教祖といふものについては殆んど云ふべき点がない。あつても少い。

彼女の少女時代には裁縫とか料理とか糸機の如きは家庭で何時習ふともなく習つた。又た遊芸とては琴を嗜まれた様であるが今日の都会の上中流の家庭の令嬢達が結婚の資格の様に思つてゐる茶の湯だの活花だの長唄だの舞踏だの絵画だのと其んなものはやられなかつた様である。即ち彼女が短かい少女時代に習得した婦人としての智識は今日のハイカラの令嬢の兎角避けたがる実用的の技芸が多かつた。これは新時代の婦人として最も注目すべきことである。

けれども此処に一つ注意しなければならぬことは彼女が習得した技芸が多く実用的のものであつたと云つても彼女の全体の特徴より云へば今日の実科女学校実践女学校等の如く何んで実用的であれば良い何んでも實際的であれば良いと云つて無暗に手先きの修養を尊重して頭の修養を怠ると云ふ側ではなかつた。彼女の一面には實際的の所がありながら他の一方には非常に神秘的宗教的の特徴のあつたことは争ふべからざる事実である。これが今日眼と手先きの技芸のみを重んじて頭と心の修養を閑却してゐる実科女学校式実践女学校式と大いに異なる点である。

即ち少女時代の彼女の性格を云へば一面に於て非常に現実的の所があると思へば他の一面に於て非常に理想的の所があつた。趣味と実益、神秘と實際、これをつき交ぜたのが彼女の性格であつた。

妻としての教祖

彼女は非常に若かいうち即ち婦人としては殆んど蕾の時代に人妻となつてから彼女に恋愛があつたか何うかと云ふことは疑問であるが一体に彼女の性格より云へば彼女は今日のハイカラの女の様星だの堇花だの恋だのと云つて騒ぎ廻る方の性質ではなかつた。何んな夫でも天の与ふる者は凡て満足すると云ふ信仰の深い婦人として作られてゐた様である。其証拠に彼女の長生涯に於て一度も恋愛に関する物語のあつたことを聞かないからである。

昔し或る高德の女菩薩が或る男子を救済する為めに自分より徳の少ない其の男に嫁いだと云ふことを聞いて居るが教祖は恰度其の女菩薩の様な人である。彼女は今日の若かい婦人の求むる様な所謂理想の夫なるものを外に求めなかつた。彼女は何んな不肖の夫でも天の与へる夫に満足し自分は自分として行くべき道を側目も振らず歩いた道である。これは今日の青年男女がいや理想の夫人だとか理想の夫だとか云つて直接自分に都合の良い好きな男や女を求めて歩くのとは大分違つてゐる。彼女には夫は賢くても愚かでも美男でも醜男でも善人でも悪人でも其んなことは構はなかつた。否寧ろ賢人よりも愚人美男よりも醜夫善人よりも悪人を選んで之れを賢人とし美男にし善人にして行かうと云ふのが彼女の主義であつた。これが今日の青年男女の考へてゐる愛と彼女の考へて居た愛との大いに異なる点である。

超人の愛！ 神の愛！

今此の二種の愛を比較すれば自分の好きな男もしくは女を理想の男だの理想の女だのと云つて居るのはこれは明かに自分の小なる利害を中心とした愛であつて真の愛と云ふものではない。真の愛と云ふものは美男であらうが醜夫であらうが善人であらうが悪人であらうが賢夫であらうが愚人であらうが凡て其等の差別を超越して唯其の人をして真の満足真の幸福を得せしむるの外何物もないのである。即ち前者の愛は相対的の愛にして後者の愛は絶対的の愛、前者の愛は利己的の愛にして後者の愛は利他的の愛、前者の愛は人間的の愛にして後者の愛は超人の愛、神の愛である。

凡て自己の利害を中心とした愛 私は其れを商人の愛即ち欲と云ふ と云ふものは其れが自分に都合の良い間は一手に生活してゐるけれども其れが自分に都合の悪い時は直ちに離反して去るのである。其れは欲と云ふもので愛と云ふものではない。利と云ふもので誠と云ふものでない。誠の愛と云ふものは相手が敵にならうが味方にならうが其んなことは聊かも自己の問題ではない。自分は唯先方に対して如何にせば先方を幸福ならしめ得べきかに就て考へるより外何物もないのである。

かくの如く此の方の愛は出发点に於て既に其の目的を異にしてゐる。即ち前者は如何にせば自分を満足せしむべきかに就て考へ後者は如何にせば他人を満足させ得べきかに就て考へるからである。今日夫を愛するとか妻を愛するとか云ふのは多く前者の所謂自己の好

悪を中心とし利害を中心とした愛云はゞ利欲より出た愛であつて眞の誠より出た愛ではない。眞の誠より出た愛は自分一身の利害を超越した愛である。
凡て自分一身の利害を中心とした愛（欲）は他の動静に依つて常に變化するものである。即ち自分にとつて有利なる間は先方を愛し、自分にとつて不利なる時は直ちに捨て去る。従つて其の愛には一定不變と云ふ要素が全然欠けて居る。けれども自己の利害を超越した愛は決して變ることはない。何故なれば彼は始めより自分の利害を捨て、他人の利害を中心として生活するが故に先方がたとひ自分に辛く当らうが親切に當らうが聊かも此方の愛には關係がないからである。此の時と所と人にと依つて愛を異にしない平等不偏の愛を稱して誠の愛と云ふ。教祖は即ち前者の所謂自分一身の利害に依つて自分の精神や態度を豹變する世界並の利己主義者でなく始めより自己を空うして他人の幸福の爲めに生活する眞の意味の愛である。

夫善兵衛と下女かのとの不正の關係に対する教祖の態度

もし教祖が夫に対して世間一般の相對的愛が持つて居ない婦人であつたら夫善兵衛と下女かのとの不正の關係があつた時必らずや離縁を要求するか何か一悶着起したに相違ない。然るに其うはせず却つて益々二人を大切にしたい見上げた態度は其うでなくてさへ夫が不品行をしはしなかつたか夫が他の女と不正の關係を結びはしないかと常に嫉妬と疑惑との眼をもつて夫の行為を監視して居る様なさもしい慮見の女の全然解することの出来ない態度である。

此の時の教祖の態度は怨に報ゆるに徳をもつてすと云ふ様な意氣づくの様な態度でなく全然愛はあつても怨はなかつたのである。其の証拠には夫がかのを伴れて何処へ行くと云へばこれに自分の晴衣を貸して着せて出し尚ほ其の上自分が毒殺に逢ひながら我が身を怨んで人を怨まなかつたのに徴して明かである。此の見上げた精神見上げた態度を罪もない夫に無実の罪をきせて世間の前に赤恥を搔かせ其の上に出るの引くのと云つて我と我が心に疑心暗鬼を作つて騒ぎ廻つて居る其辺等近所の嫉妬狂に見せたいものである。

凡て嫉妬と云ふものは女性特有の悪徳の様に稱せられて来たがこれは独女性にのみ限つた悪徳ではない。男子にも同様に此の厭ふべき悪徳があるのである。といふのは彼等に人を愛すると云ふ精神がなく唯一身の利害をのみ考へるからである。其う云ふ我利／＼亡者には教祖の爪の垢でも煎じて吞ませたいものである。

母としての教祖

凡そ婦人性の中最も発達したものは母性である。婦人は此の円満なる母性の修養によつて完全の域に達するのである。教祖は即ち此の母性の最も発達した婦人であつた。

普通の婦人にあつては母性は子をもつてから余程経つた後でなければ表はれないのであるが教祖の母性は決して子供をもつて後始めて表はれたものではなかつた。随分子供の時から早く表はれたものであつた。即ち他の子供と遊ぶにも彼等を決して自分の遊び友達として遇するのではなく恰度母親が子供を遊ばせる様な精神なり態度なりで彼等に接した。其れであるから近所の母親達が野良仕事で忙しい時などは良く彼女に頼んで仕事に出たものである。彼女は其の預つた子供に玩具を差し換へ引き換へて一日愉快に遊ばせて母親の歸るを待つて送り届ける事も珍らしくなかつたといふことである。

此の母性は年と共に発達して遂に晩年には一男五女の母としてゞなく万人の母として其の先天性を發揮する様になつた。

愛は教祖の生命

之れを要するに教祖九十年の生涯は人間として決して短かいものではなかつた。其の長生涯の間彼女は人の娘として、人の妻として、人の母として、婦人の通るべき凡ゆる道を通つた。けれども晩年万人の母として通つた五十年の間の生活貴い意味深い生活はなかつた。

古来救世主と稱し予言者と稱せられた人達の説いた愛は皆これ自己の利害を離れた絶対の愛である。けれども實際に於て釈迦の感じた人類に対する愛と基督の感じた人類に対する愛とミキ子の感じた人類に対する愛とは其の感じ方が一様ではなかつた。釈迦の感じた人類に対する愛は人類の父としての愛である。基督の感じた人類に対する愛は人類の兄としての愛である。ミキ子の感じた人類に対する愛は人類の母としての愛であつた。

更らに之れに対して一言の説明を加ふれば彼女が人類に対して感じた愛は天地が万物を生み且つ育てると同一の至情に充ちた愛であつた。

愛は此の世の無上の權威

今日の天理教徒は教祖の精神を忘却して愛をもつて人に臨まずして權威をもつて人に臨まんとする悪風がある。此の悪風は教界内部に於て殊に甚しい。

けれども眞の權威は淺果敢な人間心の造つた傲慢や尊大より生れるものではない。唯愛のみぞ眞の權威である。

見よ打たれても叩かれても母の跡を慕ふて走る人の子を。

凡て權威をもつて臨む者には我も亦權威をもつて反抗せんとするのが自然の人情である。けれども愛のみは之れに敵する害意を挟む余地がない。其の最も良き実例は猛獸である。彼等に対するに武器をもつて感服せしめんとせば彼等怒つて必らず我を害すべし。けれども何等害意なき眞の愛をもつて臨めば彼等は来つて必らず我が足の指を嘗むるであらう。これが愛の權威である。而かも此の世界に於て体力が大である智力が大であると云つても愛の力に如くものはない。かくの如くにして愛は此の地上に於ける無上の權威である。

愛なき所に貞操なし

旧道德の牢獄の中に育てられたる今日の上中流社会の婦人の大部分は貞操とは生理的に二人の男子に接しないことであると云ふ風に解して居る。成る程生理的に二人の男子に接しないと云ふことは愛を二つにしないと云ふことにはなる。けれども其れ丈けで貞操の定義は全うされたものではない。眞の貞操には必らず眞の愛を伴はなければならないものである。而かも其の愛たるや今日の青年男女の考へて居る恋愛ではない。吾が一生の幸福を挙げて其の人の幸福の爲めに捧げるの謂である。この献身的愛なきものは決して眞の貞操を有することはできない。何故なれば今日の所謂新人達に依つて唱へられつゝある所の愛即ち異性に対する興味のある中は同棲し其の興味が去れば離別すると云ふ様な生活はこれは動物と何等異なる所なき野獸的性欲生活であつて眞の意味の愛ではないからである。眞の意味の愛とは何処迄も自分一身の幸福を其の人の爲めに捧げ且つ其の人より何等の要求をもなさざにある。これが眞の愛であり、眞の貞操である。

けれども今日の間人は皆狡猾で利己的であるから誰も自分にとつて不利なる生活を続けて行かうとはしない。彼の上流社会の婦人が多少の不滿を忍んで尚ほ且つ貞操の美名の下に良妻賢母を粧ふて居るのは其の心の底を洗へば卑怯なる自己保存の爲めである。

けれども将来の婦人は其う云ふ形式に囚れたる偽善生活を捨てゝ眞の意味の貞操、貞操は即ち愛なりと云ふことを自覚しなければならない。此の自覚に到達しないうちは此の世に於て決して理想の家庭幸福の家庭を実現することはできない。現に今日上中下流を通ずる一般家庭の不和合は其の家庭の各員に眞に他人の爲めに我が一心を捧ぐると云ふ眞実の愛が欠けてある爲めである。もし其れと全然反対に夫婦兄弟親子が眞に自分を捨てゝ家庭の幸福を計つたならば其の家に決して春の来ない筈はない。これは自明の問題である。此の愛の問題の解決せられざるうちは決して眞の意味の婦人問題は解決せらるゝことはできない。

先づ權利を要求する前に義務を尽せ

かく云へばとて私は決して現在の婦人が幸福なる地位にあるとは思はない。けれども婦人参政權運動や婦人解放運動に依つて眞に婦人の地位が向上され得べしと信ずるのは余りに早計に失して居る。現代の婦人は其う云ふ形式上に於て婦人の地位を高むる以上更らに實質上に於て婦人の地位を向上せしむることを計らなければならない。之れを云ひ換へれば先づ權利を主張する前に先づ義務を尽さなければならない。何故なれば婦人がたとい一時の運動に依つて法律上男子と同等の權利を獲得しても婦人其の者の品性婦人其の者の生活が改良せられなかつたならば彼等は前にも増して不幸な生活を味はなければならないからである。

婦人の解放は過去の問題である

之れを要するに婦人の解放と云ふことは既に過去の問題である。将来の婦人問題は

婦人性の發揮

にある。
欧羅巴に於ける五六十年前に生れた新しい女今日の日本に生れた新しい女其う云ふ人達によつて行はれもしくは行はれつゝある反性的生活は決して永続すべきものではない。時代の発達はやがて自然の婦人性に帰れと男子側より新たなる要求を呈出せらるゝ時期が到来するであらう。何故なれば今日の所謂「新しい女」と云ふ変態女性に依つて真に円満なる人間生活は行はれないからである。

今日の婦人は余りに利己的なり

凡そ一家でも一国でも利己的の人間が多いければ多い程其の家其の国は衰亡するのである。これは現在の支那に徴して明かである。

今日の婦人は余りに利己的である。彼等の眼中には自分一身の幸福を得れば夫や兄弟や両親や子供の幸福等何うでも良いのである。而して其う云ふ事に一身を捧げて居る婦人を無価値の女の様に思つてゐる。けれども此う云ふ婦人が全世界に跋扈した暁には此の世界は治まり様はない。

新時代の理想の婦人

従つて来るべき新時代の要求する新しい女は今日の所謂古い女でもなければ今日の所謂新しい女でもない。新時代の教育を受けたる愛の婦人これぞ未来の世界の要求する理想の婦人である。

新は深なり真なり

之れを要するに新は深なり真なり。此の最後の二要素を欠いたものは奇であるかも知れないが真の意味の新しいさではない。真の意味での新しいと云ふことには必らず古き物もしくは人よりもより以上の深さとより以上の真実さとをもつてゐなければならぬ。今日の所謂「新しい女」の仕事は唯旧い型を破壊したと云ふ丈けである。其れ以上に何等婦人として積極的の深と真とがないのである。これ吾人が彼等の思想並に生活に対して全然同感し得ざる所以である。

新真婦人の典型

世間では天理教祖は愚夫愚婦を迷はした魔女か妖婆かの様に信じてゐる。更らに之れを今日の所謂「新しい女」に見せたならば全然自覚を欠いた旧式の女と見るであらう。けれども「新しい女」と云ふものは何も妻たることを拒み母たることを拒むことではない。もし其ういふ女が新しい女ならば此の世界には全然新しい女は不必要である。又た「新しい女」と云ふものは何も夫を捨て子を捨て親兄弟を捨てゝ迄自分一身の欲望を満足する女のことではない。もし其う云ふものが新しい女ならば此の世界には全然新しい女は不必要である。真の意味の新しい女は婦人性の真の自覚を有すべきことは云ふ迄もないが更らに其れ以上に公人としては父母兄弟夫子を捨つることをも敢て辞せない真正の勇氣と私人としては一身を犠牲にして父母兄弟夫子に仕へる自由の愛と此の二つを具へた独立した人格の婦人でなければならぬ。此う云ふ意味に於て真の意味に於て婦人の天分を自覚した新真婦人の典型であつた。

近き将来に於て婦人の自覚が最つと進んで来た暁には創世の始めより神が女の雛型人間の苗代と定めた此の人類の原母伊邪那美命の人格と生活とに真の意味の人間生活真の意味の婦人生活の意義及び価値を発見するであらう。其の時こそ此の世界に真の理想の男女の充満する時である。私は其の時の到来を待つて居る。(紀元十億七十七年一月九日)

私は百姓をしてゐました

宮森与三郎

宮森氏は元岡田と称して居た。早くより本部に入つて農事を担当する傍布教に従事した。平野檜蔵氏の媒介に依つて宮森家を継ぐ様になつたのであるが其れには氏の夫人が最も進んでゐたらしい。宮森家入籍の事を神様に願ふと

今三年は外へ出せない
と云ふことであつた。其の事を氏の未来の夫人に通ずると
本部に勤めてゐる人を貰ふなら三年が四年でも良い

と云ふことであつた。
本部員に引き挙げられる人は何れ何等かの功がなければ引き挙げられないのであるが

長々御苦労であつた

と神様からお礼を云はれたのは氏一人である。

氏は性率直にして詐も追従も飾り気もない人である。世間では氏の辞令に巧みでないといふ点をつかまへて彼之れ云ふが其れは真人と云ふものを知らない俗人の嫉みである。

凡て俗人の常として口先きや手先きの動くのを以つて偉いと信じてゐる。けれども神の見る眼は全く違ふ。神の見て以つて偉大なりとなすものは口云ふこと能はず手行ふこと能はざるが如き素朴の人間である。

此の点に於て現在の本部員中最も多分に宗教的素質をもつた一人である。私は氏の淡々として水の如き性格を愛する。

(R O

生)

私の信仰しかけたのは明治八年頃であります但本部へ寄せて戴く様になりましたのは十年から此方でした。其の時分には本部の屋敷と云つて六畝か七畝位の所で此の辺は百姓計りで何もありませんでした。

内の親爺は早くから信仰して居ましたが其の頃は或は狐つきだとか或は狸つきだとか悪口を云はれてゐる頃ではありますし私も子供の事ですから、信心せい参拝せいと云はれても参らないで居りました。

内の親爺の信心して居ります頃は唯産屋助けて下さる産屋神様だと云ふ風に聞いて居りました。自分の兄弟には姉もおりますし妹もおりますが大抵此処で産屋許しを願ひ外では助からぬ様に思つて居りました。

私の兄は只今城法の分教会をやつて居りますが兄貴とか姉とかは私より早かつたのです。私は兄貴から十柱の神の御守護だとか八つ埃だとか云ふお話を聞いて居りましたが世界から色々な話を聞いて居りますから信心する気になりませんでした。

其うしてゐる中に私は身上になり左の脇が何うしても直らんから彼方の医者にかゝつたり此方の医者にかゝつたりしてもいかんからとう／＼此の神様を信心する気になり道の四五町さへない所だから参つては直ぐ帰るといふ風に致して居りました。

其の頃はお地場に空風呂がありましたから空風呂に入れて貰つたり世話をして居ます内に段々心易くなり二三日遊ばせて戴く様になり良くなると内に帰つて仕事をするのですが内へ行くと身体が良くないから此方へ来るといふ具合で自然と此方へ寄せて戴く様になりました。

其の頃神様から余計心のすんだ神の人衆が欲しいと云ふことを聞かせられました。

其う云ふ訳で段々此方へ来て空風呂の薪を割つたり、其んな世話をさせて戴いて居りましたが其のうち空風呂もなくなりました。

其の頃中山家も段々楽になり十年の年切質に入れて置いた田地が帰つて来たから私は百姓の方を引受けてやらせて戴いて居りました。

然し其の頃は未だ認可がありませんので上から矢ヶ間敷くて教祖様も度々警察や監獄へ御苦労下されたが多分教祖様が奈良監獄へ御いでになつた時分だと思ひますが其の時分から代り番にやらせて戴いて居りました。

其れからスツカリ参詣人は止められて了つたので豊田のサユミさんは来ることが出来なくなりました。辻さんは昼百姓をして夜分参詣に来ましたが中田さんは其の方一方向ありました私共も矢ヶ間敷いもんですから寄留をさして貰つて百姓をして居りましたので楽で御座んした。

教祖様が一番終ひに警察へ行かれたのは櫛本へ行かれたのが一番終ひでした。私共も其処にゐたもの六七人も呼ばれましたが(管長様も御いでになりました)後の者は皆其の晩帰りましたけれども教祖さんと榊井伊三郎さんが残されました。其れが拘留の納でした。

其れから彼れは何年で御座いましたか早魃の時御座んした村方より雨乞ひに頼みに来ましたが管長様は断つた。村からは苦情があれば後は引き受けるからやつてくれと云ふ。神様は雨乞ひせいとお急き込みになる。管長はいかんと云ふ。其れでも結局村の者の頼み通りに雨乞いすることになり、村の東の方の氏神様(春日神社)で雨乞いをして二回目に辰巳の牛剥ぎ場でやりました。宮様へ来た時は暑くて困つたが其れから牛剥ぎ場に行きました時は東の山に雲がありました。其れが段々大きくなつて郡山の詰所へ近くに行つた時は其れが頭の上一杯に拡がつて来幸田様と云ふ神社の前に来た時は偉い雨で頭の上が痛い様の雨が降つて来ました。其の時外処では雷様が落ちて柱がさけたと云ふことでした。其れから豊田の方へ行き御墓地の下でお勤めをした時は雨が上つて居りました。其れから再び宮様へ帰りました時は前には埃が立つて居たのが此度は水が溜つて居りました。

其の頃は甘露台は外にありましたが其処で御礼勤めをしてゐた時警察で三人計り来まして皆んな引つ張つて行かれました。教祖様も引つ張つて行かれました。

其の時村の者は水掛け行つて側から行つた人丈け残つて居りましたから攫まへられて始めの者が三十銭の罰金二度目のものが五十銭の罰金でしたがな何んでも前に一遍引かれた事のあるものは罪が重かつた様です。其の時は教祖様も罰金ですみました。

其の時差渡し三寸の十二の菊の紋を戴いたものは神の人衆を仰りましたが其れを今の夫人様から貰ひ神の人衆と云ふことになりお勤めに出さして戴く様になりました。私も其の赤い菊の紋を戴いてお勤めに出さして戴いたが中には御紋を戴いても返しに来た人もありました。

其の時の年限は忘れましたが何んでも黒い着物の上に其の紋をつけてお勤めに行きましたたら雨に降られシツクリ濡れて了つたから警察へ行つて着換へたら紋まで取られて了ひました。

其の頃お神楽は男の神様は男女の神様は女が勤めることになつてゐましたが男でも女の神様になる時には女の帯を締めて女の形をします。私は其の時大食天命になり女の帯を■りて女子の■を冠つて勤めて居ると巡查が来て

「此の奴は男の癖に女の姿をしてやがる。太い奴だ」

と云つて数珠継ぎに継いで引つ張つて行かれお面だの御神楽道具だのを取られて了ひました。其れが襪本へ行かつしやる前でした。其の時サユミさん忠作さん豆腐屋のおかゆさん、嘉市の権十郎さんも行きました。

私がお道につかして戴きました頃は東の方の今の手水鉢のある辺に門がありました。其れが表門で御座いました。門を入ると西側に窓がありますが彼処の窓際にお居でなされた。今は其の窓は形が變つてゐますが其の頃は突き上げで御座いました。其の窓際に幅三尺丈七尺位の台の上に上つてお居でになりました。台の高さは私の腰の辺まで御座いました。最初は下の方にお居でになつたが下の方は身体が苦るしくてならんと云ふので台を拵へて其の上にお居でになりました。其の下は十畳の間で一寸床の間がついて居りましたが先生だとか御家内だとかは其処へお居でになりました。

御本席の時分には刻限と云ふて願はんでも御指図になる事もありましたけれども大抵此方から願つてお指図を戴くのですが其の頃は教会も何もありませんので事情願もありやせんですし又た此方について居るものも幼稚なものですから聞かして貰ふ丈けで大抵お尋ねするといふ事はありませんでした。

其の次は「説き流し」と云ふて歌見た様にズーとお云ひなされます。本席のとコロツと違ひます。戦争の起ること等も折々説き流しでお云ひなされたこともあります。

お話は一体夜分に多う御座いました。夏なぞにはサアお話しと云ふと裸体の俣で飛んで出ると云ふ風でした。其の時分に御筆先だとか色々なものをお書きになりましたが御筆先も一遍に彼れ丈けのものが出来たのでありません。何遍も出ました。私共が行くと此んなものを書きましたと出されることもありまして。教祖様に筆もて／＼と神様が云はれる。教祖様が筆もつと一人手に書かれて行きます。墨すつて其処へ置くと一人手に書かれて行きます。其れを纏めたものが御筆先です。門の所へお居でになりました時も筆先を仰山にお書きになりました。

私共は百姓の方を引き受けて居りましたから夜分等教祖の所へ遊びに行きますと楽しみな話をお聞かせ下されました。道の働きについても

「人の事と思へば皆んな人の事になる。我が事と思へば皆んな我が事になるのやで」

と度々お聞かせになりました。

其の頃は百姓の間にお助けにも出さして戴いてゐたが忙しい時などは百姓の方も放つて置けず又た来て呉れと云ふ所に行かん訳にならんから困り教祖様に伺ふと

「百姓の方計りしてゐるのではない来て呉れと云ふ所があつたら行つてやれ」

と云はれる様になり百姓専務と云ふことは出来ず、自然道一筋に働かにならんと云ふ様になりました。

其の頃の百姓と云つても勤めもチヨコ／＼あるし其う百姓一方と云ふことは出来ませんでした。其れに教祖様は

「一日朝から晩までノベツに働くのではない。半日働いたら半日陽気遊びをする様になるから」

と仰せられました。

今日は日の寄進をする人は沢山ありますが其の時分は私と中山重吉さんと二人で百姓一方にやつてゐました。彼の人はお助けに行かれませんでした。夏に忙しい時になると愚図々々してゐられませんでした。米等も夏の忙しい時は昼間ついてゐられませんか夜の明ける頃二日もついたこともあります。

教祖様は

「其う朝から晩迄働くでないから招待のある所へ行つてやれ」

と仰せになるので百姓の方は自然出来なくなりました。

明治十六年に遠州へ来て呉れと云ふので行きましたが其の日私と高井さんと門屋で米つきをしてゐました（門を入つた所へ席囊を据へて）が

遠州へ行つて来うか？

と云ふことになり

行かう

と云ふことになり早速相談が極つた。其うなると其れをつき終る迄辛抱し切れないで其の俣にしてお磁場を立つて河内の榛原に寄り夜通しで大阪迄行きました。大阪では井筒さんが綿屋をしたり真明組の講元をしたりしてゐるから其処へ寄つて誘つて行く心算であつたが未だ夜が明けませんから川の側で蜆を捕つてる所で夜を明かし其れから本田の井筒さんを叩き起こしました。其の前に井筒さんに十二下りの手をつけて心易くなつて居るから遠州へ行かうと云ふと行くと云ふ。其れから最う一人橋善吉と云つて魚屋をしてる周旋方を誘つて四人連れで莞荊蓑に菅笠で東海道を草津に廻り六七日目に遠州へ行きました。其の頃諸井さんは其の頃広岡村と云ふ所に居られました。袋井より二十町程入つた時宿屋へ泊り井筒様が十二下りの手が皆んなついてないから稽古をしてゐましたら宿のお客様さんが賽銭を上げてくれたことがあります。

諸井さんの内には一月程居りましたが其の間に講社が九千何戸つて出来ました。帰りに汽車がありませんから伊勢の四日市から伊賀の上野へ出て上野から島ヶ原を通つて帰りました。これも六日程かゝつた様に思ひます。

教祖お崩れの頃は此方へ居りましたが

「勤をせい」

と云ふことを頻りに云はれる。其の頃お勤をせいと言はれると警察が出て来ることが定つて居りました。内の先生方は其んなことをすれば矢ヶ間敷いからと云つて止めてあるし、しなければ助からんのでお勤めに出ました。其の時高井さんも居りました。古い人が居りました。お勤めをすれば拘留せられにやならんと云ふので足袋を二足位はいて何時引かれても構はんと云つてお勤めをしてしまふと教祖様の息をお引き取りになるのが一手でした。

其の前に御伺ひしましたら（其の頃は扇をもつてゐて御伺ひしなされたが始めのうちは扇が渦巻いて居るが終ひにピタリと膝についた時お願するのである）

「扉を開いて世界を直路に踏み平らさうか？ 扉を閉ぢて世界を直路に踏み平らさうか？」

」

と云ふお言葉があつた。其の頃は余り門を閉ぢたりなんぞすることが多いから

「扉を開いて世界を直路に踏み平らせて戴きたい」

と願ひましたが後で考へて見ると教祖のお崩れを願つて居たのでした。其の時御本席のもつてゐた扇がピユーツと開きました。

其れから医者にかゝつて居ませんし何うも仕様がなから菅原の勝治さんといふ藪医者頼みに参りました。此の勝治つて医者は薬三服呑んで利かぬ時は天輪さんを頼めと云はれた位信心して居ましたが私が頼みに行きましたら寒い時ですが来て呉れました。其の時は本部の西側の煮売屋迄勝治と云ふ医者を連れて来り其処で一服させつはつて帰りましたが診断書等は彼の人を書いて呉れました。

教祖お崩れより葬式迄は四五日も間がありました。葬式の時は私と山澤さんと倉掛りをして居りましたからよう見送りませんでした何が何でも偉いことでした。沿道は両側田まで道の様にして了ひました。（其の頃は信徒が大和地方から河内近辺にゾーとありました。）

教祖お崩れになつた時分は皆ガツカリしてゐました。世界でも天理教はお終ひの様に思つて居りましたが彼れからゾーと道が拡まりました。

教祖一年祭の時なぞも中々の人でしたが警察からスツカリ差し止められて参拝人は彼地へ追はれ此地へ追はれたりして参拝することが出来ないで帰りましたが装束を着けてゐたものは帳面につけられました。

教祖御存命中は何うしても教会の御許しがなかつたのです。其れは真柱の年が行かん故かも知れませんが教祖お崩れになつて一年祭がすんでから世界の子供が可哀相だから許るす。許るす限りは往還道で怪我をすな。細道には怪我はないと云つてお許るしになつた。其の頃は此方で願はうと思つても矢ヶ間敷いから東京で願ひして認可を得今の東大教会のある所へ教会を設置してそれから此方へ引いて来ました。

これより先きお地場で空風呂が出来なくなつてから一時金剛山の慈福寺を出張所として願つたことがあります。其の頃は護摩をたいたり天輪如来の掛地をかけたりにして内の先生（今の夫人様の親）が上から矢ヶ間しいと云ふので参拝しても差支へない様にお願ひしたが

神様が出て
「其んな所へ頼みに行つたら神が退く」
と立腹なされたことがあります。其れから開講式に護摩をたくのが護摩札は吉野で書くので先生が頼みに行くのに誰も随いて行く者が無い。私は頼みに行くのではないからマサカ神様が退きなされる様なこともあるまいと思つて私お伴をさせて戴きますと云つて吉野へ行きました。先生は足が悪いから道の悪い所は車に乗り好い所は歩かれるのですがサテ越峠を越える時は矢立も何も私が持ちました。芋越から吉野の川上へ出て渡しを渡つて吉野の宿へ行き護摩札を頼み其処で一晩泊り翌くる日金剛山の慈福寺に行つて護摩をたく日を極めて大豆越まで帰りました。先生は足が悪いから其処で泊り私は帰つて来て内で寝ました。其の定めた日には坊主が来て護摩をたいて説教する。其の時は大分賑かでした。其れを暫時やつて居りましたが其の後に警察が来まして神仏混合してはいかんと云つて取り払つて了つた。其の時神様が出なはりまして
「神は願ふのやないと云ふても聞かないから警察怨むやない。神が取り払ひに出したのや」
と云はれた。其の頃掛図はかけて居つたが願ひする時は二十一遍のお勤めをして居りました。
其の前に大神楽の鑑札を受けたこともありました。教祖様は願ひしても御許しが無いし、世界からは非難せられるし何んとかして表向きにして参拝させたいと思つて色々のことをしました。
教祖の食事は別になさつてゐました。側にゐて御飯を食べてみると
「食べなされるか？」
と云つて箸につけて出される
「汚な御座んすか？」
「イエ結構で御座います」
と云つて戴いたこともあります。
年老つても中々達者なもので御座んした。カラサホで麦等かつてゐますとやつて来られて
「私も少し手伝ませうか？」
と云つて手伝なされたこともあります。
力競べをしますと大概負けます。お互ひに手頸と手頸と握つて力の入れ競をしますと教祖様が力を入れて来ると此方の手が離れて了ひます。又たよく小指と人指し指とで手の甲の皮を上げなされた。又た後で合掌に組んでお見せになつたこともあります。
教祖の右の親指が少し歪んでゐましたが其れは奈良の監獄へ行きました時親指二本括つて釣り上げられたクツクと云つて曲つたと云つてゐられたが其んな目に逢はれたこともありました。
教祖は至つて謙遜の方で空風呂に入る時自分がお入りになり人の前を通る時も御免なさい／＼と云つて手を下げてお通りになりました。
子守唄に
庄屋敷小在所西から見れば足達金持ち、善右衛門さん地持ち
と云つて通り此の村でも田地田畑は一番余計持つて御座つた。其れを神様の御命令で
「埋せ込み場所迄立てゝ入れ」
と云はれた迄落ち切られた。埋せ込みになつたと云ふことを聞いて居りますが實際埋せ込み場所に入られたか何うか訊りませんが兎に角これ以上に落ち切ることには出来ないと云ふ所迄落ち切つた時神様が
「内は立派なもので寄り付き憎い。これで充分だから此屋敷を一夜の中にも元の通りにして返へす」
と云はれたが其れから十年の後に元の通り返へりました。（了）

男で御座んす

深谷 源次郎

私が此の道についたのは明治十四年で御座います。其の頃私は京都の三条下り大極町に居りました。富川久吉と云ふ鑄物師が居ました。其の人が町内に御千度をした。其の時富川の云ふには
「深谷さん今日は私の云ふ事を聞いてくれ」
「何んだ？」
「マアお茶屋に行かう。お茶屋に行かなければ話が出来ないから」
と其処で二人は退けた。

「貴方は信仰家であるから云ふが大和にはおみき様と云ふ神様があるが信心しては何うだ？」

「オウ人間が神様妙だな／＼。お前様其れに誑されてゐるのだけ。人間が神様と云ふ事はない。」

「マア／＼誑されても何んでも結構な事と思つて信心してるから明誠社へ来て呉れ」と云ふから其の頃富路小路にあつた明誠社へ行つた。其処の講元と云ふのは京都の西陣の陶器の元祖奥六兵衛といふ人である。此の人が極道して親に勘当せられ此の道を聞いて説教するのだ。其の人の云ふには

「此の神様は元此の世界を造り無い人間を始め下された親神様である。天には月様、世界ではな湿い

.....
.....
.....

先祖から伝つて来たものや親の拵へて呉れたものを大切に始末するのは良い。けれども物を出し惜しみ骨惜しみするのは天理に叶はん。

凡て吾が心からしたものだから此の世に来て何時迄も苦しみ働いて何時でも銭が足りない。これをよう思案して見い。

可愛と云ふも其の通り人間は身鼻負身勝手する。一列可愛いと云ふは良い。極道や馬鹿やと云ふ隔て心するから隔てられる日が来る。彼んな水くさい人と云つて隔てられる日が来る。マア此う云ふものだ。

其れから又た憎いと云ふは罪を憎んで人を憎まぬのは良い。

怨みと云ふたら我が行き届かぬ所を怨んで通れば良いが同じ侍なら同役を怨むから埃である。

又た腹立と云ふのも其の通り道理から腹を立てゝ来たら尤もだ。私もすまなかつたと云つて笑ですむ。これが天理に叶ふ。向ふも得心するやろ。其れを名々聞き分けせずに勝手に腹を立てゝ居る。これは埃になる。其うやらうがな。

又た欲と云ふのも其の通り家業を正直に働くのは結構であるが其れを商売しても欲のこ計りしてゐる。其れ貪欲強欲色情これは大埃だ。

高慢は国の為め人の為めになるのなら高慢にはならない。其れを知つたか振りして眼下に見下すから埃となる。

此の八つの埃を良い方に取れば良いが悪い方にとるから病となつて来る。此の八つの埃をよく聞き分け。

其れから館は神の貸物借物である。これを良う聞き分けなされ。

お伊勢様へ参る時には

ヤイトコセ。ヨイヤナ。アレワイセ。コレワイセ。ソリヤナンデモヨ。

と云ふであらう。お伊勢様に参る時は何を置いても参るでせう。彼れは天照大神宮と云つて伊邪那美命様を祀つてゐる。

其れで世界では五本目の指を子指々と云つてゐるが彼れは子指と云ふのやないで。小親指と云ふのやぜ。右の親指はこれは国床立命、左の親指は重足命、右の人指し指は惶根命、左の人指し指は国狭土命、右中の指は大戸辺命、左の中指は雲読命、右の薬指は月読命、左の薬指は大食天命、右の小親指は伊邪那岐命、左の小親指は伊邪那美命の御守護である。御膳食べるのも親字を書くのも親の御守護があるから出来る。

其処で人間は元魚であつたのが人間に出世したと云ふので魚丈けは上つたと云ふ。外の者は落ちた死んだと云ふ。其処で一人助け親に孝行、主人なら忠義、兄弟仲良ふと其の通りなされたなら何うでも此うでも結構な所に生れて行く道を神様がおつけ下されてある。貴方が人間助けをすれば神様は一粒万倍に受取つて下さる。」

「成る程其うだ其れに違ひない」

「此の道は医者要らぬ。坊ん様要らぬと云ふが其うではないで。医者も坊ん様も神様の子だけ。医者が要るから大学迄出来たであらう。坊ん様は仏法を弘めて来た」

其れ丈け聞いて帰つて来て家内に此う云ふ話を聞いて来たが己は信心しやうと思ふと話すと家内は「貴方誑されてゐる」

と云ふ

「イヤ誑されてゐない」

「月何んぼ要りますか？」

「十銭か十五銭あれば良い。」

「貴方は又たシヤバの云ふ事を聞いて誑されて来たのだ」と家内が云ふ。

「何んでも良いからお前も一遍来て呉れ」
と云つて家内を連れて明誠社に行つた。家内も神様の話を聞いてこれなら私も入れて貰はふと云ふことになつた。其れから信心しかけて昼は働いて夜は講社をひろめた。

其れから大和へ参つて教祖様にお目通りをすると教祖様は
「よう来なさつた。サア心直して勢出しなさい。京は市やで。偉いことになるのやで。
気張りなされ」

と云はれるけれども分かりやせん。又信心するに連れて参ると
「サア／＼京にはな教会といふのが出来るのやぜ。冠を着てヒヨンと出るのやで。内裏雛の奥様見たいの着物をきて出るのやで」

又た
「世界これから汽車懲役が出来るのやで。懲役といふものは赤い袴天を着て腰縄つけて働くのやで。其れから電信が出来て五分間で用が足る様になるで。又た東京へ十八時間で行けるやうになるのやで」

「ヘイ」
「人間は見てから云ふのは世界並。見えぬ先から云ふて置く。これをよく聞き分けてくれ」

京都へ帰つたが一つの講を結んで今度と云ふと
「これから授けと云ふものを渡す。万人の中に一となるのやぜ」
と云はれる。

神様がお前の熱心を見てお働き下さるのだけ。
今世界では人を笑つたり譏つたりしてゐるけれども笑はれたり譏られたりして置きなされ。向ふがボロクソに云へば云ふ丈け向ふがボロクソになるのだから。何を云はれても神様が見てゐる」

其れから御神樂歌を見せて
「人が何事云はうとも神が見て居る気を鎮め」
と云ふ所を読んで聞かしのなされ

「人が何事云つても怒つてはならない。何んぼ信心しても心得違ひはならん。
サア 何んな茨 畔 サアそれを越したら細い道もある淵もある。其れが心の道やで

此の結構な道を例へて云へば百間の金の橋がある。其れを渡つて行けば向ふに万石の倉がある。けれども大抵の人は其の橋の中途迄行つて戻つて了ふから万石の倉迄行けないのやで。シツカリ信心しなされ」

其れを聞いて帰つて一生懸命に信心してゐると町内では私が家持ちだから放り出しには来ないが度々異見に来る。
「貴方は人が善いから天輪さんに馬鹿にされてゐる」

何んと云はれても私が聞かないから今度は親に異見せい云つて来る。私の親は
「兄が何んなことをしやうが私共は唯兄に末を見て貰へば良いから兄のする通りにさせて置きます」

と云つて断る。
「オヤ／＼親爺さん迄誑されてゐる」

町内で三人寄ると
「貴方彼れは山子です。彼んなものを信心して家迄質に置くと云ふのは誑されてゐるのだで」

と云ふて止める。
「此の道は盲目なら手を引いて通る道である。人を助けるには商売は出来やせん。其処で私は商売を捨て、此の道を一生懸命に働いてゐるのだ。其れがいけないのか？」

「其れは結好だが同じ信心するなら稲荷さんを信心した方が結構ですぜ」
と。何んと云はれても私が聞かないから親類二十一軒皆私と交際しなくなつたが今は其う云つた人が皆なボロクソになつて了つて私丈けは甲賀、水口、湖東を入れて二十万からの講社が出来た。其れは私が働いたのではない。神が働いてくれたのである。其の間に前生何んなことをして来たのか分らないが途中で妻に分かれ云ふに云はれぬ苦勞をしたが其れでも何んな中でも通つて来た。其の後

「お前は此方へ来るのやで」
と云はれて此方へ本部員として勤めさして戴く様になつた。

教祖様からは
「公事訴訟に先追従これ大嫌ひ。正直が天理やで」

と云ふ様な不思議なことをタント教へられた。
私が来てゐた時或る時信徒の人が氣狂ひを連れて来た。教祖様頸をかたげて

「これは山子やで。其れは氣狂いではないぜ。其れは父親が死ぬ時此の千五百兩の金は弟にやつて呉れ頼むと云つて死んだ。其の弟が成人したから其の金を呉れと云ふと兄はないものはやれるかいと云ふ。氣狂の真似をしたら氣狂ひになる位だから本当はないのだと思はせ様と思つて其の金出すのが惜しさに氣狂ひの真似をしてゐるのだ。金はないと云はせぬで。神が呼んで神が入れる。三千八百三十円あると云つてやれ」と仰つた。其れ迄氣狂の真似をしてゐた男はビツクリして駕籠から飛んで出て逃げて了つた。

其れから此処へ三人の盲女が籠つてゐた。二人は良くなつて行つたが後の一人は良くな

らない。其れで後に残つた一人が云ふ

「私は眼がよくなりません」

「お前さんは未だ懺悔が出来ないからだらう」

「イエ私は充分懺悔をして居ります」

其の事を教祖様に申上ると

「懺悔してると云ふのなら云つてやれ。其んなら明日人の中で恥を搔せてやると云つてやれ」

其れから其の事を其の女に云ふと

「私は懺悔をしてゐる」

と云ひ張つて聞かない。

教祖様の仰るには

「其れは忘れてゐる。何年何月の十一日を思ひ出せ」

すると其の女は暫時考へてゐたが

「あります／＼」

と叫んだ。

………

………

「天理は人を崇めたら我が身崇められる。何んぼ信心しても心得違ひはならんでな」

「教会へ行つて掃除するのも皆我が徳になるのだで。其れを神様教へて下さるのやで」

教祖様のお言葉は何でも歌見た様にお説きになる。私がお側に居た時アア…と大きな欠

伸をなされ

イン／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

サア／＼月日の云ふこと聞いてくれ

飯喰も仕事するのも皆月日やで

口先き追従詐高慢これ大嫌ひ

これ聞いてくれん残念／＼／＼／＼／＼

と仰せられて其の俣こけてお睡りになつた。（了）

附記 凡そ人間に癖のない人と云つてないが其の中に於て最も癖のない人を求めれば

深谷氏の如き蓋し最も癖の少ない人であらう。氏の人の善い素直な精神は何人をも

親しまする力がある。分けて氏の大なる特長は教会の差別に依つて親疎を異にしな

いと云ふことである。この円満な性格がやがて甲賀、湖東、水口、河原町の四大教

会の父たり得た所以であらうと思はれる。考ふべき人である。

私が第一回目に伺つた時はお客があると云ふので二回目に再び伺つたが今度は快

く接して色々有益な話を伺ふことの出来たのは風来の書生にとつてこれより大なる

感謝はなかつた。私は氏並に氏の有する教会及び其の子教会の繁栄を切に祈る一人

である。（RO生）

おばさん

飯降 政甚

私は六つの年から此地へ寄せて戴きました。自分は良く覚えて居ます。母と共に櫛本か

ら相乗車に乗つて来たことを。其の時分は六つか其処等ですから腕白盛りで訳が訳らずに

唯櫛本に居るより此方が広くもありますし、其の時分は道は余程進んで来て居りますし、

以前の困難な時と違ひ大変楽になつて居りましたから子供心に唯良い処へ来たと云ふ考で

ゐましたが色々前の言葉を聞いて見ますと神様より来いと云ふお話があつたが都合があつ

て延々して居ました。

其の中に母に連れられて小学校に通ふ様になりました。其の時分は恰度中南と云つて元

門を入つた処へ教祖の御居間が出来てゐました。私共が入れて戴いてから後に今教祖殿の横に保存建築になつてゐる教祖様の御居間が出来てから私共は中南に入れて戴いた。現に中南も保存建築にさせて戴いて居るのですが彼れは教祖から私が貰つたのであります。彼れは非常に理がある相です。彼処に門屋がありますが彼の門は中央が門になり向つて右が倉左が教祖の居間（十畳）になつてゐました。彼の門を建てる頃は未だ／＼本部は困難で

ありました。

彼の門屋は私の父が建てたのですが
「此の門屋は政甚にやるのやで」

と仰つたことを聞かされてゐます。

大抵の倉に窓無しの倉つてありませんが彼処の倉丈けは窓無しの倉であります。彼れは道が進んで行く勤めの人衆の生姿をおさめる所だといふことであります。

私は非常に有難い因縁で腹の中から名前を戴きました。私の先代が政治郎と申し五つで

出直した相で御座います。其れから女計りでしたが神様が貰ひ返してやらうと仰つて名前

をマサジンとつけて下さいました。

マサジンと云ふのは
「木では靱より堅いものはないから名を政靱とつけよ」

と仰せになつた相ですがジンと云ふ字は何んな字を書けば良いか分らぬから役場で政甚と

つけたのだ相です。

其の頃は理も浅いから非常に疑ふて居りました相ですが生れた子が男の子でありました

から非常に驚き其れから信仰も進んで参りまして如何なことがあつても道の為めにせにや

ならんと決心の度を固めたと屢々其の事を話されました。

私共の子供の時分は教祖様とは申しませぬ。私等はおばさんと申しましたことが御座い

ます。何にした処で始終学校から帰りまして行く色々なものを戴く其れが何より楽しみ

でした。

勿体ないことですが私は三度も五度も教祖様に負はれたことがあります。

教祖様は私のことを

トノヨ／＼

と申されました。其れは私の先代の政治郎が先代に留治郎と申して教祖様の長女政子様の

腹に生れて居つた相であります。其の頃はお政さんもお地場に居られましたからよく戯談

に

「お前は私とお里さんの合ひや子（仲間の子）や」

と云つて非常に可愛がられました。

彼の方も教祖の子だから精神は良いけれども酒を呑むと酒癖が悪くて女にはあるまじき

振舞があつたのです。後に彼女は教祖から「埃の館」として残して置いたと仰せられまし

た。矢張り教祖様の子でも何んな子もあると世界一列に縮めて見せたのだと思ひます。

お政さんの次がお春さん。お春さんの次が小寒さんであつた。お春さんは前管長様のお

母様であります。其の方が早く亡くなつたから後へ小寒様が御いでになりました。其の時

う云ふ所にあるかと無量の感慨に打たれたといふことを父から承りました。
松枝さんのおかれの時は子供心によく覚えて居りますが腹が膨れて口からは泡が始終
出て居りました。亡くなつた時其の事を教祖様に申上ると御休息から中南 松枝さんは
中南で亡くなりました へお出でになり
「偉い溜めたな／＼。何ンぼ溜めてもあかせんで」
と仰せになりました。其の時は私の未だ子供の時分でありますから
「偉い錢入れてあると云ふことですが彼れ切つたら偉い出るで」
と云つて母から偉い叱られたことを覚えて居ります。八つ位の頃は其んな馬鹿なこと考へ
てゐたと思ひます。
松枝さんが亡くなつてから一年も経たないうちに教祖様がお湯を使つてお居でになり姉
が教祖様の背中を流して居りますとくづ屋葺きの屋根の廂の上に颯がゐた。教祖は其れを
見て
「ア、松枝帰つてゐるぜ」と云はれたと云ふことを聞いて居ります。
「彼女は再び人間界に出さんが此処より何処へもやらん。屋敷の中に置く」
と仰せられたといふことですが成る程屋敷の中に居ります。私等子供の時は松枝さんを姉
さん／＼と云つて居ましたが其の颯にあふと
「ア、姉さん／＼姉さん居るで」
と云ふと今の夫人様 其の頃はいと（お嬢さん）／＼と云つてゐましたが
「甚さん又た彼んなことを云つて私をいぢめる」
と云つて泣かれたことを覚えて居ります。（終）

付記 私は此の文を書く時始めて飯降氏に面会したのであるが氏に接して見ると矢張
り御本席の 子だけある。頭が大きい。而して最も宗教家らしい氣分に富んでゐる。
今は思想の上からか生活の上からか兎に角蔭の道を通つてゐられる様であるが氏
の為め道の 為め折角の自重を祈る。（R〇生）

眼のお助け

増井 りん子

増井りん子様は一旦失つた眼のお助けを戴きましてより熱心に信心し其の後針の心を
許され御息 きの御授けを戴いて居る方で本部員中唯一人の婦人であります。
此の度「感謝と記憶」とを書くについて特別にお話を承りたいと思つたが何分多忙で
緩然御伺す る暇がない為め以前特別私の為めに山名迄お出でを願つた時伺つたお話を掲
げることになりました。

（R

〇生）

私が此のお道に入り眼のお助けを戴いたのが明治七年であります。其れから昼夜御詰め
合ひいたしました。御承知の通り誠にいろはも知らない不行届の者で御座います神様は
阿房が好きやで
と仰せになり馬鹿なものでも今日迄御使ひ下され何んとも恐れ入る次第で御座います。
御教祖様のお生れになつたのは寛政十年四月。御生なされて僅か三歳の頃で御座います
が人々は何も結構なお方様と存じませぬからあゝ不思議なお方であると感心致して居りま
した。
御年が優り六歳におなりになりますと母親の側にて裁縫を見習ひ遊ばし糠袋巾着等をお
拵らへになり出来上つたものを御友達に上げて其の友達が喜ぶのを見てお楽しみなされま
した。
其の頃折々外へ遊びに出ますれば近所の人達が自分の子供が無理を云ひまして難儀をい
たして居るのを御覧になつて御氣の毒なものと思ひ御自分も六歳頃では玩具や宝石が欲し
い御年頃でありますのに其れを無理云ふ子供にやり其の子供の心を慰め其の親の喜ぶのを
見てお喜びなされました。
九歳の年より三ケ年の間御手習遊ばされ余る時間で裁縫を遊ばされ十一歳にて一人前す
ぐれにお成り遊ばした文化七年の九月当所お祭りに前川家と中山家とは御親類の間故お立
ち寄りになりましたが其れから縁談が調ひ十三歳の時五荷の荷物を整へて中山家へおいで
になりました。
中山家は庄屋敷の紋附様と申しまして下女下男も沢山居りましたが教祖様は何をせんと
仰やられず何んでも引き受けておやりになり通常人の二倍の仕事なされたと申すことで
教祖様のなさらぬ仕事は荒田起しと溝掘り丈けだと云ふ事で御座います。

余りお働きになるので御両親から
「其の様に働いては疲れてはならんから」

と申されますると教祖様は
「これが結構で御座います」

其の頃は殿方も一般御頭をお結びになりましたが教祖様は自ら砥石剃刀をお扱ひになつて父親様の御頭をお剃り遊ばされました。

御自分の身粧は荒唐の風をし物見遊山に半日も御出でになつたことは御座いません。其れ丈け僕に与へて喜ばれました。殊にお祭等には其弁当をお拵へになり其れを持たせて遊びに出されました。

下女に致しましても御暇を戴く丈けでも結構で御座いますのに其の上御自分の物を貸し御自分の手を下ろして髪を結ひて御やりなされました。

十六歳になりますと庄屋敷の紋附様と云はれる大世帯を御請け遊ばしました。

或る本には倉に盗人が入つて米を盗み出したと書いてありますが其うでは御座いません壁を毀ちて「サシ」を入れて出してある所を捕へたので御座います。

其の時盗人は教祖様の御説諭に感謝して帰り本心に立ち帰つたといふことであります。

二十四歳の時御妊娠中母上様御病氣になりましたことなれば何処へ行きたいと仰せられます。自分は御身重でありながら何処へでも背に負ふてお出でなされたと申す程御孝心の方で御座います。

二十八歳の時政子様、三十歳の時安子様、三十四歳の時春子様、三十六歳の時常子様、四十歳の時小寒嬢様を御出産遊ばされましたがお出産の度毎に乳が沢山御座りますから誰彼の区別なく乳をお与へ御助けなされました。二女安子様を御出産遊ばした時他人の子を御預りになり自分の子を他人に預けられました。折悪しく隣村に疱瘡が流行いたし其の預り子もこれに伝染し遂に黒疱瘡に変わり医者も手放す様になりました。教祖様は何うぞして此の預り子の生命を助けんと思召し

「自分の子供一人丈け残し後二人を差し上げます。さる代り此の子一人の寿命をお助け下さいまし」

と申し上げますとさしにも思き黒疱瘡が見る／＼間にお助けを戴きました。其の後間もなく安子様が四歳にてお引き取りになり次に常子様が三歳で御亡くなりになりました。此の常子様と申す方は安子様といふ方の生れ変りで一度に二人迎ひ取つては気の毒だと云ふので魂を入れかへて御迎ひとりになりました。

教祖様の真心は日々人を助けたい人を救ひたいと云ふ助け一條の御心にてお通り下されました。

或る時女乞食が門に立ちました。教祖様は其の乞食を御招き遊ばし粥を与へ沢山食べさせられた。暫時しますと子供が泣き出す。其れが乳呑み子故自ら其の子を御下ろし遊ばし御乳をお与へになつた。其れから御自分の着物を御出しになり

「此の着物を持ち歩いて人に疑はれてはならん。纏ふて御いでなさい」と云つておやりになります。

「一杯の粥も戴けぬ身の上なるに結構な物迄戴いて誠に有難う御座いました」

と乳を戴く間に着物を纏ひ、其の間に子供は乳を放すと御自分の子につくつた御布団を其の子に与へました。

人に依ると人に乳を呑ませて其の眞実なるに依り神憑があつたと云ひますが其うではありません。

御屋敷の因縁と教祖様に依つて御憑りがあつたので御座います。

「人間を始め出したる屋敷なり其の因縁で天降りたで」

此の屋敷は四方面鏡屋敷と云ひ又た教祖様は「手本」とも「雛型」とも申されて居ります。内も外も隔てないのが此の道で御座います。

神憑がありましてから

「神の社にする程に通れる限りは貧乏の道を通れ」

と云ふので五荷の荷物を始め中山家のものも皆施して終ひには唯つた一枚の着物が残つた。其れを人の通る所に出して置くと

「ア、結構な着物が落ちて居ります」

と持つて来る。すると教祖様は通り合せたものなら貴方にお授けになつたのでありませう」

と云ふと其の人は御礼を云つて行つた。

「ア、喜ばしいことをした」

と御喜びになる。其れから周囲の立ち屋を払ひ終ひに本家を取り払らひ田地は質に入れたり売つたりして人にお施しになつた。誰か金が要る人が通ると其の人の通る所にお金を置く。其の人が拾つてこんなものが落ちて居りますと告げると

「其れは貴方に授かつてゐるのでせう」

昼は御助け致し夜分は糸を紡ぎ針仕事を致し、仕事のなき時は木綿を織つて其れを人に与へて楽まれた。其うかと思へば日々の間に無心を云ふてくる者もある。

「ア、世の中の子供は何も分らんで人に難儀をかけるが人を難儀さすならば自分も難儀する事が出来て来る。理が廻る。可哀相や」と仰ります。

其れ計りではない度々警察や監獄へ御苦勞下され明治八年がかゝりて其れから十八回も御苦勞下されました。

十日間の拘留の時なぞは御枕はなし、湯文字を解いて其れを枕に遊ばしました。左様の所へ入るのは悪人故火の気はありません。御老体には布団一枚あるでなし御咎人ではないが咎人同様の着物を御召し遊し日々其の中にて御住ひ下さるのは微塵も御厭ひなく夏向きには暑いけれど暑さを凌ぐものもなく蚊に食はれても厭ひなく御苦勞下されました。其の御恩は海に例へる時は幾百尺の海で御座ります。

又た秀司様に小寒様は茄子をつくり芋をつくり薪を荷ふてお売りなされ誰も買ひ手がない時は頼んで貰つて貰つても良いからと仰やる。其うすると教祖様は

「ア、頼んで貰つて貰つて呉れたか」

と御喜びなされたことが御座ります。

小寒様は髪は結ひたいけれども結ぶ金はなし、其処を足納してお通りになつたのはお若い方には中々出来ぬことで御座ります。

又た教祖様は

「成人して縁についてから裁縫が出来ぬと云つてはならぬ」

と云つて近所の子供を集めてお教へになつた。

さて此の御道に於て何が頼りかと申しますると此のお道すがらの理が頼りで御座います。

「苦しみが楽しみ」

足納と云ふ理を治めまして其の理を定規と致しますれば大儀大相も御座りません。

「足納と云ふことは第一やで。足納が足らぬと案じが出る。案じが出ると埃が出る」

と御聞かせ下されて居ります。

私は四十年余り前に眼を助けて戴き本部へ歸らして戴き日帰りする日もあり一夜とめて貰うこともあります。

「雨が降ります故最う一晚御泊めなされて戴きたい」

と申上ると

「足止め／＼」

と笑つて仰せになられます。

三島へ歸りますと途中で御腹が痛む。

流れの水を呑んで神様の方に向つて願ふと良くなる又た良く又た痛む。其う云ふことが二度三度御座います。歸つて来ますと

「おりんさん又た歸つて来たぜ」

其れから

「此処は何ふですぜ」

と仰ります。柔しき言葉で仰つてさ下ります。

「此処は生れ故郷やぜ。彼所は行くのやぜ」

と御聞かせになりました。(終)

国六分の人を寄せる

諸井 国三郎

諸井国三郎氏は遠州広岡村の人。明治十六年に此の道に入つてから今年まで三十有四年。一旦道の上に一大事のある時は十里の道を跨にかけて走せ参じた此の道の柱石の一人である。

其の為めに神様よりは

国六分の人を寄せる

と云ふ有難いお言葉を賜はり令嬢には生れて一ヶ月目にお水のお授けがあつた。今日教会の数も数ある中に神様よりお面道具の御許しになつたのは氏が創立した山名大教会あるのみである。

氏は今年七十七歳の高齡に達し現在本部員中の最高齡者であるが而かも其の元氣の澆刺たる恰かも壯者を凌ぐの慨がある。道の為め氏の静養を祈る。(RO生)

私が始めてお地場へ登参したのは明治十六年三月である。其の頃御内と云つては教祖様に管長様と夫人様丈け。未だ御結婚前で夫人様より管長様をお呼びになるには兄様／＼と申して居られました。先生としては仲田儀左衛門（サユミと云ふ名を教祖より賜つた）此の人の御取次で教祖様に御拝顔を願つた。

其の時教祖様の仰るには
「諸井さん手を出して御覧」
と云つて畳の上に掌をつけてお見せになる。其の通りにして出すと私の手の甲の皮を右の人指し指と小指とで押へて釣り上げ

「此うして御覧」
と云つて今度は御自分の手の甲をお出しになる。けれども私には何うしても其れが出来ない。其れで

「恐れ入りました」
と申上ると今度は
「私の手をお持ちなさい」
と仰つて私に御自分の手頸を握らせになる。而して御自分は又た私の手頸をお握りになり
「サア確つかり力を入れなさい。然し私が痛いと言つたら離して呉れるのやで」
と仰る。

其れで此方で一生懸命に力を入れて教祖の手頸を握ると力を出せば出す程此方の手頸が痛くなつて来る。

「もつと力を入れなさい」
出せば出す程此方が痛くなりますから

「恐れ入りました」
と申上ると
「其れ限りしかないのかい。神の方には倍の力や」

と云つてお離しになる。
今度は背向きになつて両手を背中で合掌に組み

「諸井さんこれ出来ますか？」
と仰る。自分も背向になつて一生懸命にやつて見るが何うしても出来ない。其れで又た

「恐れ入りました」
と申し上げるとお笑ひになつて

「誰にでも出来るのやがな」
誰にでも出来ても此方は其れ丈けの徳を積んでゐないのだから仕方がない。

其の時はお地場に一日滞在した限り歸つた。

第二回目の登参は十六年の九月である。此の年は偉い干魃で田地は皆亀裂を生じ百姓は皆困つてゐた。

其の頃大工をしてゐた飯降御本席は建築中の教祖御休息所の仕事をすまして豆腐屋の前の腰掛けに涼んでゐられると急に大変なお障りが来た。其の事を奥様から教祖様に申上ると教祖様は

「其んなビツクリ周章せずとも良いで」
と仰せになり詰所にゐた仲田さんを召んで

「早く扇を伊蔵さんに持たせなさい。其れから遠州の講元さんも連れておいで」
と仰せになつた。其れで仲田さんが直に二階に登つて来て

「遠州の講元さん。今伊蔵さんが大変の御障りで神様に伺ふと扇を持たせろと仰せになり其れから遠州の講元さんも連れて行けと仰るから一手に行つて下さい」

と云ふから私も急いで二階の飯降様の所へ駆けつけて見ると蚊屋の中で手を握つての苦しみである。然し不思議なことには仲田さんが扇を持たせるとウンと云つて顔も確つかりし身体もチャンとして神様がお降りになつた。而して

「サア／＼珍らしい事や／＼国へ歸つて勤めをすれば国六分の人を寄せる。なれど心次第や」

と仰せになつてお上りになつた。其れと同時に飯降様の御苦しみも直つた。

私共（私と木村林蔵）がお地場へ着いて四日計り経つと伊勢へ廻つた清水重作外五名の者が到着した。丹波市迄来ると清水が云ふには

「聞けばお地場では此の頃矢ヶ間敷くて警察が参拝人を止めてゐるといふ話だが何う云ふ具合だか一つ様子を探つて見てのことによやう」

と云ふと其の五人の中の守屋国蔵といふ男が
「其うか己等其んな所だとは知らないで随いて来た。其んな警察で参拝人を止める様な所なら己等参拝しないでも良いから直ぐ歸らう」

と云つて怒り出した。其れを漸くなだめて豆腐屋迄連れて来たが

「己は帰る」
と云つて中々聴かない。帰るにしては国蔵一人返へす訳に行かないから誰か随いて行くかと云ふことを相談したが次の日になると国蔵が急に胸がつかへて飯が喰へなくなつた。明くる日も食へない。又た明くる日も喰へない。食つても皆吐いて了ふ。到達三日間と云ふもの寝通し。十一日の夕方に御地場より遠州の参詣者に皆な来いと云つて使が来た。早速行くと神様（教祖様）より

「御苦勞であつた」
といふ御言葉があり、続いて月日のお模様のついた陶器の三つ組の御盃で御自身御召し上りになり後で其の御盃をお上げになつた。夫から守屋も飯が喰へる様になつた。それで守屋も恐れ入つて申訳がなかつたと云つて懺悔をした。

其の前に清水外五名の者が丹波市へ着いた夜お地場では神様がお下りになつて「サア／＼遠い所から遙々参詣に来て見れば野原の様な河原の様なさもない所と思ふ者があるで」とお聞かせになつた。後で守屋国蔵の精神を予め神が仰せになつたのだと云つて皆な恐れ入つた。

第三回目の登参は明治十七年の一月である。途中伊勢参宮をする心算で二十一日に内を出立し途中豊橋の町を通ると提灯屋がある。其れから私は思いついて

「これは一つフラフを拵つて立てゝ行かう」
早速大幅四尺の天竺木綿を買つて真中へ日の丸を書かせ其の中に天輪王講社と書き其の下に遠江真明組と大きく書かせて其れを立てゝやつて来た。お地場に来ると表門通りの四辻に巡查が一名待ち受けてゐた。其の前を通らうとすると巡查が

「コラ待て」
と云つて立てゝ来た籬を抜きとつて
「此の籬は何か天輪王へ来たか？」
「これは講社の目印。天輪王へ参りました」
「降りろ」

「今其処まで行けば降ります。車豆腐屋迄やれ」
車夫が引き出すと巡查は籬持ちになつて随いて来た。
「天輪王へ来るには何か持つて来たであらう。此処は参り所ではない。婆々が赤い着物を着て愚民を迷はして金平糖を喰へば腹痛が直るとか水を吞めば腹下りが止るとか云つて居るから大阪府で嚴重に止めて居る。何故来たか直ぐ帰れ」
「拙者は何も持つては参らぬ。昨夜扇屋へ一泊すると女中が此の籬を見て天輪さんへお参りですかと尋るから天輪さんが何処にあるかと聴くと三島にあります。お婆様で御座いますと云ふから其んなら明日人力を雇つて案内をさして呉れと申し附けました。只今参りますと貴方が天輪王へ来たかと申されたからは幸ひと思ひ参りましたと答へましたが実は始めて聞いて喜んで参りました次第であります」

巡查
「貴様何処か？」
「籬にある通り静岡県遠江国天輪講社の講元を父の代から致して居るが拙者父に死に別れて未だ天輪王が何処にあるか知らなかつたが図らず此処に天輪王のあるといふことを聴き尋問致したいと思つて参りました。」

「静岡県何ちゆう？」
「静岡県は山名郡広岡村……」
「名前何ちゆう？」
「未だ番地が御座りません。無番地。諸井国三郎」
「む番地ちゆうが有るかい。六番地か？」
「イエ無番地」
「無番地ちゆうが有るかい。不都合なこと云ふな」
「む番地とは無番地と書きます。拙者も役場へも勤めて居る人間で詐は申しません。拙者此の度新宅を設けたから戸番の改正迄無番地として置きました。疑ひなさるなら静岡県庁へ照会なさい」

「参詣はならぬ。帰れ」
「拙者は素より参詣には参りません。当所の婆々でも爺々でも良いから天輪王の由来を尋問したいと思つて参つたのだから得心の出来る迄尋問する心算ですから帰りません。其の代り拙者の滞在中は此の籬を此処の表へ出して置きますから御用の節は何時でもお招きに預りたい。お招き次第警察へ上つて何んなことでもお答へ致しますから。又た此の旗の無い時は立つたものと心得て戴きたい」

巡査も大変弱つて手帳に住所と姓名とを書いて帰つたが其の翌日（旧正月の元日）来るかと思つたが来なかつた。其の日の朝丹波市の西尾と云ふ酒屋が来て云ふには

「今日は警察は参りません」

「何故か」

と聞くと

「昨夜警部と部長と巡査と三人で色々話をして居ましたが明日は止めに行かんけりやいかんで一人が云ふと一人は放つて置いたら五ヶ国も七ヶ国も集まるだらうから止めに行くが良からうと云ふ。其うすると巡査が幾ら五ヶ国が七ヶ国の者が集まつても今日の様に頭を抑へれば尻に抜ける。尻を抑へれば頭に抜ける。又ベコベ／＼問答しても終ひに立ち場がない様な事に成つても困るから考い物で御座いますと云ふと警部が其んなら明日は放つて置かうか？ 其れがよからうと云ふことでありましたから今日屹度来ません」

と云つて行つたが其の前の晩即ち巡査と問答した晩神様がお出でになつて今酒屋の話して行つた様な警察の三人の問答をお聞かせになつた。

私が巡査と問答をして居る時には豆腐屋の前は人で一杯であつた。が余り其の場の様子が陰悪であつたので御本席様も大変御心配なされ、御家内様は豆腐屋の裏へ廻つて立ち聞きなされたといふことである。これが為めに

「遠州の講元は偉い！」

と云ふ評判が村中に広まつた。此の時実地を見聞した人々の中で今生きてゐるのは村田幸助（豆腐屋の弟）足達秀次郎北村平四郎（時計屋の老人）等の人達であるが今でも此の人達に逢ふと昔話の一つになつてゐる。

其の前に私共がお地場に到着する前に予め私共の来ることを神様御承知であつて

「ア、／＼だるい／＼此うだるくは叶はない。遠方から子供が来るで。ア、見える／＼フラフを立てゝ来るで」

と仰せられたといふことである。

これから私がお地場に参ると必らず刻限があつた。其れで

「又た遠州の講元さんが来たから神様がお出でになるで」

と云つて他処から来た参詣者も足を止めて一日滞在すると云ふ風であつた。

此の時お地場に滞在したのが二十七、二十八、二十九、三十、三十日に大阪の真明講の講元井筒梅次郎氏から教祖に向つて（其の時高井猶吉氏も同席した）

「神様へ恐れ入ります御願ひで御座りますが遠州では郡長も懇意で御座りまして咄し致して置きまして十二下り立ち勤め出来ます故御神楽御道具を御許しを願ひたう御座ります」

と御願申上ると教祖様は暫時ジツとして御居でになりましたが

「サア／＼許す／＼私が許すでない。神が許すのやで」

と仰せになつて御許しになつた。此う云ふ事は殆んど前後に例のない破格の恩典であるから一同非常に喜んで早速大阪へ参り梅谷四郎兵衛氏に御神楽道具の調製を頼んで遠州に歸つた。

此う云ふ具合に神様から色々破格の御引立を蒙つたが明治十九年四女の秀子が亡くなつた時お地場に来て

「何か違ひがありますかお聞かせ下されたい」

と云つてお願すると

「小児の処事情があるから尋る。三才も一生地場一つに心を寄せよ。地場一つに寄せれば一方折れても三方に根が張る。二方折れても二方根が張る」

と云ふお指図を戴いたが其のお指図を戴いて歸つて十月目に家内が妊娠して出来たのがおろくである。

おろくの出来る前にお地場へ上つて安産の御願をすると教祖様御自身に御供を包んで下さらうとしたが其れを側にゐた高井さんが

「私に包ませて戴きます」

と云つて紙を曲げて御供を包んだ。其れを教祖様は良いとも悪いとも仰らず黙つて見て御居でになつたが高井さんが包み終へると別に紙をお出しになり

「鋏を貸してお呉れ」

と云つて鋏をかりて紙をチアンと切り四半斤計りの金平糖を御包みになりて私にお手づから下され

「これが産屋許しだで。これで高枕もせず腹帯もしないで良いで

今は姉の時だでな柿を食べても大事ないで。

余つたものは人にやつても良いで」

凡て教祖のなさる事やする事にこれはいかんと仰つたことはない。

赤衣様をお下げになるにも御休みになつてゐる一畳の台の下から御出しになり

「これは私が着せて貰ふたのであるが赤衣には中に月日が籠つてゐるから明るい処が見え

るのやで」
と仰つてお下げになる。お下げになるにも盆に載せるとか下に置くといふことはない。必ず手渡しにお渡しになる。
私が戴いた時は南の門屋にお居でなされたが其れを祭れとも拝せとも仰らない。唯此の中に神が籠つてゐるでと柔しく仰る丈けである。
其れから直接聞かして戴いたことでは物参りになつても乞食にくれ／＼と云はれた時一文をやらうと思つて財布を開けて四文銭さへなかつた時には決してやるでないで。今日は小さいものがないから今度やるでと言葉に文を残して帰つておいで
乞食は四文貰へば喜ぶが神がお受け取りがないから」
と云つてお聞かせになつた。
又門屋にお居でになつた頃門前に乞食が沢山居るのを御覧になつて
「ア、門前に沢山乞食が来てゐる。けれども彼等を見てうたていと云ふでないで。彼れは前生彼んなものは食べられない。こんなものは食べられんと云つて食物を放つたから理が廻つて来て此の世で人の捨てたものを拾つて食べなければならぬ様になつたのだで。可哀相なものだと可愛がつてやつてくれ」
とお聞かせになつた。可哀相なものだと云ふのは精神が可哀相だと云ふのである。
其の頃はよく警察で来て拘留に処したり罰金に処したりしたが教祖様は
「皆んな警察や巡査と云ふと怖がつてゐるがな何も怖がつて居ることはないで。彼れは何も知らない四つか五つの子供見た様なものだで。此処に止めに来るのもな皆んな役で来るのやで。真に心から止めに来たら息が止まるで」
と仰せになつた。
何時伺つても
「良ふ来なされた。内には皆な変りはないかい」
と仰る御言葉に何んとなく慈愛が籠つてゐる。
「有難う御座ります。神様の御蔭で結好に通らして戴いて居ります」
「其りや結好やな」
既にお話と云つて下されなくても仰せになるお言葉が日々深い意味をもつてゐる。
「何んでもな人を助ける心なら何を云はないでも自分に帰つて来るで」
と精神を直せとも何んとも仰やらないけれども味つて見れば其処に無限の意味がある。
殊に数多いお言葉の中に一生忘れないのは
「道について来て足場になるなよ／＼。足場と云ふものは普請が出来ると取り払つて了ふ何んでも国の柱となれ」
と仰せ聞かせ下された。これ等は忘れやうと思つても忘れることの出来ないお言葉であるが此の他にさもない御言葉を御聞かせ下されてもあゝ有難いなと自然に浮ぶ様になる。其れだから御教祖様に直接接した方は普断に有難いお言葉を戴いてゐるから教理治め方が違ふと思ふ。
当時のお話と云つては重に泥海時代の御事で御本席時代の様な詳しい事はお聞かせがなかつた。
「世界には元々を聞かしたことがないから仕方がないが此の俣居ては親が子を殺し子が親を殺しいぢらしくて見ておられぬ。其れで元を聞かさにやならん」
と仰つて月日二柱の神が道具雛型を見出して人間をお拵らへになる道すがらをズーとお説きになり
「此う云ふ訳だから何んな者でも仲良くしなければならんで」
と云ふことをお説き聞かせになつた。
教祖お崩れになる前年即ち十九年の秋には天理教会設置の運動の爲め鴻田、清水、増野の三氏と築地五丁目に宿をとり古記／＼と云つた古い記録を集めて神様のお言葉と人間の想像とを区別して一冊を神道本局に差出し一冊を清水氏が持つて帰つた。これが十九年の十二月である。
其の中に増野氏はお地場に用が出来て帰る。其の他の同行者も夫々長く東京へ止つてゐることができなくなり清水氏は船で神戸へ行く。私と鴻田氏は江の島鎌倉を経て遠州に行き途中名古屋に勾掛けをしたのが愛知分教会の元である。
此うしてお地場に帰つて見ると教祖はお休みになつてゐる。弟子達は毎晩門をしめて水をあびてお勤めをした。其れが旧十二月の十一日になつて急に御様子が變つて来たので御本席を以つて伺ふと
「サア／＼もう充分につみ切つた。是迄何によつた事も説き聞かしてあるが解らぬ。何程云ふても解るものはない。これが残念。よく思案せよ。さあ神が云ふ事嘘なら五十年以前より今迄此の道続きはせまい。今迄云ふた事見えてある。これで思案せよ。さあもう此の俣引いて終るか納つて終るか」

とお指図があり其れと同時に教祖様の御身体は冷めなくなつた。其れに驚いて十二日には御詫び勤めをした。然しお勤めをすると云つても門を閉めて夜分内々にすることであるから神様の思召に叶はないと見えて何も召し上らない。其れで十三日の夜一同が揃つて相談の末世界並二分お道八分で心を入れてお勤めさして戴くといふことに決めると翌日は大變御気分も宜敷く御飯もお上りになつた。其の為め皆心を緩めて相談もしないでであると神様がお降りになつて

「サア／＼年経つて弱つたか病で六ヶ敷いと思ふか。病でもない弱つたでもないで。だん／＼説き尽してあるで。良く思案せよ」

と云ふお指図があつた。而して十七日には大變御気分が悪くなつた。其れで又た一同が驚いて御本席様に御伺すると

「サア／＼これ迄何によふな事も皆な説いてあるで。最う何うせ此うせは云はんで。四十九年前よりの道の事如何なる道も通りたであろふ。訳りたるものもあろふ。助かりたるものもあろふ。一時思案。思案するものがない。遠いも近いも皆引き寄せある。事情訳らん。最う何うせ此うせの指図はしない。銘々心次第。云ふてあかん。サア銘々心次第。最う何も指図はしないで」

といふお指図があつた。其れが十七日の午後の三時頃である。伺つた間は六畳で梶本様に前川様に管長様の三人である。私共は次の間で伺つて後で二階で書いたものである。

其の時其の場に列した人達は前川菊太郎、梶本松次郎、榊井伊三郎、鴻田忠三郎、高井直吉、辻忠作、梅谷四郎兵衛、清水与之助、増野正兵衛の諸氏と私とで十人である。

此の御指図に驚いて一同が管長様に心定めを御願すると
マア考へて

といふ仰せであるが何時迄経つて返事がない。其れで夜の九時頃から再び相談を始めて徹夜して管長様の御返事を待つたが御返事がない。遂に夜の明ける迄其うしてゐた。其の時相談の仲間に入つたのが鴻田、榊井、梅谷、増野、清水の諸氏と私であつた。

其れから十八日になつて一同が前川様と梶本様の手を経て管長にお伺ひすると

「今日は真之助（管長）さんは酒を召し上つてお休みになつてゐるからいかん」

と云ふ。其れで十九日には御返事があるだらうと思つても夜になつても御返事がない。此うして三晩寝ずに相談した。漸く二十日の明け方の三時頃に前川様と梶本様との二人が管長様に付き添ふて神様に御伺すると云ふ事で私共は次の四畳半で襖の外で聞いていた。

「如何なる処、尋る処。解りなくば知らそふ。確つかり／＼聞き分け。コレ／＼良ふ聞き分け。最うならん／＼。前以て伝へてある。六ヶ敷い事を云ひかける。一つ事にとつて思案せよ。一時の所何ういふ事情聞き分け」

といふ御指図があつた。其れから中山様から

「前以つて伝へてあると仰せになるは勤めの事で御座りますか？ 勤め致すには六ヶ敷事情が御座ります」

と申上ると

神「今一時に運んで六ツヶ敷いであろふ。六ツヶ敷と云ふは真に治まる。長ふ／＼四十九年以前から何も分らん。六ツヶ敷と云ふ事あるものか」

中「法律がある故勤め致すも六ヶ敷う御座ります」

神「サア／＼答へる処それ答へる処の事情。四十九年以前より誠と云ふ思案がある実と云ふ処がある。事情分りあるのかないのか」

中「天子様と云ふも神様の御守護で此の世を司り下さるで御座りませふ。神様の仰を守れば天子様の道理に背きます。依て両方の立つ様に御指図を願ひます」

神「訳らんではあるまい。元々よりの段々の道すがらサア／＼一時応へる処何うでも此うでも押し切る事情いかん。唯一時ならん／＼。今と云ふ今先の道を運ぶと一時」

中「明日迄の所御猶予を願ひます」

神「サア／＼一度の話を聞いてチアンと定め置かねばならん又々の道がある。一つの道も如何なる処と聞き分けて唯止めるはいかん。順序の道／＼」

中「講習所を立て一時の所勤めの稽古をさして貰ひたう御座ります」

神「安心が出来んとあるならば先づ今の所夫々今の所談事／＼と云ふ処サア今と云ふ今と云ふたらサア抜きさしならんで承知か」

中「勤め／＼と御急き込み下さいます但唯今親様の御障りは人数定めで御座りませふか何うでも勤め致さねばならんで御座りませふか」

神「サア／＼夫々の処心定めの人定め事情なければ心定まらん。胸次第。心次第。心の得心の出来るまでは尋るがよかるふ。降りたと云ふたら引かんで」

中「教会本部を置き其上は神様の仰は如何なる事も致します。夫迄の御猶予を願ひます」

神「サア／＼事情なくして一時定め出来難い。サア／＼一時は夫々是三名の処で屹度定

め置　かねばならんで。何れ願ふ処其処は任せ置く。必らず忘れぬよふ」

中「有難う御座います」

神「サア一時今から今と云ふ心三名の心確いかりと心合せ返答せよ」

中「第一此の屋敷の道具元の魂生れ出てあるとの仰
此の屋敷をさして此の世界始まりの地場故天降り無い人間無い世界を拵へたとの仰
一天万乗の君様をして神の御魂と心得居ります所我々同様魚介の魂との仰
右三ヶ条一統の者より御上様へ申上りましたら我々何んと答へて宜敷御座りまじやうか
差支ます。人間は法律に逆ふ事は叶ひませぬ」

神「月日あつて此の世界あり。世界あつて夫々あり。夫々あつて身の内あり。身の内あ
つて律あり。律あつても心定めが第一」

中「右仰せられますれば我々身の上は承知仕りましたが親様のお身の上を心配仕りま
す。さあと云ふ時は如何様とも御利益を下されまじやふか」

神「サア／＼実があれば実があるで実と云ふは知ふまい。実と云ふは火水風。サア実を
買ふのやで。価をもつて実を買ふのやで」

これに恐れ入つて一同が退つた。
其の後お気分も漸次快方に向つて旧正月の元日には床から起き上つてお髪をお上げにな
つた。而して一同に向つて
「サア／＼充分にねつた／＼。此の屋敷始まつてから充分ねつた。充分受け取つてある
で」

といふ有難い御言葉を戴いた。此のお言葉を戴いた人は鴻田、榊井、梅谷、清水の諸氏と
私との五人である。

此う云ふ具合で御容態が大分良いので新の二月七日迄お地場にゐて一旦国へ帰り、講社
廻りをして福田村の宮本勇次郎（講元）方へ泊つてみると其の晩お地場から急用があるか
ら来いと云ふ手紙が来た夢を見た。其の手紙は誰が書いたのか分らん。唯大至急用がある
から帰れと云ふことが書いてあつた。其れで急いで御地場へ帰ると恰度教祖の御葬儀がす
んで後始末をする所であつた。

教祖御昇天の前に
「何時迄此うして居てもはたも分らん。世界も分らん。之れが残念。此の俣おさめてしま
おふか。扉を開いて世界を直路に踏みならそふか」
と云ふお言葉があつたが私が国へ帰ると間もなく旧正月十五日頃から御容態が變つて遂に
御昇天になつたのである。

此のやうにして御相談のある場合には始終置いて戴いたのが独り御昇天の際に省かれた
のは返へす／＼も残念である。これについては私に余程の深い因縁がある。其の因縁と云
ふのは六人の親をもつて一人も親の死に目に逢はないことである。即ち父の死ぬ時は私は
学問の為め他へ預けられてゐて逢はなかつた。母の死ぬ時は東京にゐて死に目に逢はなかつ
た。御教祖の場合も角目々々の御相談には何時も加へて戴いたが御臨終にも御葬儀にも逢
ふことが出来なかつたといふのは余程深い不孝な因縁である。（終）

教祖の降誕日と昇天日とに就て

大平 隆平

教祖の誕生日に就いては今日の所二説ある。其の一つは四月十八日説にして他の一つは
四月四日説である。

四月十八日説は天理教祖を始め天理教祖眞実伝天理教祖觀の如き今日一般に伝つてゐる
誕生日であつて四月四日説は一部の篤志研究家の外知らない説である。

前説の出所に関しては今日正確のことを知ることが出来ない。けれども後説の出所には
明かに戸籍が残つてゐるのである。

其れで今此の二説の中何れが正確なものであるかと云へば私は四月四日説をもつて正確
な誕生日であると信ずる。

然らば何故四月十八日説の如き根拠のない空説が生れたかと云へば私の想像する所に依
ればこれは教祖の昇天日二月十八日（一説二月十九日）の十八日と混同視したものと思は
れる。これより外に四月十八日説を確める何等の根拠がないのである。

刊行はされてゐないが長らく本部にゐて研究せられた故諸井政一氏（諸井国三郎氏の長
男）の著教祖「みちすがら」には明かに四月四日としてある。これは戸籍を調べても其う
である。明治十一年以後ならば或は新暦と旧暦とに依つて多少の相違を生ずるかも知らな
いけれども其れにしても唯つた十四日の差と云ふことはない。此等の点を総合して見ると
四月十八日説は全然虚説にして四月四日説が最も信すべきものであることが詔る。

其れから昇天日であるがこれも二月十八日説と二月十九日説とある。中山家の菩提寺善福寺の過去帳（愚かなる前管長は先祖の位牌と共に過去帳も焼いて了つたから中山家には何等信ずべき記録はない。）に依れば二月十九日と書いてあるが天理教祖の年表は二月十八日とある。けれどもこれは旧暦より繰つて行けば明治二十年の旧正月二十六日は新暦の何日に相当するか古い暦を調べれば直ちに判明することであるからこれは後日の問題として残して置く（今手元に暦がないから調べることは出来ない。）

次に教祖の年齢であるがこれは伝説に依つても天啓に依つても戸籍に依つても九十歳になるのであるが善福寺の過去帳には八十歳十一ヶ月と書いてある。これに就いて善福寺の主張する所は当時戸籍法の完全でなかつたことを唯一の論拠としてゐるがこれは役場の通知書に落ちたか善福寺で落したか分らぬが兎に角八十九歳十一ヶ月の九を脱落したものであることは明かである。これは善福寺で如何に主張しても此方には其れ以上の有力なる証拠があるから深い議論を要しない。

兎に角教祖昇天後二十年や三十年に此の様な異説が生ずる様では百年千年の後には教祖だの伝記だの歴史だのについて何んな異説が生ずるかも知らない。これ今日の天理教研究者の最も注意して精確な調査をして置かなければならぬ所以である。

之れは序だから云つて置くが仏教でも基督教でも其の他の宗教でも教祖の降誕を盛大に紀念するが天理教では立教日と昇天日とを紀念する計りで降誕日といふものを全然記念しない。これは決して謝恩の真義に叶はぬ。宜しく降誕祭を規定して教祖の降誕日を祝福しなければならぬ。これを特に此の祭に於て云つて置く。（紀元十億七十七年一月十四日）

卯の助参れ／＼

忍坂 西田 伝蔵

私の祖母さんが教祖様の妹のお桑さんと云つた人ですが随分長生きしてゐました。其の人に出来たのが藤助に勇助に幸助に名張のお叔母さんで御座います。

藤助さんが三島の小寒さんの所へ行きましたが暫時居て戻つて来て外へかたづきました。此処を継いだのは勇助さんですが其れが私です。わたい等も子供の時分良く御父つ様と庄屋敷へ行きましたが善右衛門さんつて人（秀司）は足が悪くてヒヨコ／＼歩いて居ました。何んでも布留の辺で医者にならうと思つて学問し一週間位山へ入つて学問したと云ふことを聞いて居ます。

教祖様は良く知つてゐます。私の子供の時分（私は今年六十三歳になりますが私の十位の頃）此の座敷へおゐでになり三十日も御いでになり私の御父様と御母様に扇のお授けを下されました。御幣を切つて床の間に飾つて長い事おいでになつたことを良く覚えて居ます。お帰りになります時は此方から提灯もつてと云つても私はよく見えるからと云つて帰られました。

私が彼地へ連れて行かれました時南瓜の御飯を炊いて貰つて食べたことを覚えて居ります。其れは小寒さんの居た頃でした。其の頃は米の粉を御供にして居りました。

今でも親類の中で彼の神様を重んじる方は此の座敷へ入らして貰つて／＼と云ふ人があります。普通なら此んな古い所を喜ぶ人はありませんけれども。

元来私の御父つ様も御母様も一心に神様を拜んで天理王命と紙に書いて貰つて信心してゐましたが 其の頃教祖様もよく御いでになり盛大になりかけた 内のお母さんの兄さんの安倍の北村五郎兵衛と云ふ人が大嫌ひで百姓も放つといつて其んなことをして居てはいかんと大分非道く反対したので内のお父つ様もお母様も止めて了ひました。其んなことで私共も信心を止めて百姓をする事になりましたが其の中に父も母も死んで了ひました。

教祖様おいでになると

卯の助参れ／＼

と仰つ可愛がつて下さいました。

今も神様は有難いと思つて居りますけれども彼の道には何うも良うつかぬ様に思ひます。（終）

怒られるから行かぬ

忍坂 増田喜三次

増田喜三次氏は一時小寒様の女婿になつた藤助氏の息である。今は忍坂で小さく百姓をしながら此の道を信心してゐる。

私共が尋ねた時氏は稲をこいてゐたがお父つ様のことを尋ねに来たと云ふことを聞いて仕事の 手を止めて汚ない上り縁に汚ない座布団を延べて招じて呉れた。話してゐ

る間は十分か十五分で あつたが其の人の善さ相の顔と飾気のない態度とは云ふに云はれない快感を与へた。
其処を暇乞ひして去つた後にも貧苦の中に満足しつゝ生活しつゝある其の家の家族の幸福が長く私の胸に刻まれた。

私のお父さん（藤助）の亡くなつたのは七十六で今年で十一年目になります。若い時庄屋敷の小寒さんの所へ行きましたけれども子供が死んで了ふし帰つて来たと云はれておました。
帰つて来ましてから暫時ブラ／＼して居ましたが内のお母さん（お歌）と一手になつて四十三の時私が出来ました。
本家は南半国の打ち分け場所と仰つて教祖様が時々御いでになりました。私共も子供の時分彼処で十二下りの手をつけて貰ひました。自分は要らないと云つたけれどもせいと云はれて六本のお叔父等と一手に手をつけて貰ひました。
親爺の居る頃は本部にもチヨイ／＼行き行けば大事にされるのですが段々お側附きが出来て此んな粧装をして行くと怒られますから自然遠のく様になりました。（豊田の仲田さん等がよく怒りました）教祖様は来い／＼云はれ色々お話も聞かして戴きましたけれども今は其う云ふ訳で本部へ参らして戴いても内の方に面会すると云ふことはありません。（了）

人類教育家としての中山ミキ子

大平 隆平

現代並に将来の経世家の最も注意しなければならぬことは政治や法律や倫理や哲学に依つて此世界を得べしと考へる根本的誤解である。成程現代の社会には政治や法律が必要である。もしこれがなかつたら此の社会に生活しつゝある人間は一層不幸な地位に墮落しなければならぬ。けれども一部の政治万能論者や法律万能論者の考へるが如く政治や法律さへ完備すれば此の世界をして理想の世界たらしめ得べしと考へるのは大なる誤解である。何故なれば人間其れ自身が自らを統治する信仰と勇氣とを欠いて居たならば当局者が如何に活動しても到底統治するに由なかるべし此の法律上の欠陥を埋めるために生れたのが倫理である。

今日の政治家今日の教育家は法律の欠陥を埋めるのに此の方法をとつてゐる。けれども倫理の世界も法律の世界に比ぶれば一層高い世界には相違はないが尚ほ形式儀礼の上に立つて精神界を統一する権能がない。此の實踐倫理の欠陥を補ふものが哲学である。

哲学と云ふ言葉を一層訳り良く云へば人生観である。人生観と云ふものは個人に依つて各々相異してゐるから一定の標準哲学なるものを挙げることは出来ないが真に偉大なる哲学者の占める世界は偉大なる道徳家乃至偉大なる法律家の占むる世界よりも一層根本的のものである。

けれども政治と云ひ法律と云ひ、倫理と云ひ、哲学と云ひこれは皆人間力の創造になつたものであつて自然の理法とは其の間に大なる區別があるのである。

例へば此処に偉大なる哲学者がある。彼の考へる所は確かに自然の一角に触れてゐる。けれども彼は偉大なるが故に果して疾病不幸に遭遇せぬであらうか？ 世界の哲学史を繙く所其う云ふ哲学者は一人もなかつたのである。

天理教教理より云へば凡て天理に叶つた精神生活を行ふ者には疾病不幸がない筈である。何故なれば彼れには肉体の疾病不幸を引き起す精神病がないからである。けれども今日世間の哲学者の伝記を繙くに無病息災で一生を幸福の中に生活したものは少ない。これは彼の持つて居た精神上の法則が自然の法則と一致しなかつた証拠と見なければならぬ。これは世の所謂偉大なる法律家乃至偉大なる道徳家と称せらるゝ人間の伝記に於ても同様の事実を発見することが出来るのである。

これは直接政治や法律や倫理や哲学の不完全なる証拠とならないかも知れない。けれども法律上の罪を犯さないが為めにもしくは犯しても法律上の罪人として取り扱はれない為めに其の人は神の前に無罪の人として取り扱はれるであらうか？ 又た此処に哲学者がある。彼の哲学の論理は一系整然として乱れない。けれども論理の正しいことは必ずしも道理の正しいことではない。彼は自己の哲学上の論理の正しいが為めに神の前に正義の人として承認せらるゝことを要求する権利があるであらうか？ もしあると思つてゐたら彼は偉大なる錯誤家である。

けれども多くの場合人間は監獄もしくは警察に監禁もしくは拘留せられたことがないことをもつて一人前の人間だと思つてゐる。又た多くの場合人間は自己の論理が誤つてゐない為めに自己の道理迄正しいものと信じてゐる。これは悲しむべき人間の誤解である。

吾人は至る所の病院に種々の生理的故障並に心理的故障をもつてゐる天の罪人を発見する。けれども彼等は聊かも自ら天の罪人とは思つてはゐない。

浅果敢なる人間は人の眼を暗ます事さへ出来れば窃盗をしても良いものだと思つてゐる。けれども女（男）を見て色情を起したものは中心既に姦通してゐるのである。況して其れを現実に実行せるものをや。

愚かや人の物を取れば我が物もとられ人の眼を暗ませば我が眼も亦暗まさるべき天の理法を知らない論理の上で勝つことは必ずしも道理の上で勝つことではない。もし我が精神我が生活が天理に合して居なかつたならば人は善人と認めても神は善人とは認めないのである。

今日の政治家や今日の道徳家は法律（人間の作つた）や道徳（人間の作つた）が完備すれば其れで此の世界を理想の世界となすことが出来ると思つてゐる。けれども其れは笑ふべき浅薄な考である。此の世界は人間の作つた法律や人間の作つた倫理に依つては決して完成せられない。此の世界を完成するものは天理である。人道である。自然の法則である。神の意志である。この自然の法則神の意志を称して宗教と云ふ。此自然の法則神の意志を自ら実行もし且つ他人に伝へるものを宗教家と云ふ。これぞ宇宙の最高法律でありこれぞ世界の最大政治家である。

天啓の声に曰く

「さあ、明ければ五年と云ふ。万事一つの事情を定めかけ。定めるには人間の心は更々要らん。弱い心は更らに持たず気兼遠慮は要らん。さあ思案してくれ。これから先は神一条の道国会では治まらん。神一条の道で治める」

誠や来るべき時代は法律の時代でもなければ哲学の時代でもない。宗教の時代である。神の時代である。此の宗教の時代、神の時代の先駆者として生れて来たのが天理教祖中山ミキ子である。

古来人類教育家として最も偉大なる天分をもつてゐた者に釈迦あり、基督あり、孔子あり、マホメットがある。けれども我が天理教祖中山ミキ子の人物養成の目的並びに手段は其れ等の何れの人とも違つてゐた。

天理教祖の画いた理想の人物

彼女は釈迦の如く単に頭の人を造るが目的ではなかつた。彼女は基督の如く単に心の人を造るが目的ではなかつた。彼女は孔子の如く単に手の人を造るが目的ではなかつた。彼等の目的は智情意共に円満なる理想の人物を造るにあつた。此の目的を具体的に表現せるものが御神楽歌である。御神楽歌の主要の目的は彼を単に知る丈けではない。彼を更らに口に移し手に表はすにある。即ち意と口と手と三つを一致せしむるにある。之れを人物養成の上に就いて云へば意と口と手の揃つた人物即ち智情意の円満に調和した完全の人物を養成するにある。

これは客観的に見たる天理教の理想の人物であるが之れを主観的に見れば天理教の目的は「山の仙人」よりも「里の仙人」を養成するにある。云ひ換へれば不生産的人物よりも生産的人物を養成するにある。非家庭的人物よりも家庭的人物を養成するにある。非国家的人物よりも国家的人物を養成するにある。非社会的人物よりも社会的人物を養成するにある。非活動的人物より活動的人物を養成するにある。非實際的よりも實際的人物を養成するにある。非現実的人物よりも現実的人物を養成するにある。貴族的人物より平民的人物を養成するにある。保守的人物より進歩的人物を養成するにある。自己中心的人物より神霊中心的人物を養成するにある。わけて天理教の主要の目的は平民的、活動的、實際的理想人物を養成するにある。凡て此等の要素を総合したものが天理教祖の所謂「里の仙人」である。

凡そ此の世界に於て何が困難だと云つて人類の教育より困難なるはない。彼の庭園の草木を養成するにさへ朝夕之れに水かひ土かひ贅枝を切り害虫を除くに幾年の苦心を要するか知らない。更らに其れよりも貴い神の用木を養成することは更らに幾層倍の慈悲と注意と忍耐とがなければならぬ。これは子をもつたものゝ何人も経験する所である。

彼女の教育法

彼女が人間生活に対する態度は常に論より証拠を重んじたと云ふことである。此の論より証拠を重んじたといふことは必ずしも事実を重んじて理論を排斥したと云ふ意味ではない。先づ口に云ふより行に示すことをもつて第一義としたといふことである。

事実守屋筑前や小泉の不動院や法林寺、光蓮寺の住職や其の他彼女を屈服せしめんとする敵意をもつて来た人達に対しては彼等の心服する迄諄々として其の教理を説いたのであ

る。而かも彼女の説く所の教理と其の態度なり生活なりが一分一厘の隙なく一致して居るが為めに反対者は之れに向つて強弁することが出来ないで退却したのである。

唯彼女の特色は世の所謂議論の為めの議論家にあらずして人生の為めの議論家であつたといふことである。

(一) 実物的教育法

彼女の教育法の特色を挙げれば第一に実物教育法を用ゐたといふことである。即ち火を見れば火鉢を見れば火鉢湯沸を見れば湯沸鉄瓶を見れば鉄瓶について説明を与へた。乞食が来れば直ちに乞食について説明を与へる

「彼れはな前世に贅沢計り云ふて彼んな物は食へん此んな物は食へん。彼んな物は着れん。此んな物は着れん。彼んな所には住めん。此んな所には住めんと贅沢計り云つて物を粗末にした理が廻つて今生には人の捨てたものを拾つて食ひボロを纏つて人の軒下に住まはんならん様になる。けれどもな彼れも皆な神の子供であるから目をかけてやつてくれ。神が喜ぶから」

と此う云ふ論法である。

彼の秀司氏の死骸に臨んで

「伊蔵さん内の態を見ておくれ。金計り溜めて」

と云つて涙一滴こぼさなかつたといふのは一面に於て彼女の偉大なる精神を語ると共に他の一面に於て自己の愛子を実例に挙げて天地の理法を説明した血あり涙ある人類教育家の真面目を表はしたものと見ることが出来る。

わけて彼女が偉大なる実物教育家であつたと云ふ最も著るしい例は彼女自身が新時代の典型人として自ら人類に向つて新しき雛型を示した点にある。

これより大なる実物教育法はないのである。

彼の神を説明するに月が神であるとか火水風の外に神はないとか云つて眼に見える偉大なる物象に依つて眼に見えない偉大なる存在物を推測さした如きも確かに彼女の実物教育法の一例であらうと思はれる。

(二) 實際的教育法

彼女は客觀的に教理を説かないことはないが其れが彼女の唯一の目的ではなかつた。更らに其れを実地に就て経験し且つ応用することが彼女の最後の目的であつた。其の為めに彼女は機会がある毎に其の事件を捕へて其れに向つて生きた説明を与へることを怠らなかつた。これ物体に接する毎に其れに向つて生きた説明を与へたと。蓋し同一の教育法に依るのであつた。

一例を挙げて云へば彼女の弟子達が貸物借物の理を聞き倦きて新しき話を求めた時に彼女は黙つて奥から一刀を携へて出て来て今願ひ出た弟子の真向見かけて切り下げやうとした。弟子が驚いて後退りした時彼女が微笑の中に発した言葉は確かに千金の価値がある。

「貸物借物の理が訳つたと云ふから珍しい話を聞かさうと思へば逃げる。其れでは本当に未だ訳つたのではない。貸物借物の理が訳らいでは人の師匠となることは出来ない。もつと勉強せんらんで」

これは彼女の實際的教育法を説明する充分の例にはならんかも知らぬ。けれども其の一般は之れに従つて推測することが出来る。

(三) 実験的実感的教育法

彼女は人を助けるには先づ自ら助かつたのである。彼の産屋助けの如き病氣助けの如きは皆自ら第一に之れを実験した後に行つたのである。

彼女が信徒を教育するにも決して理論を授けて其れで満足しない。必らず先づ教理を実行して実地の経験を味はせるのである。

即ち

「雛型通らにや雛型要らん」

の如き彼女の実験的教育法の精粹を語つてゐるのである。

即ち教祖の通つた「道すがら」を一度實地に通らなければ生きた教理を味感することは出来ない。生きた教理を味感することが出来なければ宗教生活は全然無意味である。彼女が実験的教育法に意を用ゐたのは此処にある。

(四) 啓発的教育法

教育法に二つある。注入的教育法と啓発的教育法である。今日旧式の学校にて多く用ゐて居るのは注入的教育法である。けれども此の注入教育の弊害として注入せられたる智識に対しては確実なる記憶を有するも其れ以外の新しき事物に対してはやゝもすれば応用の才を欠くことである。

教祖の用ゐた教育法は前者よりも寧ろ後者に属してゐた。即ち相手の力量を計らずして無暗に注入することを避けて専ら既得の智識を総合して未得の智識を獲得せしむることに努力した。

例へば彼の懶惰者の下男を改心せしめた如き其の一例である。

彼女は始めより其の男に向つて働けとも稼げとも云はない。彼が懶ければ懶ける程優待し遂に其の男を本心より改善して勤勉な男としたのである。

此の道は悟りの道であると云ふのも此処である。

(五) 暗示的教育法

前に述べたる如く彼女が人に物を教ゆるに決して一から十まで全示すると云ふことはない。大抵其の人間の力で解釈の出来る程度に止めて置く。これが彼女の教育法であつた。

(六) 比喩的教育法

釈迦でも基督でも随分巧妙な比喩家であつたがミキ子も亦其れに劣らぬ巧妙な比喩家であつた。

彼女が「貸物借物の理」を説くに神を富豪に譬ひ人間の中借物を粗末にする人間と大切に
にする人間と感謝を知らぬ人間と感謝を知つてゐる人間との二種の型と老人と最う一人の
百姓にたとひ借物を、重箱と袱紗にて表はして一篇の寓話を造り上げた手段の如きは中々
凡手ではない。わけて私の感心するのはやゝもすれば卑俗に流れ易い女性の月経を説明す
るに茄子や南瓜に譬ひて説明した手腕の如きは教育家として誠に上乘のものであると思
ふ。

此の他信仰の径路を説明するにも山坂や茨や畦や崖道や剣の中火の中、淵中、細道、大
道と云ふ風に様々の艱難辛苦の道を比喩を以つて表はせる如き又純金の長橋や宝の山の比
喩に依つて信仰の帰途を示した如きは最も著しき比喩的教育法の一例である。

(七) 漸進的教育法

けれども彼女が教理を説くにも始めより難解の教理を説いたものではない。始めは泥海
時代の如き基礎教理より順次貸物借物の理の如き八つ埃の如き互ひ助け合ひの如き日の寄
進の如きを説いたのである。即ち信徒を教育するにも易より難に入り簡より繁に入つて信
徒を教育したのである。

(八) 個人的教育法

其れから天理教祖の用ゐた教育法の中最も研究に価するものは個人的教育法である。

凡て教育上の眞の効果を納めんとせば多くの人間を一堂に始めて説明すると云ふことよ
りも直接個人個人に接して所謂人を見て法を説くに如くはないのである。此の方法は今日
最も進歩した理想的の教育法である。

(九) 自然的教育法

彼女の教育法を見るに人工的教育法に依つて不自然な人物を造らうとはしなかつた。凡
て天真爛漫に人間の本性を發揮せしむるのが彼女の目的であつた。この自然的教育法も亦
実に彼女の教育法の一つの特色である。

(十) 平民的教育法

彼女の教育法の多くの特色の中に平民的教育法と云ふことは一つの大なる特色である。
これは新時代の教育法中最も出色の一つである。

(十一) 通俗的教育法

凡て人類教育の目的は相手をして真に真理を理解せしむるにある。其れには難解の説明を用ゐるといふことは大なる禁物である。
「六ヶ敷いことを云ふては訳る人もあれば訳らん人もある。其れは道とは云へん」
「柔りこいもの／＼柔りこい物は若い者も食べれば老人も食べる」
此の自覚の下に彼女は最も通俗平易の方法をもつて人類を教育せんとした。偉大なる卓見と云はなければならぬ。

(十二) 人格的教育法

宗教の目的が安心立命にあるか人格修養にあるかは宗教哲学上の大なる問題である。もし宗教の目的が前者にありとすれば浄土宗の如きは理想的の宗教と云はなければならぬ。けれども精神的に醒めて来た近代人に取つては人間生活について自覚なき他力信仰に安心立命することは出来ない。この欠陥を補ふ為めに天理教の如き自力主義的他力主義の宗教が生れたのである。

天理教の第一の目的は決して礼拝や祈禱ではない。人格の改造社会の改造が其の第一義的目的である。此の目的の下に生れたものが教祖の人格的教育法である。凡ての天理教祖の教育法は此の人格教育に結合せられるのである。

以上は天理教祖の人類教育法の一般であるが彼女の教育法は教育法としても最も最新式の教育法に属するのである。殊に彼女が最も力を入れた実際的教育法、通俗的教育法、個人的教育法の如きは最も教育の真義に徹底したものである。

今日の社会は天理教祖と云へば主義も理想もない無学の一巫女の如く解して居る者が多い。わけて悲しむべきことは国民教育の当局に当る所の人々が此の偉大なる人類教育家の人格、思想、生活に就て全然無知なることである。これは今日の教育家の思想が如何に低級であるかを語つてゐるのである。

私は断言するのである。此の社会を根本的に統治するには法律の力だけでは駄目である。私は又断言するのである。新時代の国民を養成するには倫理や修身の力では駄目であると。見よ今日の女学生の中一人でも礼法の真義を解して居る者があるか？ 又た真に其の必要を根本的に解して居る者があるか？ 私は悲しいかな其の一人をも発見することが出来ないのである。此の仏作つて魂を入れざる現代の教育現代の政治を救ふものは何うしても宗教の力に待たなければならぬ。

私をして将来全世界の教育を左右するの権能を与へられたりとせば私は先づ全世界の修身科を廃して天理教科を置くのである。これは今日並に将来の世界を救ふには今日の倫理や今日の哲学や過去の宗教ではならぬ。何うしても神の最後の理想を表象した天理教でなければならぬと信ずるからである。

けれどもこれは天理教の教義及び理想をしらない者には容易に信ずることの出来ないことである。私は其等の人々の為めに簡単に教祖の思想を紹介せう。

天理教祖に従へば此の世界の元始りは泥の海の中で月（国床立命）日（重足命）両神居るばかり。其処でお月様よりお日様に相談するには

「吾々両神居る計りでは誠に淋しい故人間と云ふ者を拵らへ其の陽気遊山を見て樂まう」と議此処に一決して鱧をもつて人間の魂とし人魚と巳とを人間の父母とし其れに当時の最高動物の凡ゆる特徴をとつてつくつたのが原人である。けれども当時の人間と云つても決して今日の人間の姿を有したものではなかつた。其れが段々介鳥魚獣の時代を経て今日の人間に発達した。其の間実に九億九万九千九百九十九年。其の中九億九万年は水中生活。六千年は智識の仕込み。三千九百九十九年は学問の仕込み。其れに依つて十のものなら九つ迄仕込んだが後の一つが仕込むに仕込まれなかつたから天保九年に元なる地場（大和国庄屋敷）に元なる神が表はれ人間の原母伊邪那美の命（巳）の後身なる天理教祖を立て、万委細の元を聞かすのである。

其れで今迄何の様な教へもあつたけれども皆な人間の成人に依つて教へて来たものである。今度の教へは教へ始めの教へ終ひこれ一つ仕込んだなら後に何も教へることはないぞよと云ふのが天理教の序論である。依つてこれを根の教、元の教、だめの教、止めの教と云ふ。

今其の教理の一斑を挙げれば人間の肉体及び肉体の生活に必要な凡ての物質は神が人間をして日の寄進的生活相互扶助的共同生活をなさしめんが為めに神が貸し与へたものである。其れを勝手に我が身の思案我が身の欲に使ふから之れを小にしては疾病不幸の如き個人的不幸之れを大にしては天変地異と云ふ人類的不幸に遭遇するのである。従つて人類全体が無病息災不老不死の理想の世界に安住せんと欲せば先づ利己的精神を捨て、人を助ける精神にならなければならぬと云ふのである。

此の教理を具体的に説明したものが朝起き、正直、働き、互ひ助け合ひ、日の寄進である。

其れで天理教祖の画いた理想の人物は朝起者、正直者、働き手、相互扶助主義者、日の寄進者である。これが即ち彼女の所謂「里の仙人」である。天理教祖の目的は即ち全人類を里の仙人化せしむるにある。而して其の模範を彼女自身に示したのである。

凡て時代は変遷するものである。人間の定義も亦其うである。吾人は最早や昨日の太陽や一昨日の太陽に依つて今日の光を求めてはならない。今日の熱と光と力とは今日の太陽に求めなければならない。此の不完全なる論文は即ち其の生成化育の力を見んとする努力に外ならない。

(紀元十億七十七年一

月十四日)

中山家過去帳

中山家過去帳

文政三年六月十一日六十二歳ニテ逝ク 善兵衛父
戒名 専 誉 称 念 禅 定 門

文政十一年四月八日 善兵衛母
戒名 唯 誉 妙 念 禅 定 尼

天保七年四月廿四日 二女常子
戒名 智 玉 慧 弁 童 女

嘉永六年二月二十二日(玄米三斗) 善兵衛
生 遊 軒 宝 誉 長 岸 栄 寿 居 士

明治三年三月十五日 秀司長女秀子 行年十八歳
戒名 撰 取 軒 光 誉 明 照 禅 定 尼
元ト八光岸明照信女贈五重ノ約定ニテ布留街道迄神葬トス。ソレヨリ善福寺二十七世達誉上人取扱ヒ片鉢伴二人

明治八年九月廿七日 小寒子
戒名 光 唯 軒 明 誉 顕 赫 信 女

明治十一年四月六日 櫛本梶本宗治郎ヨリ小寒へ贈五重ス 桂現善福寺住職
戒名 光 唯 軒 明 誉 顕 赫 禅 定 尼

明治十一年四月六日入行(旧三月四日) 長女政子 桂現善福寺住職
善福寺ニテ五重相伝ス
戒名 実 誉 貞 信 禅 定 尼

明治十二年七月十四日 秀司子
智 生 童 子

明治十四年四月九日(教祖年譜四月十日) 秀 司
德 樹 軒 門 誉 靈 山 秀 司 禅 定 門

明治十五年十一月十一日 松 枝
神葬ニテ送り善福寺へ葬ル。墓所ニ見立テナシ焼香引導ト五重約定ニテ
宝 参 妙 樹 禅 定 尼

明治十年一月

堺県大和国第一大区三小区戸籍之五十一

山 辺 郡
三 島 村

	・	大和国第一大区三小区山辺郡庄屋敷村	
	・	第五番屋敷住平民農	
	・	実父善兵衛亡長男	
氏神同郡同村	・		中 山 秀 治
春日社	・		五十五
歳七月	・	文政四年辛巳年七月廿四日出生	
	・	明治十四年巳年四月九日病死	
	・		
	・	寛政戊午十年四月四日出生	母 み き
当国同郡勾田村	・		七十八
歳十月	・		
浄土宗	・	実父当国同郡三味田村平民農前川半七長女	
善福寺	・	文政元戊寅年二月五日入嫁	
	・		
	・	嘉永四年辛亥年三月三日出生	妻 ま つ 糸
歳十一月	・		二十五
	・	実父当国平群郡平等寺村平民農小東政吉亡二女	
	・	明治三庚午年八月二十六日入嫁	
	・		
	・	安政戊午五年一月二十三日出生	長男 音 治 郎
一月	・		十九歳
	・		
	・	文政八乙酉年四月八日出生	妹 ま さ
歳十月	・		五十一
	・	明治十一年戊寅二月十六日分家相続	
	・		
	・	明治十一年丁丑二月十五日出生	長女 ま ち
	・		
	・		以 上
	・		
	・		
	・		
	・		
	・		

教祖三十年祭も待つて居る中に来た。兼て予告の通り教祖の音容に一度なりとも接した方より感謝と記憶とを募つたが其の中に一人として自分から進んで投稿して下さる方はなかつた。

目前の利害には随分伶俐だが此んな永久的の仕事に対しては全然注意を払はれないのが天理教徒の特色である。

本誌の主義として雑誌の紙数が多くなつても少くなつても一定の定価以外には一文も多く戴かず又た少く戴かない事に定めてあるのであるから本号の如き実費が定価以上に上つても決して外の雑誌の様に定価を変更する様なことはしない。

実は最つと載せたいのであるが其う無制限に紙数を増すと云ふことは道の友の様な七千も八千も読者を有する雑誌なら兎に角僅かに五百や七百の読者しかない本誌にとつては到底不可能の事である。其れで材料は未だあつても遺憾ながら割愛することにした。

けれども本誌が兼て予告した感謝と記憶の蒐集は之れで終つたのではない。本誌は更らに永久的の仕事としてより以上の材料を蒐集し最後に単行本として発行する心算である。

私は此の頃つく／＼考へた。天理教の人達に何を頼んでも駄目だと云ふことを。彼等は自分や自分一身の事になると夢中だが少しく範囲が広まつて来て教界全体とか国家とか社会とかの事になると全然無頓着だ。其れは／＼冷淡なものだ。此んなことで世界最後の宗教で御座る等とは片腹痛い。最つと大きな自覚を望んで置く。

改名の理由

旧	大平	良平
新	大平	隆平

凡そ名前を換へると云ふことは瓶詰のペーパーを張り換へる様なものである。ペーパーを張り換へた所で正宗が月桂冠にはなりはしない。けれども人間丈けは特別である。彼は張り換へたペーパーの暗示を受けて清酒とも名酒ともなるのである。

私が大平良平を大平隆平に換へたのは必ずしも姓名哲学上の理論に囚れた為めではない。隆平の二字が良平の二字よりも一層適切に神の理想即自己の理想を表現してゐると信ずるからである。

私の解釈に依れば大平は大平原即ち世界を意味し隆平は高原即高天原（甘露台と云つても良い）を意味するのである。大平隆平は即ち此の世界に高天原（最高理想の世界）を実現することを意味するのである。

之れを天啓の言葉に徴するに

谷底をせり上げ高山を見下ろし世界を直路に踏み平らす

と云ふ神の理想は同時に私の理想である。

此の世界直路の理想は大平良平にも表はれてゐるが「世界を良くならず即ち理想の世界にする」谷底をせり上げ高山を見下ろして現在よりも一層高い理想の世界を實せんとする神の理想は良平よりも隆平により多く表れてゐる様である。これが改名の第一の理由。

改名の第二の理由は良は女性的であり且つ活動性に乏しい。然るに三十年祭以後の私の理想は一層大なる活動を熱望して居る。これ良を捨て、男性的活動的の隆を選んだ第二の理由。

改名の第三の理由は大平隆平は縦と横との八方へ拡がる意味を有す。これは空間と空間とに亘つて永久無限に自己拡張を行はんとする私の理想に一層叶つてゐる様に思はれる。これが改名の第三の理由である。

此の他二種の姓名について何れも長所と欠点とをもつてゐるが大体に於て大平良平よりも大平隆平の方が世界直路の神の理想に一致して居ると信ずるから前者を捨て、後者とつた。

是を定めるに就ては三度神籤を頂いた結果三度共隆平の御指図を戴いた故後者に決めたのである。

元來世間では改名について必らず欲があるのであるが私には欲がない。唯世界直路の理想を姓名計りではない。凡ての方面に亘つて實現せんとするより何等の欲望はないのである。且つこれは私の先天的使命だと信じてゐる。私の姓名は其の理想なり使命なりを實現したものである。元より人にとつては兎に角過ぎないかも知らないが私にとつては眞面目な仕事である。

わけて今年私の思想も生活も立て換への時期に迫つてゐる。私は思想の上に於て旧思想を捨て、新思想をとり、生活に於て先祖の財産を断つて神の世帯をもつのである。独姓

名に於て変化せざる理由はない。私の新しき姓名は私の新しき性格に向つて下されものとして有難く甘受するのである。